

牛島春子研究—「満洲」は彼女にどう作用したか

平成27年6月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

鄭 穎

凡 例

※「奉天」「新京」など、現在では使用するのにふさわしくない言葉があるが、時代性を生かすものとして使用した。もとより、時代的用法ということであり、差別や植民地主義の肯定などとは無縁である。

※本論文は歴史的用法として「満洲」「満州」の表記はすべて「満洲」に統一した。ただし、引用文献の中で元の表記「満州」に従うことを原則とした。

※引用文中、旧漢字はそのまま引用した。

※単行本は発行年度を、雑誌は発行年月を示した。単行本、雑誌名、新聞名は『 』で示し、作品、論文の表題は「 」で示した。

※引用部分は「 」で示した。

※本論文中の引用文は引用原典の仮名遣いのままとする。旧仮名遣いと新仮名遣いが混在している場合もそのままとする。ただし、旧漢字を適宜に新漢字に置き換えることがある。

目 次

序章	1
第一節 研究の目的と意義	1
第二節 研究史の概観	4
第Ⅰ部 日本女性と「満洲」	10
第一章「満洲」における女性文学	11
第一節 移住、進出の機縁と歴史的展開	11
第二節 「満洲文学」における女性文学	13
第三節 「満洲崩壊」と女性作家たちのその後	20
第Ⅱ部 「満洲」に根ざした牛島春子を中心とする考察	26
第一章 牛島春子の特質—戦中から戦後へ	27
第一節 「牛島春子年譜」における事実関係の修正と補充	27
第二節 牛島春子の性意識	31
第三節 野田宇太郎の知遇—その長い軌跡	42
第四節 川端康成との縁	66
第五節 「転向」への意識—戦前と戦後	83
第二章 牛島春子作品から読み取れる「満洲像」	114
第一節 「満洲」の女性問題	114
第二節 異民族接触と異文化衝突	128
一 「祝といふ男論」	128
二 牛島春子の捉えた「苦力」—水上勉などとの対比に即して	142

第三節 「ある旅」に見る引揚体験と表現	153
第三章 牛島文学の翻訳と変貌	164
第一節 『祝といふ男』の中国語訳の分析	164
第二節 『王属官』の変容	172
第三節 対応する日本語の作品が見つからない中国語の作品	190
第四章 結論	198
後書き 資料収集の経緯と謝辞	204
参考文献	206

序章

第一節 研究の目的と意義

日本は清朝最後の皇帝溥儀を利用し、一九三二年から一九四五年まで中国東北部で傀儡国家「満洲国」を作り上げ、実質的な植民地統治をしていた。「満洲国」は十四年間も続いたが、中国東北部における日本の植民地支配の歴史は、それを遙かに超え、日露戦争から日本敗戦まで実際には四十年間も続いていた。その後遺症は現在にまで影を落としているといえる。いたるところに散らばっている「満洲国」の遺産を避けては通ることができない。「満洲国」は、中日両国の歴史が重なっている時空であるため、現在大連、瀋陽、長春、ハルピンなどの図書館には、当時の状況を反映する貴重な資料が保存されているが、まだ十分に活用されていない状態である。以前は資料へのアクセスが難しいことが障害、あるいは無関心の原因になっていたが、グローバル化で地域連携が深まり、徐々にではあるが資料の共有も可能になりつつある。文学を越境という観点から捉えなおす契機となった。

日本と中国は何千年もの間、文化交流を行ってきたが、「満洲国」のような限られた地域空間の中で激しく中日文化が正面衝突するというようなことはなかった。日本帝国主義は植民地「満洲」に臨み、そこでいわゆる「満洲国文化」を創ろうとしていたが、結局蜃気楼のようなものにとどまっていた。中国文学と日本文学が重なっているものとして、「満洲文学」がある。「満洲」の地で行われた日本語文学は日本文学の一環として、また旧植民地文学の一環として、重視すべきである。それは歴史を語る上で、欠かせないものであろう。当然のことながら、近代日本の歴史は、文学や思想の領域を含め、日本の内側から見ただけでは本当の姿は見極められない。近代日本の発展は日本によるアジア・太平洋への戦争の歴史を抜きにしては考えられないからである。つまり、近代日本文学の本当の姿を知るためには、近代日本の歩みをアジアの視野から見て行くことが必要である。植民地は植民地主義時代における宗主国の周縁として使われた被支配地域を示す歴史用語の意味にとどまらず、近代を生きる人間の主体形成を問うことのできる空間的概念であるとも言われている。近年、日本国内では旧植民地文学が注目を浴び、研究が盛んに展開されている。

地域概念としての「満洲」はすでに存在していないが、記憶としての「満洲」、歴史遺産としての「満洲」はたとえそれが幻影であっても、確実に生き続けている。日露戦争後、夏目漱石、与謝野晶子のような著名な作家も含め、満鉄の招待で日本文壇に所属する作家、文人たちが数多く渡満した。次第に日本内地は「満洲」への関心が高まり、文学者同士の交流も盛んになり、「満洲文学」も日本文壇に注目されるようになった。当時、芥川賞は「満洲もの」に傾いていた。牛島春子「祝といふ男」が第十二回下半期の芥川賞候補になり、日向伸夫「第八号転轍器」（『作文』一九三九年二月）が第一回文話会賞（一九四〇年）を受賞し、翌年上半期の芥川賞候補（第十三回）にもなる。その後、石塚喜久三「纏足の頃」（第十七回、一九四三年）や八木義徳「劉広福」（第十九回、一九四四年）が相次いで芥川賞を受賞した¹。清岡卓行の『アカシアの大連』をはじめ、安彦良和の『虹色の

『トロツキー』など「満洲」を舞台とした作品は戦後もしばしば世に問われ、現在にいたっても「満洲」ブームが続いている。たとえば人気作家の村上春樹の小説『1Q84』では、複数の主人公の一人の父親は「満洲」体験者である。これまでの日本近代文学研究は、もっぱら日本国内の作品のみを「日本文学」とカテゴライズしてきており、植民地の日本語作品の位置づけはまだ不十分である。「満洲」をはじめとする日本の旧植民地における日本語文学研究は、アジア各国との連携が必要である。

「満洲」に移住し、異文化の中で長期にわたり、執筆活動を続けた日本人女性は少なかつた。当時、様々な職業に携わりながら作品を書き続けた女性たちは、住み慣れた故郷を離れ、国境を越え、異民族と交わる中から様々な社会的及び政治的矛盾や人間として、女性としての悩みを凝視し、苦しみ、それらを懸命に文章に綴ったのである。このような作品は「満洲国」の内部からの発信であり、「満洲」の全体像を解明する鍵にもなる。しかも時には女性文学のほうがより深く自らの抑圧されたものを描き出し得ている。牛島春子はこの時代を代表する女性作家の一人である。川村湊は次のように指摘している。

牛島春子の小説の中にある植民地の男と宗主国の女、或いは植民地における男女の関係の描き方は、ジェンダーと植民地主義（コロニアリズム）の関係という現在のなものを抱え込んでいると感じられる。「女」という立場も、一種の「植民地」として権力によって、支配され続けてきたのであり、「満洲」という特殊な場所において牛島春子の小説はそうした普遍的な男女の権力抗争的なあり方を描いていたが、彼女はいかに「満洲」社会を考え、どのように異民族、異文化を理解したか、近代日本人の海外進出体験のもう一つの側面が見られるところである。²

そのため、牛島春子をはじめとする日本人女性と「満洲」の関係を究明することは非常に有意義なことである。日本内地で自己実現のできない人は時に夢を実現するために命をかけて「満洲」に渡った。「満洲国」は一時期日本にとって、ロマンチズムのシンボルであり、亡命先でもあると見なされていた。少なからぬ知識人が混乱の内地を嫌い、逃れて「満洲」の地を踏んだ。そこは元左翼系の人々の吹き溜まりでもあった。川村湊は次のように記している。

共産主義者の転向後の行く先として、満洲は一種のアジール（聖域）ともいえる場所だった。後藤新平が満鉄のなかにつくらせた満鉄調査部は石堂清倫や伊藤武雄や具島兼三郎など転向共産主義者の学者や研究者、言論人の溜まり場ともいえた。経済統計や社会調査など社会学的な調査方法や理論を身に付けた日本人の調査員たちは、多かれ少なかれ、共産主義（マルクス主義）の洗礼を受けなかった者はないといわれるほどだった。彼らは雑誌や新聞などのジャーナリズムの世界で活動するとともに、農民運動や教育機関によって実践活動を行う者も少なくなかつた。プロレタリア文学活動で有名だっ

た山田清三郎や、プロレタリア運動に参加していた牛島春子や横田文子などが、満洲文壇で活躍するという現象も見られた。³

牛島春子は「満洲」に渡る前に、日本で左翼運動に参加して、検挙され、さらに入獄した。「転向理由書」を書かされ、国外逃亡のような感じで新天地「満洲」に渡った。一九三七年五月短編小説「王属官」で「満洲文壇」にデビューし、続いて一九四〇年九月「祝といふ男」を書いた牛島春子は、「満洲」で名を馳せた女性作家である。「王属官」は第一回建国文芸記念賞を受賞し、演劇や映画に脚色され、漫画にもなり、大いに反響を呼んだ作品である。それに「祝といふ男」は芥川賞次席となり、高く評価された。私の調査では、「満洲」時代、牛島春子の作品は少なくとも三編中国語に訳された。それは極めて珍しいことである。彼女の「満洲文壇」での知名度が高いことと関わっているであろうか。牛島春子の「満洲」時代の作品は現在、『日本小説代表作全集10』⁴『昭和戦争文学全集1（戦火満州に挙がる）』⁵『文学で考える〈日本〉とは何か』⁶など日本で出版された書籍に収録されている。ゆえに彼女は日本文学史上、特に昭和文学史上、一定の位置を占める存在と言える。『日本女性文学大事典』（二〇〇六年）の「人名索引」には牛島春子が載っていないが、「女性文学年表」には牛島春子の名前が見られる。近年、牛島春子は「満洲」女性作家として注目されている。彼女は単なる旅行者ではなく、ほぼ十年間、植民地に住み、内側から「満洲」を観察していた。また、夫の特殊な身分による業務上の便宜もあり、副県長夫人として目で耳で多種多様な事件と接触してきた。それらを取材源にして、一般の市民と違い、より深く「満洲」社会の真相を掘り下げられる立場にあった。しかも、引揚後、牛島春子は横田文子、八木秋子など沈黙を選んだ女性作家と違い、執筆の継続性があるため、その思想変化を読み取ることが可能である。川村湊は次のように牛島春子を位置づけしている。

満洲人の官僚たち、偽満洲国に忠誠を誓う人々を主人公としたり、満洲人を登場人物にしたりするということは、「豚」という小説が作者にも思いがけずに「王属官」という当選作品となり、それが劇化、映画化と独り歩きを始めたことと無関係ではない。牛島春子は「満洲文学」の有力な担い手となると期待され、注目された。そのことが、彼女の戦後の「新日本文学」や地方紙を發表の舞台とした作家としての生活に大いに影響したと考えることは的外れなことではないだろう。いい意味でも悪い意味でも、彼女は「満洲」という看板を背負っていかざるをえなくなったのである。⁷

牛島春子は「満洲」へ移住した日本人女性の記号であり、彼女は植民地女性の記憶を筆で記録している。坂部晶子が指摘しているように、「植民地という一つの歴史的現実をたんに、歴史的出来事の評価のみに還元してしまうのではなく、そこで生きた人々の経験そのものから評価し、考えていくためには、このような一種の些細な日常性のなかで生きる

れた植民地経験をこそ、分析の俎上にのせてみる必要があるのではないだろうか。なぜなら、どのように重要な転機となった歴史事象も、マクロ歴史の転換点もまた、人々の日常のなかで、それによって支えられ、生きられていたものであるから」⁸である。植民地や戦争の激動を体験した牛島春子の個人の記憶を取上げて分析することを通し、その背景となった植民地時代の理解を豊かにすることができる。一方、牛島春子の記憶に国家や社会歴史が投影している。牛島春子の記憶はどのように日本植民地文学に作用したか、また戦争、植民地支配はどのように牛島春子個人の記憶に投影したか、興味深い課題である。本論文は在満日本人女性作家牛島春子の人と文学を「俎上にのせて」詳しく考察してみるものである。

第二節 研究史の概観

日本側の研究者による「満洲文学」研究は七十年代の尾崎秀樹の先駆的な研究をはじめ、九十年代には西原和海、岡田英樹、川村湊らによって行われた。二〇〇〇年以降、植民地文化研究会によって発行されている『植民地文化研究』は「満洲文学」研究において、前衛的な機関誌である。近年、「満洲」文学研究がブームになり、牛島春子研究においては、坂本正博、多田茂治、川村湊、田中益三、崔佳琪、Kimberly Kono（日系アメリカ人）らの研究者が現れる。

牛島春子の全体像を描こうとする主な研究者は坂本正博と多田茂治である。二人とも春子と交流がある。坂本正博は「牛島春子年譜（第二稿）」⁹を作成し、研究基盤を築いたという面で功績が大きいといえよう。論文「牛島春子年譜作成を通して—その作品評価と書簡紹介」¹⁰「拝泉へのまなざし—旧満洲での牛島春子の作品」¹¹では、春子の「満洲」時代の作品を一つ一つ問い直している。多田茂治は『満洲・重い鎖—牛島春子の昭和史』¹²においては、友人の立場で春子の生い立ちから戦後の仕事までの一生を振り返り、特に戦後の春子の考察に重点をおいている。川村湊¹³、田中益三¹⁴は牛島春子にインタビューをし、記録を残した。疑問点を作家本人に確かめる聞き取りは、研究に貴重な参考資料を提供してくれた。しかし、田中益三によると、春子はかなり意識的に身構えて質問に答えたらしい¹⁵。政治運動で逮捕された経験、植民地経験、いろいろな苦痛を味わってきた牛島春子は「鎧」を脱ぎにくかったであろう。本博士論文は作家の自述と事実の関係を視野に入れて相対化し、裏づけとしての資料と合わせて、いくつかの謎を解明したい。

作品論においては、「満洲」の日本語文学を論じる際に避けては通れない「祝といふ男」を扱う。この作品は牛島春子のほかの作品に比べて、先行研究がやや多いようである。これまで尾崎秀樹、川村湊、黒川創、大川育子、原武哲、尹東燦などが「祝といふ男」を論じている。初めて「祝といふ男」を評価したのは尾崎秀樹の「〈満州国〉における文学の種々相」である。この小説の文学的意義を述べ、その後の評論の視座を基礎づけ、祝の不可解な性格、民族協和の困難さを指摘し、民族問題を正しく受け取られなかった問題点を提起した。

牛島春子の「祝といふ男」はその後芥川賞候補作にえらばれ、『文藝春秋』に再録された。しかしその作品が提起している民族の問題は正しくうけとられず、異国風な面白さといったそっけない評価をうけたにすぎない。¹⁶

また川村湊の『異郷の昭和文学』¹⁷では、祝が日系からも満系からも嫌われるのは「『日本人』的な行動パターン、原理で動いたためであると祝が嫌われる理由について述べた。これに対し、大川育子「牛島春子『祝といふ男』論」¹⁸では祝は日本的というより「むしろ正反対で、日本的な義理人情を無視したから敵視的になった」と正反対の論点を出した。原武哲の「〈満州〉時代の牛島春子」¹⁹は大川の見解に共感を示している。それに『〈外地〉の日本語文学選』²⁰の編者黒川創はその「解説」で日本語が堪能な植民地人の内面の不可解さ、宗主国との関係の危うさを指摘し、牛島春子の政治体験が滲んでいることを主張した。尹東燦の「牛島春子『祝といふ男』論」²¹では「この不思議にさえ思われると、はっきりした内外分別は、実は祝の生き方、信念の現れでもある。つまり、祝が忠実を示そうとするのは満洲国を象徴する権力にであって、それを代表する個々の人間ではない」と祝の不思議な性格を分析した。崔佳琪「牛島春子『祝といふ男』の基礎考察—転載の経過から主人公造型論に及ぶ—」²²は初出及び転載のテキストの改変が祝の人物像に与える影響を論じている。いずれも「祝といふ男」の中国語訳には言及していない。

デビュー作「王属官」については川村湊が『満洲崩壊—「大東亜文学」と作家たち』²³でその作成の経緯を整理したが、作品の解説をしていないし、脚本化されたもの、中国語に訳されたもの、映画化されたもの、漫画化されたものと原作との関連性、相違点が解明されていない。大きな反響を呼んだ「王属官」は、原作者牛島春子の手を離れ、書き換えられた日本語の脚本、中国語訳の脚本、映画、漫画と、多彩な流通を経たが、今までの先行研究では「王属官」の中国語訳は未確認のみである。

小説「女」について、アメリカ学者 Kimberly Konoは「From the Nikutai to the kokutai : Nationalizing the Maternal Body in Ushijima Haruko's "Woman"」²⁴（肉体から国体へ：牛島春子の「女」における母体の国民化）で死産した女の子は「満洲国」の崩壊を象徴していると指摘している。

田中益三の「牛島春子の戦前・戦後」²⁵は牛島春子を追悼する気持ちで、彼女の戦前、戦後の作品を見直した。牛島文学は「男に仮託する、トランスジェンダーによって成り立つ世界である」という見解を示した。しかし、いくつかの資料を合わせて考えると、私は春子の女性意識と行動はそれほど単純に割り切れるものではないと思う。

「満洲文学」の研究が進み、牛島文学の意義が問われつつあり、評価が高まっている状況の中で、新資料を援用し、新たな研究を展開する価値が充分ある。牛島春子の知られていない作品はまだあるし、牛島春子研究の基礎作業はしっかりしているとは言えない。資料の制限で牛島春子文学の全容が見えにくい恐れがあるから、実証調査や散逸作品の収集

が最も重要かつ基礎的なステップであると思う。本博士論文は以上の先行研究を踏まえ、実証研究の方法を用い、以下のような新たな考察を試みる。

(一) 「牛島春子年譜」における事実関係の修正と補充

坂本正博は「牛島春子年譜」を作成し、牛島春子研究の基盤を築き、牛島春子研究の第一人者として、尊敬すべき存在である。坂本正博のおかげで、われわれは牛島春子研究を展開することができた。坂本は「牛島春子との二年間にわたる面談や書簡の往復を通して得られた伝記事項・書誌事項の解説を基として、それと筆者の独自の調査・親族の補訂などを照合し、客観的資料となりえたもののみ表記した」（「牛島春子年譜」）と年譜の客観性を強調した。田中益三や川村湊は牛島春子本人にインタビューをし、その記録を残した。言うまでもなく、それらの資料は牛島春子という女性作家を理解するうえで、信憑性が高いものであるといえよう。フランスの歴史家ピエール・ノラは『記憶の場』で、フランス的国民意識のあり方を探求するという目的で、かつてないほど記憶が問題にされている事態を取上げ、「記憶と一体化した歴史」を分析している。植民者が体験を語る際に、「事後的に」修復していく傾向がある。自分の名誉を保護するために、己を完璧に見せかけるために、事実を歪めたり、構築したりすることを免れない。

ゆえに、本人に確認済みとはいえ、完全に信用できる事実とは限らない。それは個人の記憶の間違いもあれば、虚構の話もあるであろう。裏付けの資料を合わせて考える必要があると思い、二〇一四年十一月、私は実地調査を試みた。調査を通じて、「牛島春子年譜」と食い違った情報や新たな情報を手に入れたので「牛島春子年譜」の訂正と補充を加える試みをする。

(二) 牛島春子の性意識

牛島春子は「女流作家」というラベルが貼られることに反逆し、野田宇太郎宛の手紙には「文学と酔っぱらったやうな文学少女あがりの女流作家なるものに反逆するために、私はさりげなく市井の生活に徹しようとしてゐるのかもしれない」と述べた。春子は小柄で可愛くて、子供を生み、立派に育てた女らしい女であるが、彼女の作品は本人のイメージを転覆している面があり、「女らしくない」「男装心理」であると言われる²⁶。それは春子の性意識と切っても切れない関係を持っている。「満洲」と縁を結び、懸命に生きた女性たちの生はかけがえのないものである。本論文は牛島春子の作品、自家版の『手記—青空と自殺』、野田宇太郎宛ての書簡などの資料を合わせて彼女の性意識を検討してみる。さらに、牛島春子の性意識をどのように作品に投影したかを考察し、旧植民地における女性の振る舞い、中日女性像を浮き彫りにしてみる。

(三) 野田宇太郎の知遇

牛島春子研究はテキスト分析のほかに、彼女の生活、思想を探る必要もあると感じている。彼女は生まれてから死ぬまでどのような人生を送ったか、どのような人と交流し、どのような考えを抱えているか、それらの疑問を解くことは、作品の特徴や意味を正確に読み解くことにつながる。野田宇太郎は牛島春子からの書簡などの資料にも目を配り、大切

に保存していた。それは小説やエッセーで窺い知れなかった春子の内面を伝える記録ともなっている。牛島春子は一九三〇年同人誌『街路樹』で野田宇太郎と知り合って以来、終生親しかった。実は野田は一九二七年十八歳の時、「満洲」、朝鮮へ修学旅行をした。戦時中ではないが、「外地」体験があるといえよう。当時、目に焼きついた「満洲」にはちよつと親友の春子が移住したので、野田は彼女を通して、「満洲」の記憶を継続しようとする気持ちもあったのではないかと推測している。野田は牛島春子の創作を助言し、激励し続けた。彼への書簡などの資料から、川端康成との対面、女性文学についての考え、戦争へのスタンス、春子文学の本質といった重要な情報が読み取れる。

(四) 川端康成との縁

二〇一三年小谷野敦の研究書『川端康成伝—双面の人』²⁷は川端康成の「戦争、最低限の協力」であると評価し、「川端が満洲で牛島春子に会ったのか確認はできない」と疑問を残した。川端康成と在満女性作家牛島春子と今まで指摘されていない縁を手がかりとして、「牛島春子年譜」の修正、春子が川端康成から受けた影響を検討することにする。

(五) 「転向」への意識

今まで牛島春子の「転向」問題は曖昧に扱われ、彼女の「転向」へのプロセスがまだ明らかになっていない。本論文は実地調査を踏まえ、野間宏からの書簡五通、牛島春子『手記—青空と自殺と』（野田宇太郎資料館所蔵）など先行研究には触れられていない資料を入れて検証を行うことによって、牛島春子の「転向」への意識、思想の変遷を検討してみる。「転向」問題についての考察は日本人のマルクス主義体験のプロセスを顧みる面においても有意義なことであれば、在満女性作家牛島春子の本音を理解し、作品を解説する面においても基礎的かつ不可欠なものでもある。ここで牛島春子の作品、書簡、自家版手記などのオリジナルな資料を叙述にしばしば援用しながら、牛島春子の出発の原点に辿りつき、彼女の「転向」意識を究明し、牛島春子文学の本質を考えていく。

(六) 引揚体験

同じく「満洲」女性作家として活躍した牛島春子は八木秋子と違い、沈黙せずに引揚げた直後、続々と「満洲放浪記」を書いたが、牛島春子の引揚体験の全容はまだ究明されていないままである。言うまでもなく、引揚げ体験は決して一様に語れない、多様で複雑なものである。コロニアリズムの真ん中にいた牛島春子はいかに敗戦を受け止めたか、作品中語れなかったことは何か、また、内面化された植民地主義からいかに脱構築したかといった問題を念頭に入れながら、本論文は舞鶴引揚記念館の実地調査を踏まえ、牛島春子が野田宛の書簡と照らし合わせ、彼女の詳細な移動ルートを整理し、牛島春子の「満洲」引き揚げの主題を詳しく検討してみる。

(七) 牛島文学の翻訳と変貌—その一「祝といふ男」

岡田英樹の考察によると、「満洲」時代、中国語に翻訳されたのはほとんど日本近代文学の代表作であり、「満洲文学」の単行本として翻訳され、出版されたのは牛島春子『王属官』と大内隆雄の『文藝談叢』しかなかった。雑誌も同じ傾向を呈したという。このよ

うな社会風潮の中で氷壺は日本の近代文学の代表作でもない「祝といふ男」を訳したのは珍しいことである。翻訳文学は社会的コンテクストと切り離せない密接な関係を持っている。特に植民地の場合、状況は一層複雑になりかねない。牛島春子文学の中国語訳はほとんど知られていない。多民族が共存した植民地「満洲」において、異民族支配、交流には、翻訳は不可欠な手段であり、重要な領域である。にもかかわらず、中国語の雑誌に掲載された日本人の作品の翻訳や中国人読者への受容についての研究はまだ十分とはいえない。それを究明しないと、「満洲文学」の全容が見えにくいであろう。「満洲」文学の翻訳の問題を深く掘り下げることによって、「満洲」ならではの文化構造の複雑性や翻訳の力学が理解できるはずだ。本論文は「祝廉天」と「祝といふ男」の対照研究によって、「満洲」時代ならではの翻訳状況を考察してみる。

(八) 牛島文学の翻訳と変貌—その二「王属官」

今まで関心を寄せてきた作品「王属官」を新たな視点から再読してみる。脚本、映画、漫画と多彩な流通を経て、ドラマチックな運命を辿った「王属官」は微妙に変容しつつある。「満洲」という特定の時空における「王属官」の変容は、決して偶然なことではない。特に、研究対象になっていない「王属官」の中国語訳を取り入れ、その歩みの軌跡を辿ることによって、主旨の変化、登場人物の変容、改作者の動機などの諸問題を究明してみることにする。

(九) 対応する日本語の作品が見つからない中国語の作品

より全面的に牛島春子を究明するには散逸している彼女の作品を発掘して集めることも必要である。「遙遠的訊息（遠くからの便り）」は、今まで誰も論じたことがなく、対応する日本語の作品もまだ見つからない作品である。それを日本人に紹介し、解説することにより、日本人に知られていない牛島春子の一側面を究明してみる。これらの中国語の資料を生かし、牛島春子研究を補充する試みを行いたい。

注

- ¹川村湊『満洲国一砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』 現代書館 二〇一一年
- ²川村湊『牛島春子作品集』「日本植民地文学精選集 021」 ゆまに書房 二〇〇一年 解説四頁
- ³川村湊『満洲国一砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』 現代書館二〇一一年 四十一頁
- ⁴川端康成他編『日本小説代表作全集 10』 小山書店 一九四九年
- ⁵昭和戦争文学全集編集委員会編『昭和戦争文学全集 1（戦火満州に挙がる）』集英社 一九六四年
- ⁶飯田祐子他編『文学で考える〈日本〉とは何か』 双文社出版 二〇〇七年
- ⁷川村湊『満洲崩壊—「大東亜戦争」と作家たち』 文藝春秋 一九九七年 三三六頁
- ⁸坂部晶子『「満洲」経験の社会学』 世界思想社 二〇〇八年 四頁
- ⁹坂本正博「牛島春子年譜（第二稿）」『紋説二（三）』二〇〇二年一月 二〇五～二一三頁
- ¹⁰坂本正博「牛島春子年譜作成を通して—その作品評価と書簡紹介」『朱夏』（十九）二〇〇四年五月 九十四～一〇六頁
- ¹¹坂本正博「拜泉へのまなざし—旧満洲での牛島春子の作品（上）」『紋説二』文学批評（通号一）二〇〇一年一月一四九～一六六頁
- 坂本正博「拜泉へのまなざし—旧満洲での牛島春子の作品（下）」『紋説2』文学批評（通号二）二〇〇一年八月 二一三～二三〇頁
- ¹²多田茂治『満洲・重い鎖—牛島春子の昭和史』弦書房 二〇〇九年
- ¹³川村湊「〈満洲文学〉から戦後文学へ—牛島春子インタビュー」『文学史を読みかえる5』インパクト出版会 二〇〇二年 一〇八～一二五頁
- ¹⁴田中益三の「牛島春子の戦前・戦後」『朱夏』（十八）二〇〇三年六月八十五～一〇一頁
- ¹⁵第Ⅱ部第一章第一節「牛島春子年譜の修正と補充」の部分で扱う
- ¹⁶尾崎秀樹「〈満洲国〉における文学の種々相」『近代文学の傷痕』岩波書店 一九九一年二六一頁
- ¹⁷川村湊『異郷の昭和文学—「満洲」と近代日本』岩波書店 一九九〇年
- ¹⁸大川育子「牛島春子『祝といふ男』論」『昭和文学史における「満洲」の問題第一』
- ¹⁹原武哲「〈満洲〉時代の牛島春子」『近代日本と偽満洲国』日本社会文学会 二〇一四年 三五九頁
- ²⁰黒川創『〈外地〉の日本語文学選』新宿書房 一九九六年 二三七頁
- ²¹尹東燦の「牛島春子『祝といふ男』論」『「満洲」文学の研究』明石書店 二〇一〇年 一九八頁
- ²²崔佳琪「牛島春子『祝といふ男』の基礎考察—転載の経過から主人公造型論に及ぶ—」『現代社会文化研究』二〇一一年十二月 十九～三十七頁
- ²³川村湊『満洲崩壊—「大東亜文学」と作家たち』文藝春秋 一九九七年
- ²⁴二〇一三年四十五号『日米女性ジャーナル』 六十九頁
- ²⁵田中益三の「牛島春子の戦前・戦後」『朱夏』（十八）二〇〇三年六月八十五～一〇一頁
- ²⁶一九四一年五月二十三日 野田宛の書簡による。「こちらでは九文（九州文学） 同人の足利竜平さんと時々お会いしてをります。写真屋さんなので子供と写真とってもらったりしてすっかりいゝ友達です。足利さんが、私の作品と私とがあんまり似つかはしくないので、「男装心理」があるのだらうと指摘されました。」
- ²⁷小谷野敦『川端康成伝—双面の人』中央公論新社 二〇一三年五月 三二四頁

第 I 部 日本女性と「満洲」

第一章「満洲」における女性文学

第一節 移住・進出の機縁と歴史的展開

田中益三『長く黄色い道—満洲・女性・戦後』¹は「満洲」と関わりのある日本人女性達に注目し、映画スター李香蘭、男装の麗人川島芳子、歌謡と女性表象、コミックによる女性たち、満洲体験のある作家（平林たい子、牛島春子、望月百合子）について広汎な考察を行った。田中は「満洲と女性の問題は、コロニアリズム、ナショナリズム、ジェンダーが交錯する地点において像を結ぶ」（二四八頁）と女性と「満洲」の関係の複雑性を主張し、「満洲国時代の庶民的な日本人女性たちは、この東北の地を日本の既得権とみなして渡満した人々であり、ジェンダー的に言えば、戦時下の女、妻、母の役割を一身に引き受けて生きた。男たちに随伴する女たちは、概ね侵略ということに無自覚であり、自らを「一等国民」の一員とみなし、満洲国の民族協和という命題においてすら、優越の意識の範囲内でしか理解していなかった」（二四三頁）と指摘している。本章は「満洲」と縁を結んだ中日女性両方に焦点を当て、その関わりの流れに辿りつつ、「満洲」における女性文学をまとめてみる。

加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』²を参照すると、日露戦争によって日本はロシアが清国から租借していた遼東半島を譲り受け、「関東州」を設けるとともに南満洲鉄道株式会社（満鉄）を設立した。それ以来、満鉄の社員をはじめ、多くの日本人が「関東州」と満鉄沿線の「付属地」に移住しはじめた。

一九三一年九月十八日、奉天郊外の柳条湖で満鉄線路が爆破され、いわゆる関東軍高級参謀石原莞爾らによって謀られた「九・一八事変」が勃発した。この事件をきっかけに、日本は溥儀を操り、「満洲国」を「建設」する道に邁進することになった。日本が直面する人口の過剰、食糧と資源の不足といった国内矛盾を海外に移すとともに中国東北部の豊富な天然資源や農産物などに引きつけられた。「満洲」は国防上重要な位置を占めていたため、日本の経済的、政治的理由によって不可欠なものとみなされ、軍事力によって満蒙を占領統治する方針が下された。朝鮮併合、台湾割譲と異なり、国際世論を避けようと石原らは事変発生からわずか五日後、清朝のラストエンペラー溥儀を傀儡とする「独立国家」の建設を図りはじめた。一九三二年三月一日、「満洲国」が誕生した。「満洲」は戦略防衛基地であると同時に共産主義の蔓延を食い止めるための防波堤でもあった。さらに、日本の国内矛盾を解決するための自給自足圏づくりにも不可欠な地域である。

このような気運の中に、移民のブームが起こった。岩見照代「〈満州〉開拓の光と影—砕かれたユートピア」³は当時の政策と女性団体の活動を詳細に記している。それによると、まず、「国境防衛」のために、「満洲」に農業開拓移民団の送り出しがはじめられた。一九三六年には日本内地における農村経済更生計画の見直しの中で「満洲」農業移民は特別助成事業として認められたが、一九三七年から「二十力年百万戸創出計画」で移民政策は本格化していった。デフレと昭和恐慌による農村の極度の貧困と植民地主義の国家とがうまく結び付けられたわけであるが、この計画が始まった年に、侵華戦争は全面化にエスカ

レートし、日本は完全に戦時体制に突入していった。そのため成年を移民の主力とすることが無理となり、計画二年目からは未成年者も「満蒙開拓義勇軍」として送られ、戦争の激化とともに、移民の主流に変わった。未婚男子で編成された義勇軍の「花嫁」探しが焦眉の急務となった。

女性の軍事後援団体は、これまで華族や上流夫人を対象に組織された「愛国婦人会」があった。また「満洲事変」後の一九三一年に、文部省が後ろ盾となり、「大日本連合婦人会」を発足させた。これは家庭教育を振興し、日本国民の思想善導のために、その結成が促されたものであった。続いて翌年には、「大日本国防婦人会」の結成に至った。これは軍部を背景に軍事援護と家庭国防を課題としたものであり、より広範な女性を戦争協力、国策協力へと向かわせていくことになった。

「満洲事変」は日本国内にとどまらず、植民地「満洲」にもいち早く銃後後援の女性団体を次々と発足させ、早くもそれらの組織をまとめた連合組織「全満婦人団体連合会」を誕生させ、「満洲国」建国後は、これらの女性団体は「大陸の花嫁」の受け入れに奔走した。男女ともに力をあわせて「国策」に沿い、忠実に戦争への道をひた走っていった姿がよくうかがえる。当時、「満洲」には漢民族、日本民族、満族、モンゴル族、朝鮮族の五つの民族が共存した。「満洲国建国宣言」の中で、日満一徳一心「民族協和」の建国精神と共同防衛の国防方針を基調とし、「満洲国」内に住む五つの民族が一心団結し、東亜の永久平和を守り、世界のモデルになるために「王道主義を実行する」ことが明確にされた。「満洲国」建立後、政府当局は政権基盤を固めるには「婦徳を基とする家庭強化、銃後の後援、民族協和」という三つのことが最も重要な任務であると示した。婦人団体の結成及びそれによって「満洲国」国民の半分以上を占める婦人に対する教育、教化の事業は非常に重視されていた。

北田幸恵「女性解放への夢と陥穽」⁴によると、一九三八年八月、作家の筆を以て国民の報国意識を煽動し、国家総動員体制を図ろうとした「ペン部隊」が編成された。中には「紅二点」の吉屋信子と林芙美子も含まれていた。戦況の悪化に伴い、その後、女性作家たちは南方も含めた遠い戦地へ進んで出かけることになった。そこには日本国内の女性たちの代わりに戦場の夫や息子や恋人の姿を自分の目で見て伝えたいという熱意や、女の力量発揮の好機ととらえる意識など、さまざまな思いが動機となった。「ペン部隊」の女性作家のほかに、当時さまざまな女性が、さまざまな事情を背負って「満洲」へ渡った。田中益三が「実験国家満洲国には、政治、制度、建設、産業、技術、その他の領域において日本内地には無い諸々の新しさや知の冒険があり、それに魅了された男たちがいて伴侶となる女たちがいた」と指摘しているように、随伴者として家族と一緒に渡満した女性が少なくなかったが、一方、日本内地で左翼運動にかかわり、弾圧された女性も少なくなかった。それは日本では身を寄せることがなく、やむを得ず、「満洲」へ逃亡した一群である。その地に生き、苦闘を乗り越えて生きた女性たちと「満洲」の関係を究明することは非常に有意義な事である。女性動員には植民地支配のあり方と植民地の人々の状態によって、共

通する側面と異なる側面があったが、植民地に住む日本人女性とその地の女性たちの間にはほとんど交流がなく、別社会をつくっていた。支配と抑圧、指導と被教化の力関係にある民族の壁は男性との壁より深かったといえよう。

第二節「満洲文学」における女性文学

「満洲」の地において中国語、日本語、朝鮮語、ロシア語などの言語による文学活動が行われていたが、その所産は全部「満洲文学」のカテゴリーに属する。それらは中国語と日本語による創作がほとんどであり、主な部分を占めた為、本節は、中日女性文学に注目する。

「満洲文学」の定義について、諸説が残っている。日本では歴史的用語という立場から、通常、括弧付きの「満洲文学」を使用し、中国では「東北淪陥時期文学」と称している。いずれも「満洲国」が傀儡国家、植民地であったという共通認識に基づいた概念であるが、ニュアンスが違うような気がする。中国の言い方からみると、「満洲」はあくまでも中国東北部の一部であり、一時的に陥落されただけであり、独立国ではないという強い反抗意識が含まれている。日本側の学者の中には「満洲文学」について尾崎秀樹、川村湊、岡田英樹、西原和海、田中益三などの論文があった。一九七〇年代「満洲」研究の第一人者尾崎秀樹は次のように述べている。

カッコつきでいわれる「満洲文学」について考えるとき、私はその土地と文化に大きな夢を託していた日本の作家たちと、満系作家の「面従腹背」の夢が、どう交錯したかに興味をそそられる。それは時とともに戦時色の加わる日本国内から脱出し、ロマンチズムの夢を外に求めて、新しい地平にゆきついた日本浪漫派の一群と、プロレタリア文学運動からふりおとされ、みずから裾を分った転向作家の一群が、「王道楽土」の新天地に奇妙な混交を生み出した仇花であったかもしれない。⁵

彼は「満系作家」の「面従腹背」の精神を見抜いたうえで、日本の作家を「浪漫派」と「転向作家」に分類した。作者の政治的主張や作品のモチーフに基づいた分類であるといえよう。この尾崎秀樹の「〈満州国〉における文学の種々相」は「満洲文学」および日本の旧植民地文学について初めての研究書であった。

後に、「満洲文学」は日本の昭和文学の単なる異端児ではなく、むしろ正当な「近代主義」の継承者であると主張しようとしたのは川村湊である。彼も「満洲文学」には主に日本語文学と中国語文学があると認めたが、彼によって提起された「満洲文学」の一部である日本語文学は別の角度から分類された。「日本帝国主義が傀儡政権として中国東北部に樹立したという、いわゆる“満州帝国”（偽満州国）における文学活動全体と、それによって生み出された作品を意味する。それは日本人による日本語の作品と、“満州人”（中国人、主に漢民族）による“満州語”（中国語）による作品に大別される」という。

日本人による日本語作品としての「満洲文学」も、それぞれ性質を異にするいくつかの類型に分類することができる。

一つには、満州を旅行し、その印象や感想や取材したことを、紀行や創作として発表したものであり、これは書かれた題材、素材が満州（満州人、満州の文物）であるという意味での「満州文学」である。

第二のグループは、満州に移住し、居住者として生活しながら文学に携わった人々である。“満州国家”の成立とともに、日本文学とは違った「満州文学」を理想的には作り上げようとした文学者たちである。

第三のグループとして、満州に生まれ、育ち、そして戦中、戦後において日本へと引き揚げてきた人々が、その生活体験、引揚げ経験をもとにして書いた作品がある。⁶

このように、川村は作者の主張を気にせず、「満洲」との関わり方によって、日本の文学者を三つのグループに分類した。

岡田英樹は更に「満洲文学」の日本語文学を大連イデオロギーと新京イデオロギーと分類を試み、大連と新京の地域的な差異を見出した。

日本側の学者の共通的な認識としては「満洲文学」には日本語による創作される日系文学と中国語により創作された満系文学が含まれていることである。この点においては、「満洲文学」概念の統一化が見られる。「満洲」当時の日本人文学者の見方と一致している。

それにひきかえ、中国側の学者王向遠氏は違う考えを持っている。「“満洲文学” 是指在我国东北地区的日本殖民者的文学，它与日本在满洲的殖民侵略活动相始终，是日本在满洲殖民统治的产物。」（「満洲文学」とはわが国の東北地区における日本植民者の文学である。これは日本の満洲での植民侵略活動と深くかかわりがあり、日本の満洲における植民地統治の産物である）すなわち、日本植民者による創作された文学のみ「満洲文学」のカテゴリーに属し、中国人により創作された文学は中国文学であり、「満洲文学」に属さないという考えを示した。さらに王氏は「満洲文学」を偽「満洲国」の成立を境に二つの時期に分けた。「第一期は1905年から1931年まで、すなわち日露戦争後から「満洲国」成立までである。日本植民者の「満洲文学」は一定のパターンと規模を成し遂げた。第二期は1932年から1945年までである。「九・一八」事変以後、特に「満洲国」が建国後、日本植民者の「満洲文学」は新たな段階に入った。アマチュアの自発的な活動から意識的に建国文学、戦争協力文学へと発展しつつある。「芸文指導要綱」に従い、組織的、系統的かつ計画的な発展が見られた」⁷。違う意見を持っているのは蔣原倫である。彼の『創作生涯四十年』には「北満文学の繁栄にはその歴史的条件と地理的要素がある。ハルピンは早くから、中国内地からソ連を結ぶ一つの間駅であり、マルクスレーニン主義思想をわが国に輸入する秘密の通路であった」という論述があった。明らかに、蔣氏は「北満」は中国の一部であり、「満洲文学」は中国語文学だけであると認識した。すなわち、近代中国側

の学者たちは「満洲文学」の概念について、当時日本植民者により創作された日本語文学に限定するか、中国人により創作された中国語文学に限定するかという認識のずれが見られる。「満洲文学」の概念について、意見がまとまらないようであるが、「満洲」は不法な植民地であり、中国の不可欠な領土であるという出発点は変わらない。日本語文学はあくまでも植民者側の文学であり、「外」の存在であり、中国語文学と同じカテゴリーに共存しえないと考えられている。

「満洲文学」の発祥地は大連であり、その担い手は満鉄職員が中心であった。当時大連には三〇人くらいの日本人詩人がおり、日本モダニズム文学の源として知られる『垂』以外の同人雑誌の刊行も計画された。一九二九年、「あかしや短歌会」ができて、この会の主宰者甲斐水棹が女性であったことから「あかしや短歌会」には女性の歌人が集まっていた。男たちとともに「満洲」歌壇を築き上げた。一九三二年、「満洲新女性会」から『満洲女流文芸集』が出版された。『作文』は同年十月に創刊された純文学雑誌であった。主要女性メンバーは三宅豊子、松原一枝などがおり、リアリズム志向の作家が多く、冷静に現実を見極め、「満洲」の民族矛盾、社会問題を暴露しようとする傾向が強い。一九三七年六月、大連で「満洲文話会」が結成され、機関誌『満洲文話会通信』を刊行した。この会は文芸をはじめとする「満洲」の総合文化の紹介、ひいては「満洲」文化の醸成を目指したものであったが、一九四〇年二月、本部が大連から新京に移動すると、国策的な官制文化の道程から避けようのない状況に囲まれていた。一九四一年弘報社の「芸文指導要綱」の発表により、解散の運命を辿った。「芸文指導要綱」は文学者の組織化を管制し、思想統制につながっていく。検閲の目は徐々に厳しくなっていた。また、岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』に従って見てみると、昭和十五年ごろ、中国人文学者の間に「八不主義の恐怖」が広がっていた。「八不主義」とは「時局に対し逆行的傾向を有するもの」「国策の批判に当って誠実を欠き建設的ならざるもの」「民族意識の対立を刺激するもの」「建国前後における暗黒面の描写のみを目的とせるもの」「頹廢的思想を主題とせるもの」「恋愛情事に関しては刹那的、三角関係、貞操軽視等の恋愛遊戯、愛欲描写、変態性欲、或ひは情死、乱倫、姦通等を描写せるもの」「犯罪の描写に当って残虐或は深刻なるもの」「媒酌婦、女給等を主題として歓楽街方面特有の世相人情のみ誇張描写せるもの」⁸である。このような厳しい検閲基準が公布され、文学者や編集者たちは慎んで行動するしかなかったであろう。

文話会が本部を新京に移す前の一九三九年、新京ではもう一つ重要な同人誌『満洲浪漫』が創刊されたが、一九四〇年十一月まで不定期刊ながら四輯が発行されていた。これは旧日本浪漫派の北村謙次郎が創刊したものであり、女性同人には横田文子、牛島春子などがいた。満洲浪漫派の代表人物北村謙次郎の「探求と観照」⁹はまず満洲浪漫派と日本浪漫派との相違点について述べた後、満洲浪漫派は「大陸性への接近、溶解」を探求しようとする精神を述べた。『満洲浪漫』は「満洲文学」においてロマンチズムを追い求めていた。日本浪漫派の核心と離れたところにあつたとしても、リアリズムを卑俗な思潮として反駁

し、幽かにしてやさしい情緒、伝統ある美意識を多用した。やがて「満洲」文壇において『作文』と並び、二大同人誌となり、「満洲」の文学史上に大きな役割を果たした。¹⁰一九三七年在満日本人作家の間で、「満洲」の土地から「満洲」ならではの独自の文学を創造しようとする人々がしばしば見られたが、その中には女性の姿が見られなかった。ちょうど「満洲独自文学論争」が盛んに行われていたころ、「満洲」へ移住する日本人女性が急増していく。「満洲」の地と縁を結んだ日本女性文学者は大雑把に三種類に区分される。

(一) 旅行者として通り過ぎた女性

与謝野晶子、矢田津世子はこの類に属している。

一九二八年、与謝野晶子は夫の与謝野鉄幹とともに満鉄の招待で、「満洲」を四十数日にわたり、旅行した。その時の見聞を紀行文『満蒙遊記』に書き留めた。彼女は弟のために『君死にたまふことなかれ』という反戦の歌を書いたが、最後まで反戦意識を貫かなかった。「九・一八事変」の勃発以降、与謝野晶子は「満洲国」を擁護し、戦争翼賛の作品を発表した。彼女の女権主義の作品は周作人により、中国語に翻訳され、「五・四運動」後の中国女性の近代化を促進した。矢田津世子は、美人女性作家として、坂口安吾との感情の葛藤で語られることが多いようである。一九三二年矢田津世子は坂口安吾と知り合った。翌年の一九三三年、共産党への資金援助という罪で検挙され、拘留された。彼女は旅行者として何回も「満洲」に渡ったことがあり、その見聞が『矢田津世子全集』に収録されている。

しかし、当時、本格的な「満洲文学」として期待されたのは「満洲」の地に永住する人達による創作された文学である。一九四〇年八月菊池寛、小林秀雄らは「満洲」を訪れた。満洲文話会は茶話会を行った。そこで菊池寛の発言は「満洲文学に寄す一文話会茶話会の談話要旨」にまとめられ、『満洲新聞』に掲載された。

最近満洲は作家達に新しい題材を提供してをり、既に数々の満洲を描いた作品が生まれてをります。が、まだ本当に深い作品はないやうに思はれます。之は日本から満洲に来る作家が旅行者の慌ただしい眼でしか観て行く暇がない為であって、夫よりも此の満洲に二年なり三年なり住む人達更に永住する人たちの上に期待が持たれるのであります。

11

日本文芸家協会会長の菊池寛は「満洲」在住の人達の「深い作品」を期待する意を表明した。また菊池寛らの芥川賞選考委員が、当時の時代状況に追従し、「満洲もの」に選考の焦点を絞った。一九三〇年代の芥川賞作品はほとんどそうであることは近代日本文学史研究で究明された事実である。

(二) 息苦しい日本国内の生活から脱出し、新天地を開こうと「満洲」に根ざした女性

平林たい子、牛島春子、永嶋暢子、横田文子、八木秋子、望月百合子、三宅豊子らはこのグループに属している。彼女達は日本で失意に沈み、脱出し、「満洲」に亡命した。

平林たい子は「満洲」進出の先駆者であり、一九二三年関東大震災に際し、不穏分子として予防検束され、恋人の山本虎三と一緒に刑務所に留置されたが、東京を離れることを条件に釈放され、「満洲」へと脱出した。牛島春子は労働組合運動に参加し、二回も検挙され、執行猶予の身で牛嶋晴男と結婚し、渡満した。永嶋暢子は一九二〇年新婦人協会に参加し、女性解放運動、労働運動に身を投じ、検挙され、一九三八年、夫と別れ、自殺未遂の失意の果て、「満洲」に逃げた。八木秋子は一九三一年に農村コミュン建設に力を注ぎ、逮捕され、出獄した。一九三五年、可愛がっていた甥の自殺でショックを受け、深い失意にあった。一九三八年、「満洲」に行き、就職した。横田文子は、一九三八年六月、二十八歳の時、大連に到着した。「これは『日本浪漫派』の同人で「満洲」文壇に勢力のあった北村謙次郎に誘われたことが契機だったが、このさそいに文子が応じたのは、日本内地でのデカダンスな生き方が出来なくなっていたためであった」。¹²望月百合子は女性解放運動に専念し、脊椎カリエスを病んだ。持病を抱える中、どん底の貧乏生活を送っていた。苦境を打開するため、望月夫婦は新宿で仏英塾を経営したが、挫けてしまった。一九三七年、夫の古川は渡満し、国策商事会社大興会社に勤めた。一九三八年、望月百合子は「満洲」に渡った。三宅豊子は関東大震災直後の十一月に「満洲」に赴き、結婚した。¹³在満日本女性文学者たちの交流について、資料の制限がある。東栄蔵『横田文子 人と作品』（一九九三年）によると、横田文子は『女人芸術』で親しかった望月百合子の紹介で『大新京日報』の記者となった。そして、その年の秋に北村謙次郎らを中心に創刊された『満洲浪漫』の同人となり、「満洲文壇」の人々との交流が広まったという。望月百合子の『女人芸術』以来の友人、芥川賞候補作家横田文子、アナキーストの八木秋子、永嶋暢子など、『女人芸術』同人少なくとも四人が「満洲」に移住した。『八木秋子著作集』の中に、親交した「永嶋暢子さんの思い出」というエッセーがある。それによると、永嶋暢子は一九三八年十一月、八木秋子を頼りに「過去の凡てから離脱して出発したい気持ちで」「満洲」に渡った。『月刊満州』という大衆雑誌の編集をやっていた。のちほど、機関紙『鉦工満州』の編集に携わった。ソ連参戦後の混乱の中、八木秋子と永嶋暢子は離れ離れになってしまった。引き揚げ後、しばらくして知らされた永嶋暢子の死は八木の心を深く傷つけた。一方、牛島春子は同時代の女性作家と交流が少なかった。川村湊「〈満洲文学〉から〈戦後文学〉へ—牛島春子インタビュー」によると、「祝といふ男」は『満洲新聞』に連載される時、山田清三郎の関係で、在満作家と会ったことがある。牛島春子本人は次のように、語っている。

十人あまり、連載するのにね。あの時にひととおりにお会いしたと思いますけどね。（中略）、それは日本人だけじゃなくて、「満洲人」も、皆さんいっしょだったんですね。（中略）、しかし、私は意識してああいう方たちと付きあうのを避けていましたから。作家でございという雰囲気あまり好きじゃなかったですから。日本からも川端さんもそうだけれど、たくさんの作家がたびたび見えられましたね。顔ぐらいはだしましたが、

ほとんど覚えていませんね。¹⁴

牛島春子の親友野田宇太郎に宛てた書簡などに目を通してみたら、同時代の女性作家との交流に言及していない。「作家でございという雰囲気あまり好きじゃなかったですから」、ほとんど交流がなかったわけであろう。しかし、本論文の第Ⅱ部第一章第四節で詳細に考察するが、実は牛島春子は川端康成と「不思議な縁」があり、戦後まで付き合い、川端から大きな鞭撻を受けていた。インタビューで牛島春子は意識的に川端との関係を隠した。それは牛島春子の個性と関わっている。第Ⅱ部第一章第三節で詳述するが、野田宇太郎に宛てた書簡で牛島春子の性質が読み取れる。彼女はネガティブな人であり、注目されると縛られるおそれがあるから、名利に無欲なわけである。

私といふ人間は、昔も今も真赤に身内を燃やししながら、軌道を邁進せずにはをかぬ機関車で、私は自分を文学人のキャテゴリーで考へたことはあまりありません。私はただ私といふ人間の生きる道を考へてゐる丈なのです。昔にかはった手紙が今の文学と云いませうか。(中略)、ジャーナリスチックな名声はすこしも欲しく思いませぬし、又そのやうなものは私を縛り付けてしまふばかりだと思ひますが、自分の魂のありか丈は知ってもらいたいと思つてゐます。文学をやる以上、やはり社会的な実践だからです。¹⁵

「満洲」は日本女性作家にとって「亡命の地」であり、「流謫の地」でもある。「満洲」もそれなりに彼女達を受け入れる土壌が形成され、左翼人士の吹き溜まりになっていた。女性たちは「満洲」で自分の居場所を見つけ、自己実現するきっかけを得た。過去のプロレタリア意識は簡単に変えられるものではなく、「満洲」に渡っても、「転向」しない芯が強い女性がいれば、「転向」しても、労働者階層や弱い者への同情、暗黒面の摘発に注目し続けた女性もいる。彼女たちは「満洲」文壇で活躍しているかたわら、『輝く』『女人芸術』といった日本内地の女性誌にも投稿をしている。旅行者達と異なり、彼女たちは「満洲」内部からのまなざしで物事を観察してきた。昭和前期、左翼の日本女性たちが持っているマルキシズム、アナキズム思潮、及び女性解放思想は「満洲」の地に渡り、コロニアリズムの介入により、ある程度の変化が現れていた。思想弾圧の苛酷さと植民地「満洲」で指導民族として、矜持と相対的な「自由」、相対的な「富」を持っていたことと関係があるのではないか。牛島春子は当時日本人を取り巻く状況を論じた。

考へようではあの動乱の満洲は何といふロマンチックな一時期だったことでせう。私達は家に住みながら、家賃を払う訳でもなく、電気や水道を使ひながら料金取りもこず、つまりそういった一切の世俗的な煩はしさから解放され、街には私たちのほしいと思ふありとあらゆるものが惜し気もなく露店に並べられて客を呼んでゐるのです。その中で日本人は過去を忘れ未来を思はず、ただ思ひたいことを思ひ、したいことをしても、誰

れもそれを兎や角いふものもみませんでした。それは本当に空想か童話ででもなければ今の世にあり得ないやうな世界を現出してみました。¹⁶

ここから内地で規制された身は指導民族としての日本人女性の裕福な生活ぶりに変化していることが伺われる。

(三)「満洲」で生まれ、また、幼少期はそこで過ごした女性

代表的な人物は松原一枝である。彼女は大連を故郷にし、「満洲」に対する愛着が深い。松原一枝は、一九三七年、二十二歳まで、「日本へ遊学していた期間をのぞき」両親とともに大連に暮らした。いわゆる「満洲二世」である。彼女は大連を故郷と呼ぶ、自称「大連人」である。「満洲」滞在中、『満洲文芸年鑑』に「紅葉」「桔梗の季節」を寄稿した。一九四三年『雲は風を孕んで』を刊行する。戦後、『お前よ美しくあれと声がする』によって田村俊子賞を受賞していた。『幻の大連』『大連ダンスホールの夜』といった大連関連の作品が出版されていた。多感な少女時代を「満洲」の地で過ごした彼女が記憶を辿り、歴史書にはない貴重なリアリティを再現した。

一方、中国側の女性は「五・四運動」の時、ロシア文学、革命後のソ連新文学も流入していた。厳しい状況の中で、ナショナリズムや国民国家を建設しようとする意識は中国近代文学の覚醒を促した。魯迅の「狂人日記」は、中国にはじめて近代文学が誕生した証である。「満洲」で中国文学が芽生えたのは一九二〇年代の初期であった。植民地の朝鮮、台湾には、日本語による創作が強いられた。「満洲」で日本語強制教育も行われていたが、そこまで強制されることはなかった。新しい文学運動による結社や刊行物が次々と現れてきた。

一八九四年の甲午中日戦争（日清戦争）以降、教育の重要性が認識され、梁啓超¹⁷をはじめとする維新派は女性教育の問題に関心を寄せ、清政府に提案した。女性の新しい思潮の芽生えにもつながり、中国近代の女性解放運動は次第に醸成されていく。中国東北部の広大な大地は朗らかで強靱な女性を育ててきた。

一九〇七年からの女子学校の続出は女性作家の誕生を促した。「五・四運動」前後、中国女性作家の多くが女子学校に入学した。また、歴史的な勢いで女性も留学に関心を示すようになった。日本への留学はブームになり、中国女性たちは新しい思想や知識を身につけるために、勇ましく海を渡った。その上、一九一八年五月に周作人により翻訳された与謝野晶子の「貞操論」が『新青年』に発表された。中国の女性の近代化、女性解放に大きな影響を与えた。近代女性文学の発展に適した土壌を醸成した。

一九三〇年代になると、東北地方には数多くの女性作家が登場してきた。当時の中国人の考えでは「満洲文学」とは中国人が書いた中国語文学だけである。「満洲」の中国人女性作家呉瑛が書いた「満洲女性的人と作品」（「満洲女性の人と作品」）の中には中国人女性作家だけ取り上げて論じていた。当時、よく知られたのは蕭紅、白朗、梅娘、呉瑛、藍苓、但娣、朱提、左蒂、楊絮、氷壺、君頤、苦土、乙卡などである。

当時、日本が中国への侵略を始め、「満洲国」を建国し、さらに全面侵華戦争へと戦域を拡大していった時代であり、中国国内においては、封建体制が崩壊を始め、民主主義が芽生えると同時に民族意識に目覚めていった、まさに激動の時代であった。抑圧された彼女たちは女性を取り巻く環境を暴露し、筆で心境を訴え、女性による創作活動が非常に活発になっている。一方、一九四四年、女性満洲社により、大内隆雄編纂の『現代満洲女作家短編選集』も刊行された。太平洋戦争勃発後、「大東亜文学者大会」は三回も開催されたが、中には「満洲」女性作家代表の姿もいた。女性たちの文学活動は「満洲」では無視できないような存在になっていた。

最も代表的な女性作家群は「満洲左翼女性作家群」である。「九・一八事変」（満洲事変）以後の中国東北部に蕭紅、白朗などの女性文学者は傀儡国家成立で故郷を失った亡国の思いが濃く、自らの体験や見聞をもとに、日本占領下の東北の現実を描き、貧しい農民たちが救国抗日に立ち上がる様子を記録した。

ストレートに反日したため、左翼作家群の活動範囲がだんだん狭くなり、逮捕され、殺される人が続々と出てきた。後に、彼女達は思想弾圧や言論統制から逃れようと、関内に逃亡した。もう一つ重要な作家群は「満洲新進女性作家群」である。彼らは当時「満洲文学」の主流であり、「五・四運動」の影響を受け、新文学創作を自分の責任とした。主に『明明』『芸文志』作家群と『文選』『文叢』作家群からなる。『明明』は一九三七年三月、月刊満洲社の社長城島舟礼の協力で創刊された中国語雑誌であった。最初は文化総合誌として出発したが、第一巻第六期から純文学誌に変身し、「満洲文学」に新しい血液をもたらした。彼らは「写与印」主義、「方向のない方向」を唱え、文学の繁栄のために特定の主義を持ち込むことに反対した。『明明』の同人は後に『芸文志』派に発展した。女性同人には君頤、苦土、楊絮らがいる。「明明・芸文志女性作家群」と対立するのは「文叢・文選女性作家群」である。女性同人には呉瑛、梅娘などがいる。彼女たちは暗黒な現実を暴露することを目的とした。

第三節 「満洲崩壊」と女性作家たちのその後

一九四五年八月十五日正午、歴史上、「満洲」は重大な転換点を迎えた。昭和天皇の「玉音放送」とともに「王道楽土」「五族協和」という壮大な夢が破れた。牛島春子はそれを聞いた瞬間、「声をあげて泣きだし、泣いてしまうと今度は笑いだした。子供がびっくりしてのぞいていた。あの詔勅が終わった瞬間に、まるで“しんきろう”でもあったように満洲国というものが消え失せたのを私は悟り、その奇妙な感じがおかしくてしかたがなかった。満洲国民だと思って暮らしていた自分もついでにおかしかった。おかしがりながら之でよいのだと感じていた」¹⁸。上林猷夫も「戦争が終わった時」という詩に「満洲崩壊」時の苦境と自らの心境を記した。

不幸な戦争が終わった時
私は若い時から集めたベートーベンやモーツァルトのレコードを
もてるだけ風呂敷に包んで
焼跡の壕舎を出た。
やっとのことで窓からすし詰め列車に乗り
家族のいる村へ急いだ。
列車は途中駅で止りいつ動くともわからなかった。
食べものを探しに改札口から出ようとする
朝鮮人の一団が私を囲んで口々に
「お国の人ですか」と懐かしそうに呼びかけた。
私は首を振った。
その時
私は自分に国籍があることを
はっきりと知った。¹⁹

これまで信じていたものが崩れることによって、信仰の揺らぎに伴う語れない戸惑いなど複雑な気持ちをもっている人が少なくなかったであろう。「満洲崩壊」は女性たちの問題にも連鎖していく。慰安婦問題、残留孤児問題といった後遺症は消えることなく、今日に至っても、この驚天動地の出来事で、女性作家たちを悲惨な生の軌道に導いていった。女性達は戦中に持ち上げられながら、戦後には簡単に見捨てられしまったといえよう。「満洲国」は日本の大陸侵略の産物であり、国家ごと夢見た壮大なロマンチックな蜃気楼でもあり、その代償もまた大きく個人に降りかかった。女性たちは傀儡国家という収奪した土地に住み、植民者の利権によって生活したが、侵略ということに無意識で、究極には他者としての異民族を理解していなかった。「満洲」体験やその後の「満洲崩壊」について喪失と恥辱の記憶のゆえか黙して語らぬ女性作家もいれば、贖罪意識で書き続けた女性作家もいる。

芥川賞候補作家であった横田文子は『大新京日報』に勤務していたが、一九四六年、子供三人とともに郷里の飯田市へ引き揚げた。夫は出身地の佐賀県へ引き揚げた。文子は飯田の小さな信州日報社の記者となり、一九五一年まで勤めた。敗戦直後の窮乏の中を女手一つで三人の子どもを育てるのは大変なことであった。ちなみに、一九五〇年秋から冬にかけて執筆されたと推定される未発表小説「奈落の章」には、その貧窮生活の惨めさが書かれている。一九五二年春、文子は諫早市に移った夫のもとに子どもと赴き、一家団欒六年間暮らしたが、一九五七年五月、夫との別居を決意し、三人の子どもを引き取って上京した。このとき、文子は四十七歳であった。そして日本電気協会新聞部に就職し、『電気年鑑』の編集の仕事をしたが、三人の子どもをそれぞれに育て上げた。一九七二年に十五年間勤めた日本電気協会新聞部を定年で退職したあと、成人した子ど

もたちの同居の薦めを断り、フリーの校正の仕事などをしながら自由な一人暮らしを続けていたが、一九八五年五月四日に急性心不全で七十五歳で一生に終止符を打った。戦後の横田文子は、戦前の作品を超えるものが書けなかったため、彼女の文学は埋もれてしまった。²⁰

望月百合子は「満洲」に移住した後、新京の女性文化向上をめざし、女性のための私塾の創設や読書会などの啓蒙活動に積極的に取り組んでいたが、敗戦後は、人種、階級の差別なき「王道楽土」という「満洲」建国精神にかけた希望を否定することなく、ソビエト・ロシアの共産主義、中国の共産主義を批判する態度が変わらなかった。（『新しい神様の国』）望月百合子は一九四八年一月、アメリカ領事館に助けられ、引き揚げ飛行機で北京に脱出し、このときの記憶が『夢』に集められた短歌の最後のものとなっている。「内戦の銃火にしばし 飛び立たぬ 機窓につきぬ 名残り惜みし」（『夢』）、塘沽から日本に帰る引き揚げ船に乗ったのは六月であった。²¹その後、望月百合子は女性解放運動に力を注いだが、それは戦中、中国人女性に宣伝したものと異なっている。望月は長い間、「満洲」のトラウマを抱えて沈黙し、一九六四年『幻のくに』一九六七年『夢』一九八八年『限りない自由を生きて』といった歌集を発表した。彼女は「満洲」の刻印を確認し、「満洲」の記憶を呼び起こそうとしていて、自己再認識の次元に昇華している。

また『女人芸術』以来の友人でアナーキズムの実践活動で逮捕され、出獄した八木秋子（満鉄新京支社、庶務課に勤務）も混乱のなか、一九四五年に引揚げている。ソ連参戦後の混乱の中、八木秋子と親友の永嶋暢子は離れ離れになってしまった。引き揚げ後、しばらくして知らされた永嶋暢子の死は八木の心を深く傷つけた。「満洲」体験が封印されたまま、一九八三年四月三十日に波乱の多い八十七歳の生涯を閉じた。

「満洲」はマルキシストの永嶋暢子にとって、憧れのソビエト・ロシアに隣接している所である。彼女はソビエトに越境さえしようとしたが、「満洲崩壊」後、彼女はソ連軍による略奪と暴行の対象になり、直接被害者になった。絶望の日々になお難民孤児の介護に力を尽くした永嶋はその冬を生きて超え、帰国することはかなわなかった。一九四六年、新京で悲劇的な自殺を選んで四十七年の生涯の幕を閉じた。三宅豊子は日本の交通公社満洲支社編集部員として奉天で敗戦をむかえ、引き揚げた後は貸本屋を営む。引退後も死の直前まで彼女のかたわらには歌があった。戦後、『貸本屋日記』や『朱の落葉：歌集』を執筆した。彼女は「満洲の生活十七年」²²に「私はふるさとの東京をなつかしみ乍らも、いつかそこへ帰らうなどとは夢にも考へず、この地で貧しい生活を営むためあくせく働いてゐる。この地に骨を埋めようといふやうな立派な覚悟があるわけではなく、そんな悲壮な覚悟など要らない程、ごく自然にもうこの地で果てる気もちになり切つてゐる。私の満洲への愛着はもはや肉親的な感情になつてゐるらしい」と「満洲」に対する愛着の深さを述べた。そこで、再び戻れない故郷への郷愁に苦しみながら、新天地に完全に溶け込めないまま、自己と他者のどちらにも帰属しないまま、変容を遂げた。結局、自らの心象が日本の郷土、

「満洲」の「郷土」のいずれにも根を下ろすことができなかった。「満洲」は日本女性たちにとって、単純に支配的な性的な他者だけではなく、自らの生や性と深く関わってきた複雑な空間でもある。

以上見てきたように、「五族協和」を謳い、建国された傀儡国家「満洲国」、日本内地から押し寄せた女性たちはいかにして夢を追い、その崩壊を体験したかが窺える。日本人女性作家たちはジェンダー的差別のないユートピア「満洲」に憧れ、出かけ、翼賛の姿勢が強く押し出されていた。引き揚げ後、トラウマから回復するのに時間がかかった。かつての「満洲」体験を封印し、語りたくない傾向があり、戦後、復興へと向かう風潮で、「満洲」を生きた女性作家はほとんど筆を投げ、一刻も早く忘れ去りたい過去として遠ざけられた。

しかし、その中では牛島春子が例外的な存在である。本節冒頭部で書いてある牛島春子は一人で営口の疎開先で敗戦の詔勅を聞いた時の反応である。第Ⅱ部第二章第四節で詳しく考察するが、「満洲崩壊」後、彼女は三人の子どもを連れ、一年近くの放浪生活を経て、瀋陽で行き先を知らない疎開列車から降りて、営口から船に乗り、一九四六年七月一日舞鶴に引揚げた。こんな奇跡的な生を得た牛島春子は、引き続き作品を書き続けている。引揚げ体験、少女時代、政治運動時代及び「満洲」時代を振り返り、回想的なものがほとんどである。それらの作品を通じ、一人の女性として自ら戦時と戦後をどのように認識したか、また、戦後に戦争をどのように総括したかをうかがい知ることができるであろう。戦後続けて文学者として活動しているほとんど唯一人といってよい作家である。（他には男性作家秋原勝二がいる）牛島春子は一つの記号として、女性と「満洲」の関係を認識するうえで、一つのケーススタディーになる。本論文第Ⅱ部では、牛島春子を中心に考察してみる。

一方、「満洲」の中国人女性作家も「満洲崩壊」で大きな災いに遭わされた。但娣は自らの遭遇に対し、不満を持っていた。「私は解放後書かれた『中国現代文学史』を二冊読みましたが、いずれも淪陥時期の文学については一言も言及していませんでした。なぜ書かないのか、淪陥時期の作家はすべて〈漢奸〉文人だと思っているのでしょうか。淪陥時期の作品はすべて敵に奉仕するものだと思込しているのでしょうか。これは東北淪陥時期の文学に対する不公正な見方であり、東北淪陥時期の文学者に対する大きな侮辱であります」²³。岸陽子「〈満洲国〉の女性作家、但〔娣〕を読む」²⁴によると、一九四五年八月十五日、日本の敗戦によって但娣はやっと自由の身となったが、「満洲国」崩壊後の彼女の人生も平坦ではなかった。長春電影公司の前身である東北電影公司に脚本家として勤めながら、十二月に創刊された月刊文芸雑誌『東北文学』に「血族」「没有太陽的日子」（「太陽がない日」）などの小説を發表した。そのころ、同じ東北電影公司のニュース映画科の科長陳致遠と結婚した。内戦の激化とともに、彼女は組合の夫人部長として、傷病兵の慰問など後方活動に挺身した。ところが、一九四七年の秋、二人の青年をかばったことによって「二人の政治犯」の黒幕と疑われ、三ヶ月軟禁されたあと、ジャムスの監獄に一年半

収監された。連累を恐れた夫は、彼女と離婚し、再び愛した人に裏切られた但娣は憤りと孤独感で苦しんでいた。彼女の名誉回復がなされたのは、一九四九年九月、中華人民共和国成立の直前であった。新中国成立後、チチハル第一中学校の教員、黒龍江省教育庁などを経て、一九五三年一月、黒龍江省文聯で『北方文学』の編集を担当した。また黒龍江省作家協会に所属し、一九五七年ごろから田琳の名で、エッセー「不没氷排」やルポルタージュ「女生産隊長」など、新しい時代の到来を謳歌する作品を次々と発表した。しかし、不幸なことに一九六六年から始まった「文化大革命」は三度も彼女を獄中に送り、一年半の監獄生活を余儀なくされた。一九七九年の名誉回復まで十二年間、創作の自由を奪われていた。

また、岸陽子「〈満洲国〉の女性作家 梅娘を読む」²⁵によると、梅娘は第三回大東亜文学者大会に出席し、「蟹」が大東亜文学賞を受賞した。新中国成立後、これらの日本との深いかかわりが梅娘に大きな災いをもたらした。日本の敗戦後、柳龍光は家族とともに中国台湾へ渡った後、家族を置いてまた大陸に戻り、上海から中国台湾に戻るとき、船の事故で死去した。妊娠している梅娘は二人の子どもをつれて中国大陸へ戻り、一九五一年末、国務院農業部所属の中国農業電影製作所に配属された。しかし、一九五五年の「反革命分子肅正運動」から一九七八年の名誉回復まで二十三年間、「文革」を経て二人の子どもを失い、あらゆる辛酸を嘗めた。一九八六年、山丁に編集された『長夜螢火』が出版され、当時の梅娘の作品も収録され、さらに、一九九八年には、梅娘の作品は中国現代文学館の編んだ叢書『中国現代文学百家』の一冊に選ばれ、中国文学史に一席を占めた。二〇一三年、死去した。

以上、まとめているように、「満洲国」の崩壊は中国人女性作家にも日本人女性作家にも大きな災いをもたらした。「満洲」を生きた女性たちは歴史の証言者であり、かけがえのない存在である。第Ⅱ部で戦争と植民地の激動を体験した牛島春子に焦点を当て、彼女の人と文学を詳細に検討してみる。

注

- ¹田中益三『長く黄色い道—満洲・女性・戦後』せらび書房 二〇〇六年
- ²加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』朝日出版社 二〇〇九年
- ³岩見照代「「満洲」開拓の光と影—砕かれたユートピア」『私たちの戦争責任』東京堂出版 二〇〇四年 八十九～一〇一頁を参照
- ⁴北田幸恵「女性解放への夢と陥穽」『私たちの戦争責任』東京堂出版 二〇〇四年 一三六～一五二頁を参照
- ⁵尾崎秀樹『『満洲国』における文学の種々相』『旧植民地文学の研究』勁草書房 一九七一年
- ⁶川村湊「日本における「満洲文学」研究の現状」『近代日本と「満洲国」』不二出版 二〇一四年
- ⁷王向遠『“笔部队”和侵华战争：对日本侵华文学的研究与批判』北京師範大学出版社 一九九九年
- ⁸岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』文研出版 二〇〇〇年
- ⁹一九四〇年東都書籍新京出張所による出版された『満洲文学研究：評論随想』六十一頁
- ¹⁰葉山英之『「満洲文学論」断章』三交社 二〇一一年を参照
- ¹¹一九四〇年八月の『満洲新聞』による
- ¹²東栄蔵「横田文子の文学の特質」『横田文子人と作品』信濃毎日新聞社 一九九三年
- ¹³川崎賢子『読む女 書く女—女系読書案内』白水社 二〇〇三年、八木秋子『異境への往還から—八木秋子著作Ⅲ』一九八一年を参照
- ¹⁴川村湊「〈満洲文学〉から〈戦後文学〉へ—牛島春子インタビュー」『文学史を読みかえる5』インパクト出版会
- ¹⁵一九四一年三月一日野田宛の書簡
- ¹⁶牛島春子「手紙」『九州文学』一九四六年
- ¹⁷梁啓超（一八七三～一九二九）中国近代の政治家、思想家、啓蒙家である。
- ¹⁸牛島春子「ある微笑—日中不再戦植樹に思う」『牛島春子作品集』二九二頁
- ¹⁹『コレクション戦争と文学9 さまざまな8.15』集英社 二〇一二年
- ²⁰東栄蔵『横田文子人と作品』信濃毎日新聞社一九九三年を参照
- ²¹田中益三『長く黄色い道—満洲・女性・戦後』せらび書房 二〇〇六年を参照
- ²²一九四〇年八月『満洲新聞』による
- ²³一九九一年五月中国長春にて「東北淪陥時期文学国際学術シンポジウム」での発言
- ²⁴岸陽子「〈満洲国〉の女性作家 但〔デイ〕を読む」『アジア遊学 日中から見る「旧満洲」』二〇〇二年十月 一〇二～一一三頁
- ²⁵岸陽子「〈満洲国〉の女性作家 梅娘を読む」『環：歴史・環境・文明10』二〇〇二年 三十九～四十八頁

第Ⅱ部「満洲」に根ざした牛島春子を中心とする考察

第一章 牛島春子の特質—戦中から戦後へ

第一節 「牛島春子年譜」における事実の修正と補充

「満洲」時代の女性作家として近年注目されてきた牛島春子は短編小説「王属官」で『満洲文壇』にデビューし、「祝といふ男」で芥川賞次作となり、「満洲」ゆかりの女性作家である。彼女は旅行者ではなく、十年ほど長期間にわたって植民地に住み着き、彼女の視点は内から「満洲」を見極めていたわけである。夫の特権的な身分による業務上の便宜もあり、副県長夫人として多種多様な事件をまのあたりにする事も多く、より深く「満洲」社会の真相を掘り下げられる立場にあったと言える。牛島春子について考える場合、「満洲国」官僚の妻であったということは考慮に入れるべきである。大内隆雄『満洲文学二十年』ではこの夫婦のことを「にたもの夫婦の牛島一家」¹とうまく言い当てている。

牛島春子は「満洲」へ移住した日本人女性の記号であり、彼女は植民地女性の記憶を筆で記録している。「満洲」に渡る前に、春子は日本で左翼運動に参加して、検挙され、さらに入獄した。「転向理由書」を書かされ、本人は川村湊のインタビューで「国外逃亡という感じ」で新天地「満洲」に渡ったと言っている。「外地」にいる牛島春子はずっと「内地」に憧れ、親友の野田宇太郎と文通し、日本の状況を把握していた。七十九通の野田宛の書簡は彼女が書こうとして書かなかった物語を読むことを可能にさせる。一九四四年六月二十八日野田宛の書簡で自らの心境を述べている。「生活の根はもう満洲に下りてしまったやうです。でも、内地に憧れる気持ちは、これは永久のもんですけど…」。また、牛島春子は不思議な縁で川端康成とも知り合って、戦後まで深い交流があった。春子研究を通じて、文豪の川端康成がどのように「外地」や植民地主義を受け止めたかという問題も浮かび上がってくるであろう。引揚後、牛島春子は沈黙を選んだほかの在満女性作家と異なり、書き続けていた点で特筆される。

日本側の研究者による「満洲文学」研究は七十年代の尾崎秀樹の先駆的な研究をはじめ、九十年代には西原和海、岡田英樹、川村湊らによって研究が行われた。二〇〇〇年以降、植民地文化研究会によって発行されている『植民地文化研究』は「満洲文学」研究において、先駆的な機関誌である。近年、「満洲」文学研究がブームになり、牛島春子研究においては、坂本正博、多田茂治、田中益三、崔佳琪、Kimbely Kono（日系アメリカ人）らの研究者が現れてきた。

中日側の新たな資料に基づき、更なる研究を展開する価値がある。本論文は以上の先行研究を踏まえ、事実関係の指摘など新たな論点を提出したい。坂本正博によって作成された「牛島春子年譜（第二稿）」は牛島春子研究の基盤を築いた面で、功績は大きいと言えよう。「牛島春子との二年間にわたる面談や書簡の往復を通して得られた伝記事項・書誌事項の解説を基として、それと筆者の独自の調査・親族の補訂などを照合し、客観的資料となりえたもののみ表記した」と坂本正博が年譜の客観性を強調した。田中益三や川村湊は牛島春子本人にインタビューをし、その記録を残してくれた。それらの資料は牛島春子という女性作家を理解するうえで、不可欠で信憑性の高いものと考えられるが、春子が田

中の質問に対し、必ずしも心を開いて素直に応答せず、そこには身構えている姿があった。田中益三はそれに気付き、「インタビューの時、牛島さんも言葉を選んで慎重に発言しているようで少しもの足りなかった」²と記した。

ここでフランスの歴史家ピエール・ノラ『記憶の場』が想起される。ピエール・ノラはフランス的国民意識のあり方を探求するという目的で、かつてないほど記憶が問題にされている事態を取上げ、「記憶と一体化した歴史」を分析している。³記憶する意志が存在しているため、植民者が体験を語る際に、記憶の間違いも否認できないとはいえ、「事後的に」修復していく傾向がある。完璧に見せかけるために、事実を歪んだり、構築したりすることを免れない。

そのため、本人に確認済みとはいえ、完全に信用できる事実ばかりであるとは限らない。そこには個人の記憶の間違いもあれば、虚構の部分も存在しかねる。したがって、裏付けの資料を合わせて考える必要があると思い、私は実地調査をし、これまで用いられていなかった資料をもとに検証を行った結果、いくつか「牛島春子年譜」と食い違った事実を発見した。年譜は作家の本音を理解し、作品を解説する上で基礎的かつ不可欠な参考資料であるが、場合によっては、一つの事実指摘が作家へのイメージを転覆させることもある。より客観的に牛島春子像を浮き彫りにするために、「牛島春子年譜」の修正を加えることを試みる。

第一、牛島春子の渡満時期についてである。「牛島春子年譜」は「一九三六年、牛嶋晴男と結婚。秋、牛嶋夫妻は「満洲」に渡る」と書いてある。一九四四年二月一日、春子は自分の履歴を記した書簡を野田に出した。『満洲公論』に掲載予定の「訪友記」に触れた後、「一応何でもお送りしてみます。（中略）昭和十二年十一月結婚渡満です」と書いてある。一九四四年、三十一歳の牛島春子はまだはっきり覚えていたはずであるから、一九三七年十一月の結婚渡満が有力であると思う。一九三七年五月発表した「王属官」と一九三七年十月に発表した「苦力」は果してどこで創作されたか気になるわけである。一九八〇年牛島春子はエッセー「感傷の満洲」で「王属官」誕生の経緯を回想している。「第一回建国記念文芸賞というのに「豚」という五十枚ばかりの私の小説が入選した。（満洲で）初めて書いた小説だったので自分でびっくりしてしまった。夫の勤めている奉天商工署に陳さんという同僚がいて、ある時、夫はうちに連れてきて、二人で色々話しをしていた。傍から聞いていて、その中の一つのエピソードを小説にしよう、とわたしは思った」。これは明らかに手紙の内容と矛盾している。一九八〇年の回想は記憶の間違いもありうるが、脱植民主義のために、事実を虚構した可能性もある。一九三四年夫の牛嶋晴男は大同学院に入学する前に、春子の姉婿鈴木春造に頼り、「満洲」の錦州に渡った。そこで中国人労務者の監督をした。そのことに関する裏づけとして、川村湊のインタビューが残っている。「私の姉婿が軍人で新京にいましてね。苦力なんか使っていたんです。そこに晴男さんが頼っていったんです、私のツテで。」⁴「牛島春子年譜」によると、一九三三年、牛島春子は「保釈後、姉のマスエの家に同居する。学生服を着た晴男が、遊びにくるようになる」。

一九三五年、「懲役二年執行猶予五年の判決」を言い渡された。保釈後の春子は「満洲」に逃亡する意思があったから、「満洲」に行く晴男同行しようとしたのではないかと推測している。一九三七年十一月に渡満したのなら、牛嶋晴男の話に基づき、日本で「王属官」「苦力」を創作した可能性がある。また、牛島春子は正式に結婚する前に、一時的に「満洲」に様子を見に行き、そこで聞き取ったエピソードを小説に書き込んだことも考えられる。「牛島春子年譜」には一九三四年の春子の活動を書いていないが、一九三四年牛島春子は保釈の身でひそかに牛嶋晴男と同行し、「満洲」での苦力監督の体験を「苦力」に書き込んだ可能性もある。一九三五年五月、牛嶋晴男は「満洲」官僚の揺り籠とも言われた「大同学院」に入学、十月、第四期生として卒業した。一九三六年、「満洲」官僚になった。牛島春子は一九三七年「満洲」官僚になった晴男と正式に結婚したと考えている。牛島春子の結婚証書の確認ができなかったため、断定できないが、牛島春子の手紙に書いてある渡満時期と「牛島春子年譜」に記載されているものとの間に一年の差があることは言い切れる。「王属官」「苦力」を日本国内で執筆したことについて曖昧にしたり、「転向」した上の結婚、渡満などの事実を隠蔽した可能性があるかと推測している。

第二、川端康成との対面についてである。牛島春子は野田宇太郎宛の一九四二年二月二十八日日付の書簡によると、彼女は二月十八日東京から神戸の友人宅に寄って久留米に帰った。二月二十二日久留米から出発し、二日後の二十四日新京に戻った。東京で野田と川端に再会した状況について次のように記している。

（前略）、それでもお目にかかれて嬉しく存じました。お会いしたのは七年、八年ぶりでございます。人間なんて十年位の年月でそうそう変わるものでもないと見えます。けれどさすがに責任のある仕事をなさってられるな。昔の青年した感じとちがひ、何か社会的な落ち着きを感じられました。すこし太ってられるやうでした。（中略）、川端さんの好意は身にしみて有難く感じてをります。（中略）、これといふのも凡て川端さんの偉れたお人柄によることでせう。私はおつかなびっくりをります。川端さんの激励についていけるだらうかと。何にしても、今度の東京行は本当に嬉しくて豊かなものでした。⁵

牛島春子はしきりに川端に激励され、感激している。野田宇太郎も『灰の季節』でわざわざ一九四二年、牛島春子は東京で川端康成と対面したことを書き留めた。

牛島氏は「祝といふ男」を書いて満洲でデビューした異色の女流作家だった。私とは同郷で、早くから親しかったが、久留米で共産党事件に連座して、その同志と結婚し、満洲国の日系官吏夫人となっていた。昭和17年に夫と共に満洲から一度東京に来て、川端康成氏と三人で銀座で食事を共にしたこともある。⁶

前述の書簡を参照すると、三人とは牛島春子、野田宇太郎、川端康成の三人である。坂

本正博「牛島春子年譜」は「1941年「満洲」に来訪し、新京に滞在中の川端康成と会う。1942年の来訪時にも会う」と書いてあるが、実は川端康成一九四一年四月～五月、一九四一年九月～十一月、二回「満洲」を訪問した。一九四二年川端康成は「満洲」に行っていない。前に引用した春子の一九四二年二月二十八日の手紙を裏づけとして、一九四二年二月牛島春子は東京で川端と会ったことが明らかになった。牛島春子と川端康成の不思議な縁を第Ⅱ部第一章第三節で詳しく検討してみる。

第三、牛島春子の引き揚げについてである。牛島春子の引き揚げ体験について、「年譜」は「七月、春子と子供三人は奉天を離れて引き揚げ船（マーキンネー号）で舞鶴港に上陸し帰国」とあり、具体的な情報が不明のようである。二〇一四年十一月、私は舞鶴引揚記念館での資料調査を通じて牛島春子の引き揚げルートがだいたい把握できた。牛島春子は一九四六年七月十一日、東京の野田に葉書を出した。「帰へりついて十日やっと人心地がついて来ました」という葉書の一文から牛島春子は一九四六年七月一日に、引き揚げてきたことがわかった。それに春子は一九四六年八月十四日野田宛の書簡で「舞鶴で上陸」と記している。「舞鶴入港の引揚船一覧表」⁷によると、当時「満洲」からの出港地は葫蘆島と大連である。敗戦時、「満洲」に一七〇万人の日本人が残された。牛島春子はその中の一人である。舞鶴引揚記念館のパネルによると、「ソ連の侵攻により、開拓団の男達の大半が現地召集（根こそぎ動員）となり、残った老人と婦女子は自殺用の青酸カリを持たされ、悲惨極まる逃避行でありました」。それに、終戦時、武装解除された日本軍人は、シベリアなどへ抑留生活を強いられた。葫蘆島から引き揚げてきたのはほとんど女性と子供であった。

牛島春子は営口で敗戦を迎えたが、一九四六年六月二十六日或いは二十七日に葫蘆島から三人の子供をつれ、アメリカの船に乗り、四～五日かかって、黄海、東支那海、日本海を渡って、七月一日に舞鶴西港に上陸したと推測している。舞鶴引揚記念館の学芸員によると、当時、船から小さいボートに乗り換え、長い栈橋を經由して上陸した。岸壁で待っていた各県の人達の歓迎の声の中でバスで移動した。

第四、ほとんど知られていなかった牛島春子の作品についてである。私は実地調査に踏み出し、まず、二〇一三年四月、牛島春子の散逸した作品を集めようとして、中国東北部の黒龍江省図書館、ハルピン市図書館、吉林省図書館、東北師範大学図書館、吉林大学図書館、遼寧省図書館、遼寧大学図書館へ資料調査に回り、以下の作品を発見した。

- (1) 一九四〇年一月二十日から二十二日『満洲新聞』に三回連載された「性癖」
- (2) 一九四三年八月『青年文化』に掲載された牛島春子の中国語の作品「遙遠的訊息（遠くからの便り）」
- (3) 一九四一年第三卷六月号『新満洲』（「満洲女性文芸作品」特輯）に載っている「祝といふ男」の中国語訳「祝廉天」
- (4) 一九四四年一月『観光東亜』に載っている「峰（訪友記その一）」
- (5) 一九四四年三月『満洲公論』に載っている「女の燈—訪友記その三—」

「性癖」「遙遠的訊息（遠くからの便り）」中国語訳「祝廉天」の存在はほとんど知られていない。『牛島春子作品集』の「後書き」に発見できなかった作品の一つは「訪友記一」として書かれてある。「牛島春子年譜」には「訪友記その一」と書いてあるが、正確なタイトルは「峰（訪友記その一）」である。また、「年譜」には「同月、「女の灯」を『満洲公論』三月号に発表（未見）」と書いてあるが、実は同月ではなく、ニヵ月後の三月『満洲公論』に「女の燈一訪友記その三一」が載っている。

また、城西国際大学水田図書館のご協力で、「牛島春子年譜」には「未確認」と書いてある牛島春子のデビュー作『王属官』の中国語訳を手に入れた。それは、劉貴徳により翻訳され、一九三九年十月十日満日文化協会により発行された単行本である。詳細な対照研究は第Ⅱ部第三章に譲る。

「満洲」文学研究の専門家西原和海先生から一九四二年十二月『観光東亜』に載っている牛島春子の随想「大いなる現在」が贈呈された。牛島春子の内面を窺う重要な作品であり、後で援用させていただく。上記の新たに発見した作品を入れて「牛島春子執筆目録」を作成し、本論文の付録とする。

第二節 牛島春子の性意識

野田宇太郎は『灰の季節』で「牛島氏は「祝といふ男」を書いて満洲でデビューした異色的な女流作家だった」と春子のことを評価した。研究者の田中益三は「祝といふ男」に「女から見た男への憧憬、羨望が入り交じっていると感じ取れる。絵になる男をそれを認め、その男に仮託する、トランスジェンダーによって成り立つ世界である。牛島春子には男の側に身をおくという書法が初期の頃から確立されている」という見解を示した。『トランスジェンダー・フェミニズム』⁸によると、トランスジェンダーとは「性別越境者。生まれた時に与えられたジェンダーと違うジェンダーのあり方で生活することを選んでいる人。広くは異性装のトランスヴェスタイト、性器違和のあるトランスセクシュアルも含まれる」とある。田中の論文では、別のとらえかたでこの用語を使っていると思う。つまり、牛島春子が女性でありながら、「男に仮託」して作品を書いたというとらえ方であろう。しかし、私は違う意見を持っている。牛島春子の作風を理解するには、彼女が持っている性意識を深く掘り下げる必要がある。本論文は牛島春子の作品、自家版の『手記』、野田宇太郎宛ての書簡などの資料から総合的にこの問題を検討してみる。

牛島春子は自ら「女流作家」というラベルを貼られることに反逆し、一九四五年二月二十四日野田宇太郎宛の手紙には「文学と酔っぱらったやうな文学少女あがりの女流作家なるものに反逆するために、私はさりげなく市井の生活に徹しようとしてゐるのかもしれない」と述べている。春子は小柄で可愛くて、子供を産み、立派に育てた世の中の通念からすると、申し分のない女性であるにもかかわらず、彼女の作品には本人のイメージというよりは「女らしくない」「男装心理」が窺えると言われる。野田はそのことについて春

子に訊ねたところ、彼女は次のように弁解した。

この前のお手紙で私が女かと聞いた作家の話に苦悩しましたがけれど、（中略）、私の友人の一人は、私があんな作品を書くのは男装心理の一種だらうとうねった質問をしましたけれど、これはすこし曲喰ったのでした。私は作品を書く場合は、男でも女でもないと思っています。殊に満洲では拓くべき分野が多いだけ、私はその男像に突込むので、男でも女でもない気持ちです。私が別に女らしい作品を書かぬでも、世の中に沢山女らしい作品を書いてくれる女流作家がいるので、ただ社会性というものを私は取り組んでいます。これは私の過去の経験につながる考え方もかもしれません。⁹

この書簡からみると、研究者田中益三の見解は牛島春子本人の考えと食違っているといえよう。春子は前期「王属官」「祝といふ男」「張鳳山」といった異民族男性に注目してきた。一九四二年から、彼女の「苦悩」した「女らしくない」という評価を覆すためか、総力戦体制のためか、春子は女性を中心に書くようになった。第Ⅱ部第二章第一節で女性を扱う作品を解説するが、それはほとんど一九四二年以後執筆されたものである。

このような「異色的女流作家」の誕生は彼女の性意識と切っても切れない関係を持っている。一九三八年五月、牛島春子は「満洲」にしながら、十五歳から十八歳までの手記を謄写版刷りで自家版の『手記』五十部を日本で発行した。牛島春子は知り合いの人達に寄贈したかもしれないが、その中の一冊は野田宇太郎に贈呈した。野田宇太郎資料館に「50部之内 第47号」が保存されている。少女時代の手記は牛島春子文学の原点であり、その後の文学創作に連鎖していくものであろう。中には少女時代の春子の性意識を反映する箇所もある。

「女らしい」「男の様だ」それは因襲が造り上げた言葉であった。彼女は因襲から全然解放される事を望んでゐた。彼女は男でも、女でもどちらでも好いのだった。唯彼女がのがれたいと思ったのは因襲であった。因襲が縛り付けた女といふものであった。（彼女がもし男で、因襲的な男の立場を知ったなら、同様にそれから逃れたいと思ったに違ひない。）

彼女は自由に真理の世界に出入し得た位置にちりたかった。それは彼にとって性の区別は問題でなかった。¹⁰

つまり、牛島春子は男に憧れているのではなく、女性として生まれても、男性として生まれてもいい、ただ、自分を束縛している因襲に反発しているのであるといえる。ボーヴォワールは「人は女に生まれえない。女になるのだ」とうまく言い当てている。「女らしさ」「男らしさ」について、江原由美子が『ジェンダーの社会学』で指摘している。

社会は、「女」あるいは「男」に、それぞれ「一連の性格と態度と行為の類型」を割りふっており、社会成員は自己の性別の認知にしたがって、割りふられた「一連の性格と態度と行為の類型」を学習していく結果、「女らしさ」「男らしさ」を身につけていくことになる。¹¹

江原は女性が「魔女」や「山姥」といった他者として表象され、「〈理性がない〉、つまり〈人間ではない〉存在として定義されたため、参政権、人権を否定された」と主張した。「女らしさ」というと、「従順」「淑やか」「大人しい」「人の世話をする優しさを持つ」などの項目が頭に浮かんでくるが、牛島春子は性役割が規定されたジェンダー社会に対し、強く反発している。それは彼女の創作にもしばしば投影していく。一九五一年四月『九州文学』に載っている「ある旅」は奉天での避難生活からはじまり、新京へ引き返す冒険的な旅を書く小説である。

女が髪を切り落として、ずぼんを穿き、ぼけっとに両手をつつこんで歩きまわる一つまり男を装うて歩く、なんて新奇なことでもなんでもない。気障な甘ったるい思いつきにすぎないのだ、と私は思っていた。

それなのに、私がいよいよそうしてしまった時、私はかつて知らなかった、鮮烈な悦びに取り乱してしまった。

生まれるときから私を囚えて金縛りにしてしまった女と云う得体の知れない化物が、この瞬間、私から離れ去り、私ははじめて誕生した本当の人間のように、誇りと悦びに自分が輝きだすのを感じた。（「ある旅」）

敗戦を迎えた時、「満洲」の日本人女性は、強姦されることを恐れ、髪を切り、男装する人がいた。このような「世間の秩序と安寧と自らを守るために、合法的(?)に男であることを要請されていた」。（「ある旅」）状況は春子にまたとない機会を与えた。牛島春子も男装したが、それは別の理由による行動である。牛島春子は性的に、あるいは生理的に異常がなく、男装をした女性である。彼女の男装は因襲に囚われ、いつも貶められてきた女性としての役割を打ち破る象徴的な意味を持っている。牛島春子が男装することの背後には、男性優位の社会に対する反抗がある。

第Ⅱ部第一章第二節でより詳細に考察しているが、野田宇太郎は「牛島春子はそのころの久留米の闘士で、活動もめざましく、ジャンヌ・ダルクのような存在であった」¹²と春子进行评估している。ジャンヌ・ダルクと牛島春子の共通点は少なくないが、その中の重要な一つは男装に憧れ、「女らしくない」という点である。日本でジャンヌ・ダルクの受容の軌跡に関して、高山一彦『ジャンヌ・ダルク—歴史を生き続ける「聖女」—』¹³は考察している。明治初期、「脱亜入欧」の日本は欧米先進諸国をモデルとした風潮の中で、「西洋英傑伝」

もそのモデルの一例である。「ジャンヌという女性の事跡も、この中で、年若い身でありながら生命を賭して祖国フランスの危機を救った美談として紹介され始めてい」(十二頁)る。明治半ばになると、ジャンヌは「ウーマン・リブ(=女性解放)運動の象徴として取上げられているのである」(十六頁)。大正期になると、「ほとんどの中等学校の歴史教科書には、ジャンヌの記事が載せられて、この女性の名は確実に日本人の間に定着していたかに見えます」(二十四頁)。映画『裁かるるジャンヌ』には、「神様の声」が聞こえるジャンヌ・ダルクはイギリスに渡され、審問された時、司教たちに男装の理由を聞かせたシーンがある。A・ボシュア(新倉俊一訳)『ジャンヌ・ダルク』¹⁴によると、当時、男装や女装はイギリスの教会から異端とされた。池上俊一が『魔女と聖女』でヨーロッパ「古代末期から初期中世にかけて、多くの聖女が男装したといわれるのである」と指摘し、その本質を次のように綴っている。

男装する女性、とくに聖女たちは、聖書に保証された〈すぐれた性〉である男性に、外面だけでもちかづくことによって救われようとする。ここには、女性の性を無化し抹殺したいという欲求があるわけである。つまり、これを別の面からいえば、女性は女性であるかぎり、まったく救いがなかったのだといってもよいのかもしれない。¹⁵

石井達郎『男装論』¹⁶はジャンヌを例として取り上げ、彼女の男装の理由を分析した。「ジャンヌの男装が特異であるのは、個人的な意思によるものでなく、天の配剤であるということである」と指摘し、「女性が貞淑で慎み深いことを要求されていた時代、男装することはまず「女」の役割を生きることを拒否することである。だからといって、数千の兵の先頭に立つ「男装の女」は、「男性兵士」になりきったわけではない。鎧兜のなかにいるのが若い女性であることは敵も味方も承知していた。ジャンヌの男装には味方を牽引し、敵を畏怖させるような、神懸かった異形性があったかもしれない」(一二九頁)という見解を示した。しかし、入獄後の男装は別の理由がある。「それは囚われの身という弱い立場にいる少女が、獣のような男たちから少しでも自分の身を守ろうとしたことである」(一三〇頁)。結局、「ジャンヌは、男装しても男たちの好奇の眼差しと暴力から自由でいることはできな」(一三〇頁)だった。ジャンヌは不正審判で「悪魔に魅かれた女」として異端の宣告を受け、一四三一年五月、ルーアンで火刑に処せられたが、二十五年後ジャンヌは名誉回復ができて聖人の列に入った。ジャンヌは女らしい要素を極力で排除しようとしたが、格好がよくて、独特な魅力を見せられた。

また、日本には女が男役を演じる宝塚少女劇場というユニークな文化がある。男装の麗人は異様な魅力を以て人気を集めている。牛島春子も男装の魅力を感じたであろう。女達の男装の理由について、石井達郎が八つに分類している。

1. 男性中心社会において、男の都合のいいようにつくられた「女像」にたいする反発、

そこからの逃避

2. レズビアニズム 同性の関心をひこうとすることで、男装したり、男言葉を使い、男の仕種をする。恣意的なポーズ、遊戯感覚でもある。

3. サバイバル男社会のなかでは、女であることを隠したほうがより安全に生きられる。十九世紀以前にはこれが著しく多い。

4. ジェンダーの越境行為。男と女の領域がはっきりと規定されていて、男の領域の仕事をしていきたい場合、「男」として生きること以外にそれを越えることができない。

5. まつりごとなど、社会の「制度」や「慣例」の一環として

6. トランスセクシュアル（性転換願望）

7. 芸能、舞台、映画などの演者として

8. ファッション¹⁷

さて、牛島春子の男装の理由について、考えることにする。前述したが、敗戦の混乱を前に、在満日本人女性は強姦を恐れ、身を守るために、男装した人は少なくなかったが、牛島春子もそのような狙いもあったかもしれない。しかし、彼女はまたとないチャンスももらい、「はじめて誕生した本当の人間のように、誇りと悦びに自分が輝きだすのを感じた」（「ある旅」）という。つまり、表の理由は3であるが、裏に潜んでいる主な理由は1ではなかろうか。彼女は男装を女のセクシュアリティ、そして、女として生きることの伝統、習慣、女であるアイデンティティといったものから脱け出す手段としていたであろう。彼女は極めて冒険的であり、野心に富み、自分を束縛しようとする社会に対し、反抗していた。これらの思想は彼女の作品にも投影している。たとえば、第Ⅱ部第二章第一節で触れている牛島春子の「女」は女性が男性にいささかも劣ってはいないという狙いで女性の産む性を大いに強調した。第Ⅱ部第三章で検討する彼女の中国語の作品『遙遠的訊息（遠くからの便り）』においても、ヒロイン瑞枝は教育を受け、自由恋愛のない婚約を拒絶し、家父長制から逃げ出し、「満洲」で就職した近代的なモダンガールである。引揚後、牛島春子は書き続け、回想録的な作品にはしばしば女性が登場するようになった。戦後、女性を描く作品は「少女」「笙子」「知子」「青葉の季節」「過去」「夢について」「狂った日々」などが取上げられる。牛島春子は女性の悲劇に注目し、女性解放の道を求めていく。

牛島春子の『手記』にも彼女の性意識を反映する箇所がある。授業で先生が「同名の極は相斥け、異名の極は相引き…」と説明した時、「私」は感激を覚え、「ノートの端を被って、素早く」、Mさんへの手紙に「同性愛は不自然なものです。異性はお互いに本能的に引き合っているのです」と書いた。Mさんはちょっと変わっている女性である。彼女は恋人を愛していたが、「時々彼女の魂は悪魔にみまはれた。そんな時、彼女は恋人の姿に堪えられないやうな嫌悪を感じた。そして、手紙書くことさへもやめてしまった。恋人はそんな時、悲しみのどん底に落ちた。併し、悪魔が去った時、彼女はやっぱり本当に彼を愛してゐた」。このように性意識の揺れがあり、男も女も好きであり、「魂は悪魔にみまはれ

た」ら、同性愛の種が芽生えることになる。続いて、不思議なことに「彼女には〈女らしい〉と云ふ言葉が恐ろしかった。しかし〈男の様だ〉と言はれる事も好きでなかった」と自分の位置づけは女でもなく、男でもなく、一人の人間である。

このような性意識は戦前から戦後一貫して変わっていない。一九四八年『九州文学』に発表した小説「青葉の季節」¹⁸にも投影されている。十五歳のまち代は春子の分身であり、彼女が持っている「女」としてのコンプレックスや「女」への反逆を打ち明けた小説である。母に女らしくないと言われ、「母や姉の中にある何か割り切れないもの〈女〉に向けてまち代は敵意すら感じ」、「あたしは人間だ。まち代は女である自分に反抗するやうに心の中で叫ぶ。けれど、まち代の肉体の中に自然に育っていく、女の生理についてはどう逆らうことも出来なかった。時としてはまち代はそれにひそかに思ひ悩み、はじら」った。どうしても肉体的に性別を乗り越えることは限界がある。女の体で生まれた春子は女性としての劣等感を感じ、悩んでいた。

また、春子が戦後に書いた「少女」という短編小説では小学校六年生の少女「私」が先生との眼差しのやりとりで男への乙女の恋心を感じていたことを描写した。少女時代から女性の「性」が芽生え、自然に流出してしまっただが、春子はあえてそれを抹殺しようとした。春子の「反逆の心」は生涯、彼女から離れなかったと言えよう。春子は両親が気にする「世間」は金と力で支配されている空しいものであると主張し、自ら自由な意志で誰にも頼らずに自分の求める方向へ努力していくと決心した。それは「両性具有」に当てはめるであろう。J・シンガー著『男女両性具有』（人文書院 一九八一）によると、「男女両性具有とは、一個人の「男性的」側面と「女性的」側面を結合する特定の方法のことである」（三十八頁）と定義され、「女性解放運動は、男女両性具有の方向への決定的な一歩であった」（三十八頁）と指摘している。「男女両性具有は人間の心に本来備わっている元型である」（三十五頁）と思われ、牛島春子には限定された存在でありたくない、普遍的な存在でありたいという人間の根源的な衝動がある。それは両性具有的であり、果敢にジェンダーにとらわれない、性別を越境する心理である。

第Ⅱ部第一章第四節で詳しく考察したが、それは彼女が耽読した一九二六年一月、高田博厚により翻訳され、叢文閣から出版された『ベートオヴェン』に共鳴を覚えたに違いない。一九四九年一月『女人芸術』に載っている牛島春子の「秋深かむ窓」は彼女の人生観を形成する経緯を記している。

和江の共産主義者としての出発の源をなしたものは労働者としての自覚ではなかった。直接的には和江たち婦人のおかれてゐるいひやうなく暗黒な封建的地位への反逆でもなかった。それはまだ女学校の制服を着てゐる和江が読んだ一冊の本、フランスのヒューマニズムの作家によって描かれたある音楽家の生涯への感動と共感からであった。

「人たる名に値するために己れの出来る凡てをつくす」人として、「日々の凡庸さに己れを委し去らない者にとっては人生は日毎の闘争である」といふ言葉で物語られたこの

音楽家の生涯であった。「人たる名に値するために……」この言葉はその時以来和江の胸に大きく刻み込まれた金文字となった。さうした和江が共産主義への道へ歩いたことはすこしも不思議ではない。¹⁹

「人たる名に値するために己れの出来る凡てをつくす」人間として生きていき、「日々の凡庸さに己れを委し去らない者にとっては人生は日毎の闘争である」。その後、形成された人生観は次々と彼女の作品に投影していく。

一九四六年、引揚げてきた直後に「手紙」²⁰という小説を『九州文学』第十四号に発表した。これは「満洲」から引揚げの混乱中、男女の出会いと激しい愛を書いた小説である。文中の「あなた」は東大出の青年であり、金権主義の男である。「私」は春子の分身であり、この作品はその男への手紙である。春子の小説は、現実にあったことを書く点で、ルポルタージュの方が力を発揮できるといえよう。一九四六年八月十四日牛島春子が野田への書簡でその事実を打ち明けた。

(前略)、主人が帰へらぬので生活の方針もたてられません。

この前の手紙に変な事を書きましたので、きっと御心配かけてあると思います。事実はあるどさくさの時に、六つも年下の人から恋愛的に接近されて、私はその激情から逃れることが出来なかったのです。愛されたかはり苦しめられもしたのです。私がおその人を愛してをれば、私は人の妻でも、子の母でも幸福であったでせうけれど、その人の謂ゆる「暴風の性格」に完全に圧倒されてしまいました。嫌いでなかったまで。(中略)、このことは誰れにでも云はないで下さい。何も知らぬ主人を傷つけないのです。

牛島春子は「何も知らぬ主人を傷つけない」と気を使いながら、「手紙」という小説を発表した。春子は『手記』で予言したように、「私は同時に幾人もの異性を愛し得る」²¹「私は尼になるより、むしろ淫売になるでせう」²²。まさに、「聖女」に見える春子の中には「悪女」が住んでいる矛盾の統一体である。「聖女」とはそもそもキリスト教から由来し、ジャンヌのように、「神に一生をささげ」「奇跡を起こし、まわりの者たちを救う」²³女性を指す。広義的に言えば、牛島春子のような、宗教とは無関係であり、人間愛に満ちている女性も「聖女」の側面を有しているといえよう。一方、田中貴子は『〈悪女〉論』で「悪女」という概念の変遷をまとめている。中世では、「容貌が「悪」い「女」」である。中世後期からは、「性質や品行が「悪」い「女」という意味が並行して存在した」。現代では「男を惹き付けてやまない「魅力的な女」」である。「性質が悪くとも大いに魅力的な部分がある。(中略)、魅力といった場合、容貌の美しさだけでなくセクシャルな魅力の方が優勢」²⁴である。小説中、「私」は夫が活着ていることを知りながら、遠慮なく、大胆に若い東大出身の青年との官能的なラブシーン、女性のセクシュアリティをさらけ出した。

たしかにあの夜は私の不覚でした。私は暗い玄関の壁ぎわに押しつめられ、あなたはいきなり私を抱きすくめてしまひ、息も出来ないやうに激しい接吻で顔中を埋めてしまひました。それがあなたの謂ゆる「暴風的性格」の現はれでした。それから後の私は始終あなたのその暴風的性格に圧倒されつづけて来たと云へます。²⁵

その男は暴風のように、衝動的で激しい愛で春子を圧倒していた。春子はその激情から抜け出すことができず、苦しんだあげく、拒絶も受け入れも難しかったであろう。夫の牛嶋晴男が復員する前に、発表されたものとはいえ、「夫が奇跡的に生きてゐた」ことを知りながら、このような激しい男女の愛を大胆に描き出した春子はかなり反逆的な女性といえよう。それを春子の「反体制論」を合わせてみると、彼女の心理をより深く理解できる。

なぜ日本には惜しみなく美女を消費？する施設が軒並みというほどあるのかわかりません。一つぐらいいきのいい美青年ばかりをとりそろえたバーかなにかあったらいいでしょう。きっと利口な奥さん方がたくさんたのしみにおいでになるでしょう。世のダンナさま方は大恐慌です。ああいうものは健全な家庭生活を破壊し、社会風紀上よろしくないといふと急に道徳家になってしまうかもしれない。そのとき美女ばかりとりそろえたそういうところも抱き合わせにして、その存在意義について考えていただくことですね。²⁶

ここで牛島春子は男女平等、同権を主張し、フェミニストとしての姿が鮮明になっている。このような性意識を持っている牛島春子により造形された女性像はどうか、創作にどのように投影したかを第Ⅱ部第二章第一節で詳述する。

一方、春子は芸術的なセンスの持ち主であり、文学より絵を以て本当の自分を表現しているというような考え方を持っていた。

私は絵描きさんが好きですけど、これは私が絵に深い憂愁をもっているからで、もし私がほんとうに私らしく表現されるにはむしろ絵に描いてあらうと思っています。文学の私は理念や思想で動くのですが、絵では私の人間や感性ばかり現はれるだろうと思います。²⁷

一九五五年新聞『新九州』に彼女の「裸婦」という解説付きの絵が載っている。春子はじめて裸婦のモデルを見てリアルに描こうとすると、結局自分の中のカンで描いてしまい、「人間の裸体とは何と美しく感じさせるものだろう」と嘆いた。牛島春子は伝統的な女性と違い、裸体に対して恥ずかしいという感覚がなく、芸術的で美しいものと感じたのであろう。これについては春子の野田宇太郎宛の手紙が想起される。「でもこれも昔から

の悩みなのですが、主人があることは私を裸にさせないのです。どうしたらいいか教へて頂けたらと思ひます。今度も私は主人がある限り葬り去らねばならない一頁を持ってをります。誰れにも話すことも書くこともないかもしれません」。牛島春子は夫の牛嶋晴男との関係が微妙であり、晴男がいるかぎり自分をさらけ出すことはできないという。

坂本正博作成の「牛嶋晴男年譜」によると、牛嶋晴男は「満洲国」の官吏であり、一九三一年旧制九州帝国大学に入学し、右翼の鹿子木員信²⁸が顧問を務めた弁護部に所属して社会活動に従事した。その頃、筑後川の集会で春子と知り合った。一九三五年、晴男は「満洲国」大同学院に入学した。鹿子木員信はそこで「皇国主義」というテーマの講義をした。第Ⅱ部第一章第一節で考察したが、一九三七年二人は結婚に至った。「牛島」春子は旧姓であり、夫「牛嶋」晴男氏のほうも、もとの姓である。春子は姓を変えずに済んだ。妙なことに、主人の牛嶋晴男は「満洲」で発表した文章「拝泉県を偲ぶ」「報徳道と開拓農村の建設」は署名がいずれも「牛島晴男」である。また、敗戦後、主人は博多港開発株式会社の常務取締役を務めた時の名刺も「牛島晴男」になっている。夫が妻の「牛島」に改姓したのかと疑問に思う。「満洲」時代の文章は牛島春子が代筆した可能性が高く、「牛島」になっても理解できるが、戦後の名刺まで姓が変えられたのは春子が優位に立っていたことの現れであろうか。元マルキストの春子と右翼傾向の晴男の結婚は不思議に思われる。春子は「転向」の姿勢を装い、逃げ出すためか、本当に「転向」したか、一言では言い切れないが、牛島春子の「転向問題」は第Ⅱ部第一章第四節に譲るが、要するに世界観が正反対の二人はぎくしゃくになっていることは予想外のことではなかろう。野田宛の手紙で春子は本音を打ち明けた。

私は寡婦であった方が良かったやうな気がします。（随分ぜい沢で不貞な奥さんですね）でもそれは誰れにも云へない本当の気持ちなのです。一人になって自由にしたいことをし、書きたい事が書けたら、昔からのひそかな憧れでした。²⁹

夫がいるかぎり、春子は自由に書けないわけである。絵画に長けている春子は「自画像」³⁰を以て、自らを取り巻く状況を描き出した。周りの背景が暗くて、何かに覆われているような気がする。女がそこから逃れようともがいて、顔だけ出し、無力感に囚われがちであった。その顔は能面みたいな無表情な顔である。主人の陰から抜け出せない春子であろう。（「牛島春子自画像」を参照）

「トランスジェンダー」と誤解された牛島春子の性意識について、オリジナルな資料『手記』、野田宛の書簡などを用い、作品と合わせて検証を行ってきた。実は、牛島春子の性意識の源は「反逆の心」にある。彼女は別に男に憧れているのではなく、男でもいい女でもいい、因襲に束縛されずに、自由に生きていく人間になりたい。少女時代、女性の性に目覚め、男への乙女の恋心を感じていた。一方、性意識の揺れがあり、男も女も好きであり、「魂は悪魔にみまはれた」ら、同性愛の種が芽生えることになる。春子は子供を産み、

立派に育ち、「満洲」 官僚の夫を支えている同時に、大胆に自分の不倫の激情を書き、矛盾な統一体と言っても過言ではない。彼女は女性の規範であった旧い因襲に対抗する女権主義者であり、姓を変えずに済んだ。

さて、このような性意識はどのように作品に投影したか、牛島春子の作品における女性像について、第Ⅱ部第二章第一節で掘り下げてみることにする。



牛島春子自画像

注

- ¹大内隆雄『満洲文学二十年』国民画報社一九四四年 三三一頁
- ²田中益三「牛島春子の戦前・戦後」『朱夏』 二〇〇三年六月 八十五～一〇一頁
- ³ピエール・ノラ『記憶の場』 岩波書店 二〇〇二年 二十九～三十八頁
- ⁴「〈満洲文学〉から〈戦後文学〉へー牛島春子インタビュー」『戦後という制度』インパクト出版会 二〇〇二年 一〇八～一二五頁
- ⁵一九四二年二月二十八日 野田宛の書簡
- ⁶野田宇太郎『灰の季節』 創元社 一九五八年 二五二頁
- ⁷舞鶴引揚記念館資料
- ⁸田中玲『トランスジェンダー・フェミニズム』インパクト出版会 二〇〇六年 十三頁
- ⁹一九四二年四月十二日 野田宛の書簡
- ¹⁰牛島春子『手記』自家版 一九三八年 二十頁
- ¹¹江原由美子他著『ジェンダーの社会学』 放送大学教育振興会 一九九九年 三〇頁
- ¹²野田宇太郎「二・一のころ」『西田信春書簡・追悼』土筆社 一九七〇年 四三八頁
- ¹³高山一彦『ジャンヌ・ダルクー歴史を生き続ける「聖女」一』岩波新書 二〇〇五年十二～二十五頁
- ¹⁴Aボシュア（新倉俊一訳）『ジャンヌ・ダルク』白水社 一九八七年 八十四頁
- ¹⁵池上俊一『魔女と聖女』講談社 一九九二年 六十八頁
- ¹⁶石井達郎『男装論』青弓社 一九九四年
- ¹⁷石井達郎『男装論』青弓社 一九九四年 二二七頁
- ¹⁸牛島春子「少女」『藝林閑歩』第十八号 一九四七年十二月 十四～二十頁
- ¹⁹牛島春子「秋深む窓」『女人藝術』第一集 一九四九年一月 二十三頁
- ²⁰牛島春子「手紙」『九州文学』第十四号 一九四六年十月 二十九～三十一頁
- ²¹牛島春子『手記』自家版 一九三八年 三十六頁
- ²²牛島春子『手記』自家版 一九三八年 四十頁
- ²³池上俊一『魔女と聖女』講談社 一九九二年 五十八頁
- ²⁴田中貴子『〈悪女〉論』紀伊国屋書店 一九九二年 六～七頁
- ²⁵牛島春子「手紙」『九州文学』第十四号 一九四六年十月 二十九～三十一頁
- ²⁶掲載紙不明「反体制論」
- ²⁷一九四二年四月十二日牛島春子が野田宛の書簡
- ²⁸日本青年協会議員、文学博士、大日本言論報国会の事務局長として国粹主義思想運動をリードし、戦後はA級戦犯容疑者として逮捕された。
- ²⁹一九四二年四月十二日 野田宛の書簡
- ³⁰野田宇太郎文学資料館所蔵

第三節 野田宇太郎の知遇—その長い軌跡

はじめに

牛島春子研究はテキスト分析のほかに、彼女の生活、思想を探る必要もあると感じている。彼女は生まれてから死ぬまでどのような人生を送ったか、どのような人と交流し、どのような考えを抱えているか、それらの疑問を解くことにより、作品の特徴や意味を正確に読み解くことにつながると信じている。そこで、私は牛島春子のゆかりの地福岡県小郡を歩き、その気候風土を肌で感じ、春子と深い友情の絆を結んだ野田宇太郎について取材した。

井上洋子（二〇〇二）「終戦の軌跡—牛島春子と小郡」¹は牛島春子と野田宇太郎との関係を簡単に触れた上に、牛島春子の「満洲」から野田に宛てた書簡が彼女の内面を知るための証言であると書簡の重要性を記した。坂本正博（二〇〇四）「牛島春子と野田宇太郎」²は一頁で軽く二人の出会いと付き合いに触れ、書簡にまったく言及していない。多田茂治（二〇一〇）「ある微笑—牛島春子と野田宇太郎—」³は友達立場で牛島春子と野田宇太郎との交友関係を紹介した。多田が牛島春子のエッセー集『ある微笑』を編集するために野田宅を訪ねた時のエピソードを記した。しかし、日本の文芸雑誌における野田の役割、位置は牛島春子にどう作用するか、二人の接点はどこにあるか、また、二人を取り巻く環境、戦争へのスタンスはどうであろうかなどの疑問はまだ解けていないままである。

原武哲は野田文学資料館所蔵書簡研究を行い、「火野葦平の書簡（一）—野田宇太郎宛葦平書簡の紹介」⁴「火野葦平の書簡（二）—野田宇太郎宛葦平書簡の紹介」⁵「火野葦平の書簡（三）—野田宇太郎宛葦平書簡の紹介」⁶「劉寒吉宛火野葦平書簡の紹介—野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻（七）」⁷「平塚らいてふ書簡の紹介—野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻（八）」⁸「江口渙・三木清書簡の紹介—野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻（九）」⁹「志賀直哉・武者小路実篤・里見書簡の紹介—野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻（十）」¹⁰という一連のオリジナルな書簡の紹介を通じ、作家研究にリンクした。そのシリーズのなかには牛島春子書簡の紹介はなかったことに気付いた。なぜ作家達の書簡が野田宇太郎資料館に保存されているのか、それは野田の遺書に関係を持っている。野田宇太郎資料館の展示室には昭和五十六年、野田が書いた遺書が展示されている。

わたくしは生涯の文学者で私財などの蓄へは人道主義者として持ち得ない。（中略）、わたくしが所有する文学書その他書籍資料は一個人のものでなく、いはば国の文化財として公共のために永久に保存すること、そのために適当な方法を講ずべし、決して金銭に代はるべからず、故郷に財団法人の資料館をつくり、少しでも日本文化のため役立つやうに努力すべし。

野田は人道主義者で、財産に対し、無欲な人である。その遺書に従い、一九八七年十一月、故郷小郡で野田宇太郎資料館が開館した。野田はどのぐらいコレクションを持っていたか計り知れないが、「蔵書、資料三万点が福岡県小郡市に寄贈され、（中略）、寄贈に先だって蔵書目録が野田さんと親しかった神田・山田書店山田朝一氏によって編集されたが本になったのは昭和六十二年三月B5判二百頁、小郡市役所から発行されている」¹¹という。主な蔵書は次の通りである。

野田宇太郎が集めた雑誌には、北原白秋主宰の「煙草の花」、パンの会の機関誌「屋上庭園」「ユークレント」「イエローブック」などの稀誌原本が揃っています。詩歌集や小説類の初版本、葛飾北斎『隅田川兩岸一覽』『北斎漫画』などの浮世絵、『江戸名所図会』をはじめとする各地の名所図会、山東京伝『骨董集』、曲亭馬琴『玄同放言』、鈴木牧之『北越雪譜』などの和本。グワルチェリ『日本遣欧使者記』、アマチ『伊達政宗遣欧使節記』などの洋書。ケンペル「江戸参府紀行図」、全国の絵図、地図や地誌をはじめ、思想、哲学、歴史、民俗、美術等の書籍・資料。文学者を中心にした書簡、原稿、色紙、挿絵などの肉筆類。「文学散歩」で撮影した昭和二十七年以降の写真ネガフィルムは五万枚を超えるものです。¹²

野田は「満洲」女性作家の代表者として知られている牛島春子からの書簡などの資料にも目を配り、大切に保存していた。それは小説やエッセーで窺い知れなかった春子の内面を伝える記録ともなっている。牛島春子と野田宇太郎の親交は一九三〇年代から一九八四年野田がなくなるまで五十年間にも及んでいる。資料館に保存されている牛島春子が野田に宛てた書簡七十九通の内、本節では十一通援用することにする。

野田宇太郎は詩人、文芸編集者、文芸評論家という三つの肩書きを持っているが、野田本人が最初に持っていた夢は詩人である。にもかかわらず、二〇〇六年、藤井淑禎は「野田宇太郎研究のために」で「野田宇太郎の研究がまったくといっていいほどなされないのは残念である」と「文学散歩」の創立者野田が忘れられつつあることに対し、遺憾の意を表明したうえ、その理由について次のように分析している。

過去に殉じる姿勢が人気を呼ばなかった、という面もないではないが、そもそも研究とは、作家を対象としてこそ盛り上がるものなのであり、その意味では野田の場合、「文学散歩者、編集者、「パンの会」の研究者、（中略）詩人」（「失われた佳き文芸の時代へ）」とあるうちの最後の「詩人」だけが、かろうじてそれに当てはまるに過ぎない。（中略）、正面からの研究となると、やはり創作でないとやりにくい。¹³

野田宇太郎は創作が少ないから研究対象になりにくいという。『現代日本詩辞典』¹⁴によると、野田は『北の部屋』（一九三三、金文堂）『旅愁』（一九四二、大沢築地書店）『すみれうた』（一九四六、新紀元社）『野田宇太郎全詩集 夜の鋼』（一九六六、審美社）『定本野田宇太郎全詩集』（一九八二、蒼土舎）など十冊の詩集を出版した。野田の詩の創作は戦前、戦中がメインであり、戦後、日本耽美派の研究や「文学散歩」に移した。空襲により廃墟に化した東京の文学遺産を守り続け、それを次世代に伝承しなければいけないという思いで、野田が文学者ゆかりの地、作品の舞台の地を歩き回ってみた。その感動、感銘を「文学散歩」に凝縮した。

野田宇太郎は遺書で記したように、「人道主義者である。人の教養と、やさしさを尊ぶ」自由に生きる道を求め、静かに「文学散歩」という独特なライフワークを切り開いた。牛島春子は野田の死去を聞いて、「三日間位果然としていて」「弔電を打つ智慧さえ働かないでいた」¹⁵ほどであったという。青天の霹靂のような体験であったのであろう。牛島春子の書簡で「あなた」と呼ばれた野田宇太郎は詩人、編集者、評論家を遍歴し、日本文学史上独自の役割を果たした人物である。藤井（二〇〇六）が「野田宇太郎研究のために」で述べたように「野田宇太郎が遺した仕事は無限の可能性を秘めた原石として、われわれの前につつましやかにその優雅な姿を横たわらせているのである」¹⁶。牛島春子は野田を通して日本国内の文壇との縁ができ、文芸雑誌に作品を掲載される立場を得たと思われる。二人の交流は戦中、日本内地と「外地」のつながりを探求する重要な手がかりになると思う。本節は日本の文芸雑誌における野田の役割、位置などから牛島春子を考えるアプローチである。以上の先行研究に踏まえ、さらに深く掘り下げ、牛島春子と野田宇太郎の長い付き合いの軌跡を振り返り、野田に宛てた手紙を援用し、実証方法で牛島春子と野田の交流の長い軌跡に辿りつつ、牛島春子の内面及び彼女の文学特質を探ってみる。

一． 渡満前一青春の重なり

野田と牛島春子の人生の知遇は『街路樹』からである。二人とも一九三〇年六月創刊された『街路樹』に詩を発表した。その時、春子は十七歳であり、野田は二十一歳であった。その四歳年上の「久留米緋を着た青年の野田」が春子の頭に焼き付いていた。春子は「野田さんを想う」という野田を追悼するエッセーの中で「野田さんが久留米で過ごした一途の青春と、私の小さな青春が僅かではあるが重なり合っているのである」¹⁷と追憶した。一九二九年、野田は早稲田大学第一高等学院へ進学したが、心悸亢進症で帰郷した。野田は母と父に次々と死なれ、家産も失った。天涯孤独の身になっている野田は、貧乏のどん底で久留米と東京を放浪しながら詩を書いている。

一九三三年野田の第一詩集『北の部屋』が刊行された。一九三四年、丸山豊らと「ボアイエルのクラブ」を結成し、一九三六年、丸山豊らと同人誌『糧』（のち『抒情詩』と改題）を創刊した。春子は野田の詩集を耽読し、「野田さんと丸山さんは、誰れがなんととっても、日本レベルの、第一級の詩人だ」¹⁸と高く評価した。「牛島春子年譜」によると、牛島

春子は十四歳の時、短詩「黄昏風景」「思索」を『街路樹』に発表した。その後、詩からそれて政治運動に身を挺するようになった。春子は野田の詩を読み返してみると、「それらの詩集の中から甦ってくる記憶がいくつもある。その中から久留米餅を着ていた青年の野田さんが浮かび上がってくるのであるし、またそれらの詩集を共鳴しながら読んでいる娘の私が浮かびあがってくるのである」¹⁹と回顧している。牛島春子は「満洲」文壇に登場してから、亡くなるまで詩を発表することはなかった。詩に詳しい人ではないが、野田の詩を通じて青春時代の記憶が甦ってきたから、野田の詩集に耽読したわけである。『日本現代詩辞典』²⁰は野田宇太郎の詩の創作に次のように位置づけている。

初期から一貫して、いわゆる「久留米抒情派」といわれる、静謐な口語詩形に豊かな感情を内包する詩である。抑制的な感情表現や主知的な作風は、地味で派手さはないが、抒情詩の正統に位置づけられよう。

前述した春子のエッセー「野田さんを想う」によると、その時、野田は春子と喫茶店であつたり、丸山豊と同行して春子の家へ話に行ったりして、頻りに交流を行ったという。久留米の歴史を振り返ってみると、「江戸時代は藩の殖産興業策もあり久留米餅など、商業都市として発展する。（中略）、一八九七年（明治三十年）に第十二師団、一九〇七年に第十八師団の駐屯地になってからは軍都としても膨張、一九二二年（大正十一年）に始まった地下足袋生産がゴム化学工業の発展に結びつく」²¹当時の久留米は商都、軍都として筑後の中心をなしていたが、坂本繁二郎、青木繁、古賀春江、丸山豊を輩出した芸術的土壤の中で、文学や絵画を志す青年達が集まり、青春のエネルギーをぶつけあいながら、切磋琢磨していた。

牛島春子と野田宇太郎の青春の火花も眩しく散らした。二人とも日本共産党九州地方委員会準備会委員長西田信春との関連で拘束された。春子は西田に協力し、共産党活動に参加した。『西田信春書簡・追憶』に載っている牛島春子の随筆「追憶」で西田信春との付き合いを記している。「西田さんと知り合っていた期間は半年ばかりの間でした。詳しくいいますと、昭和七年九月から昭和八年二月までです。二月の一斉検挙で西田さんは捕まり、そのあと二週間ぐらいして私も捕まり、そしてそれきり再び会うことがなくなりました」²²という。その「二・一一」事件の時、野田も従弟の樋口国英の巻き添えとなり、入獄した。野田は『西田信春書簡・追憶』に「二・一一のころ」を寄稿し、一九三三年二月十一日、自分が逮捕されたことを記録した。

西田氏はわたくしが久留米に在住していたころの昭和八年二月十一日に共産党一斉検挙が行われた、所謂二・一一事件の九州地方委員会委員長であったという。たまたまわたくしの従弟の樋口国英もこの事件の主要人物の一人で、西田氏の下にあって倉庫兼書記の任務をしていて、樋口はわたくしのいた家を秘密通信のアドにしていた。その関

係でわたくしも二・一一事件で久留米警察に留置されることになり、はじめて共産党員たちと顔を合わせて旬日をすごしたが、そのときはまだ、どれが西田氏か知らなかった。

23

「二・一一のころ」によると、野田は幼い頃、従弟の樋口とは年に数回祖母の家で会っていた。小学校から中学時代、月に一回文通あった。その樋口がある日突然、野田を訪ねた。野田は коммуニストに成長した樋口に会って、喜んでいたという。樋口は「実は自分の家では警察の眼がうるさいので、すまないが、自分あての手紙をここで受け取ってほしいと素直にアドになることを」野田に求めた。野田は「それがいかに危険なことかぐらいは知っていた。しかし、樋口のすることには、すべてこれが自分の為すべき最善のことという確信があり、二つ返事でわたしはうなずいた」とその危険を察知しつつも、快諾した。

次に野田は「牛島春子たちがやって来て、カンパをたのむので、自分は共産党でないが、あんたたちにならやってもええ、と云って一円（十銭だったかもしれない）を渡したことで、シンパサイザーということになり、拘引された」と久留米の詩人青木勇が逮捕された理由も綴っている。一ヶ月後の三月十日、牛島春子も再逮捕された。野田は留置場での体験を「今から思うとすばらしい体験」と評価した。詩の創作に専念した野田は拘束をきっかけに、左翼人士と出会った。「あの軍国主義時代に真向から社会主義と人道主義によって絶対権力と闘っていた若き人々が、信念によるのかどの顔もはればれとおだやかで、少しの粗暴な振舞いもみせなかったことを、今にして思い出す。当時の記録をみると殆んどが労働者で、学歴らしいものを持つ人々も少ないが、すべては国家権力の矛盾を解明するまでの教養を身を以てわがものとした、真のインテリであった」²⁴と称賛した。その経験は野田の強い気骨を鍛えることにもつながったかもしれない。戦中、野田は難関を乗り越え、孤独で日本文学の灯を守り抜いたことも、戦後、廢墟の東京から日本文学を立て直し、後世に伝承しようとすることもその「すばらしい経験」に由来した可能性がある。さらに、野田は「牛島春子はそのころの久留米の闘士で、活動もめざましく、ジャンヌ・ダルクのような存在であった」²⁵と書いている。「裁かるるジャンヌ」という映画が昭和初期に日本で上映され、バーナード・ショーの戯曲『聖女ジョウン』は一九二三年十二月ニューヨークで初演され、一九六三年、日本で上演された。一九六九年十一月二十六日『朝日新聞』夕刊に『『聖女ジャンヌ・ダーク』劇団雲が6年ぶりに再演』という記事が掲載されている。野田はこれらの芸術作品を享受し、一九七〇年「西田信春追悼」の執筆を頼まれ、ちょうど、久留米時代の春子を回想する箇所があり、二人の共通点に気づき、春子をジャンヌ・ダルクにたとえたのであろう。

ジャンヌ・ダルクと春子の共通点は少なくない。第一、少女ジャンヌは十九歳で不正審判を受けて処刑された。春子も十八歳、十九歳の時、検挙され、入獄した。ジャンヌは文字が読めなかったが、優れた感性と知性の持ち主である。春子は文学少女でありながら、絵画にも長けている。第二、ジャンヌは男装して男の兵士たちを率いた。「ジャンヌは、シ

ョーの戯曲に特有の「女らしくない女」と呼ばれるヒロインたちの中でも、最も性別を超越した登場人物である…ショーの創造したジャンヌは、戦時下の男性中心社会において、女性でありながら自らの才能を發揮すべく、男装に身をつつみ、女性らしい要素を極力排除しようとする」。²⁶第Ⅱ部第一章第一節にも書いたが、牛島春子は自ら「女流作家」というラベルが貼られることに抵抗があり、野田宇太郎宛の手紙には「文学と酔っぱらったやうな文学少女あがりの女流作家なるものに反逆するために、私はさりげなく市井の生活に徹しようとしてゐるのかもしれませんが」と述べた。牛島春子は男に憧れているのではなく、女性として生まれても、男性として生まれてもいい。ただ、自分を束縛している因襲に反発している。春子の作品は「女らしくない」「男装心理」と言われていた。第三、二人とも自負していた。ジャンヌは自ら「神様の使者」と称し、自負心が強かった。春子は大衆に人間愛と軽蔑を共に抱えている。自分が持っているこのような性質について『手記』で次のように書き留めた。「愛と嫌悪、愛と軽蔑を同時に感ずる事もある。むしろそれらの場合の方が多いかも知れない」。春子も労働大衆が愚昧であると思ひ込み、自ら自負している。第四、二人とも闘士であり、激しい闘争に身を挺し、他人に「勇気を吹き込む」存在であるが、周りの「勇気が吹き込まれる」人たちは簡単には変わらないものである。ジャンヌはフランスの皇太子に勇気を与え、即位を促した上、軍隊を率い、イギリスを破った。シャルル七世は戴冠式でジャンヌのパリ攻略を非難し、脅した。ジャンヌは孤立しながら、神を信じ、民衆を信じ、火刑を恐れずに正しいと思うことを実行に行く。「牛島春子年譜」を参照すると、一九三一年、十八歳の少女牛島春子は日本足袋久留米地下足袋工場（後に久留米プリジストン地下足袋工場、現在のプリジストンK・K）に入社。生産現場で工員として働き始めてまもなく、日本労働組合全国協議会地方支部系の合同労働組合の専従者が帰り道で話しかけてくる。それ以後、職場で気長に労働運動に取り組もうと考えて、同僚と友達になろうとしたという。一九三二年、一斉検挙で逮捕されたが、釈放後、春子は屈せずに、日本共産党九州地方委員会準備会委員長西田信春に久留米で出会い、準備会直属の書記局で準備会のピラや文書の複写を作製する仕事に従事し、日本共産党に入党した。春子は労働者の権益のために闘ったが、労働者たちに蔑視され、孤立した。彼女のせいで家族まで異端視されるようになった。第五、不正の審判を受けた。獄中で、二人とも肉体的にも精神的にも大きな打撃を受けた。ジャンヌはシャルルからの偽りの手紙で騙され、有罪の答弁に導かれてしまった。火炙りの刑を恐れ、罪を認めたが、自分の弱みに気づき、後悔していた。最後まで、神様を愛し、殉教した。牛島春子は共産党員佐野、鍋山の転向声明を読まされ、気が弱くなってしまった。周りの人たちから孤立し、孤独になること、家族が異端視され、軽蔑されることを恐れて、ついに「転向理由書」を書かされ、釈放された。ジャンヌは司教に異端者と言われ、イギリス軍に引き渡され、処刑されたが、一九二五年ジャンヌは名誉回復ができて、聖人の列に入った。春子も非合法活動のラベルが貼られ、「世間」や権力に屈した。不合法な日本共産党は戦後、合法政党となり、共産党は復権できたが、「転向」問題で牛島春子はコンプレックスを持っていた。野田は春子をジャン

ヌ・ダルクにたとえ、春子や樋口のようなマルキシズムを信じて勇ましく闘っていた人達を尊敬しているが、行動を控えめにしていた。野田は彼等に対し、一種のコンプレックスを感じたと考えられる。この微妙なコンプレックスは戦後まで野田から離れることはなかったであろう。その後、野田は終生、春子の後ろ盾になり、彼女を見守り、励まし続ける。

二. 「満洲」追想

牛島春子は新天地「満洲」に渡った後、一九四〇年野田は上京し、小山書店で編集の仕事に携わり始めた。野田宇太郎資料館館長中村良之が書いた「野田宇太郎の世界」²⁷によると、一九四〇年三月、野田たちの寄り合い場所となっていた金文堂書店に東京の出版社小山書店主の小山久二郎が現われ、野田が市役所に勤めていることを知ると、その足で市役所に野田を訪ねた。小山は野田の高い詩精神とすぐれた編集の資質を見抜き、野田に会ったら、自分の経営する出版社の状況を話し、上京して働いてみる気はないかと誘った。当時は岩波系の小さな出版社であったが、質の高い出版物を出して出版界の注目を集めていた。小山書店は小規模であるがよい出版社であると判断した野田は、小山の誘いに応じた。小山は愛媛県出身の評論家安部能成の甥である。一九三六年岩波書店から独立して小山書店を成立した。小山書店は戦後、D・H・ロレンス著、伊藤整訳の『チャタレイ夫人の恋人』の発禁問題で、文学の根幹について問題を提起した出版社である。大胆な性の問題を露骨に描写した作品であり、階級社会への否定的な見解が強く表明された。当時、激しい議論をもたらし、社会に大きな波紋を広げた。一九五一年裁判が始まり、六年後の三月、最高裁判決で訳者、出版社ともに有罪と言渡された。野田はこのような小山書店で三年間勤めたが、志賀直哉、川端康成、宇野浩二など著名な作家と知り合い、人脈を広げて知己を得ていた。中には川端は後に、野田が編集する『文藝』の顧問になり、重要な役割を果たした。また、内容は別として、野田のその後の「文学散歩」シリーズが小山書店で知り合った宇野浩二の『文学的散歩』という題にちなんだ可能性が高い。宇野浩二は福岡市出身であり、一九二四年新潮社より『文学的散歩』が出版され、一九四二年改造社により再び『文学的散歩』が出版された。二冊の『文学的散歩』は同じ題であるが、中身は違うものであった。一九二四年の『文学的散歩』は文学についての雑談、芥川龍之介といった作家との深い交流などを書き込めた。一九四二年の『文学的散歩』はさまざまなことを回想し、文学界の出来事、名作家の青春時代を綴った。

牛島春子は「王属官」で「満洲」文壇にデビューし、文学活動を開始した。特に「祝といふ男」が一九四〇年芥川賞候補となり、注目されていた。一九四二年野田は詩集「旅愁」を出した。牛島春子からの書簡から二人はお互いの作品を鑑賞し、読後感を交わしたことがわかった。春子は野田の詩を読んで、「昔ながらの美しい感性」を賞賛し、その「詩のよさは判ると自惚れてゐます」²⁸。二人を近づけさせる一つのエレメントは「同郷の情」であると考えている。久留米の郷土で育まれる文学青年、文学少女は意気投合し、よく理解しあっている。戦中、戦後、野田は自分の詩集を春子に送っていた。春子は詩の裏に潜ん

でいる風景や出来事がわかるから、正確に理解できる。春子は野田の詩を愛読し、「大抵は郷愁を誘ふやうなものなつかしく、私はグルメ娘時代とあなたの着てゐらしたグルメ緋の着物を目の前にあるやうに感じたりしました」という²⁹。

詩集も、雑誌も、お手紙もありがとうございました。

相変わらずのきまり文句ですけど、あなたは日本一好い詩をお書きになる一人だと思っています。これは私があなたの詩を好きだからかもしれませんけれど。それにあとかきも大変感銘深うございました。何年たっても、どんなに世の中になっても瑞々しい命溢れてゐるあなたの詩。余談ですけど、あの詩の中の「チェといえる」少女は私知ってゐます。少女でなく、もう乙女でしたが、私が日本足袋に出てゐるころ、すぐよこで働いてゐました。言葉を交はしてゐるうちにだんだん親しくなり、とても私を慕ってくれて、私があんなことで警察にいる時も乙女らしく小さな鏡やチリ紙をさし入れてくれ、出てからも私のうちへ遊びに来たりしてゐましたが、その後どうなったでせうか。轟木チェ、きっとあの人だと思います。³⁰

「チェと言へる少女」は一九三三年出版された野田の初めての詩集『北の部屋』に収録された詩である。

チェよ あなたと一緒に
僕はふるさとの野葡萄をたべたい

あなたの口に僕の野葡萄を
僕の口にあなたの野葡萄を

野の花に埋れながら
僕はあなたを教育したい

「チェのヒトミ ト ノブドウ」

「チェのココロ ト ノブドウ」

チェよ 野葡萄をいっぱい摘んだら
秋の空へとけてゆきたい³¹

野田の詩集にはこのような少女への恋心がしばしば読み取れる。当時、詩の享受者はただ表現から野田の詩を鑑賞し、その詩に豊かな感情が内包され、静かな抒情詩であると受

け止めたが、その文字の裏に潜んでいる風景、エピソードについては恐らく想像がつかないであろう。牛島春子は一般の読者以上に、野田の詩を理解していた。野田も春子の作品を読み、アドバイスや批評をしている。

久しぶりのお手紙は大変嬉しうございました。気分が明るくなりました。あんな中々とした作品にあれだけ親切に批評を下さるのは、やっぱりあなただけです。あなたのきびしさは何よりもまして、得がたいものに思はれます。友情をあのやうに表現してくださる人は他にありません。³²

野田も牛島春子の「祝といふ男」を読んで、批評したことは次の書簡で明らかになった。一九四一年三月一日野田宛の書簡はそれについて綴っている。

満洲に来てもう六年になります。子供を育てながら相変わらずこつこつ考へ、書いてみます。「祝といふ男」の御批評有難うございました。古賀さんより器用だと仰言った事が意外に感ぜられました。私は技術の点では古賀さんに及ばぬと思つてみたからです。その上あの作品は新聞社からせきたてられ、泡を喰つて書き上げたもので、私は何時もこつこつ風で私の望みはどれ丈長くかかってもいいから書きたいと思ふことを十分練つて、堪能して書き上げたいと思ふことです。(中略)、日本文化の只中にゐらっしゃるあなたはきっと私に色々の糧と教訓を与へて下さるだらうと思ひます。どうぞ時々おたより下さいますやうお願い致します。³³

「色々の糧と教訓を与へて下さる」野田は牛島春子にとって、日本内地の状況を把握し、「外地」にいる己を内地とつなぐ重要な糸のような大切な存在である。当時、野田は雑誌『新風土』を編集し、「外地」にいる春子を鞭撻し、執筆を依頼した。春子は日本内地を離れていても、ずっと内地に憧れている。一九四四年六月二十八日野田宛の手紙にある一文がその気持ちを表明している。「生活の根はもう満洲に下りてしまったやうです。でも、内地に憧れる気持ちは、これは永久のものですけど」。

牛島春子が渡満後、二人は絶えず書簡を往復している。先行研究には触れられていないが、実は野田がはじめて接した異国は「満洲」であった。二人の持っているもう一つの重要な接点は「満洲」体験である。一九二七年十八歳の時、「満洲」、朝鮮へ修学旅行をしたことがある。戦時中ではないが、「外地」体験があるといえよう。野田のエッセー「わが修学旅行記」には次のように「満洲」を語っている。

わたくしの修学旅行は中学四年生、十七歳になった昭和二年五月の満鮮旅行であった。そのころの満洲はすでに日本の植民地になってゐたが、わたくしにとっては遠い異国で、

はじめての海外旅行だった。³⁴

野田は門司港からはるぴん丸という船に乗り、大連に上陸した。「エキゾティシズムの感動が」野田を「いきなり捕らへた」。苦力の群れる波止場を見たり、星の浦のヤマトホテルで中国人給仕たちに仕えられ、はじめて薄ジャムを塗ったトーストを食べたりした。また、ロシア植民地時代の面影、纏足の女も野田にとって印象深かった。当時、目に焼きついたロマンチックな「満洲」にはちょうど親友の春子がいて、彼は春子を通じ、「満洲」の記憶を継続しようとする気持ちもあると推測している。証拠として一九四三年六月、牛島春子が野田宛の書簡には「あなたの満洲への追想の鮮やかなのに愕いています」という一文である。野田は「満洲」に憧れていて、春子を通じて、「満洲」への追想を続けていた。春子は野田にとって、「満洲」にリンクする重要な存在であった。

春子の「祝といふ男」が一九四〇年第十二回芥川賞候補になって以来、野田との文通が頻繁になってきた。手紙の署名は字が大きくて、宛名と変わらない大きさになっている。牛島春子の字は力強くて、男っぽく感じられる。しかも、第Ⅱ部第一章第二節で考察したが、牛島春子は結婚後も、旧姓のまま、改姓しなかった。署名は「牛島春子」であったり、「春子」であったりして、二人の親しさが伺えた。野田宇太郎はこのように牛島春子の創作を助言し、激励し続けた。渡満初期の牛島春子は昔の政治運動のかわりに、文学活動に取り組んでいたが、自分の文学に自信がなくて、名声には無欲で、人間として自分の魂をさらし出そうとしていた。

私といふ人間は、昔も今も真赤に身内を燃やししながら、軌道を邁進せずにはをかぬ機関車で、私は自分を文学人のキャテコリーで考へたことはあまりありません。私はただ私といふ人間の生きる道を考へてゐる丈なのです。昔にかはった手紙が今の文学と云いませうか。(中略)、ジャーナリスチックな名声はすこしも欲しく思いませぬし、又そのやうなものは私を縛り付けてしまふばかりだと思ひますが、自分の魂のありか丈は知ってもらいたいと思つてゐます。文学をやる以上、やはり社会的な実践だからです³⁵。

春子はネガティブな人であり、注目されると縛られるおそれがあるから、名利に無欲なわけである。一九四三年三月、野田は編集方針の衝突で小山書店を退社し、劇評家詩人の長谷川巳之吉の経営する著名な出版社第一書房に移り、雑誌『新文化』を編集することになった。長谷川巳之吉は二十九歳のころに「玄文社」を退社し、大田黒元雄や片山広子らの資金援助を元に出版社「第一書房」を設立した。「書物の美にこだわり、絢爛とした造本の豪華本を刊行したことや、在野精神と反アカデミズムの精神による長谷川の出版活動は、「第一書房文化」と讃えられた」³⁶という。野田は第一書房から牛島春子の作品集を出そうと企画したが、満洲文藝春秋社も牛島春子作品集を企画しているので、川端康成の斡旋で結局満洲文藝春秋社に譲った。第Ⅱ部第一章第四節で詳述することにする。

一九四三年十二月十七日、川端康成が野田に宛てた書簡がある。

頃日牛島さんより手紙参り、あなたの御世話で作品集を第一書房から出してもらへる由、申し来られ、(中略)、文芸春秋社の満洲出張主任より、電報で牛島さんの作品集を出したいから、斡旋頼むとの事。文芸春秋の出張所なら、従来の満洲出版社と違って、万事よくやってくれるでせうし…

「文芸春秋の出張所」とは満洲文芸春秋社である。『文芸春秋七十年史』³⁷の「社史」によると、一九四三年十一月「満洲文芸春秋社」が新京で設立された。資本金十九万円、社長は菊池寛であり、専務取締役は永井龍男である。一九四四年七月「満洲文芸春秋社」は満洲国の委託によって月刊雑誌『藝文』を編集発行しはじめた。一九四五年四月『文芸春秋』休刊になった。一九四六年九月「満洲文芸春秋社」より香西昇、式場俊三、徳田雅彦は、引揚げ帰国した。北村謙次郎の『北辺慕情記』は「満洲文芸春秋社」の「満洲」進出を綴っている。

折りから満洲日日新聞社理事後藤和夫氏が上京中だったが、氏は前に上海にあったころ、文芸春秋社の永井龍男氏らと親しく、その縁故によって極力文芸春秋社の満洲進出をすすめた。文春社としても、一考に価する問題と見てとり、さっそく重役会議がひらかれたが、その席上、後藤案に非常な賛意をしめしたのは菊池寛の女婿藤沢閑二氏で、案外、気乗薄だったのが、社長菊池氏だったといわれるが、とにかく出版界の将来は暗澹としていたうえ「ここで何か新しい手を打たねば」と願う気持ちが大き勢を決したか、一応現地視察を兼ねて瀬踏みを敢行することになり、十八年まづ藤沢氏が単身現地視察の旅に上った。³⁸

呂元明は「戦局が逼迫している状況のなか、日本国内では出版界を取り巻く環境は一層厳しくなったが、「満洲国」では出版や物資の状況は相対的にゆるやかであった。従って、日本の出版界は業務の一部を満洲に移転することを考え始め、弘報処もこれを大いに歓迎し後押しをしている」³⁹と指摘している。

呂元明「総説雑誌『藝文』の前」⁴⁰によると、「満洲文芸春秋社」の事業には雑誌出版のほかに、書籍の出版もあった。これは『藝文』の広告からはっきり確認できる。ただ、「満洲文芸春秋社」が出版したほとんどの書籍は日本国内作家の作品であり、満洲作家の作品は極めて少なかった」(十七頁)。ゆえに、「満洲文芸春秋社」が成立してから一ヶ月後、「満洲」作家牛島春子の作品集の企画に乗り出したのはめずらしいことである。牛島春子の「満洲」文壇における重要な位置と関係があるであろう。春子の文学は「満洲」時代、野田や川端康成らを通して、日本内地にも発信した。野田と牛島春子は編集者と作

者の関係でもあった。編集者としての野田は春子に助言し、頻繁な交流を行った。野田は翌年の一九四四年、河出書房に入り、戦争末期唯一の商業文芸誌となった『文藝』の編集責任者となった。前述した「野田宇太郎の世界」によると、『文藝』は経営基盤のしっかりした大手会社でなければ、運営することができなくなった。その著作権は改造社から十萬円で河出書房に移った。すると、『文藝』は野田の責任編集で新たに河出書房から発行することになった。河出書店は一九三三年、改造社が『文藝』を創刊した同じ年に、河出孝雄が創立した出版社であり、一九三八年には、雑誌『知性』を創刊し、斬新な出版企画によって戦時中もあきらめずにやり抜いていた。社主の河出孝雄は文学に関する造詣も深く、国内外の文学全集を刊行するなど文芸書の出版に力を入れていた。

野田のコネで木下杢太郎、川端康成、火野葦平、豊島興志雄を編集顧問におき、独自の編集方針で、戦争中の抑圧に反抗しながら、文芸の灯を守り続けた。このような高い芸術性を保った文芸誌の編集に携わった野田は、特権でお金を儲けようとするのではないかと誤解され、嫉妬されたであろう。このようなスタンスをとった野田について、牛島春子は次のように評価している。

野田さんはほんとうに心優しいひとだった。傷つきやすく、純粋なひとだったと思う。そして深く孤独であったにちがいない。会えば、筑後なまりのとれない話し方でよく色々と話してくれる人だったが、話の中にいわゆる「文壇」に強い抵抗があるように感じられ、それが涼しいような感じで私に伝わってくるのだった。(中略)、野田さんは、深い、柔らかい感性で受けてとめてくれた。そうした野田さんに私は感謝している。⁴¹

以上の文脈からみると、野田は「文壇政治」を嫌がり、孤立し、「文壇」に抵抗しつつあるが、春子のことを案じ、優しく助言をしたことが窺い知られる。

「満洲」から一時的帰国する際、一九四二年二月、牛島春子は野田宇太郎、川端康成と東京で会い、交流した。第四節で詳しく考察するが、渡満後期の一九四二年から、牛島春子は「転向」し、正真正銘の国策協力の小説を書きはじめた。彼女自身も思想の変化に気付いたようである。

(前略)、物の考へ方など、いろんな混迷からやっと抜けはじめた所でございませう。すこし常識人に近づきました。何か依り所を見つけたら、又、昔のやうになる我武者羅さを感じますが、すこしは大人になりました。⁴²

戦時色が濃くなるにつれ、牛島春子は昔の政治運動の「混迷」から脱出し、戦時動員中の植民支配の「常識」に接近していく心身の変化が見られる。また次の文脈から野田は春子の「転向」姿勢に対し、憤りを示したと考えられる。

あなたのお言葉よく判りました。私はあの手紙の中から何か愛情深い憤りといったものを感じました。それは文学に対してであり、又私に対してでもあると思いました。(中略)、私はあの人を借りれば、何時かは「ヘドを吐きたい」、吐かねばならぬと思ってみますが、それより全き形で、吐くためにじっと醇化する時代を待っているのかもしれない。(中略)、私は娘時代にあまりに軌道を逸したことを考へ、行って来ましたので、現在己れがどうやら社会の軌道にのり得たことに、つまり平凡になり得たことに人々とちがふ悦びを感じてみます。私は常識はずれであった昔を幼かったと思い、今は常識をわきまへ、しかもそれをのりこえる人間でありたいと思います。⁴³

明らかに国策文学を書いている春子が野田の批判を受けた後、自らの気持ちを弁明する手紙である。春子は時代の流れに棹をさし、喜びを感じているようであるが、一方、野田は反戦の姿勢を貫き、政治性の強い国策文学に対しても、牛島春子の「転向」姿勢に対しても「愛情深い憤り」を示した。野田に崇敬された久留米の闘士ジャンヌ・ダルクのような存在であった牛島春子は「満洲」の地に渡り、植民地主義翼賛、戦争協力する行為を取っていた。それに対し、野田は失望し、「憤り」を覚えた。戦中の一九四二年出版された野田の詩集『旅愁』に反戦の詩が何本も収録されている。「ナプキン」はその中の一本である。

とある少女のテーブルの仕事場で
この白い歴史の形は作られた

フォーク
それは兵士の銃剣のやうに
スプーン
それは塹壕に突刺したショベルのやうに

ナプキンは
愛の中から険しい響きをころがして

一人の罪深い男の口の
汚れを潔めた⁴⁴

野田は罪深い侵略戦争を批判し、戦中もヒューマンイズムの信念を貫いている。戦争末期の一九四五年五月二十一日、野田はやむを得ず多摩特別警備隊に入隊し、軍服を着せられ、

軍人になった。「しかも二等兵で、もう自分の自由は失われたのだ。意見も希望も云えない。獄に入ったと同じである」⁴⁵野田は六月一日の朝、除隊になり、「本当に生き返ったような気持だった。同時に、また十一日間の経験が恐怖となって私の心をしめつけた」と『灰の季節』で軍隊体験を書きとめた。それにひきかえ、「外地」に滞在する牛島春子はマイノリティの植民者であり、常に軍人達に囲まれ、守られている。彼女の小説における兵隊賛美の表現はこれと関係がありそうである。

「女」において、春子は兵士に対する「兵隊さん、ありがとう」と感謝の気持ちを表した。同時に、彼女は兵士たちが戦場で命をかけて戦う場面を描いて、兵士たちへの賛美の意を表明した。また、中国語の雑誌『新満洲』に載っている春子の「遙遠的訊息」（遠くからの便り）も「女」と同工異曲の戦争賞揚作である。牛島春子からみると軍人精神が最も純粋で潔い。

〈作家精神〉がこの世で一番高く純粋なものやうに作家達が云ってゐたのですが、軍人精神の前にやはりそれが云へるだらうかと思ったりしてゐます。⁴⁶

さらに、戦争後期になると、春子は特別攻撃隊に憧れ、息子を一員にさせたがっている気持ちを野田宇太郎への手紙で表明した。「日毎に重大になってゆく戦局をみつめてみると、凡ゆる観念的なものが無力に見えて来てしまひます。子供達がみな男の子なので、私はよく男の子達が、特別攻撃隊の一員になって出撃する場面などを思い描きますが、そうすることによって、今日の私の生活が支へられてゐるやうな気もします」。⁴⁷時代の重き流れを春子自身も意識したが、「ひと頃の全社会を向ふにまはしたやうな気負った反逆はもう不可能で、その意味では今はひたすらに日本の運命に祈りをささげずにはをれません。妙な偶から妙なことをかいてしまいました。まるで思いもしなかつたのに。」⁴⁸『特攻 自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』によると、「特別攻撃隊が略称されて特攻とよばれるようになった一九四四年（昭和十九年）から、海軍は「決死」ではない「必死」の兵器を採用しはじめた。「特攻隊」の活動がはじめて公表されたのは同年10月、フィリッピン・レイテ島に上陸する米軍を撃滅するために出動した連合艦隊とともに、米艦隊を襲った神風特別攻撃隊である」⁴⁹

その特攻に対し、様々な視点から多種多様な見解があるが、太田尚樹『天皇と特攻隊』⁵⁰は天皇の存在なくしては特攻はありえなかつたと指摘した。「日本が追いつめられた太平洋戦争の末期、愛する人や家族、国土を守るといふ、目の前のリアリズムの世界の価値観だけで、死地に赴くことができるだろうかと問われれば、答えはノーである。彼らの立場に立ってみれば、人間の最後に問われるモラルの原点は何か、心を預けられる対象は何か、日本人の魂をどの方向にベクトルを働かせるかとなると、そこにあるのは日本古来の観念論への信仰であり、神の政を司る天皇に収斂される背景がそこにある」。（一二〇頁）

特攻は一九四四年、圧倒的な国力の差で挽回しがたい戦況に陥った日本軍の戦術であろう。日本国内では戦況悪化と共に特攻という言葉が流行語になっていた。死をものともせぬ犠牲になった隊員は「軍神」と称賛され、崇拜されることは戦意高揚につながった。こんな歴史の流れに「満洲」にいる春子まで息子を特攻に加入させたがっている姿が浮かび上がり、「軍国の母」としてのイメージが鮮明になってきた。野田は『灰の季節』で「文藝」一九四四年十二月号編集後記を引用している。野田は春子と同様に特攻に関心を示し、感激したようである。

某日、私は神風特攻隊の新聞記事をきりとった。机の上ののせて仕事をしてゐるうちに何故に私はそれを切りとったかと反問してみた。これは他人事ではない。今更感激することではない。ただ泣けばよいのだ、泣いて立ちあがることなのだ。⁵¹

三. 引揚げ後の再会

野田は『文藝』一九四五年十一月号に「満洲」で生死不明の牛島春子を心配し、「閨秀作家牛島春子の墓標」を立てる気持ちで彼女から預っていた小説「過去」を掲載した。その経緯について『灰の季節』に記録した。

(前略)その後満洲が日ソの戦場となると、消息も絶え勝ちとなり、夫が沖縄へ満洲から召集となったという便りを最後に音信は切れた。その前に私は牛島氏から一篇の小説を預っていた。それは戦時中久しぶりに日本を訪ねて過去の友人を訪ね廻る題未定の原稿だった。私は牛島春子もついに満洲に散ったに違いないと思いあきらめて、その原稿を取り出し「過去」という題をつけた。十一月号に発表したのは、閨秀作家牛島春子の墓標を友人として私の手でたてる気持であった。(牛島氏はその後奇跡的と言ってもよい程の苦難に耐えて内地に帰還した)⁵²

牛島春子の「野田さんを想う」⁵³によると、「過去」は川端康成の鞭撻で書かれた小説である。自信がない春子は野田の意見を求めるために、無題のまま野田に預けたという。「夫が沖縄へ満洲から召集となったという便り」は一九四五年五月十五日日付のものである。時局激動の中、牛島春子は「むずむずしたもの」を感じ、「昔の虫がまだ出たのでせうか」と昔から固有のヒューマニズムを押さえ、「やはり男のやうなああいふ動きに心惹かれ」、戦争協力の道に邁進した。「牛嶋晴男年譜」によると、夫の牛嶋晴男は一九四四年三月、召集を受け満洲駐屯の部隊に入隊し、八月までに「満洲」から部隊が沖縄へ移動した。「主人は只今沖縄で闘ってゐます」と夫の行方を伝えた後、春子は「手紙ではどうも不便なので、一度あなたと心ゆくまで話せたらと思ったりします」と野田と胸衿を開いて深く交流することを期待している。その後一年以上も音信がなくなった。

奇跡的に一九四六年七月、牛島春子は三人の子供を連れ、多難な道を歩み、後の第Ⅱ部第二章第四節で詳述するが、牛島春子は葫蘆島から舞鶴に上陸し、小郡に引き揚げてきた。その直後の一九四六年七月二十六日、春子は野田に手紙を送り、「支那人の暴徒に囲まれて物をはぎとられた事もあったし、子供三人をつれて旅から旅へ、今度も背中にリュックをしょひ、胸に下の子をくくりつけ片手に荷物をさげ、もう一方の手で中の子の手を引き、みんなの列より百米もおくれてほど帰ってきました。（中略）、内地に帰ったら、東京まででかけて行ってあなたや川端さんに相談しようかしらと思ったり、あなたに会ったら大いに甘へて色んな話を聞いて貰うと空想したりしてみました」と引揚げの状況を記録し、東京に出かけて野田と川端康成に会おうとする気持ちを伝えた。しかし、それは実現できず、「ほんとうに一度お会いできたらいいですね」⁵⁴「春にお帰へりになるのをお待ちしてゐます」⁵⁵という書簡の文によると、牛島春子は野田との再会が待ち遠しかった。一九四六年、引揚げ直後の牛島春子はまだ「満洲」との縁を完全に切ることはできなかった。実体験に基づき、創作された引揚げ小説の分析は第二章第四節に譲る。春子は次のように打ち明けている。

満洲での放浪生活がしきりに思い出されます。あのやうなロマンチックな（非現実的な意味で）一時期を思ふと、私今でも飛躍したがります。何時になっても何かしら憧れてゐる困った性分です。⁵⁶

敗戦後の放浪生活と引揚げ体験が春子にもたらしたのは苦痛と悲しみではなく、未知な世界への憧れ、ロマンチックな自由、解放感であった。同時に、春子に自己省察の機会も与えた。

「敗戦に負ける」とは警句だと思います。ヒューマニティといふ言葉、私はかつてこれを人に向かって口にすることはありませんでした。私はこの言葉を安易に使いたくないのです。最も高貴なもの謂いだそれは思います。（中略）、この言葉を大切な宝としてしまいこんでゐました。私がこういふことを考へはじめたのは十四位の時からでせう。私の世俗的なものへの反逆もその頃からはじまったのですが。私があんな思想運動に入ったのもそのためなら、それからぬけ出したのもそのためですし、今度の戦争もそういふ面から理解し肯定しようと四苦八苦をしましたが、何時でも何処でもさして不安を感じないのは私なりにこの宝を抱いてゐるからだと自分で思つてゐます。これから先も、私はこの言葉を周囲の人に安易に口にすることはないだろうと思います。書きたいことを書く境地に安住してをれるのも、そのためだと自分で思つたりしてゐます。いつの間にか四角ばった顔になってしまいました。⁵⁷

「敗戦に負ける」というフレーズは野田からの書簡で出たものであろう。敗戦で落ち込んだりしてはならず、その廃墟から立ち上がり、やり直すことを野田は提唱した可能性が大きいと思う。牛島春子はこれを受け止めて、これまでの人生を振り返った。ヒューマニティこそ彼女の心にしまいこんでいる宝物であり、彼女の行動を左右する最も根本的な理念である。激しいマルキストというより、春子はヒューマニストであると言った方が適切である。石神豊の『ヒューマニズムとは何か』（一九九八年第三文明社）によると、ルネサンス時代の「ヒューマニズム」は「一つの普遍的な主張であるが、じつは同時に歴史的な主張でもある。つまり、その時代、社会に巣くう非人間的なものに対する闘争という面をもっている。この非人間的なものはさまざまな形態で現れる。それには中傷、迫害、弾圧といった物理的暴力のみならず、差別という、社会に潜む目に見えない暴力も含まれる」。(十六頁)「マルクスは、近代のヒューマニズムをブルジョア・ヒューマニズムとし、これを退ける。ブルジョア・ヒューマニズムは基本的に個人主義的ヒューマニズムであり、階級的差別を覆い隠す役割をもっている。それに対し、労働者階級は近代のこうした傾向をうち破り、真のヒューマニズムである社会主義的ヒューマニズムをうち立てる歴史的使命があると主張する」。(六十六頁)

一九四六年七月、牛島春子は引き揚げてきた直後、民主化が進んでいる日本内地に憧れている気持を野田に表明した。「私は敗戦日本が気がかりでならず、天皇制が云々されたり、共産党が合法政党になったりした祖国の姿に何時も思ひを馳せておりました」⁵⁸。一九四八年、牛島春子は新日本文学会久留米支部の創立に参加した。彼女の心に深く根ざしたヒューマニズムは蘇り、再び共産党に接近しはじめた。そのヒューマニズムはルネサンス時代の「非人間的なものに対する闘争」である。

天皇制を批判するのも天皇個人を人間的な侮辱したり、人身攻撃をやったり、悪意に悪意と解釈したりするやり方は私も不愉快です。あの人たちのこんなくせは昔ながら持っています。一種の主観主義です。(中略)、けれど実際の所、私は共産党員は好きです。中としての非人間的な印象にもかかわらず、個々の共産党員は実に美しい人々です。今の世の中ではやはり真実の政党は共産党のみだと思います。

牛島春子は党内の問題点を指摘し批判したが、相変わらず、昔の政治思想を持ち続け、共産党員を賛美し、擁護している姿勢が変わらなかった。春子は自然にそのコミュニスト達と交友し始めた。書簡、葉書を手がかりとして調査すると、新日本文学会の同人の野間宏、中野重治、壺井繁治らと付き合っていた。特に親しかったのは野間宏である。新日本文学会については、第四節で詳述することにする。ヒューマニズムは牛島春子と野田宇太郎の絆を結びつく最も重要なエレメントであると思う。牛島春子の「ヒューマニズム偶感」(一九四九年六月『新日本文学』四十二頁)は極めて簡潔な文章であるが、次のように「ヒューマニズム」の定義の変化を指摘している。

ヒューマニズムという言葉ほど漠然としたものはない。大変便利なものであるし、又考えだすとこれほど厄介なものもない。ヒューマニズムを口にするほどの人々はそれぞれ自分なりの意味で解釈しているであろうし、そして又その大方はその通り間違いないであろう。

人間が、動物から神までの幅広い階層に棲むものであるならば、ヒューマニズムの内容も又そのようである訳である。ただ私にはヒューマニズムとゆう時、それは動物よりもむしろ神へのアンチ・テーゼを含んでいるような気がしてならない。

ギリシャ、ローマからルネサンスにつながるヒューマニズムの運動が、人間愛とか教養とかを意味したとしても、もはや現代ではあのようにあることは出来ないであろう。人間が人間を搾取する経済機構そのものへの疑いが、新しいヒューマニズムの一つの起点となるのではないか、という気がする。⁵⁹

「あなたの説かれるヒューマニズムはよく判ります。そして大変教へられます」⁶⁰という手紙の一文からみると、野田もヒューマニズムについて、春子に説いたと推測している。野田は遺言で「わたくしは人道主義者である。人の教養と、やさしさを尊ぶ。（中略）、個人の自由は法によって支配さるべきものにあらず」と己の人生を締め括った。「人間愛、教養」という解釈は野田のヒューマニズムへの理解であると考えられる。春子は時代の変化に伴い、ヒューマニズムの概念も変化が起きたと指摘している。それはマルクスの社会主義ヒューマニズムの概念に近い理解である。

春子が受け止めているヒューマニズムは野田とは異なり、書簡でヒューマニズムには時代的限界があることも主張した。

ヒューマニズムの運動が、ヒューマニティの抑圧への反逆として起ったといふことが云へるならそれは夫々全人間的な解放を求めながらその運動はやはり時代に制約されずにはゐられなかったのではないでせうか。（中略）、私はこういふ考へ方にも関心をもつ人間です。（もちろんこれは唯物論的立場ですね）ヒューマニズムの本質追求とこういふ考へ方はどちらも同じやうに尊重されねばならないのではないかといふ気がするのです。⁶¹

「時代に制約されずにはゐられなかった」とは「満洲」時代、夫を支え、国策協力の作品を書いた牛島春子の言い訳ではなかろうか。敗戦とともに、野田は雑誌『文藝』の編集をやめて、一九四六年日本文学を擁護するために、雑誌『藝林閑歩』を創刊し、戦後の廃墟の中で孤独に日本文芸復興に尽力した。文豪の森鷗外、夏目漱石、幸田露伴、蒲原有明の特集号を発行した。教養主義は六つの定義がある。野田はヒューマニズムの立場で古典を尊び、学問する生き方を大切にす教養主義者であると思う。世の中に揶揄されながら

も決して編集方針を変えずに、文芸復興に力を注いだ。それに対し、牛島春子は若い頃と違い、過激な行動を取らないが、次のように野田の文学スタンスに敬服し、支持する姿勢を示した。

文壇や出版界の事情は私には判りませんが、悪戦苦闘なさっていらっしゃるお姿を大変心づよく思います。どうぞしっかりお願いしますと頭を下げるより他私には出来ませんが。⁶²

一九四八年、文芸誌の経営に限界を感じた野田は編集生活を終わらせ、詩の創作と近代文学研究に没頭するようになった。一九五一年一月より、野田は『日本読書新聞』に「新東京文学散歩」を連載しはじめた。「文学散歩」という用語がはじめて日本文学に登場した。実地調査による近代文学の実証的研究という新たな分野を拓いた野田は、精力的な著作活動を始め、廃墟と化した日本文学の復興に取り組んだ。『新東京文学散歩』の「序」に野田が提唱している文学研究法が書かれている。

足で書く近代文学史一と、そんな大それた考えを抱いていたわけでもなく、また私にそれが書けると思っていたわけでもなかったが、新東京文学散歩という漫然とした気持で焼け跡の東京を歩いているうちに、一つの事跡は他の事跡に自然につながってゆき、いつしかそれは近代文学史の形に似て来るのを私は知った。（中略）、概念的で概論的な近代文学史ばかりがいくら類を増しても、それは決して真の文学史をより正確に刻むことにはならないし、却って過誤を後世に遺す結果となる場合が多い。詩人や作家の価値をたまたま文字の上に表れたことのみで評価することは、ややもすればその商品価値で芸術を評価するようなことにも成り勝ちである。先ずその人間を知らねばならない人間を知るためにはその自然と環境をも知らねばならない。私生活を理会せねばその文学を本当に理会することはできない。⁶³

文学作品を批評する際、テキストのみでなく、作者の生まれ育ちの地、生きていた環境を身をもって実感する必要があるから、「文学散歩」が必要であるという主張である。しかし、「文学散歩」は単なる案内書ではなく、文学作品を作者の心理、地理環境から捉えようとするものである。観光案内と誤解されないように、野田は一九五六年二月二十三日『産経時事新聞』に「文学散歩と案内 私の著作の誤解について」を公表した。「題名だけならばまだよいとして文学散歩の模倣出版を拝見とどれもこれも一種の案内書にすぎないのを私はあきれた」⁶⁴。野田は単なる観光案内を書くのではなく、実際に文学風土へ足を踏み入れることによって、自分が信じるもののみを自分の人生観や社会観に融合させ、新たな文学を創造することを主唱した。

これはあくまでも〈足で書く〉近代文学史であると同時に歴史的事実の中から私個人が真に価値ありと信ずるものだけを拾ひあげて、私の人生観や社会観の中にとかしいれながら、そこに一つの特種な私なりの文学を創ることが目的であった。文学を創らねばこの仕事は単なる売文と同様だからである。⁶⁵

特権を持っていない野田は「文学散歩」第十四号（一九六二年六月）の「編輯室」欄で、「私はもちろん職業的な編輯者ではないから、十分な時間もなければ、経済力もない」と記している。「ざっくばらんに言へば、文学散歩を編輯する間だけ、自分の生活は苦しくなる。だが、苦しいなと意識すればするほど、文学散歩の編輯に熱中する結果になるから奇妙なものである」と述べ、この雑誌の運営が楽でなかったことをあきらかにした。このように、戦中から戦後まで野田は文学の初志を貫き、強い責任感を背負っている。『灰の季節』では次のように記した。

最後まで踏みとどまって文学雑誌の編集を続けてゆく責任があった。もし私がその責任を捨てたら、もはや過去と未来を継ぐただ一つの文学伝統の橋も日本からなくなってしまうからである。⁶⁶

野田は自由に生きようとして「文壇政治」から遠く離れ、静かに「文学散歩」という独自のテーマを作り出した。それは名利に淡泊な牛島春子と野田宇太郎の気持ちは相通ずる。戦後、野田の『九州文学散歩』で春子のことを取上げなかったのもそれと関係があるに違いない。野田は誰よりも深く春子の心を洞察し、春子のことを心にとどめておきたかったのであろう。前述したが、牛島春子が引き揚げてきた直後、野田に民主化が進んでいる日本内地に憧れている気持を表明した。「私は敗戦日本が気がかりでならず、天皇制が云々されたり、共産党が合法政党になったりした祖国の姿に何時も思ひを馳せてみました」⁶⁷野田宛の書簡で牛島春子は共産党内の問題点を指摘し、非人間的な行為を批判したが、共産党員を大いに褒めている。次の文脈から見ると、それは野田の共産党批判の書簡を受け入れてからの返信である。

お手紙のありました党への批判は全く同感だと思います。

例へば、天皇制を批判するのも天皇個人を人間的な侮辱したり、人身攻撃をやったり、悪意に悪意と解釈したりするやり方は私も不愉快です。⁶⁸

一九八〇年、多田茂治は牛島春子の依頼でエッセー集『ある微笑』を編集した時、野田を訪ね、意見を聞いてみた。野田は「牛島春子は小説集を出すべきだ。随想集ではねえ」「牛島春子を軽くみてはいけませんよ、立派な作家です」⁶⁹と牛島春子を賞賛したらしい。「ある微笑」は一九六九年牛島春子が書いたエッセーの題である。それは多田

編集のエッセー集に収録された。フランスのサガン著『ある微笑』（新潮社 一九五八年五月）を想起させる。ドミニックという少女の恋愛についての物語である。その微笑は長い苦しみの後、静かな落ち着いた微笑である。一方、牛島春子の目に映った「ある微笑」は内容が違うが、その表現にちなんだ可能性がある。それは家族が日本人に殺された中国人女性の慎んでいる微笑である。同じく苦しみ後の微笑であるが、その微笑は心から出てきたものではなく、その裏に憎しみ、恨み、平和への憧憬が潜んでいるかもしれない。

ある年、中国からの文化使節団に小柄の若い婦人が交っていた。同じテーブルにいて私はそのひとの、言葉すくなに、つつましい微笑をたやさない姿にうたれた。後日、そのひとは家族全部を日本軍に殺され、女子師範生だった彼女は一人延安にのがれて抗日戦に加わったひとだったと知って、はじめて私は日本人である自分に深い苛責を感じた。あのひとの、あの私たちにむけたつつましい微笑はどこからでるのだろうか。それについて私は考えつづけなければならない。⁷⁰

二〇〇一年の第十二回野田宇太郎生誕祭に、牛島春子は野田宇太郎資料館にメッセージを入れた。「私のささやかな青春は野田さんの詩と共にありました。それから戦中戦後の永い年月、私の環境は色々と変わりましたが、文学上のおつき合いは変わりませんでした。野田さんはやさしい先輩として、忘れられない思い出の中の大切な一人として、今も私の中に生きています」。⁷¹

おわりに

近年、「外地」文学研究が次第にブームになり、牛島春子は「満洲」女性作家として晩年になって注目され、彼女についての研究も盛んに行われるようになりつつある。彼女を考える上で、親友の野田宇太郎の存在は無視できない。牛島春子と野田宇太郎との長い付き合いを振り返ることによって、より立体的な牛島春子像も浮かび上がってきた。牛島春子が野田宛の書簡は彼女の作品や彼女の思想を読み解く有効な裏づけ資料であるから、私は実地調査に踏まえ、春子の渡満時期を再検討し、彼女の内面に立ち入り、語れなかった本音を探ってみた。日本内地にいる野田は牛島春子を介し、「外地」にリンクして「満洲」追想を果たした。春子はずっと内地に憧れ、野田を通じて「内地」の動向を把握し、機関誌、出版社との関係を保っていた。

二人の接点は三つある。第一は、青春時代からの同郷の情誼である。第二は、ヒューマニズム思想という強い信念である。第三は「満洲」体験である。野田はずっと牛島春子の後に立ち、彼女を支え、激励していた。二人は知己として意気投合し、よく理解しあっているが、戦争へのスタンスにおいて分岐があった。戦時色が濃くなるにつれ、牛島春子は昔の政治運動から脱出し、戦時動員中の植民支配に接近していく心身の変化が見られる。

彼女の小説にはしばしば兵隊賛美をいとわない表現が見える。書簡の内容からみると、野田は春子の「転向」作品に対し、批判したと推測している。編集者の仕事に携わっている野田は「外地」にいる春子を鞭撻し、常に執筆を依頼した。牛島春子は野田の詩が好きで、一般の読者以上に、詩の深層を理解していた。野田も春子の作品を読み、率直に批評をしている。二人の深い友情は書簡の行間にあふれている。

注

- ¹井上洋子「終戦の軌跡—牛島春子と小郡」野田宇太郎文学資料館十五周年記念『背に廻った未来』二〇〇二年 二一五頁
- ²坂本正博「牛島春子と野田宇太郎」『野田宇太郎顕彰会会報』第十一号 二〇〇四年三月一頁
- ³多田茂治「ある微笑—牛島春子と野田宇太郎—」『蝶を追ふ』野田宇太郎生誕一〇〇周年二〇一〇年七十頁
- ⁴『叙説：文学批評』 一九九六年八月
- ⁵『叙説：文学批評』 一九九七年八月
- ⁶『叙説：文学批評』 一九九八年二月
- ⁷『福岡女学院大学紀要』二〇〇一年三月
- ⁸『福岡女学院大学紀要』二〇〇二年三月
- ⁹『福岡女学院大学紀要』二〇〇三年三月
- ¹⁰『福岡女学院大学紀要』二〇〇四年三月
- ¹¹八木福次郎「愛書家、思い出写真帖 野田宇太郎さん」『日本古書通信』二〇〇八年十月三十三頁
- ¹²中村良之「文学館だより野田宇太郎文学資料館」『文学批評 叙説三』六 一四七頁
- ¹³藤井淑貞「野田宇太郎研究のために」『立教大学日本文学』第九十七号 二〇〇六年十二月 四十五頁
- ¹⁴桜楓社 五二七頁
- ¹⁵「野田さんを想う」『野田宇太郎資料館ブックレット』野田宇太郎資料館 八頁
- ¹⁶藤井淑貞「野田宇太郎研究のために」『立教大学日本文学』第九十七号 二〇〇六年十二月 四十五頁
- ¹⁷「野田さんを想う」『野田宇太郎資料館ブックレット』野田宇太郎資料館 八頁
- ¹⁸「野田さんを想う」『野田宇太郎資料館ブックレット』野田宇太郎資料館 八頁
- ¹⁹「野田さんを想う」『野田宇太郎資料館ブックレット』野田宇太郎資料館 八頁
- ²⁰分銅惇作〔ほか〕編『日本現代詩辞典』桜楓社 一九八六年 五二七頁
- ²¹久留米市史編纂委員会『久留米市史』久留米市 一九九八年を参照
- ²²牛島春子「追憶」『西田信春書簡・追悼』土筆社 一九七〇年 三六五頁
- ²³野田宇太郎「二・一一のころ」『西田信春書簡・追悼』土筆社 一九七〇年 四三〇頁
- ²⁴野田宇太郎「二・一一のころ」『西田信春書簡・追悼』土筆社 一九七〇年 四三〇頁
- ²⁵野田宇太郎「二・一一のころ」『西田信春書簡・追悼』土筆社 一九七〇年 四三〇頁
- ²⁶日本バーナード・ショー協会編『バーナード・ショーへのいざない』文化書房博文社 二〇〇六年十一月 一九〇頁
- ²⁷中村良之「野田宇太郎の世界」『背に廻った未来』野田宇太郎資料館 二〇〇四年
- ²⁸一九四一年三月一日 野田宛の書簡

-
- 29一九四二年十二月二十四日野田宛の書簡
- 30年不明、九月六日野田宛の書簡
- 31野田宇太郎『野田宇太郎全詩集』 蒼土舎 一九八二年 一四八～一四九頁
- 32一九四八年一月二十二日 野田宛の書簡
- 33一九四一年三月一日野田宛の書簡
- 34野田宇太郎『母の手鞠』新生社 一九七五年 四十二頁
- 35一九四一年三月一日野田宛の書簡
- 36長谷川郁夫『美酒と革囊：第一書房・長谷川巳之吉』 河出書房新社 二〇〇六年
- 37『文藝春秋七十年史』文藝春秋 一九九一年
- 38北村謙次郎の『北辺慕情記』大学書房 一九六〇年
- 39呂元明『『藝文』創刊号、二月号の解説を兼ねて』『『藝文』と満洲藝文聯盟版 満洲藝文協会版』 ゆまに書房 二〇一〇年 二十四頁
- 40『藝文』藝文社版 ゆまに書房 二〇〇七年
- 41「野田さんを想う」『野田宇太郎資料館ブックレット』野田宇太郎資料館 八頁
- 42一九四二年二月二十八日野田宛の書簡
- 43一九四二年五月二十日野田宛の書簡
- 44野田宇太郎『野田宇太郎全詩集』 蒼土舎 一九八二 七十～七十一頁
- 45野田宇太郎『灰の季節』 創元社 一九五八年 二〇八頁
- 46一九四三年八月十七日野田宛の手紙
- 47一九四五年五月野田宛の手紙
- 48一九四五年五月野田宇太郎宛の手紙
- 49岩井忠正他著『特攻 自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』 新日本出版社 二〇〇二年七月 一六四頁
- 50北影雄幸『これだけは読んでおきたい特攻の本』 光人社 二〇〇七年
- 51野田宇太郎『灰の季節』 創元社 一九五八年 六十二頁
- 52野田宇太郎『灰の季節』 創元社 一九五八年 六十二頁
- 53「野田さんを想う」『野田宇太郎資料館ブックレット』野田宇太郎資料館 九頁
- 54一九四六年十一月十九日野田宛の書簡
- 55一九四六年七月二十六日野田宛の書簡
- 56一九四六年十一月十九日野田宛の書簡
- 57一九四六年十一月十九日野田宛の書簡
- 58牛島春子一九四六年七月二十六日野田宛の書簡
- 59牛島春子「ヒューマニズム偶感」 『新日本文学』 一九四九年六月 四十二頁
- 60一九四八年七月二十二日野田宛の書簡
- 61 一九四八年七月二十二日野田宛の書簡
- 62一九四八年一月二十二日 野田宛の書簡
- 63野田宇太郎『新東京文学散歩』日本読書新聞 一九五一年
- 64行吉正一 田中実穂「文学散歩という方法—漱石文学散歩の記録」『東京都江戸東京博物館紀要』第一号
- 65「九州文学散歩を終りて」『九州文学散歩』創元社 一九五三年八月 八頁

⁶⁶野田宇太郎『灰の季節』 創元社 一九五八年 二頁

⁶⁷牛島春子一 九四六年七月二十六日野田宛の書簡

⁶⁸牛島春子一 九四八年九月九日野田宛の書簡

⁶⁹多田茂治「ある微笑—牛島春子と野田宇太郎—」 『蝶を追ふ』 二〇一〇年 野田宇太郎資料館
七十二頁

⁷⁰牛島春子「ある微笑—日中不再戦植樹に思う」『牛島春子作品集』 ゆまに書房 二〇〇一年 二九四～
二九五頁

⁷¹「闘った、書いた、生きた追悼 牛島春子一」『小郡市民ふれあい広場』（館報第六十号） 二〇〇四年
二月

第四節 川端康成との縁

はじめに

ノーベル文学賞受賞作家川端康成は四十年にわたり、多様なジャンルにまたがって歴大な量の作品を発表した。『伊豆の踊り子』『雪国』『山の音』などを代表作とし、初期は「新感覚派」として活発に活動し、後に「日本伝統的な美」を重視する方向になった。これに添って彼についての研究も幅広い側面から展開されてきたが、戦争や植民地との関係は比較的曖昧に扱われてきた。近年、二〇〇五年山中正樹「〈十五年戦争〉と作家〈川端康成〉（覚え書き）—昭和十年代の作品を中心に—」¹は昭和十年代の作品を中心に川端の戦争に対する姿勢を検討し、「当初川端は戦争に対しても反抗する姿勢を持ち得たのだろう。しかし、それが徐々に失われ、結局は戦争に対して〈我関せず〉といった姿勢へと変わっていくのである」と指摘した。二〇一一年李聖傑「川端康成における戦争体験について—「敗戦のころ」を手がかりに—」²は「満洲」紀行の日程を詳細に記録し、そこから引き出される「敗戦のころ」に同行した村松梢風、火野葦平を書き漏らしたことについても論じた。特攻隊の報道班員の体験を背景にした「生命の樹」について、同行した新田潤と山岡荘八の記述や特攻隊員の杉山幸照の川端に関する回想を通して、作家としての川端の戦争体験を考察し、「知識人の立場から特攻という制度の非人間性を感じており、特攻隊基地という死地から飛び急ぐ生き生きとした魂をむなしく凝視するより、戦時色の薄い東京に戻ったほうがいいと考えていたのであろう」と結論付けた。二〇一三年小谷野敦の研究書『川端康成伝—双面の人』は「戦争、最低限の協力」であると評価し、「川端が満洲で牛島春子に会ったのか確認はできない」³と疑問を残した。二〇一四年森本穂『魔界の住人 川端康成』は川端と「満洲」について李聖傑の論文があると簡単に触れているのみである。川端康成に関する先行研究は川端が戦争とコミットした出来事として、二回の「満洲」訪問と特別攻撃隊基地の報道班員体験を取上げたが、それだけでは不十分である。先行研究はいずれも在満女性作家牛島春子への働きかけについて一切触れていないことに気付いた。一方、牛島春子を研究する際、「牛島春子年譜」には「〈満洲〉に來訪し、新京に滞在中の川端康成と会う。（一九四二年の來訪時にも会う）」という一行に過ぎない記録があることが気になっている。結論から先に言うと、「一九四二年の來訪時にも会う」という一文は間違いである。本論文は在満女性作家牛島春子と今まで指摘されていない縁を手がかりとして、「牛島春子年譜」の修正、春子が川端康成から受けた影響を検討することにする。それは従来の川端戦争関与、引いては人生全般にもつながっているようである。

一. 不思議な縁

牛島春子は野田宛の書簡や葉書には頻繁に川端康成のことに言及している。牛島春子と川端康成との接点はどこにあるか、「満洲」での二回の面会だけでない。牛島春子と川端康成は絵画という共通趣味を持っている。坂本正博作成の「牛島春子年譜」によると、春子の兄磐雄は一九二六年図画、音楽の教員資格を取得し、荘島尋常小学校に赴任した。この

頃から八歳年上の古賀春江と親交を深め、古賀がなくなるまで続いた。『古賀春江藝術と病理』によると、古賀春江は福岡県久留米市で浄土宗の寺・善福寺の住職の長男として生まれ、大正期に活躍した日本の初期のシュルレアリズム（超現実主義）の代表的な洋画家であり、詩人でもある。東珠樹は「童心の画家 古賀春江」で「試みに彼の作詩のいくつかを読んでみると、そこに驚くほど絵画的なイメージがうたわれていることがわかる。そして彼の絵画作品のいくつか見ると、そこに驚くほど彼の詩情が造形化されていることがわかる。古賀にあっては、詩と絵画の両者は、その何れが先行するのでもなく、またその何れが隷属するのでもない。古賀春江は絵筆をもって詩情を描いた画家であった」⁴と古賀が絵画と詩を妙に融合した境界を評価した。古賀は久留米美術団体「来目会」の中心メンバーであり、同人の坂本繁二郎、田崎広助、高田力蔵と交流を行った。一九二七年春子が郷里の先輩である高田力蔵に磐雄を紹介したことをきっかけに、磐雄も「来目会」に入会したという。同郷の牛島春子はこのいきいきとした青年たちと交友を始め、絵を描いたりした。野田宇太郎も古賀に関心を寄せていた。

昭和六年から十年近く久留米に住んで文学の勉強をしたわたたくしが、古賀春江の藝術に関心を抱きはじめてのは、この絵よりむしろ詩人としてであった。詩壇もようやくシュールリアリズム（超現実主義）とかポエジイ・ピュール（純粋詩）とかの用語が流行しはじめた頃で、久留米の詩人仲間ではしばしば先輩としての古賀春江のことが話題になり、上京して絵の修業をしている青年がたまたま帰郷すると、文学仲間がその青年を餌にして、古賀春江のポエジイと絵画を話題にすることが多かった。⁵

牛島春子と知り合っている古賀春江、高田力蔵は川端とも親交があった。『川端康成伝 一 双面の人』（二〇一三年中央公論新社）「川端康成年譜」によると、一九三一年「古賀春江、高田力蔵など画家と親しむ」⁶とあり、川端秀子夫人の『川端康成とともに』⁷は「昭和六年に入ってから古賀春江さん御一家と知り合いになりましたが、古賀さんも大の犬好きでブルドッグを飼っていらっしやいました。（中略）、先方も主人の犬の文章なんか読んでいたりして、それですぐ気が合ったようです。動坂の古賀さんの家にはよくうかがいましたが、そこでまだ書生さんという感じの東郷青児さんにお会いしましたし、高田力蔵さんや中川紀元さんともお知り合いになりました」と書いてある。

川端は一九三三年古賀がなくなるまで、交流を続けた。それは三年に足らずというごく短い付き合いであったが、深い友情の絆を結んだようである。川端には、古賀の死の直後に執筆した「末期の眼」、一周忌を記念した古賀の詩画集に寄せた「死の前後」、ノーベル文学賞記念講演「美しい日本の私」など、古賀のことに触れた作品がいくつもある。古賀春江の臨終にも居合わせた川端は「死の前後」で「故人は入院後も数十枚、多い日は一日に十枚も、水彩色紙を描いた。絶筆の色紙はただ幾つかの色を塗ったに過ぎぬ。同時に判読にも苦しむ文字で、言葉の支離脱落の甚だしい詩を書き続けた。その柩には彩管と共に

愛読の文学書の若干が納められた。故人をしてもし西欧にあらしめば、詩人、小説家なども相携へて、前衛藝術運動の旗手であったらう。故人は常に新しい文学を愛した。年少無名の詩人や作家の同人雑誌までを幾多購読し、愛蔵してみた如き、文壇にも比を見ざるところである。絶えず新しく生きんとした故人の本性であった」⁸と死に面した古賀の姿を回想した。

また、川端は古賀を偲ぶ作品「末期の眼」を一九三三年十二月『文藝』に発表した。伊香保温泉で出会った竹久夢二の思い出に始まり、芥川龍之介、正岡子規、梶井基次郎、古賀春江といった芸術家たちの死について書いているが、中には古賀春江についての部分はその大半を占めている。「古賀氏も自殺を思うこと、年久しいものがあつたらしい。死にまさる芸術はないとか、死ぬることは生きることだとかは、口癖のようだったそうだが、これは西洋風な死の讚美ではなくて、寺院に生れ、宗教学校出身の彼に、深くしみこんでいる仏教思想の現れだと、私は解くのである」⁹（「末期の眼」）仏門で生まれ育った古賀が「死にまさる芸術はない」、「死ぬることは生きることだ」と口癖にしたのはそれほど不思議ではなく、むしろ頷けることである。「古賀氏は西欧近代の文化の精神をも、大いに制作に取り入れようとはしたものの、仏法のおさな歌はいつも心の底を流れていたのである。（中略）その古いおさな歌は、私の心にも通う」（「末期の眼」）同じ仏教的教養を持っている川端は古賀の死生観に共鳴を覚えている。さらに川端には「古賀春江」という題の未発表作品（年次不詳）もある。一九五四年「古賀春江と私」を発表した。「昨年の秋、久留米の古賀の生家善福寺を高田力蔵氏と訪れても、住持は古賀の縁者ではなかった」¹⁰という一文からみると、一九五二年十月、牛島春子は川端康成、高田力蔵と共に、大分県別府・日田、福岡県久留米を旅行する際、わざわざ古賀の生家まで足を運んだことが明らかになった。川端と古賀は意気投合しており、共通な生死観を持っている。しかも二人とも子供がなく、犬好きである。そればかりでなく、藝術の面においても、二人は似ているところが多いと私は考えている。川端も文学的地位を確立しつつ、絵画に長けていた。川端の小説で風景によって心象をあらわす描写が頻出するのもその美術的意識と関わっているに違いない。美術は川端康成の文学に深く浸透していたといえよう。

一方、古賀は超現実主義の画風で注目を集めていた時、詩の創作にも力を注いでいた。前述したように「古賀春江は絵筆をもって詩情を描いた画家であった」。川端は「末期の眼」で古賀と自分の共通点を次のようにまとめている。

私は常に文学の新しい傾向、新しい形式を追ひ、または求める者と見られてゐる。新奇を愛好し、新人に関心すると思われてゐる。ために「奇術師」と呼ばれる光榮すら持つ。もしさうならば、この点は古賀氏の画家生活に似通つてもゐよう。（中略）その作風の変幻常ならずと見えため、私同様彼を「奇術師」扱ひにしかねない人もあらう。ところで私達は果してよく奇術師であり得たらうか。相手は軽蔑を浴せたつもりであらうが、私は「奇術師」と名づけられたことに、北叟笑んだものである。

川端は「新奇を愛好し、新人に関心する」が、古賀も日本の前衛絵画運動の先駆的な役割を果たした。川端は二人が共に有している「奇術師」という根本的な性質を指摘した。川端と春子にはもう一人共通の友人がいる。本章の第二節で考察した野田宇太郎である。一九四〇年から野田が務めている小山書店に志賀直哉、川端康成などの有名作家が出入りした。野田は編集者として川端と親しくなり、後に編集する『文藝』の顧問という重要な役も川端に依頼した。野田宇太郎資料館館長中村良之が書いた「野田宇太郎の世界」¹¹によると、川端は野田が『旅愁』を出版するとき、わざわざ編集室にやってきて「あなた詩集が出ますね。出たらあたしにも下さい」といって、野田を驚かせたという。川端は親友古賀春江、野田宇太郎と同郷の牛島春子に「満洲」で会えるなんて思わなかったであろう。古賀への思い、野田への友情、絵画、文学という共通的の趣味についての話題などは牛島春子と川端康成に親近感をもたらしたものであると推測している。

牛島春子は一九四二年二月二十八日、野田に宛てた書簡で川端と初対面の様子を記した。二人の縁は一九四一年の「満洲」から始まったようである。

縁とは不思議なもので、一番はじめてお目にかかったのは、新京の第一ホテルで、牛島の高等学校時代の友人の人からすすめられ紹介して頂いてました。実を言ふと、私はお会いしたくないと思いながら、つい断はりかねて紹介して頂いたのですが、今思ふとその友人の方に感謝したくなります。¹²

牛島春子は新京第一ホテルで夫の友人の紹介で川端に会った。「牛島春子年譜」によると、牛嶋晴男は中学を卒業後、旧制福岡高等学校に入学した。牛島春子はその紹介人の名前を書いていない。恐らく野田の知らない人だからであろう。本章第二節で考察したが、牛島春子は無欲な人であり、日本内地からの大作家川端がどんな人か知らなかったために、会いたくなかったかもしれない。川端は一九四一年四月から五月にかけて、『満洲日日新聞』の招待で「満洲」旅行をした。李（二〇一一）によると、四月二十二日新京第一ホテルに泊まったという。春子の書簡を合わせて考えると、その日に川端が牛島春子と会った可能性は大きい。牛島春子は面談の様子を野田宛の手紙に書きとめている。

この間、川端康成氏が見えた折、本当に思いもしなかったのに紹介する方があってお会いしました。ホテルのロビーで三十分ばかり。大変個人的な親しみをこめて色々話してくださいました。名刺を用事があつたらと呉れました。¹³

上述したように、牛島春子と川端康成は共通の親友、共通の趣味を持つており、「大変個人的な親しみ」を感じたに違いない。まさに「不思議な縁」で植民地「満洲」にいる牛島春子と日本内地にいる川端はつながっていたのである。

二. 歩調が整っている二人

一九四一年九月から十一月太平洋戦争勃発直前まで、川端康成は関東軍の「満洲建国十周年」を記念する招待で再び「満洲」に行った。一九四一年十一月二十日、牛島春子はお産のため、実家の久留米に帰り、野田に手紙を出した。その手紙からみると、牛島春子は新京で川端と再会したうえに、林芙美子、窪川（佐多） 稲子、小島政二郎にも会った。

川端さんにも二度会いました。好い人で一寸甘へてみたい気がしました。小島政二郎氏にも会い、力づけてくれました。窪川、林芙美子の諸氏にも会いました。小島氏からは半年に一度は作品を発表しろと云はれましたけれど目下そのゆとりもありません。ただ皆さんの過分の好意を感激してゐる。¹⁴

牛島春子は川端の人柄を賞賛し、信頼している。彼女は川端をはじめとする日本内地の作家たちに会って、鞭撻された。「満洲」題材の創作が期待され、「内地に帰ったら、東京まででかけて行ってあなたや川端に相談しようかしらと思ったり」¹⁵するほど川端と親しくなったようである。川端は二回目の「満洲」訪問は秀子夫人を呼んで自費で旅を延期した。その理由に就いて一九四一年十月六日秀子宛の書簡で記した。

満洲で一つ自分の作品を纏めて行きたく、奉天に後十日ほど滞在する事にした。この前は満洲の作品年鑑を世話したが、今度は自分の仕事を一つはしてみたくなった。来ただけの甲斐はあらめたい。仕事は、満蒙毛織会社の厚生工場の満人女工を扱ふ。女工の生活や家庭も調べるつもり。見学万端の便宜は出来た。厚生工場とは、廃品更生の仕事だ。¹⁶

つまり、一九四一年川端康成は「満洲」の出版事業に協力しながら、積極的に在満の女性達を扱う作品を書く準備をしていた。妙な偶然かもしれないが、この態度は牛島春子の小説「女」の誕生を促したとも考え得る。一九四二年四月牛島春子は『芸文』第一巻第五号四月号に女性の運命を描く短編小説「女」を発表した。一九四一年牛島春子は出産のため、一時帰国し、不慮の死産でかなりのショックを受けた。春子はエッセー「自分を書く」の中でその経緯を綴っている。「二番目の子供を産んだ時のことであつた。太平洋戦争が始まろうとしていた。新京から久留米の実家に帰ってきてここで出産をしたのだが、大変陣痛が永くひどくて、やっと生まれた女の子は泣き声もたてないでそのまま死んだ」（牛島「自分を書く」）。春子の分身である主人公の「和江は今更のやうに男のもつ使命の偉大さに打たれ、目を開かれる思ひであつた。それなら女は？と和江は自らに反問した。それは子供を産むことだ！と和江は叫びかへした。和江の肉体は、精神はさう叫ばずにはをれなかつた。男の戦場で聞ふことと、女が子を産むことは民族を育てる表裏一体の営みにすぎぬのだ。（中略）己れ一人の悲しみの中からすつくと立ちあがったこの切々とした願

ひと、和江の祖国が今の時代に要請してやまぬものがかくも見事に和江の中で一致したことはなかった。これは無上の幸福でなくて何であろうか。和江は産褥の床の中で足を延ばし、自分の体をさすりながら、己れのすこやかな生命を愛しむのであった」(牛島「女」) 牛島春子は男と平等な地位や権利を求めるには、女しかできないこと一子供を産むことを大きく強調した。男性は勇ましく戦い、女性は子を産むという男女役割分担で戦争に協力することをアピールした。川端康成との知遇や交流は具体的にどのように彼女の作品に影響を落としているかを七十二頁で展開している。

川端は帰国後、その「満洲」の印象をいくつかの文章にまとめている。一九四二年五月、「続美しい旅」を發表し、「満洲」へのイメージを記している。川端は「満洲国」の植民地の本質を見極めずに、力強くて若々しい国家の建設に参加する意を表明し、「満洲」への移民を煽った。

力強い満洲国を見るといふことは、力強い日本を見ることなのだった。

満洲国は、日本人にとって、ただ、見るもの聞くものが珍しいといふ、外国ではない。日本人が、他の民族と一つになって、今、この新しい国を建ててあるのだった。一言はずと知れたことだが、その国へ自分が行って、実際に見ると、ほんたうにわかって、若々しい国家と民族との力が、胸にあふれるのだった。自分も大陸に来て働きたくなるのだった。¹⁷

一九四二年三月、「満洲の本」で、川端は自分の目で確かめている「満洲」と日本内地でロマンチックな新天地であると宣伝された「満洲」と、かなりずれがあることに気付き、「満洲」文学の誕生に貢献する意気込みを語った。

私が満洲に行ってみて第一に驚いたことは、満洲国のありさまが日本内地に知られてゐないといふことであつた。それは私自身の怠惰な無知に驚いてゐるやうなものにちがひなかつたが、満洲国の知らせ方にもあやまりはあつた。文学の任務が改めて感じられた。芸術の古典も伝統もないと言ってよいこの新しい国に、どのような文学が誕生するか、私達は遠い傍観者であつてはならない。¹⁸

さらに、川端は銃後の女性たちにも関心を寄せ、一九四二年十二月「『日本の母』を訪ねて」を發表した。

文学報国会員として私達が、こんど各府県を訪ねることになった。「日本の母」は、たいていはこの井上ツタエさんのやうに、言はば平凡な婦人であり、尋常な母親である。一県から一人ずつ選び出されたとはいふものの、一県に一人しかいないやうな母ではな

い。今はすべての女、すべての母がさうであらねばならないやうな、また昔から日本の母の多くはさうであったやうな人達である。さうして、かういふ無名の母達によって、銃後はまもられてゐるのである。戦線の勇士達が呼ぶのも、かういふ母達である。¹⁹

さて、女性と戦争はどのように結びついたかを振り返ってみることにする。岩淵宏子(二〇〇四)によると、「人的資源確保のための国策結婚宣伝の時代を背景に母性ファシズムが吹き荒れ、こうした時代状況とまさに呼応するかたちで、母性の文学が奨揚されたのである」。²⁰当時の日本の母性政策を振りかえって見ると、一九二七年五月、産婆を組織する大日本産婆会が設立した。一九三二年「大日本国防婦人会」を先駆けとして庶民女性の戦争協力が進んだ。一九三七年に侵華戦争(日中戦争)が始まると、進歩的、文化的エリート女性たちの大多数が戦時体制に巻き込まれていった。一九三八年には厚生省が設置され、「母子保護法」を実施した。「産めよ増やせよ」政策を支え、戦争体制の一環に組み込まれていくことになった。一九四〇年には結婚の早期化と出産奨励策が打ち出された。「多産報国思想」は「軍国の母」賛美の風潮を盛り上げることになった。いわゆる「戦時下母性政策は、戦争遂行のための人口増加を目的とし、本来私的領域である結婚・妊娠・出産を国家が調整しようとするものであり、その要となるのが母性であった」(岩淵二〇〇四) 国家総力戦に備え、川端康成も女性動員の列に加入し、「軍国の母」としての銃後女性を称揚した。これは牛島春子が一九四二年発表した短編小説「女」の主旨と一致している。また、牛島春子が女性の銃後後援を扱う作品として、一九四三年発表した「遙遠的訊息」(遠くからの便り)という中国語の作品がある。第三章第三節で詳しく検討するが、今までの先行研究では中国側の研究者も日本側の研究者も中国語の作品「遙遠的訊息」(遠くからの便り)に触れたことなく、対応する日本語の作品も見つかっていない。牛島春子の経歴を詳しく紹介した「牛島春子年譜」(第二稿)²¹にも収録されていないため、この作品はほとんど知られていない状態にある。日本人女性瑞枝を主人公とする小説である。瑞枝の父親は亡くなった後、瑞枝は仕事しながら、母親の面倒をみるようになった。母親は強制的に結婚させず、瑞枝の意見を尊重し、いとこの俊二との婚約話を断った。学校教育を受けた上に、自由に働き、自分の意志で結婚相手を決める瑞枝はモダンガールとして造形されている。瑞枝は俊二の愛から家父長制のシンボルとしての俊二の家から抜け出そうとして新天地「満洲」に渡った。同じく男性と女性は役割分担で、戦争に協力する小説であるが、春子の「女」という小説で造形された和江は「良妻賢母」「軍国の母」であるのに対し、瑞枝は男権に屈しないモダンガールでもあり、積極的に銃後活動をする戦争加担の女性でもある。牛島春子がフェミニスト²²としての側面はこの中国語の作品から伺えた。フェミニストの瑞枝は「満洲」の地に渡ることによって、女性という被抑圧者から植民者という抑圧者に変身した。家父長制に反逆した近代女性まで「聖戦」に協力し、常に死と隣り合わせても、恐れず勇ましく戦う兵士の姿を大いに賞賛した。日本人の男を積極的に勇ましく戦うように激励すること、日本人の女に慰問袋とか銃後の協力を呼びかけること、中国人に戦争の

正当性をアピールすることなどに意図があるのではないかと考えられる。戦争中の作品や言論を考察した結果、川端康成の戦争加担への道は微妙に牛島春子と重なっていたことが窺える。

川端は「満洲」視察後、「新京から北京へ」という随筆で「満洲」ならではの教育問題を取上げた。「都会に遠い地方の農村は、私達日本人の想像もつかぬ程度文化は低いのでせう。子供達の魂は日本人の開拓すべき未墾の土地です。開拓移民は農業に限りません。いろんな方面に生き生きと働いてゐる日本娘を見ましたが、いい女教師は最も重要だ」²³と川端は日本人女性による植民地教育を推進する必要性を主張した。牛島春子はこれに同調し、「就職するなら、農村の女教師か、看護婦になりたい」と野田宛の手紙で表明した。しかし、これと矛盾する事実として、牛島春子の『手記』に教師が嫌いという箇所がある。「私は教師の生活程淋しいものはないと思ふ。教師は偽善者でなからねば生き得ないのだ。教師は必然的な人間らしい要求も、教師といふ名のもとに、もみ潰されねばならない」²⁴少女時代の春子は教師の仕事が嫌いであったが、意識が変化しつつあることが伺えた。

一九四二年二月二十八日日付の書簡によると、牛島春子は二月十八日東京から神戸の友人宅に寄って久留米に帰った。二月二十二日久留米から出発し、二日後の二十四日新京に戻った。東京で野田と川端に再会した状況について次のように記している。

(前略)、それでもお目にかかれて嬉しく存じました。お会いしたのは七年、八年ぶりでございます。人間なんて十年位の年月でそうそう変わるものでもないと見えます。けれどさすがに責任のある仕事をなさってられるな。昔の青年した感じとちがひ、何か社会的な落ち着きが感じられました。すこし太ってゐられるやうでした。(中略)、川端さんの好意は身にしみて有難く感じてをります。(略)、これといふのも凡て川端さんの偉れたお人柄によることでせう。私はおつかなびっくりをります。川端さんの激励についていけるだらうかと。何にしても、今度の東京行は本当に嬉しくて豊かなものでした。

25

牛島春子はしきりに川端に激励され、感激している。野田宇太郎は日本の代表的な作家川端康成とのかかわりで春子の地位を高めようとしていたためか『灰の季節』でわざわざ一九四二年、牛島春子は東京で川端康成と対面したことを書き留めている。

牛島氏は「祝といふ男」を書いて満洲でデビューした異色の女流作家だった。(中略)昭和 17 年に夫と共に満洲から一度東京に来て、川端康成氏と三人で銀座で食事を共にしたこともある。²⁶

前述の書簡を参照すると、三人とは牛島春子、野田宇太郎、川端康成の三人である。坂本正博による書かれた「牛島春子年譜」は「1941年「満洲」に来訪し、新京に滞在中の川

端康成と会う。1942年の来訪時にも会う」と書いてあるが、実は川端康成一九四一年四月～五月、一九四一年九月～十一月、二回にわたって「満洲」を訪問した。一九四二年川端康成は「満洲」に行っていない。前に引用した春子の一九四二年二月二十八日の手紙を裏づけとして、一九四二年二月牛島春子は東京で川端と面談したことが明らかになった。

「満洲」に定住していた牛島春子の野国宛書簡に目を通すと、川端の名前が頻繁に出てくる。中には、「第一書房にかはられても川端さんにはお会いになりますか。おついでに折に、私の近況お伝へ下さるやうお願い致します」²⁷というような野田に自分の近況を川端に話してほしいという意志表示もあった。たとえば、一九四二年七月四日死産のショックを抱え、「満洲」に帰った牛島春子は野田宛の手紙にその後の川端のお見舞いと激励を書いている。

川端さんから七月までだから中止しないで書くやうにとお手紙きましたが、この分では七月か八月になっても出来あがりそうにもなく、内心困ってみました。(中略)、川端さんからお見舞いの言葉を頂いて恐縮しましたが、別に無理したといふのでもありませんが、体をこはしたので、氣力を失ったのです。²⁸

牛島春子は川端の鞭撻にストレスを感じてもいたようである。「満洲」時代、牛島春子は川端が編集に関与した『満洲国各民族創作選集』に短編小説「雪空」「女」が選ばれている。川端は『満洲国各民族創作選集』の「序文」で「民族協和」の要を説き、「大東亜共栄圏」の夢を「満洲」で実践する決意を示した。

満州国の建国十周年の春に、この年鑑作品集の第一巻の出版を見たことは、私達の慶祝の心が幸ひに最もふさはしい表現、また一つ確かな結実を得たものと思ふ。(中略) 諸民族が協和の文化の里標を歴史に綴ってゆくこの書は、美しい理想の象徴であらう。大きい未来を呼ぶ声でもあらう。

日本は今南方にも戦を進めたが、他の民族と共に国を建て、文化を与しつつあるのは、まだ満州国の外にはないのである。大東亜の理想は先づ満州に実践されたのであって、ここになし得ぬと考へられるばかりでなく、これを漢民族と共にししつつあることも、満州の重要な所以である。言ふまでもなく、漢民族ほどの優秀な民族は他にないからである。文化の領野に見ては、尚明らかにさうである。²⁹

また、一九四二年十月の書簡でも春子は川端に期待され、鞭撻され、プレッシャーがかかっていることを記した。

私は川端さんと不思議なご縁でおちかづきにして頂いてから、川端さんの無言の鞭撻がみにしみてをりますけれど、すこしこわい気も致します。私はそんなに期待して頂い

ていい人間かどうか自分で迷っています。私はつまらぬ作品を書くと、すぐに川端さんにすみませんと思います。³⁰

川端康成は「満洲」文学の形成について一定の使命感を持っていたのかもしれない。その立場で彼は作品集の出版に協力し、牛島春子をはじめとする在満作家を鞭撻することによって、植民地主義を内面化していたと言えそうである。牛島春子は一九四二年から敗戦まで、戦意高揚の作品を書いていた。「満洲」は本質的に日本の植民地なので、その「建国精神」を顕彰する文学を樹立しようとして在満作家を支えた川端のコロニアリズムとの関係は相当に高いと思われる。川端本人は戦争と距離をおいていたようであるが、「満洲」訪問したり、在満作家を激励したりして、「満洲国」の正当性を認め、新しい文学の誕生に力を注いでいた。「満洲」女性作家牛島春子との交流を探ることによって、彼の戦争協力に繋がる一側面が窺えた。

上述したように、牛島春子は川端に支えられていた。一九四二年十一月十三日、彼女は自分の作品を野田に送り、「川端さんの方へよろしく願いますの手紙を書きました」と野田に知らせた。続いて、一九四二年十二月二十四日再び、作品発表のことで迷惑をかけたことに対し、お詫びの意を表した。

川端さんもお元気でせうか。(中略)、厚かましく雑然としたのを押しつけて、どんなに川端さんにもあなたにもご迷惑だったことでせう。どうぞあなたからも川端さんにお詫びをして下さい。³¹

一九四三年小山書店に勤めていた野田から春子は作品集を出すことを持ちかけられた。当時彼女は妊娠中であったが、川端の好意に応えるために、がんばっていることが次の野田宛て書簡に明らかである。

本当に作品らしい作品をせめて書きたいと(川端さんの御好意に対しても)思ったのは本当で、その意気込みはありながら、色々の事情で、それを思ふやうに果たせませんでした。ただ今でも慰めになるのは、お義理でなく、本当に御好意にむくいたいと、一生懸命苦しんだことで、それを川端さんへの申訳にしてゐます。どうぞそのこと丈をついでの折にお伝へ下さいませ。お願い致します。³²

続いて、春子は自分の作品に自信がなく、作品集を出すべきかどうかについて、野田と川端の意見を求めることに至った。

私はまだ自分の本を出したい欲望を切実に感じないのですけど。みんな集めたらきつともう三百枚ははるかに突破してゐると思います。けれど私は今まで長い修練時代とい

ふものがなく、書きだしたのと発表しだしたのがほとんど同時でしたので、みなさんの聖歴から考へてみますと、私の今はまだ修練時代で、私の作品も地ならしか、習作か（客観的に）といった所ではないかしらと自分で思ってをります。

（中略）、川端さんはどんなに仰言るでせうか。私ははたの人達からお前の作品を本にして出すことは十分満洲文学のためにも、日本の文学のためにも意味をもってあるのでと云はれたらその気になりそうですけど。（中略）、一度川端さんに伺ってみて下さいませんでせうか。³³

第四節で牛島春子の転向問題を詳述する。一九三〇年牛島春子はブハーリン著『史的唯物論』やマルクス・エンゲルス著『共産党宣言』などのマルクス主義関係の書物を読んだことをきっかけに、労働者として生きようと考え始めたようである。これは運動組織からの働きかけによるものではなく主体的なものであった。牛島春子が共鳴を感じた根本信念はマルキシズムというより、ヒューマニズムといったほうが適切である。このような理念に支えられ、一九三一年から牛島春子は労働組合運動に身を投じ、翌年、全国一斉選挙で逮捕され、ニヶ月の留置場生活を送った。釈放後、日本共産党に入党し、左翼活動を続け、一九三三年、再逮捕され、「転向理由書」を書かされ、保釈された。大内隆雄『満洲文学二十年』では夫婦のことを「にたもの夫婦の牛島一家」³⁴とうまく言い当てている。彼女の創作はずっと「満洲」官僚の夫を支えている旨が読み取れる。一九四一年を境に、思想的な変化によって前期と後期と分けられると思う。私としては、一九三七年～一九四一年を前期、一九四二年～一九四六年引き揚げまでは後期と呼ぶことにする。

「王属官」「祝といふ男」といった前期の作品はいずれも中国人を主人公とし、指導民族の立場で中国人を観察したり、「満洲」の不調和な部分を摘発したりするものである。牛島春子はリアリズムの手法で「満洲」暗黒部を暴露し、労働大衆に対し同情の意を示したが、国策に沿う表現も採らざるを得なかった。大衆への同情は彼女のヒューマニズムという根本信念に関わっている。また、暗黒部の摘発は彼女が持っている「世俗的なものへの反逆」に由来すると考えている。彼女は社会の不合理に対し、常に反発の姿勢を取っている。後期になると、春子は「女」「福寿草」「遙遠の訊息（遠くからの便り）」といった戦時色濃い作品を書くようになった。いずれも男性と女性は分業し、戦争に協力する方向の小説である。特に、戦争の正当性、女性が積極的に銃後活動に参加することを強調している点が注目される。このように、春子は左翼思想から徐々に「転向」しつつある。時代に身をおいて、世間並みに行動するのはいいかという問題まで川端に相談したがっている。

私は昔の文人達がして来た自分本位の行動をとって、周囲にいろんな波や苦しみを起こすことが必ずしも正しいとは思はないし、私といふ人間が天涯孤独でなく、様々な社会的血縁的支への中にあることを思ふと尚更です。昔はこんなものを無視することが出来たのであんなこともやったのですが。こういふことも私は一度川端さんに聞いて貰い

たい気持ちがありますけれど、又身辺的なことで川端さんの頭を煩はしたくない遠慮もあります。³⁵

以上考察してきたように、牛島春子は川端と親しく付き合い、文学作品のことだけでなく、個人の思想問題まで川端の意見を求めた。一九四四年、春子が「満洲」作品らしいものを集めて、作品集を出すところ、「川端先生の序文は今までの経緯からも是非頂いて下さい。儀礼としても、そうしたい気持ちでございます」³⁶と川端に序文を書いていただいたという気持ちを野田に伝えた。呼称は「川端さん」から「川端先生」に変えた。春子は川端に尊敬する気持ちが徐々に強くなった。牛島春子はそれについて「野田さんを想う」で触れている。

昭和十六年「満洲新聞」に連載した「祝といふ男」が思いがけなく芥川賞候補になり、受賞作と一緒に「文藝春秋」に掲載された。それからしばらくして野田さんから小山書店から作品集を出さないか、と手紙を貰った。それと前後して「文藝春秋」からも話もあり、東京でのいきさつは私にはまるで判らなかったが、結局作品集は「文藝春秋」社から出るようになった。³⁷

第二節で述べたが、春子が言う「東京でのいきさつ」は川端より野田宛の書簡に書いてある。次は鎌倉在住の川端が牛島春子の作品集を出すことで野田宇太郎に相談し、斡旋した書簡である。

文藝春秋社の柴野君が牛島春子さんの作品集の事で御願ひに上りたいのと事で、御紹介申上げておきました。多分御引見御聞取を下されたとの事と存じますが、小生よりも御願申上げます。

頃日牛島さんより手紙参り、あなたの御世話で作品集を第一書房から出してもいへる由、申し来られ、小生も非常に結構と返し致して置きました。満洲従来出版社にあまり感心せず、内地の志へかりしたところから出るに越した事いと存じました。ところがその後また牛島さんから手紙で第一書房ではないらしい、野田さんにお委せしてお世話いただくとの事、それと前後して文藝春秋社の満洲出張主任より小生に電報で牛島春子作品集出したいから、斡旋頼むとの事、文藝春秋の出張所なら、従来満洲出版社とちがって、万事よくやってくれるでせうし、友人永井君が出張第一番として、牛島さんの作品集を手がけるのは、小生としても喜びでありますので、永井君に口添へして小生もあなたに願ひしたいと存じました。東京の本社とも連絡ある事故、日満両地で出版するやうな形となり、内地にも牛島さんの作品が問へて結構と存じました。なるべくならば文藝春秋社へ出さしてやっていただければ、小生も幸ひに存じます。³⁸

「満洲文藝春秋社」について、本論文第Ⅱ部第一章第三節で詳細に考察している。『文藝春秋七十年史』³⁹の「社史」によると、一九四三年十一月「満洲文藝春秋社」が新京で設立された。資本金十九万円、社長は菊池寛であり、専務取締役は永井龍男である。「永井君」とは永井龍男である。友人永井龍男に依頼され、川端は、牛島春子の作品集を「満洲文藝春秋社」から出すことについて野田を説得しようとした。川端と野田は二人とも日本内地で春子を支えていたことが浮き彫りになった。敗戦前後の混乱で結局作品集は世に出なかったが、「満洲」時代、牛島春子に対する川端の関わりの大きさは上の書簡の行間から読み取れる。

李（二〇一〇）は「川端が戦時下に賛美とはいえないが、戦争を肯定していることが見られるといってもいいだろう。（中略）、戦争に関する三回の体験の中で、特攻隊の体験は最も「敗戦のころ」に紙幅を取った。この体験は旧満州行に比べて、川端は切実に身をもって戦争の苛酷さを感じた」⁴⁰と川端の戦争体験を考察した。川端は自己の戦争体験について、次のように記している。「軍報道班員としても私は外地に出なかった。役に立たないと見られてみたのである。しかし、十六年の春と秋と二度、満州から北支へ行った」「二十年の四月、私は初めて海軍報道班員に徴用され、特攻隊基地の鹿屋飛行場に行った。今急になにも書かなくていいから、後々のために特攻隊をとにかく見ておいてほしい、といふ依頼だった。新田潤氏、山岡荘八氏と同行した」。⁴¹

小谷野敦によると、川端が海軍報道班員として、鹿児島県鹿屋の海軍航空隊特攻基地への派遣は「海軍主計大尉の高戸顕隆（一九一五～二〇一一）の発案で、その部下の吉川誠一が、志賀、武者小路などを訪ねたが、志賀は高齢だからと言って、横光と川端を推薦し、川端なら正確に書くだらうと言ったため、四月十日頃、吉川が鎌倉へ来訪したものである。それから川端は海軍を訪ねて高戸に会い、話が決まった」⁴²六月一日、『朝日新聞』は、川端の談話を引用し、新兵器「神雷」についての記事が載っている。「神雷こそは実に恐るべき武器だ、この新鋭武器が前線に来た時、わが精鋭は勇氣百倍した、これさへあれば沖縄周辺の敵艦船群はすべ海の藻屑としてくれうぞ一神雷特別攻撃隊の意気は今天を衝いてゐる」と川端が語っている。

川端は武器の威力を宣伝し、「役に立たないと見られてみた」のではなく、日本の戦争に協力し、役に立ったといえよう。その後、川端は「生命の樹」（『婦人文庫』一九四六年七月初出）を執筆した。「生命の樹」は川端の特攻隊の体験を背景にした唯一の作品である。時間設定は一九四五年四月二十五日から一九四六年四月二十五日までの一年間であり、戦争、戦後の状況が凝縮されている。それは戦後、発表された作品なので、戦争協力の色彩はほとんどなく、時代順応的に戦争末期の悲惨さを書いた。特攻隊基地で、特攻隊員の世話をする動労働員の一女学生啓子が見た特攻隊員の日常生活とほのかな恋、死を迎える青年の心を繊細な筆致で描いた小説である。長谷川泉は『「生命の樹」には、自然の美しさが強調されている。人間と自然を対比した場合に、人間には行動のダイナミズムがある。とくに、戦争に際しては、人間の動的な行動の哀歎がめだち、瞬間的に燃焼する生と死のド

ラマがめだつであろう」⁴³と論述している。二〇一二年長濱拓磨は「川端康成「生命の樹」論：戦後文学と聖書」⁴⁴で作品と『聖書』の内容と照らし合わせながら、『聖書』からの受容を考察した。戦後、作家たちの言論は一般的に戦中と微妙な変化が現われ、脱植民地化の傾向が見られるから、特定の歴史の渦巻きに身を置いていた川端と牛島春子のスタンスに焦点を当てたい。

言うまでもなく、当時の社会状況とも関わっているが、牛島春子は戦中の一九四五年、同調して「子供達がみな男の子なので、私はよく男の子達が、特別攻撃隊の一員になって出撃する場面などを思い描きますが、そうすることによって、今日の私の生活が支へられてゐるやうな気もします」⁴⁵という特攻隊への憧れを表明する一文が残っている。

戦況悪化と共に特攻という言葉が流行語になっていた。犠牲になった隊員は「軍神」と称賛され、崇拜されることによって国民の戦意高揚に貢献した。このような歴史の流れの中で「満洲」にいる春子は息子を特攻に加入させたがっていた事がこの一文から浮かび上がり、彼女の「軍国の母」としてのイメージが鮮明になって来る。春子は始終、軍人に対して、最高の敬意を持っており、国のために命を惜しまずに献身する軍人は無垢であり、尊敬されるべきであると思っていた事が作品から読み取れた。

戦後も二人は交流を続け、親しい関係を保っていた。前述したように、一九五二年十月、牛島春子は川端康成、高田力蔵と共に、大分県別府・日田、福岡県久留米を旅行し、途中で坂本繁二郎を訪問したという。この旅は「千羽鶴」の続編「波千鳥」に活かされるようになった。

以上のような縁によって戦後、牛島春子は川端よりの書簡五通、平成九年久留米中央図書館に寄贈した。

おわりに

本論文は牛島春子の書簡、野田宇太郎の作品を援用し、「川端が満洲で牛島春子に会ったのか確認はできない」という小谷野の疑問については解決出来たのではなかろうか。また、「牛島春子年譜」の川端康成に関連する記述を若干修正した。牛島春子と川端康成との今まで指摘されていない縁を考察し、二人の付き合いの軌跡を辿ることによって、春子が川端から受けた影響が鮮明になってきた。在満女性作家牛島春子と文豪川端康成は「不思議な縁」で親しくなり、戦中から戦後にかけて頻繁に交流をしていた。二人は共通の親友として、古賀春江、野田宇太郎、高田力蔵らがいるし、文学、絵画という共通の趣味まで持っていた。野田宇太郎と川端康成は牛島春子にとって、最も重要な知人であり、彼女の人生を導くような存在である。春子は川端を尊敬し、信頼している。同時に、自分の作品に自信がなく、ストレスを感じて悩んでいた春子を川端は全力で鞭撻し、支えていた。また、川端の戦争関与、植民地との関係については、二回の「満洲」訪問と特別攻撃隊基地の報道班員体験を扱うだけで物足りない気がする。前述したように、川端が牛島春子をはじめとする在満女性作家に積極的に働きかけたことも戦争関与の一側面ではなかろうか。

川端康成は在満作家を鞭撻したり、作品の出版を協力したりすることによって、「満洲」文学に力を注ぎ、いわば、植民地主義を内面化していたのである。

注

- ¹山中正樹「〈十五年戦争〉と作家〈川端康成〉(覚え書き)―昭和十年代の作品を中心に―『桜花学園大学人文学部研究紀要』二〇〇五年三月 一～十六頁
- ²李聖傑「川端康成における戦争体験について―「敗戦のころ」を手がかりに―『ソシオサイエンス』十七 二〇一一年 九十五～一一〇頁
- ³小谷野敦『川端康成伝―双面の人』中央公論新社 二〇一三年五月 三三四頁
- ⁴東珠樹は「童心の画家 古賀春江」『牛を焚く―古賀春江詩画集』東出版 一九七四年 一四九頁
- ⁵野田宇太郎「古賀春江の詩」『牛を焚く―古賀春江詩画集』東出版 一九七四年 一四二頁
- ⁶小谷野敦『川端康成伝―双面の人』中央公論新社 二〇一三年五月 六一六頁
- ⁷川端秀子『川端康成とともに』新潮社 一九八三年
- ⁸川端康成「死の前後」『近代の美術』三十六 至文堂 一九七六年 七十九頁
- ⁹川端康成「末期の眼」『川端康成』新学社 二〇〇五年
- ¹⁰川端康成「古賀春江と私」『芸術新潮』一九五四年三月 七十一～七十四頁
- ¹¹中村良之「野田宇太郎の世界」『背に廻つた未来』野田宇太郎資料館 二〇〇四年
- ¹²一九四二年二月二十八日 野田宛の書簡
- ¹³一九四一年五月二十三日 野田宛の書簡
- ¹⁴一九四一年十一月二十日 野田宛の書簡
- ¹⁵一九四三年四月二十三日野田宇太郎宛の手紙
- ¹⁶川端康成記念会『川端康成全集』(補巻二) 新潮社 一九八九年 五十二頁
- ¹⁷川端康成「続美しい旅」四『川端康成全集』第二十巻 新潮社一九八一年
- ¹⁸「満州の本」『文章』東方書店 一九四二年 一五八頁
- ¹⁹『『日本の母』を訪ねて』『婦人画報』 一九四二年十二月
- ²⁰岩淵宏子「戦時下の「母性」幻想―総力戦体制の要」『女たちの戦争責任』東京堂出版 二〇〇四年 一二八頁
- ²¹坂本正博「牛島春子年譜(第二稿)」二〇〇二年『敍説』二(三) 二〇五～二一三頁
- ²²女性解放論者、女権拡張論者、女権論者、婦人解放論者という意味
- ²³「新京から北京へ」『川端康成全集』第二十七巻 新潮社 一九八二年 三〇二頁
- ²⁴牛島春子『手記』一九三八年 自家版
- ²⁵一九四二年二月二十八日 野田宛の書簡
- ²⁶野田宇太郎『灰の季節』創元社 一九五八年 二五二頁
- ²⁷一九四三年五月一日 牛島春子が野田宛の書簡
- ²⁸一九四二年七月四日 野田宛の書簡
- ²⁹川端康成『満洲国各民族創作選集』ゆまに書房 二〇〇〇年
- ³⁰一九四二年十月 野田宛の書簡
- ³¹一九四二年十二月二十四日野田宛の書簡
- ³²一九四三年二月十日 野田宛の書簡
- ³³一九四三年二月十日 野田宛の書簡
- ³⁴大内隆雄『満洲文学二十年』国民画報社一九四四年 三三一頁
- ³⁵一九四三年二月十日 野田宛の書簡

³⁶一九四四年二月二十七日野田宛の書簡

³⁷牛島春子「野田さんを想う」『野田宇太郎 丸山豊』野田宇太郎文学資料館ブックレット1 一九九一年
九頁

³⁸十二月十七日川端康成が野田宛の書簡 菊池隆雄先生から写真を提供していただいた。後、三木紀人
先生は野田宇太郎資料館訪問に際し、そこで現物が確認できた。

³⁹『文藝春秋七十年史』文藝春秋 一九九一年

⁴⁰李聖傑「川端康成における戦争体験について―「敗戦のころ」を手がかりに―」『ソシオサイエンス』
十七 二〇一一年 九十五～一一〇頁

⁴¹一九五五年八月号の『新潮』に発表された「敗戦のころ」(三) 七十～七十一頁

⁴²小谷野敦『川端康成伝―双面の人』中央公論新社 二〇一三年五月 三四四頁

⁴³長谷川泉『川端文学の機構』 教育出版センター 一九八四年 一七七頁

⁴⁴長濱拓磨「川端康成「生命の樹」論：戦後文学と聖書」『キリスト教文学研究(二十九)』 二〇一二年
一〇六～一一七頁

⁴⁵一九四四年二月二十七日野田宇太郎宛の書簡

第五節「転向」への意識—戦前と戦後

はじめに

「転向」は既に研究者たちにそれぞれ定義づけられている。本多秋五『転向文学論』によると、「転向」とは「共産主義者の共産主義放棄を意味する」¹であり、鶴見俊輔の『転向研究』は「権力によって強制されたためにおこす思想の変化」²であると主張し、吉本隆明の「転向論」は「佐野、鍋山の胸中にあったのは、権力の圧迫にたいする恐怖よりも、大衆的な動向から孤立感であった」³という考えを示した。『共同研究 転向』⁴（二〇一二年二月）は鶴見の「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」（二十九頁）と定義している。『共同研究 転向』は鶴見俊輔を中心とした共同研究であるゆえに、鶴見の定義に従っているわけである。『共同研究 転向』は六巻にわけて極めて詳細に転向の問題を論じているが、その序言で問題点も指摘されている。「私たちのこの共同研究には、女性はほとんど登場することがなく、このことは一つの欠点である。女性には女性らしい転向のコースがあり、独自の思想的問題をふくんでいる」。（六十四頁）一九三〇年代の思想動向では「転向」が際立っているものである。一九三三年、日本共産党の最高指導者の佐野学と鍋山貞親が公表した「共同被告同志に告ぐる書」は日本の共産主義者の転向のきっかけとなった。それ以来、林房雄、島木健作、中野重治といった大量の転向者が続出していた。牛島春子も「転向理由書」を書かされ、釈放された一人である。

人によって、「転向」のパターンはまちまちである。女性である牛島春子の「転向」問題は植民地と絡み合い、決して単純なものではない。夫は植民地社会の一翼を担う官僚である。牛島春子は思想的な理由で追われるように帝国の周縁「満洲」へ逃亡を余儀なくされた。異質な文化に遭遇し、さまざまな思想との衝突、葛藤、融合を経て、自分のアイデンティティを再認識し、自己の思想を再構築したといえよう。「牛島春子年譜」によると、「夏頃、佐野学・鍋山貞親の転向声明（六月）のアピールを読まされ、同時に転向理由書を書くように求められる。春子は、表題をただの理由書と変えて、共産党の組織活動への批判と共に、自分自身は今後も労働運動を続けるという主旨を書き、九月二十七日に提出と回想。但し内務省警保局の資料では、転向理由書の表題になっていて、父に面会した際に〈自分の頑固さが意地も張りもなく音を立て崩れて行くのを感じました。私の転向の動機は只それ丈です〉の表現になっている」。

はたして牛島春子本人が主張した通りであろうかと牛島春子の「転向」に私は疑問を持っている。今まで牛島春子の「転向」問題は曖昧に扱われ、彼女の「転向」へのプロセスがまだ明らかになっていない。

川村湊『〈満洲文学〉から〈戦後文学〉へ—牛島春子インタビュー』⁵によると、牛島春子は「手許にあったものを全部、久留米の図書館に送ってしまいました」という。そこからヒントを得て、私は久留米中央図書館を訪問し、調査してみた。書簡が十三通保存されている。野間宏から五通、川端康成から五通、壺井繁治から一通、広津和郎から一通、発信人、発信年月日不明の書簡一通（朝日新聞の学芸課用便箋使用）である。また、はがき

は八枚あり、野間宏から二枚、川端康成から二枚、中野重治から一枚、岡本潤から一枚、小倉市砂津赤司氏から一枚、長谷川四郎から一枚である。新聞切抜き二枚があり、「二月の小説 下 評論家 平野謙」（掲載紙不明）、「きれいな選挙へ わたしの『提言』 7 作家牛島春子さんへ 評論家中野好夫」（『西日本新聞』一九六五年六月十七日）である。外には写真一枚（一九五二年、坂本繁二郎訪問）、中野重治自筆書一枚（一九五三年春）がある。

本論文は実地調査を踏まえ、野間宏から五通の書簡、牛島春子『手記—青空と自殺と』（野田宇太郎資料館所蔵）など先行研究には触れられていない資料を入れて検証を行うことによって、牛島春子の「転向」への意識、思想の変遷を検討してみる。「転向」問題についての考察は日本人のマルクス主義体験のプロセスを顧みる面においても有意義なことであり、在満女性作家牛島春子の本音を理解し、作品を解読する面においても基礎的かつ不可欠なものでもある。ここで牛島春子の作品、書簡、自家版手記などのオリジナルな資料を叙述にしばしば援用しながら、牛島春子の出発の原点に辿りつき、彼女の「転向」意識を究明し、牛島春子文学の本質を考えていく。

一. 第一段階：大衆からの孤立による「世間」への屈服

牛島春子は福岡県久留米市の出身である。『県民性：文化人類学的考察』によると、福岡県は「すでに七世紀のころから外国船の出入りする要港として、また大宰府の外航として、それにまた遣隋使や遣唐使の発着や、朝鮮、中国との交渉はここを起点として行なわれたわけで、西日本における政治、外交、軍事の中枢だったのである。こうした関係から福岡県は、たしかにもっとも開放的で排他性が少ないと言える。いつも海外に眼をむけていたから、その感覚は国際性を持っていて時流にさとく、闊達で、進取の気象に富んでいる」。⁶牛島春子はこのような精神風土で生まれ、非常に強い反逆精神を持っている。少女時代、春子は兄磐雄から強い影響を受けていた。当時、十歳年上の磐雄は小学校の図画の先生を務めながら、「来目会」という画家の団体に入っていた。同人には坂本繁二郎、古賀春江、高田力蔵といった筑後の優れた画家がいる。牛島春子は「〈街路樹〉の頃と勇さんと」で当時情熱あふれる青春的な切磋琢磨について次のように記している。

私の家でも、夜になると兄の部屋に何人かが集まってきて、遅くまでなにやら芸術に関する激論をたたかわしていた。（中略）、少女の私も兄の影響でいつもその周辺にいて、私なりに新聞や少女雑誌などに、詩や小文などを投稿していた。⁷

兄と「来目会」メンバーの啓蒙は文学少女の芽生えを促したといえよう。「牛島春子年譜」によると、兄はドイツ哲学、特にヘーゲル、フォイエルバッハの系譜に傾倒したという⁸。『ヘーゲル事典』（二〇一四）は「ヘーゲルは、〈市民社会〉という概念を確立した思想家である。そして歴史の意味が自由という理念の政治的な発展の過程にあるという見方を呈示した。近代社会と近代化について考えるための拠り所となる思想家である。ヘーゲ

ルを母体として、マルクスとキルケゴールという互いに異質な二人の思想家が誕生した」(iii頁) フォイエルバッハは「ヘーゲル左派に属する哲学者。『ヘーゲル哲学批判のために』(一八三七)を機にヘーゲル批判に転じた。彼は『キリスト教の本質』(一八四一)における徹底したキリスト教批判によってドイツ思想界で有名となった。(中略)、若きマルクスに大きな影響を及ぼした」(四七二頁)とある⁹。「年譜」によると、一九三〇年牛島春子はブハーリン著『史的唯物論』やマルクス・エンゲルス著『共産党宣言』などのマルクス主義関係の書物を読んだことを契機に労働者として生きようと考え始めたという。マルキシズム関係の書物に関心を持って読み始めたのは兄磐雄からの導きと切っても切れない関係を持っているであろう。本章第三節で論じた「来目会」のメンバーである同郷の洋画家古賀春江も坂本繁二郎もフランス留学の経験がある。『坂本繁二郎』¹⁰によると、坂本繁二郎は出発当初から、耽美派にも浪漫派にも傾かず、ひたすらものの実在を描こうとする写実の姿勢を一貫させ、実証的な現実認識の立場に立って内面的な深く豊かな知覚の親しみに溢れた表現をめざし、進んできた。フランス留学を機に、日本の豊かな自然と奥深い人間性を再発見したという。これらは春子に有形無形の影響を与えたに違いない。彼女は常に自己省察し、日々の感想を手記に書き留めた。第一節で論述したが、一九三八年、「満洲」にいる牛島春子は日本で自家版の『手記』五十部を刊行した。それは牛島春子の内面を理解するには有効な参考資料になっている。「牛島春子年譜」は「こうしていかに生きるべきかを考え始めたが、その頃、ロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』(どの訳本で読んだか判明しないので、後に読んだ岩波文庫版の片山敏彦訳一九三八年の本文を引用する)を読む」としている。一九四九年一月『女人芸術』に載っている牛島春子の「秋深かむ窓」は彼女の共産主義への接近の経緯を記している。

和江の共産主義者としての出発の源をなしたものは労働者としての自覚ではなかった。直接的には和江たち婦人のおかれてあるいひやうなく暗黒な封建的地位への反逆でもなかった。それはまだ女学校の制服を着てある和江が読んだ一冊の本、フランスのヒューマニズムの作家によって描かれたある音楽家の生涯への感動と共感からであった。「人たる名に値するために己れの出来る凡てをつくす」人として、「日々の凡庸さに己れを委し去らない者にとっては人生は日毎の闘争である」といふ言葉で語られたこの音楽家の生涯であった。「人たる名に値するために……」この言葉はその時以来和江の胸に大きく刻み込まれた金文字となった。さうした和江が共産主義への道へ歩いたことはすこしも不思議ではない。¹¹

「年譜」で判明していない牛島春子が女学校時代に読んだ「フランスのヒューマニズムの作家によって描かれたある音楽家の生涯」について調査してみた。「年譜」によると、一九二五年牛島春子は久留米女学校に入学し、一九二七年、春子はフランス作家ロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』を読んだという。訳本の調査をした結果、牛島春子が耽読

したベートーヴェンの伝記は『ベートーヴェンの生涯』ではなく、『ベートーヴェン』である。それは一九二六年一月、高田博厚により翻訳され、叢文閣から出版されたものである。ちょうど春子が久留米女学校在学中の出版なので、春子がそれを読んだ可能性は極めて高いと判断している。しかも高田の訳本には「魂の凡庸さに己れを委し去ることをしない者にとっては、日毎の闘争である」(『ベートーヴェン』二頁)「人たる名に値するものになる為に己れに出来る一切の事を竭した…」(同上五頁)という春子の引用に極めて近い文がある。片山敏彦の訳本『ベートーヴェンの生涯』(岩波文庫一九三八年)は「魂の凡庸さに自己を委ねない人々にとっては、生活は日ごとの苦闘である」(十五頁)「人間という名に値する一個の人間となるために全力を尽くした…」と訳している。二つの訳し方「闘争」と「苦闘」どちらが原文に近いか気になり、フランス語の原文『Romain Rolland: Vie de Beethoven』(Librairie Hachette Paris 一九一四年)と対照してみたら、「combat」と書いてある。フランス語の「combat」とは「闘い、戦闘」という意味であるため、高田の「闘争」のほうが適切であると思う。それは階級闘争ではなく、苦しい人生との闘いを指す。片山は闘争の苦しさ、厳しさを強調したかったであろうか、「苦闘」と訳した。『ベートーヴェン』は春子の人生を変えた決定的な本であるといえよう。『高田博厚の空間と思想』によると、高田(一九〇〇～一九八七)は日本の彫刻家であり、早くから哲学や文学、芸術に目覚め、一九一八年上京し、一九三一年パリに渡った。当時の優れた数多くの知識人と交友を深め、文筆家、思想家としても活躍した。一九二一年パリでロマン・ロランをはじめとする知識階級の人々と親しくかかわった。周知のように、ロマン・ロランはフランスの理想主義的ヒューマニズム、平和主義、反ファシズムの作家である。数多くの戯曲やベートーヴェン、トルストイ、ミケランジェロといった英雄の伝記、また『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』のような大河小説を書いた。これらの作品には共通のモチーフがある。作品に描かれた主人公達は社会の進歩に対し、揺ぎない信仰を抱え、あえて世俗に反抗し、不屈な精神をもって闘争し続ける英雄である。ロマン・ロランは偉大な魂を持つ英雄像を造形し、人に光と力を与えた同時に世の中にある無知、愚昧、偏狭、暴虐、エゴイズムなどの暗い側面を暴き出した。¹²ロマン・ロランは当時、日本の知識人達に多大な影響を与えていた。『ロマン・ロラン研究』は百合子の文学は「トルストイの影響が非常にあると言われていますが、ロマン・ロランの影響が非常に大きかったと思います。(中略)、ロマン・ロランが生きることと死ぬことについて、学んだ師匠はベートーヴェンだと書かれています、つまり宮本百合子はそれと同じことを、ロマン・ロランから習ったと思います」¹³とある。植村哲朗「歴史の中のロマン・ロラン」¹⁴(二〇一一)は宮本百合子とほぼ同じ時期に同じテーマを追求していると指摘している。「この二人が誠意をもってロシア革命を受け止め、それをじかに見て確かめようとしたこと、そこから得たものをその後の生き方の基本的思想とし、行動したことは共通している」(一二八頁)とロランと宮本百合子の共通点をまとめた上、「ロランはロシア革命によって、平和を獲得するための唯一の保証、すなわち社会構造の変革という真の保証が得られると確信したのであろう。ロランの

ヒューマニズムと歴史家としての透徹した眼によって、何が歴史の真実であるかを見極めることができたのである」（一二九頁）とロランの革命観を評価した。

ロマン・ロランは宮本百合子ばかりでなく、若い知識人達に多大な刺激を与えた。第Ⅱ部第一章第三節で触れているように、一九四一年十一月二十日、牛島春子は野田に宛てた書簡に「小島政二郎氏にも会い、力づけてくれました。（中略）、小島氏からは半年に一度は作品を発表しろと云はれましたけれど目下そのゆとりもありません。ただ皆さんの過分の好意を感激してゐる」と小島政二郎と「満洲」で会い、鞭撻されたことを書いている。第Ⅱ部第二章第三節で触れているが、芥川賞選考委員を務めた小島政二郎¹⁵は春子の「祝といふ男」を「祝と云ふ満人の一異人種の、非常に特殊な性格をこれ程まで見詰めた（中略）しかも、その性格描写に於ける成功は、特筆していいと思ふ。殊に、女流としては珍しい理知的な措成、展開の現実的な精確さ、作品の裏打ちになっている作者の心の置きどころの適度さ、私は正確な記録を読んでいる楽しさのうちに、祝といふ不思議な性格をまのあたり見る心地がした。異人種を、これだけ理解したといふことは、一つの立派な収穫だと思ふ」¹⁶と高く評価した。その小島の「眼中の人」「芥川龍之介」などの小説¹⁷によると、小島は『羅生門』という短編集を読んで、すっかり芥川に傾倒した¹⁸。芥川龍之介より二歳年下の小島はひたすら芥川のことを尊敬している。「眼中の人」は、芥川の才人ぶりと芥川との出会いから始まる。「芥川龍之介は、私などより二つしか年上でなかったが、一まだ三十前だったが、新進の小説家中の花形で、大家を凌ぐ流行児だった。その上、海軍機関学校の教官を勤めていた。文学に関する学殖は、あす大学教授に任ぜられても困らないだろうと言われていた。書齋には和漢洋の書籍を羨ましいほど沢山持っていた」¹⁹「芥川の読書の範囲、趣味の限界は、実に広汎にわたっていた。ドイツ語、フランス語が口を突いて出た。西洋の絵画、彫刻、音楽、哲学、歴史、支那画、日本画、陶器、織物—文学だけだって、今近代の話をしていたかと思うと、古典の話になったりした。アメリカの文学の現代作家さえ彼は読み漁っていた」²⁰と芥川の広範な知識と理解力、卓抜した英語力と膨大な読書量に対する驚愕と尊敬、憧れの心境が綴られている。小島は芥川から大きな影響を受け、小説家としても、人間としても成長していた。小島が「退屈で読み通せ」（「眼中の人」二三四頁）なかったロマン・ロランの小説『ジャン・クリストフ』を芥川は一週間で読みこなしてしまった。すると、小島は芥川に、どうしてそのようなつまらない本があなたにはそんなに面白く読めるのかと質問したことがある。芥川は「確か五六十ページ目に出て来たと思うよ、ゴットフリートという叔父さんが一。そこから読み出して見たまえ、俄然面白くなるから一」（「眼中の人」二三五頁）と、小島に助言した。『よみがえる芥川龍之介』（関口安義二〇〇六）によると、「若き芥川に強い影響を与えた外国の文学者に、ロマン・ロランがいた。芥川がロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』に出会ったのは、一九一四（大正三）年の春から夏にかけてのことである。（中略）、生命力あふれるものへのあこがれは、この時期の芥川を支配していた。ロランの評伝『トルストイ』や『ミケラジェロ』も芥川の心をとらえて放さなかった」。²¹第一次世界大戦前後、大正デモクラシー

の風潮の中で、ロマン・ロランは人道主義と理想主義をもって日本の若者達をとらえたであろう。そこで小島は芥川の助言に従い、試しに読んでみたら、本当に面白いと感じて一気に読み終わり、深い感銘を受けた。小島は「強烈な意力を以ってあらゆる苦痛をも力強きものたらしめつつ、最後まで戦い抜いたベートーヴェン、余りに弱い霊と肉とのために不安、焦燥、混乱のうちに投ぜられつつ、内に燃え上がる過剰な力に苦しみ続けたミケランジェロ、無慈悲なまで明るい視力によって照らし出される現実の醜い姿に悩みつつ、脇目も振らずに真理と愛とを追求して止まなかったトルストイ、この三人の天才の力が、ジャン・クリストフの中に投げ込まれている」（「眼中の人」二三六頁）と感想を記した。『ジャン・クリストフ』は、小島にとって人生を変えるほどの大切な一冊になった。関東大震災のような天災と生活の窮迫に勇気を持って向き合えたのはロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』のおかげである。

「ジャン・クリストフ」のお蔭で、ベートーヴェンのお蔭で、ミケランジェロのお蔭で、ミレーのお蔭で、大地震によって突然私に襲い掛かって来た貧困にも、失望落胆にも、逆境にも、前途の暗澹さにも、私は敢然として立ち向かうだけの勇気を、最後の一线に於いて失うことなくして済んだ。その後長い間、私の精神を支えてくれたものは、ロマン・ローランだった。（「眼中の人」二三九頁）

ここからロマン・ロランは当時の日本の若者達にどれだけの力を与えたか、当時の読者達はいかにロマン・ロランを愛し、崇拜したかが確認できる。

ヒューマニズム作家ロマン・ロランばかりでなく、牛島春子の思想形成に大きな影響を及ぼしたのはもう一人の文豪―芥川龍之介がいる。「年譜」に、牛島春子は「一九二九年女学校時代は、現代日本文学全集（改造社）を読み、特に、同全集第三〇篇の芥川龍之介集（一九二八年）収録の作品（「河童」「鼻」「藪の中」「侏儒の言葉」など）を愛読し傾倒する」とある。芥川への憧れは前述した小島政二郎と共通している。周知のように、これらの小説は人間の心理を巧妙にとらえ、当時の日本社会に痛烈な風刺と批判を施した。第Ⅱ部第二章で触れることになったが、それは後に「満洲」時代の牛島春子の代表作「祝といふ男」にも影を落とすと考えている。第Ⅱ部第二章第三節で論じることにするが、「祝といふ男」は日本人女性の立場で異民族の祝という中国人通訳の心理を深く洞察し、「満洲国」の暗黒面を指摘し、日本人の気質を風刺した作品である。

牛島春子が共産主義に接近したのは運動組織からの働きかけによるものではなく、主体的なものであった。牛島春子が共鳴を感じた根本信念はマルキシズムというより、ヒューマニズムといったほうが適切である。本章第二節で述べたように、石神豊の『ヒューマニズムとは何か』（一九九八年第三文明社）によると、ルネサンス時代の「ヒューマニズム」は「一つの普遍的な主張であるが、じつは同時に歴史的な主張でもある。つまり、その時代、社会に巣くう非人間的なものに対する闘争という面をもっている。この非人間的なも

のはさまざまな形態で現れる。それには中傷、迫害、弾圧といった物理的暴力のみならず、差別という、社会に潜む目に見えない暴力も含まれる。」(十六頁)「マルクスは、近代のヒューマニズムをブルジョア・ヒューマニズムとし、これを退ける。ブルジョア・ヒューマニズムは基本的に個人主義的ヒューマニズムであり、階級的差別を覆い隠す役割をもっている。それに対し、労働者階級は近代のこうした傾向をうち破り、真のヒューマニズムである社会主義的ヒューマニズムをうち立てる歴史的使命があると主張する」(六十六頁)。周知のように、ロマン・ロランはフランス大革命後に生じた精神の頹廃と政治の墮落を鋭く洞察し、ベートーヴェン、ミケランジェロといった英雄達の伝記で死滅に瀕している人間精神を復活させようと考えていた。第一次世界大戦中に彼はスイスへ亡命し、絶対平和の精神や人間愛から偏狭なナショナリズムによる戦争を否定し、ドイツとフランス両国の和解のために、全身全霊を打ち込んで行動した。それは「人道主義、博愛主義」ルネサンス時代の解釈に近いヒューマニズムであると私は捉えている。第Ⅱ部第一章第二節で触れているが、ヒューマニティこそ春子の心にしまいこんでいる宝物であり、彼女の行動を左右する最も根本的な理念である。最初に牛島春子がとらえているヒューマニズムはマルクス主義的なヒューマニズムであろう。その理念に支えられ、労働者階級のために、一九三一年から牛島春子は労働組合運動に身を投じ、翌年、全国一斉選挙で逮捕され、二ヶ月の留置場生活を送った。釈放後、日本共産党に入党し、左翼活動を続け、一九三三年、再逮捕され、「転向理由書」を書かされた後、保釈された。

牛島春子は、「転向理由書」で次のように心境を述べている。

私は此の運動に入る時、この運動こそ今の社会に於いては唯一無二の正義への道であり、大道徳だと信じ、偉大な社会革命の完成のためには目の前の多少の犠牲や生起する悲劇は当然なことだ、私達はそれを乗り越えてこそ、本当の革命家たる事が出来るのだと考えへてみました。最近私は色々な考と共にそれが一面には最なことだとは云へ、全く若いもの々陥り易いはき違へたヒロイズムであり、一種の誇大妄想に過ぎなかったと考へる様になりました。父母にとってよい娘であり、兄姉にとっても良い妹であり、そうして私の真面目な正義への追求もゆがめないで、もっと正常に生きて行く道があつてよい筈だとひそかに思ひ廻らしてゐた際、私は父に会ひました。何時も無口で我儘な私にも無頓着だと思はれる位に寛大だった。父のやっぱりムツッリした姿を薄暗い面会所で見出した時、私は自分で自分の頑固さが意地も張りもなく音を立て崩れて行くのを感じました。私の転向の動機は只それ丈です。²²

牛島春子のように、西欧の個人に、ベートーヴェンやドストエフスキーの読書体験でしか接触できなかった戦前の共産党員は、「世間」の一員としての意識の方が実際の生活では主導したのである。「秋深かむ窓」における春子の分身である和江一家は「世間」から疎外されている。

世間からうけた有形無形の屈辱は小さいものではなかった。中学校の教師であった和江の兄はそのために生徒の父兄達の圧迫で学校を追はれたし、和江の家に出入りしてみた者の足はだんだん意識して遠ざかり、傭の女は世間体を気にやんで暇乞ひを申し出た。父や母が人中に出ていくと露骨な目で衣裳を眺めまはし、一寸ばかり家の造作をしても、あれはみんな共産党から金が出てゐるのだ、と世間は噂した。さういふ人々の多くが貧しい動労者や小商人たちであり、和江たちの運動はさういふ人々の人間と生活の解放を望んでゐるのに…（中略）和江の胸は憤りと憎悪でたぎり、しかもその憤りと憎悪がともすれば支配者共へよりも直接彼等の「無智」に向はうとする衝動を和江は抑へることはできなかつた。²³

日本社会は「世間論」で成り立っているといわれる。「世間論」の提唱者阿部謹也の『「世間」とは何か』²⁴は「世間には、形をもつものと形をもたないものがある。形をもつ世間とは、同窓会や会社、政党の派閥、短歌や俳句の会、文壇、囲碁や将棋の会、スポーツクラブ、大学の学部、学会などであり、形をもたない世間とは、隣近所や、年賀状を交換したり贈答を行う人の関係をさす。」（『「世間」とは何か』十六頁）と定義している。その世間の重要な掟の一つは「世間の名誉を汚さないということである」（十八頁）「世間から後ろ指を指されたり、世間に顔向けできなくなることを皆恐れている」（二十一頁）。牛島春子のせいで家族が異端視されていたこと、「世間」から外されたことが彼女の「転向」を促した。それは吉本隆明の「転向論」と合致している。吉本（一九七八）は「日本的転向の外的条件のうち、権力の強制、圧迫というものが、とびぬけて大きな要因であつたとは、かんがえない。むしろ、大衆からの孤立（感）が最大の条件であつたとするのが、わたしの転向論のアクシスである」²⁵とある。牛島春子は当時、自分の「転向」に関し、プロレタリア信仰を徹底的に裏切るのではなく、「世間」を生きるためであると主張したかつたと考えている。第二節で論証したように、一九三七年、春子は牛嶋晴男と結婚し、春子本人が川村湊のインタビューで答えたように「国外逃亡の感じ」²⁶で、「満洲」に渡つた。牛嶋晴男との結婚はより強力な「世間」に転属することにつながり、ある程度の自由を獲得した。一九三八年「満洲」に移住した春子は己の思索過程を振り返ることを目的として日本で自家版の『手記』五十部を出版した。次のような端書が書いてある。

これは私が十五才から十八歳の春までの手記の一部です。その頃（一九三〇年前後）私の住んでみた九州の一小都市にはようやく若い人々の間にマルクス主義が全面的に浸潤し始めておりました。それらの文献に次第に傾倒しつつ、半面私はこの恐ろしく個人主義的な貴族趣味な手記を書きつづけて行つたのでした。云ひかへると、この手記の後半は私のもつ個人主義、貴族趣味と、新しく私の前に登場した世界観、思索方法との火花の散る様な激しい内部的闘ひの中に書かれたものです。（中略）、現在私はこの頃と遙

かに距つた人間になってゐます。けれども自分の経て来た思索過程をふりかへる時、私は感慨を持たずにはをれません。²⁷

「現在私はこの頃と遥かに距つた人間になってゐます」という一文から、「満洲」に渡った牛島春子は既に自らの思想変化に気付いたことが伺える。前に触れたように、牛島春子について考える場合、主人の牛嶋晴男のことも充分考えねばならない。「牛嶋晴男年譜」によると、「一九三三年、保釈中で、姉マスエの家に寄留していた春子を訪れるようになる。当時の晴男は大学を休学していて、九州帝国大学鹿子木員信教授（日本青年協会評議員・文学博士）やその下で学ぶ青年達と交友があった」。「一九三五年七月初旬の四日間、鹿子木員信が大同学院で講義する。講義の題は「皇国主義」だった。同月、晴男を含む第四期卒業予定者が奉天省蓋平県和尚村の農村調査に行き報告書を作成する」とある。

鹿子木員信の生涯と軌跡は、宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想—安部磯雄と鹿子木員信の場合』²⁸が詳しく書いてある。それによると、鹿子木は、一八八四年に生まれ、海軍機関学校を卒業し、日露戦争に従軍するものの、戦後、海軍を退いてしまう。それから京都帝国大学で哲学を学び、アメリカに行つてニューヨークのユニオン神学校を卒業、コロンビア大学ではニーチェについて修士論文を提出している。このとき鹿子木は、彼を追つてアメリカへ渡つて来た女性と当地で死別しており、それは徳富蘆花の『みみずのたはごと』所収の「梅一輪」（一九一三）のモデルとなった。アメリカで鹿子木は本格的にドイツ哲学を学ぶことを決意し、ドイツに渡つてイエーナ大学でルドルフ・オイケンのもとで学び、博士号を取得している。博士論文の提出に際して骨を折ってくれたコルネリアとは、それが縁で結婚する。こうして一九一四年に帰国し、慶應義塾大学哲学科教授に着任した。

『永遠の戦』（一九一五）、『戦闘的人生観』（一九一七）などを発表した『ガンヂと真理の把持』（一九二二）で英国の帝国主義を批判し、アジア主義を鼓吹し、『やまとこころと独乙精神』（一九三一）などでドイツのナチズムにも接近、さらに『日本精神の哲学』（一九三一）や『すめらみくにの理論と信念』（一九三六）などで国粹主義を展開することになる。

こうした鹿子木の遍歴とファシズムへの接近については、葉照子（二〇〇七）「鹿子木員信における日本精神とナチズム」²⁹という詳細な研究がある。鹿子木員信は大日本言論報国会の事務局長として国粹主義思想運動をリードし、戦後はA級戦犯容疑者として逮捕された。牛嶋晴男はこの鹿子木に師事し、導かれた。一九三五年「満洲」官僚の揺り籠として知られている「満洲国」大同学院に入学できたのも鹿子木員信の縁によるものであると推測している。「牛島春子年譜」によると、春子は「一九三五年公判で、懲役二年五ヶ月の判決、直ちに控訴。同年、長崎控訴院で、懲役二年執行猶予五年の判決」が言い渡された。

『刑事法辞典』³⁰によると、「執行猶予」の場合、保護観察が付随することはある。牛島春子は「思想犯保護観察法」に当てはまるであろう。一九三六年から一九四五年まで「思想犯保護観察法」が実施された。「第四条 保護観察二付セラレタル者二対シテハ居住、交友又ハ通信ノ制限其ノ他適当ナル条件ノ遵守ヲ命ズルコトヲ得」と規定されている。牛島春

子の居住、交友などは制限されたはずであるが、彼女は晴男との関係によって、晴男の先生鹿子木員信の支援を受け、観察が緩和され、晴男と「満洲」に逃亡することが出来たのではなかろうか。牛島春子は執行猶予の身で右翼の鹿子木員信に師事した牛嶋晴男と交際し、結婚して昔の左翼活動とけじめをつけようとしたと考えている。

二. 第二段階：コロニアリズムへの屈服

政治運動をやめ、文学活動に従事しはじめた牛島春子の意識を彼女の小説や書簡を援用しながら見直す必要がある。本章の第一節で論証しているように、牛島春子は一九三七年十一月結婚し、渡満した。一九三六年五月「王属官」をもって「満洲」文壇にデビューし、在満女性作家として重要な一席を占めた。大内隆雄『満洲文学二十年』ではその夫婦のことを「にたもの夫婦の牛島一家」³¹と言いつけていて、彼女の創作は終始「満洲」官僚の夫を支えている旨が読み取れる。一九四一年太平洋戦争の勃発を境に、春子の思想的な変化によって前期と後期と分けられる。一九三七年～一九四一年は前期で、一九四二年～一九四六年引き揚げまでは後期と呼ぶことにする。

前期には「王属官」「苦力」「雪空」「祝といふ男」「二太太の命」「張鳳山」などの小説が次々と世に出た。一九三七年、春子のデビュー作「王属官」は第一回建国記念文芸賞を受賞したし、演劇や映画に脚色され、漫画にもなり、大いに反響を呼んだ作品である。人気小説家赤川次郎の父親赤川幸一は当時満洲国文教部社会教育科（後に民生部と改称）に勤めていた。ハルピン図書館の出版物『北窓』という雑誌に「東遊記帳」³²という赤川幸一の文章が載っている。それによると、第一回建国記念文芸賞は「満洲国」文教部の赤川幸一により企画された文化行事である。赤川は美術展覧会や建国記念文芸原稿募集など、幅広く仕事を展開したが、一番印象深かったのは一九三七年の建国五周年記念文芸募集の時の当選作、牛島春子の「王属官」であるという。

（康德）四年七月から五年二月迄の間、文教部時代に作った二つの文化行事、一つは、三月一日の建国記念文藝原稿募集、もう一つは、九月十八日の承認建国記念文藝原稿募集を国家的定例行事として終ふやうに頑張った。（中略）当時文教部内には「審査員」なる者は私一人しかなく、他にも私以上の優秀なる学者文人は雲の如く在っても「小説」とか「劇」とかいふものとは縁の遠い賢人ばかりで、結局、私は当時百二三十篇の応募原稿を抱へて、下宿へ帰るやユーウツになって天井ばかりを睨んだのである。³³

一九四〇年、春子の代表作「祝といふ男」は芥川賞次席となって高く評価されていた。このように、牛島春子は「満洲」で活発な文芸活動を行い、「王属官」と「祝といふ男」の二作で注目され、「満洲」文壇で女性作家としての地位を確立したといえよう。川村湊は牛島春子が「〈満洲文学〉の代表的な存在の一人のように見られることになったといっても過言ではない」³⁴と牛島春子を位置づけた。「王属官」「祝といふ男」といった作品論は後で

第二章に譲るが、前期の作品はいずれも中国人を主人公とし、指導民族の立場で中国人を観察したり、「満洲」の暗黒部を摘発したりするものである。牛島春子はリアリズムの手法で「満洲」の不調和な部分を暴露し、労働大衆に対して同情の意を示したが、国策に沿う表現も免れなかった。大衆への同情は彼女が持っているヒューマンイズムという根本信念に関わっており、暗黒部の摘発は彼女が持っていた「世俗的なものへの反逆」に由来すると考えている。彼女が捉えているヒューマンイズムはルネサンス時代の「人間愛、入道主義」のほうに傾いていると考えている。しかし、「満洲」時代、春子はナショナリズムを優先し、民族の壁を超えられなかった。本章第二節で触れたが、牛島春子は野田宛の書簡でそれについて明らかにしている。

ヒューマニティといふ言葉、私はかつてこれを人に向かって口にすることはありませんでした。私はこの言葉を安易に使いたくないのです。最も高貴なもの謂いだそれは思います。(中略)、この言葉を大切な宝としてしまいこんでみました。私がこういふことを考へはじめたのは十四位の時からでせう。私の世俗的なものへの反逆もその頃からはじまったのですが。私があんな思想運動に入ったのもそのためなら、それからぬけ出したのもそのためですし、今度の戦争もそういふ面から理解し肯定しようと四苦八苦をしましたが、何時でも何処でもさして不安を感じないのは私なりにこの宝を抱いてゐるからだと思つてゐます。これから先も、私はこの言葉を周囲の人に安易に口にすることはないだろうと思います。³⁵

一九四五年二月二十四日牛島春子は野田に宛てた書簡に「私の記憶によれば、十才頃からずっと反逆することによって生甲斐を感じて来たやうです」という文がある。牛島春子は十代から、父母や家庭に対する反抗期を経て、自己形成を遂げた。女学校時代からマルクス主義に惹かれ、政治運動に参加し、世俗へ「反逆」することによって生き甲斐を感じたであろう。その「世俗的なものへの反逆」は春子の生まれつきの気質であると考えている。牛島春子の前期の作品には久留米時代の政治運動の経験も投影している。彼女は一九四二年四月十二日野田宛の書簡で綴ったように「社会性というものを私は取りくんでいません。これは私の過去の経験につながる考え方かもしれません」。春子は終始「満洲」における農民問題、農民大衆に関心を寄せている。その裏にはヒューマンイズムを重視している春子の労働組合運動の経験がある。

後の第Ⅱ部第二章第一節で詳細に考察するが、王属官が農民達の「無智」に対する怒りは牛島春子が勤労者や小商人の「無智」に対する憤りと憎悪という作家の体験から生じたものである。更に建国精神と「満洲」の暗い現実の食い違いに苦しんでいることの裏に春子が共産主義の理念と実践の食い違いに苦しんでいた経験がある。春子は久留米時代を書いた小説「秋深かむ窓」で「共産主義者こそ最も人間らしい人間でなければならぬ、といふ信念は今でもゆるがない。けれど現実の活動の中で和江はたびたび理念と実践の間に食

ひ違ひを感じ、ジレンマに陥ち苦しんできたのも事実であった」³⁶と苦しみを明かしている。小説「王属官」も「満洲」の暗黒な現状に苦しみながら、「王道政治という合言葉が上の方にいる偉いお役人達だけの空念仏に終わってはならない」と実践の必要性を主張した。

「苦力」「張鳳山」も同様であるが、彼女は苦力、ボーイといった大衆に対して人間愛と軽蔑とを共に抱えていた。自分が持っているこのような性質について『手記』で次のように書き留めた。「愛と嫌悪、愛と軽蔑を同時に感ずる事もある。むしろそれらの場合の方が多いかも知れない」。植民者としての牛島春子には限界があり、それは指導民族として矜持し、被植民者を教化しようとするナショナリズムの壁である。彼女は暴力を振るわずに温情を施した行為は苦力、ボーイを救うためではなく、巧みに被植民者の中国人を操るためである。それは「民族協和」「王道楽土」の国策宣伝にもつながっていく。

代表作「祝といふ男」も「それは一見陰険にも狡猾にも見えるけれど、これも永い被抑圧者の生活が教へた智慧かもしれぬ」と中国人の行為に同情と理解を示したが、それは作者の左翼体験と切っても切れない関係を持っている。また、日本の国民性を批判し、「五族協和」「王道楽土」の現状をありのままに書き出し、鋭く指摘した。よりスムーズに中国人を支配するために、祝という中国人通訳に関心を寄せて理解しようとした。祝のような被植民地的主体は隅々まで、風間真吉のような帝国主義的な他者の監視と凝視のまなざしに曝され、かつ刺し貫かれることになる。牛島春子は正真正銘の「王道楽土」を建設するために、支配者の日本人達の覚醒をも促そうとする意図もあつたのであろう。

『満洲協和会の発達』³⁷によると、一九四〇年十二月十七日「満洲国広報処」が設置され、報道、言論などを統一的に監視、管理するようになった。一九四一年三月、弘報処により「芸文指導要綱」が公布され、検閲が一層厳しくなり、「満洲」文学界に大きなショックをもたらした。政府は文化人の組織化をはかり、思想統制が急速に行われた。「満洲国」の「建国精神」に背いている作品は出版禁止となり、多少疑念のある箇所は削除されてから、はじめて出版できた。「満洲」の文学者達は極めて厳しい環境に置かれるようになった。後期になると、春子は「女」「福寿草」「遙遠的訊息（遠くからの便り）」といった戦時色濃い作品を書くようになった。いずれも男性と女性は分業して戦争に協力する小説である。特に、戦争の正当性を説き、女性が積極的に銃後活動に参加することを強調した。

「女」では牛島春子の分身和江は「男の戦場で闘ふことと、女が子を産むことは民族を育てる表裏一体の営みにすぎぬのだ」（「女」『牛島春子作品集』一五七頁）と戦時中の男女それぞれ、戦争協力の使命を認識している。

さらに、「ラジオは勇壮な軍楽を奏し、和江はこの時ほど軍歌を美しく逞しいものに聞いたことはなかった。（中略）、十二月八日にはじまった、この日本民族にとってかつてない大きな時代を、もし和江が満洲にみたらこのやうに純粹に、ぢかに己れの血の奔騰で感じ取ることが出来たらうか、と思ふのであつた。ニュースのたびに〈兵隊さん有難う〉と見栄もはりもなく涙を流すことが出来たらうかと思ふのであつた」（「女」）。彼女は兵士たちが戦場で命をかけて戦う場面を描いて、兵士たちへの賛美の意を表明した。太平洋戦争

勃発後の牛島春子の興奮は野田宛の手紙にも表明されている。「私が帰国中にこの大きな時期に出会ったことを本当に幸せに思いました。満洲にゐては、とてもこのやうに純粋な興奮を味はうことは出来なかつたでせう。いろんな理屈を考へてまはり道をしないで〈兵隊さん、有難う〉とそのまんま素直に感謝出来るのもそのためだと思います」。³⁸その括弧つきの「兵隊さん有難う」は一九三九年一月から発売された軍歌「兵隊さんよありがとう」に因んでいた可能性が極めて高いと考えられる。『明治・大正・昭和のうた』にも収録されている軍歌「兵隊さんよありがとう」（昭和十四年 作詞：橋本善三郎、作曲：佐々木すぐる）は「肩を並べて兄さんときょうも学校へゆけるのも」、「タベたのしい御飯どき 家内そろって語るのも」「淋しいけれど 母さまときょうも円かにねむるのも」「明日から 支那の友だちと仲よく暮してゆけるのも」皆「兵隊さんのおかげ」であると国のために犠牲を惜しまぬ兵士に感謝の意を捧げるものである。³⁹一九三八年十月二十九日の『朝日新聞』に「懸賞募集一皇軍将士に感謝の歌」を載っている。次のような時代背景による募集である。

南支の要害広東もろくも潰え、抗日の首都漢口の攻略も成って聖戦ここに年余皇軍将士はあらゆる苦難に耐へて勇戦苦闘し、銃後国民また協力一致して奉公の誠を捧ぐる秋、忠烈国に殉じた護国の英雄、全支に転戦しつつある儘忠の将士達にまた名誉の戦傷病のため療養中の勇士に対して心からなる国民の感謝を捧ぐるため、さきに本社で募集を発表した「皇軍将士に感謝の歌」は全国民の熱誠と感激をこめて続々と本社に殺到して居るが、武漢三鎮陥落の今日、銃後国民の真情溢れたる感謝の歌として後世永く歌ひつづけらるべき一代の名篇を切望して止まない。

二箇月後の一九三八年十二月三日の『朝日新聞』に「佳作第一席」が発表された。ただし、歌詞は書いてあるが、タイトルなしである。佳作第一席入選の橋本善三郎は秋田出身であり、郷里の中学校を卒業して代用教員を務めたこともあるが、当時は康文社印刷所に文選工として働いているという。橋本は次のように入選の喜びを語った。「街に見られる少年少女達の兵隊さんへの尊敬や憧れの純真な気持をそのまま童謡風に綴ってみました、これで皇軍将士に対する感謝の気持も現はれた訳でこんな嬉しいことはありません」。

太平洋戦争は、春子が出産のために、久留米に帰郷中の時に勃発した。彼女に「大いなる時代」（一九四二年十二月『観光東亜』）というエッセーがある。先行研究には触れられていないのであるが、西原和海先生のご協力で購入できた。春子の「転向」意識が強く読み取れる随筆である。「私は幾年か思想の混迷から抜け出すことが出来なかつた。姿も見せず人間の精神を喰い荒す思想とは細菌よりも恐ろしい魔物である。ここ三四年來私は魔物の呪縛から解き放たれてゐたけれど、まだ白昼大手を振って歩く自信は持たなかつた」。すなわち、春子は昔の共産主義思想を「恐ろしい魔物」と位置づけ、一九三七年「満洲」に渡ってきた時から、既に政治思想を放棄しているにもかかわらず、まだ劣等感を持っている。春子はラジオで太平洋戦争が勃発したと知り、「生き甲斐を感じてゐる今、これ

からこそ私の本当の人生が始まる」と興奮した。それをきっかけに、春子は戦争協力の道にひた走った。

春子はその後戦争を全力で擁護し、素直に兵士に感謝している気持を表しつづける。コロニアリズム、戦争体制に屈服し、積極的に協力する姿がそれらから浮かび上がってくる。また、中国語の作品「遙遠的訊息（遠くからの便り）」では、「在这激流里，瑞枝和俊二，洗涤旧日个人的感情残渣，二人在更高的地方，将要重新握手了。那真是遥远的感觉。祖国战争的圣美，在这一点也会让她感到」（この渦巻きの中に、瑞枝と俊二は昔の感情の屑が洗われて、もっと高いところで手をつなぐようになった。それは本当に遠い感じである。母国戦争の神聖と美も感じられた）とヒロインの瑞枝は戦争の神聖と正当性を訴えている。対立してきた二人は国の戦争のために味方になり、協力関係に転じた。最後に、瑞枝は慰問袋を作り、「装满一个足以满足俊二的慰問袋，写一封信，只不过是更高洁的，换句话说，那是日本的一个女性捧呈给军人的至诚的祈祷罢了」（俊二を満足させる慰問袋を一杯詰め込むのも、手紙を書くのも、もっと清らかになることにほかならない。言い換えれば、それは一人の日本人女性は軍人に捧げるお祈りだけである）と日本人女性による銃後の支援を強調した。常に死と隣り合わせつつ、恐れず勇ましく戦う兵士の姿が大いに褒美された。「福寿草」も、勇ましく抗日連軍と闘った日系警察官を賛美すると同時に、日本人女性が死を恐れずに戦争に力をつくすことを書いている。

云はでものことですが、私達が此处でかうして死んでも、犬死ではありません。兵隊さんが戦さで死ぬのと同様立派なことです。武士の妻がお城と一緒に殉死した、あの日本婦人の血があなたがたにも流れてみます。私達は誇りをもって満洲で骨となりますのです」と女性に神聖な死を恐れないことを説得しようとした。その後、「一度は、死の覚悟をした女達は、嬉しさのあまり手を握り合って、すすり泣きをはじめた。それから立ち上って、てんでにを掛けたり割烹着をつけたりして、いそいそと炊出しの用意にかかるのであった。（「福寿草」）

牛島春子後期の作品は意識的に女性を主人公にしたり、女性の戦争役割分担に注目したりする傾向が見られる。このように、春子の小説のテーマは労働者大衆に対する同情と「満洲」暗黒部の摘発から完全に戦争賞揚、女性の戦争加担に変わった。彼女自身も自分の「転向」を意識し、喜びを感じたことを一九四二年五月二十日野田宛の手紙で記した。

私は娘時代にあまり軌道を逸したことを考へ、行って来ましたので、現在己れがどうやら社会の軌道にのり得たことに、つまり平凡になり得たことに人々と違ふ喜びを感じています。私は常識はづれであった昔を幼かったと思い、今は常識をわきまへ、しかも、それをのりこえる人間でありたいと思います。⁴⁰

春子は左翼思想から徐々に「転向」しつつある。時代に身をおいて、世間並みに行動を取るようになった。本章第三節で述べたように、この思想の変化について川端康成の意見を聞いたかったようである。

私は昔の文人達がして来た自分本位の行動をとって、周囲にいろんな波や苦しみを起こすことが必ずしも正しいとは思はないし、私といふ人間が天涯孤独でなく様々な社会的血縁的支への中にあることを思ふと尚更です。昔はこんなものを無視することが出来たのであんなこともやったのですが。こういふことも私は一度川端さんに聞いて貰いたい気持ちがありますけれど、又身辺的なことで川端さんの頭を煩はしたくない遠慮もあります。⁴¹

「満洲」時代、牛島春子は幼いごろから持っていた「反逆」精神を猛烈な歴史の渦巻きの中で堅持できなかつた。夫牛嶋晴男は「牛嶋晴男—興農部参事官」の名前で一九四一年十二月「拝泉縣をしのぶ」を、『月刊満洲』十二月号（第十四卷第十一号）に発表した。協和会全国聯合協議会の六日目の状況を書いたものである。「牛嶋晴男年譜」（坂本正博）は、晴男について「一九三八年秋、興農部参事官となり 新京に転勤となった」「一九四〇年、総務庁企画処参事官となる」と書いてあるが、晴男の「私は今付君が問題にした農村問題を担当する興農部に居る」（「拝泉縣をしのぶ」）によると、一九四一年、牛嶋晴男はまだ興農部に所属しており、総務庁に移動していない。「拝泉縣をしのぶ」は日本人に協力した中国人付春山を通じ拜泉縣の歴史を回顧したものである。自ら行政の仕事に就いた時期、「拝泉では三年間豊作が続き、農民は豊かであり、治安も穏やかであった。（中略）、つくづく第一線で働くことの喜びに胸をふくらましたのである。そして今にしてはじめてあの頃の拝泉こそ「楽土満洲」であった」と満足感を示した。今、拝泉縣が抱えている農産物が安いなどの問題を「新しき責任と勇氣と農村への愛情を覚ゆると共に、拝泉の農民に対し、東亜共栄圏の明日の輝しき確立の為に政府と共に時難を克服し逞しき前進を祈ってやまない」と締めくくっている。

一九四二年十一月、牛島春子は随筆「全聯傍聴」を『藝文』第一卷第十三号十二月号に発表した。それは一九四二年協和会全国聯合協議会の四日目の状況を書いたものである。

第四日目を選んだのは、この日上程される議案が、農村に関する問題であったことが私の心を惹いたからであるけれども、それにしても九日間昼夜の別なく行はれた厳肅な協議会のうち、僅か或日の四時間だけを傍聴してその感想を書かうとするなど、大変出すぎた事だと思ふ。内心ためらふものがあるけれど、約束してしまったので、本当にまとまりのない一場の印象記丈を書かせて貰はうと思ふ。（「全聯傍聴」）

「約束」の相手を究明する術はないが、恐らく夫の晴男であろうか。牛島春子は「二年

ばかり前一度傍聴したことがあった」「半日の全聯傍聴は私に非常に面白く、深い感銘を与えてみた。と云って、全聯に対してもっともらしい意見や、批判めいたものは何もない。ただ面白さが心身に応へたといふ丈の感銘であった」（「全聯傍聴」と全聯に興味を示している。

上述した二本の文章はいずれも、協和会全国聯合協議会の様子を記録し、「満洲」農村、農民問題を重視すべきことをアピールする主旨である。一九四三年二月一日晴男は「報徳道と開拓農村の建設」を『開拓』に発表した。それは「勤労、報徳綱領大地の勤労は之れ皇国開闢の道の実行である」（「報徳道と開拓農村の建設」と「報徳精神」を宣伝する文章である。牛島春子の「全聯傍聴」には「興農部次長の説明の冒頭に云はれた、天地人に対する官舎、報恩の勤労精神こそ、農村振興の重要な条件の一つであるといふ言葉が、決して卒爾に云はれたものでないことを、私自身の反省と共に深く考へたといふ事なのである」という「報恩の勤労精神」を称揚する文がある。内容は「報徳道と開拓農村の建設」と妙に重なっていることから、それは妻の牛島春子が代筆した可能性が高いと推測している。それが証明されれば、牛島春子が夫の立身出世を支え、「内助の功」を果たしたことを浮き彫りにすることになる。

第Ⅱ部第一章第四節で記しているが、牛島春子はすでに日本が敗戦の匂いが濃厚となっていた一九四五年、特攻隊への憧れを表明する書簡が残っている。『特攻 自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』（二〇〇二）によると、「特別攻撃隊が略称されて特攻とよばれるようになった一九四四年（昭和十九年）から、海軍は「決死」ではない「必死」の兵器を採用しはじめた。「特攻隊」の活動がはじめて公表されたのは同年10月、フィリピン・レイテ島に上陸する米軍を撃滅するために出動した連合艦隊とともに、米艦隊を襲った神風特別攻撃隊である」⁴²。その特攻に対し、様々な視点から多種多様な見解があるが、太田尚樹『天皇と特攻隊』⁴³は天皇の存在なくしては特攻はありえなかったと指摘した。「日本が追いつめられた太平洋戦争の末期、愛する人や家族、国土を守るという、目の前のリアリズムの世界の価値観だけで、死地に赴くことができるだろうかと問われれば、答えはノーである。彼らの立場に立ってみれば、人間の最後に問われるモラルの原点は何か、心を預けられる対象は何か、日本人の魂をどの方向にベクトルを働かせるかとなると、そこにあるのは日本古来の観念論への信仰であり、神の政を司る天皇に収斂される背景がそこにある」。（一二〇頁）特攻は一九四四年、圧倒的な国力の差で挽回しがたい戦況に陥った日本軍の戦術であろう。日本国内では戦況悪化と共に特攻という言葉が流行語になっていた。死をものともせぬ犠牲になった隊員は「軍神」と称賛され、崇拝されることは戦意高揚につながった。こんな歴史の流れに「満洲」にいる春子まで息子を特攻に加入させたがっている姿が浮かび上がり、「軍国の母」としてのイメージが鮮明になってきた。当時の春子は常に勇ましく戦っている軍人に対して、最高の敬意を示している。戦争が拡大されていくにともない、牛島春子はまさにその重き時代の流れに反逆できなかった。彼女のエッセー「鵲の巣と冬」には巣作りをする鵲に自身を投影し、自分の生き方を暗喩する箇所がある。

「深く底に堪えた高く激しいものを、ただ冷徹な表情にこめた冬の貌。その貌に心を打たれる私は何時か時代の貌について思ひを馳せてゐる。さうすると、青空と白銀の世界の境目に懸かった可憐な鵲の巢は何か一つの生き方を暗示するもののやうに私は思はれて来るのである」。⁴⁴「青空」は牛島春子『手記』のキーワードの一つである。たとえば、「青空と人々は何故に妥協出来ないだろう」⁴⁵と疑問を持っていた。「青空」は世俗の対極にある理想の世界である。「私の理想は遠い。私の理想は遙かすぎる。私は生きるために凡ゆるものを手段とする。私の一生よ、あ、生きるために強く雄々しくあれ」⁴⁶と牛島春子は理想と現実の大きな隔たりを意識し、ヒューマニズムを胸に秘めて「満洲」での生き方を思索していたに違いない。

三. 第三段階：戦後の再度の方向変換

「満洲」での一年間の放浪生活を終えて、一九四六年七月、牛島春子は三人の子供をつれ、引き揚げてきた。「満洲放浪」は牛島春子にとって、新鮮で活気あふれているロマンチックな一時期である。第二章第四節で詳述することにするが、彼女はしきりに「満洲」のことを思い出し、民族を超えた人間の善良性に気付き、「満洲」の本質を考え直したようである。そのためか、春子の引き揚げ体験記には脱植民地化の傾向が次第に強くなっているのである。一九四六年七月、牛島春子は引き揚げてきた直後、民主化が進んでいる日本内地に憧れている気持を野田宇太郎に表明した。「私は敗戦日本が気がかりでならず、天皇制が云々されたり、共産党が合法政党になったりした祖国の姿に何時も思ひを馳せてあました」⁴⁷。

『新日本文学』創刊号によると、一九四五年十二月、「新日本文学会」の創立大会が開かれた。その創立発起人は秋田雨雀、江口渙、蔵原惟人、窪川鶴次郎、壺井繁治、徳永直、中野重治、藤森成吉、宮本百合子といった戦前のプロレタリア文学運動の関係者である。彼らが創立発起人となった資格に関しては、中野重治の大会報告によると、「帝国主義戦争に協力せずこれに抵抗した文学者」⁴⁸であることが条件とされた。当時の情勢をおおまかに言うと戦後の新たな出発によって共産党の躍進と呼応して新日本文学会が勢力を拡張した時期であった。創立発起人の江口渙は議長に選ばれ、「会はプロレタリア団体の単なる復活ではない。新たな民主主義革命の進展に応じて、一切の民主主義文学者の結集を図り、民主主義文学の前進のために闘うものでなければならぬ」⁴⁹と新日本文学会の性質を強調した。戦後社会に登場した新日本文学会が共産党員作家を中心とする左翼文学集団であることは明らかであるが、それを是正し、民主主義文学者の結集を図ろうとしたのである。彼らは以下のような宣言を発表し大会を閉会する。

「宣言」

われわれは今日、日本における民主主義的文学運動組織のために集まった。われわれは、日本における民主主義的文学の創造とその普及、人民大衆の創造的文学的エネルギー

一の昂揚とその結集とを自己の任務として自覚し、この任務達成のための基本組織とその活動方針とを決定した。われわれはこの方針を具体化、この具体化におけるわれわれの献身を以て日本の全人民に答へ、同時に全世界の人民、特に中国および朝鮮の人民に答へようとするものである。⁵⁰

翌年の一九四六年一月『新日本文学』の創刊準備号では、新日本文学会創立の趣意と綱領が表明されている。

「新日本文学会創立の趣意」

十数年にわたって日本帝国の侵略的戦争を指導して来たわが国の軍国主義者たちは、その反動的、反文化的支配を強化するためにすべての進歩的文学者に暴圧を加え、わが日本文学の民主的伝統を根底より破壊し去ろうとした。わが作家達はその自主的活動の自由を奪われ、わが国の文学は最も重大な危機に直面するに至った。然るにこれらの軍、官、財閥は、連合軍の攻撃の前に敗退し、ここに自由な文学のためのいはば外的社会的条件が与えられた。今こそ日本の文学者は、わが人民大衆の生活的現実・文化的欲求の真実の表現者として、日本文学の中に存在し続けてきた民主主義的伝統の上に立ち過去の日本文学の遺産の価値高きものを継承し先進民主主義国の文学より学びつつ真に民主的、真に芸術的な文学を創造し、日本文学の高き正しき発展のために結合してその全力を傾けねばならぬ。

「新日本文学会の綱領」(草案)

- 一. 民主主義的文学の創造と普及
- 二. 人民大衆の創造的・文学的エネルギーの昂揚と結集
- 三. 反動的文学・文化との闘争
- 四. 進歩的文学活動の完全な自由の獲得
- 五. 国の内外における進歩的文学、文化運動との連絡協同⁵¹

(一九四六年一月創刊準備号)

さて、「民主主義的文学」とは何かという問題は新日本文学会のコアである。『「新日本文学」の60年』によると、新日本文学会は「民主主義文学の創造と普及」を目的とする団体である。新日本文学会による「民主主義」の概念は次のように解釈されている。

蔵原惟人さんが最初の編集長をやってますけれど、彼の規定の仕方は「封建時代を超えて民主主義」に行くという歴史観で編集するといってますが、戦後になって、封建制度から近代国家にむかう、そういうふうなところに文学運動の意図があったんじゃないじゃなくて戦後民主主義革命を徹底していこう、社会を徹底的に変えていこうという、そういう

想いや声を全国から集めてやっていこうというのが大方の気持だったと解釈しています。まあそれが中野重治さんとか第二期の編集長の壺井繁治さんとかの創成期だったと思います。(ii 頁)

宮本百合子は『新日本文学』創刊号で「歌声よ、おこれ—新日本文学の由来」を發表し、「民主なる文学ということは、私たち一人一人が、社会と自分との歴史のより事理に叶った発展のために献身し世界歴史の必然な動きを胡魔化することなく映しかえして生きてゆくその歌声という以外の意味ではない」(同上九頁)と「民主主義文学」を位置付けたのである。蔵原や宮本をはじめとする新日本文学会の中心人物は戦前のプロレタリア作家同盟の系譜に位置した作家であった。彼らにとって戦後、合法政党に復権できた日本共産党は輝かしい権威を背負った偉大な存在である。当然に新日本文学会は日本共産党理論の影響下にあった。一九四六年から一九四七年にかけて、戦争責任追及の声が高まり、「政治と文学」の問題も次第に論じられるようになった。周知のように、「政治と文学」論争とは、第二次世界大戦直後に、プロレタリア作家中野重治と『近代文学』を創刊した評論家の荒正人と平野謙との間で繰り広げられた、文学の政治利用のあり方についての論争である。それについて、吉田永広(一九七七)「戦後「政治と文学」論争・その後—主として中野重治、平野謙」⁵²といった詳細な研究がある。平野謙は一九四六年十月『新潮』に「政治と文学」、『近代文学』に「〈政治の優位性〉とはなにか」を發表した。平野は中野重治の「二等兵と天皇とを混同し、帝国主義的専制政治と反帝国主義的民主政治との質的な差別を抹殺する「反革命的言辭」⁵³を批判し、人間性を取り上げ、人間の尊厳を強調した。

ここから「政治と文学」の問題はヒューマニズムとエゴイズムとの対決という文学内部の問題に転化され、(中略)、今日「政治と文学」の問題は「民主主義文学」と自己規定するような提出のしかたではすでに片づかぬ。民主主義、それは現在では政治用語の色彩が強い。それと文学との結びつけには、どうしても政治的なにおいがつきまとう。人間侮蔑とは反対に、人間の尊厳と個人の権威とを瞭然と打ちだすためには、いまこそ「個人主義文学」の確立が必要なのだ。⁵⁴

一方、中野重治は一九四六年七月『新日本文学』に「批評の人間性(一)」一九四七年三月『展望』に「批評の人間性(二)」一九四七年五月『新日本文学』に、「批評の人間(三)」を載せた。中野も人間性を武器として平野と論戦した。中野から見ると、平野の批評そのものにおいて「非人間的」であり、「文学反動」と人間的に闘争することを諦めているせいで、敗戦をきっかけに生じた民主主義革命の希望が再び反革命に押し流されるのを黙認することになっているのではないかと批判した。更に「平野には政治を人間的に考える能力がない。(中略)、政治を人間的に考えることのできぬもの、人間的な政治を人間的に空想することのできぬ批評家が、目的のために手段をえらばぬのは自然である」⁵⁵と平野を

擲掬した。中野重治は「新日本文学会」の中堅の一人である。一九六二年まで、中野は「書記長」という重要な役割を担っていた。一九五二年二月十三日、その中野は野田宇太郎宛てに手紙を出し、蒲原有明追悼のために蒲原の晩年に関する原稿執筆を依頼した。

蒲原さんがなくなられ、例の詩集のことで僕も参加し、新日本文学会としてもすぐに参加していたこととて、すくなくならず残念に思います。さて今度『新日本文学』で蒲原さんのことを扱いたく、詩の業績についてもふれますが、特にあれだけの方が、晩年いろいろいわば不遇であったことについて、今度の完全詩集のくわだてのことなどをも含めて、雑誌の発表したく、そのことをどうかあなたに書いて頂きたいのです。⁵⁶

中野は電話、面談といった一般的な連絡手段ではなく、手紙で野田に依頼している点、また宛名の表記で「野田宇太郎」を「野田卯太郎」と間違えた点などからみると、野田と親しくなかったことが窺える。

第Ⅱ部第一章第二節で考察しているように、野田が編集した『藝林閑歩』などを舞台として発表した作者の列には、左翼系の人々が殆ど入っていないし、「民主主義」「改革」といったスローガンを掲げた左翼団体「新日本文学会」について野田は積極的にコミットする気はなかったであろうが、一九五二年四月号の『新日本文学』に野田執筆の「有明先生の晩年」が掲載された。野田が蒲原と知り合ったのは一九四五年の年末であった。次に「私が蒲原先生とお会ひする最初のきっかけとなったのは、その頃少々知りたいと思つてゐる青木繁のことをお訊ねする用件からでもあつた」⁵⁷とその対面のきっかけを綴っている。編集者としての野田は「〈忘れられた〉先生の仕事の一端に役立てやうと決心した。先づ二十二年の八月に、明治三十八年刊行の歴史的な名詩集『春鳥集』の決定版を出し、十一月には、それまで約一年間、私の雑誌に連続執筆された先生の詩人としての精神史とも云ふべき散文集『夢は呼び交す』を出した」。⁵⁸野田の協力で出版された『夢は呼び交す』のおかげで、蒲原は一九四八年日本藝術院会員に選ばれた。野田は次のように蒲原を高く評価している。

私は先生に接してゐるうちに、七十歳を越された先生の中に、永久に老いることの無い精神乃至智力と言ふやうなものを感じ、先生の衰へぬ読書欲と創作欲とに驚かされた。先生は明治四十一年一月に第四詩集「有明集」を刊行されると、ぶつたりとそれまでの旺盛な詩作を断たれたかのやうに人々から思はれ、やがて東中野から二階堂、そして静岡へと転住されるに従つて、やうやく人々の記憶から遠隔かられた。その後も先生の仕事が世に出なかつたわけではなかつたが、飽き易く忘れ易い日本人は、この近代詩の眞の父、眞の詩人であつた先生を殆ど過去の人として葬りつつあつた。⁵⁹

蒲原が「新日本文学会」のメンバーたちにとって、関わりのない「過去の人」であつた

ため、野田にとって、この執筆依頼は難しかったのではあるまいか。

一九四八年、牛島春子は新日本文学会久留米支部の創立に参加した。彼女の心に深く根ざしたヒューマニズム（人間性、人道主義）は蘇り、再び共産党に接近しはじめた。野田は親友牛島春子の共産党加入を喜んで受け止めかねたことであろう。春子は己の分裂している内心、煩悶していることを野田に打ち明けた。

あなたの説かれるヒューマニズムはよく判ります。そして大変教へられます。けれどヒューマニズムとか人間性とかは一体何でせうかだんだん判らなくなります。その本質の追求はたしかに学問によるべきでせう。けれど、私にはよく判りませんが、西欧のヒューマニズムの歴史はそれが何であったか、何であらうとしたかを研究するとき、ヒューマニズムの運動が、ヒューマニティの抑圧への反逆として起ったといふことが云へるならそれは夫々全人間的な解放を求めながらその運動はやはり時代に制約されずにはゐられなかったのではないでせうか。（中略）、私といふ人間このやうに分裂してゐます。私はしん底からコミュニストになれない人間といふことを自分でよく知ってゐます。私は大衆の中にとけこめないいつも自己に固執し、大衆の愚昧さを軽蔑し、孤独であるのですが、それと同時に、大衆課税によって、大衆の生活権をおびやかす、富を収奪する政府の無能厚顔さにも憤るのです。⁶⁰

牛島春子の心は分裂し、矛盾に満ちている。少女時代からの信条であるヒューマニズムが彼女を左翼運動に導いていたが、そのヒューマニズムにも時代的な限界があることを主張している。それは「満洲」時代の春子を理解する糸口になるのではなからうか。

また、政治と文学の関係について、春子は次のように考え、苦しんでいる。

文学では私は政治文学はほんとうは嫌いです。私の本領は本質は自己を掘り下げる所、とロマンチズムにあるのですが、政治的関心が押へられてゐる時、それが文学の態度の上に現はれてしまふ。そしてあなたの仰言るやうにロマンチズムにもサンチマンにも徹し切れずに上つすべりなものになってしまふ。よく知ってゐます。それでこのまま私が自由になったら政治的な運動をやりながら、それとゆかりもないロマンチズムの作品をかくといふ結果になるかもしれません。

そしてその矛盾をどのように解決したらいいか相変わらず苦しむのでせう。このやうな矛盾があつてはいけない。必ず統一されねばならないと思ひながら、現在その鍵をどこに探しだすこともできません。政治的運動もやれないかもしれない。⁶¹

ここで春子が言っている「政治文学」は政治思想を鼓吹するために書いた文学、特に、共産主義など政治的なコントロールを受ける文学、政治に奉仕する文学であると理解して

いる。そして、牛島春子は日本共産党内の「非人間的」なものに納得できず野田に宛てた書簡で共産党内の天皇への悪意のこもった「人間的な侮辱」「人身攻撃」などの行為へ批判のスタンスを取っていた。彼女は労働階級と対立している天皇制に反対するにもかかわらず、天皇個人への侮辱、人身攻撃に同調できない。牛島春子がとらえている「非人間的な行為」とは天皇の人間としての尊厳と人格を抹殺されることである。

お手紙のありました党への批判は全く同感だと思います。

例へば、天皇制を批判するのも天皇個人を人間的な侮辱したり、人身攻撃をやったり、悪意に悪意と解釈したりするやり方は私も不愉快です。あの人たちのこんなくせは昔ながら持っています。一種の主観主義です。けれどこれは階級的に中間、などをなすインテリ、子づれの感覚なのです。労働階級と資本家階級（天皇制も含めて）の対立は歴史的に宿命的なもので、今まで労働階級の置かれていた非人間的な地位を考えれば、彼等が、資本家階級を仇敵と思ふのはやむをえないもので、資本家権力の集中的代行機関としての天皇制、天皇に対して階級意識の強いものほどそのやうな気持ちをもつのもやむをえないのかもしれませんが。なぜなら天皇制の最も大きな犠牲者は労働階級であり、農民であったのですから、私は自分の感覚とは別にここから只一つ同化することのできなかったのは党の中にあるこうした非人間的なものでした。

しかしながら、これは従来のヒューマニズムの立場からの批判であり、共産党への全面的な否定ではない。後に春子は共産党員を大いに褒めている。

けれど実際の所、私は共産党員は好きです。中としての非人間的な印象にもかかわらず、個々の共産党員は実に美しい人々です。今の世の中ではやはり真実の政党は共産党のみだと思います。他の政治家たちの犯した陋劣な罪に比べれば彼らの薄汚なさに比べれば、共産党員はるかに純潔な魂を持っています。あの人達は欺瞞も虚栄も虚飾もありません。入党する時「何ら報いられることを期待しない人民への献身」を宣誓しますが、真正の коммуニストは殉教者の道へ通じていると思います。あの人達は明るく単純なのですが、その単純さは「矛盾の統一」としての高さが感じられます。最も、党員にもピンからキリまでありますが、少なくとも коммуニストの自覚した人々はそうです。少し褒めすぎたやうですけど、私はあなたに коммуニストを理解し好きになっていただきたいものだと思っています。⁶²

前後の文脈から見ると、牛島春子は野田の共産党批判に納得し、党内の問題点を指摘し批判したが、相変わらず、昔の政治思想を持ち続け、共産党員を賛美し、擁護している姿勢が変わらなかった。春子は自然にその「純潔な魂を持って」いる коммуニスト達と交友し始めた。一九九四年牛島春子が久留米中央図書館に寄贈した書簡、葉書を手がかりとし

て調査した結果、新日本文学会の同人の野間宏、中野重治、重井繁治らと付き合いがあったことがわかった。特に親しかったのは野間宏である。野間宏研究には黒古一夫『野間宏』（勉誠出版二〇〇四年）といった詳細な研究があるが、新日本文学会同人牛島春子との交流に言及していない。それに野間宏の共産党と新日本文学会へのスタンスについての研究がまだ不十分である。

『日本共産党の八十年』⁶³によると、一九五〇年前後は東アジアにおいて激変が起き、緊迫した雰囲気は漂いはじめた。それは日本共産党における内紛に連鎖した。一月にコミンフォルム（ヨーロッパ共産党・労働者党情報局）が機関紙に日本共産党の平和革命路線を批判する文章を掲載した。朝鮮戦争直前、アメリカとの闘争を促すコミンフォルム批判によって党組織は徳田球一を中心とする「所感派」と宮本顕治を中心とする「国際派」に分裂した。「一九五〇年、朝鮮戦争を前にしての日本共産党の分裂は、新日本文学会とその運動にも深刻な影響を及ぼした。分裂の多数派（所感派）が会ではごく少数派であり、『人民文学』という雑誌を発行して、新日本文学会を乗っ取ろうとした」。⁶⁴この共産党の内部分裂は五十年問題に始まり、一九五〇年代の半ばまで続いた。黒古（二〇〇四）によると、野間は所感派側に近づき、『人民文学』を拠点としたが、その理由は二つある。一つは野間が「日本共産党へのコミンフォルムの批判は間違っており、日本革命に関しては日本の特色を生かすべきであると考えていた」（『野間宏』一五九頁）からである。もう一つは「かつて自分を「党の名において」批判した者たちが、今度は党指導部批判を行う、この政治のマキャベリズム（御都合主義）に疑義を持った」（同上一六〇頁）からであると指摘している。

野間の春子宛ての書簡を通じて野間の本音を理解することができる。

お手紙頂き、すぐ送ろうと思いながら、原稿お送りするのがおくれました。体の方はようやくよくなってきました。しかしまだもとに復したわけではありません。作品なかなかおかきにならないようですが、思い切って、大きいものにとりかかられては、如何ですか。

私もこれから、またはじめようと考えています。原稿古いのがありませんので、うつしかえました。原稿返送は結構です。交差点の松永さんにお渡し下さい。九州へはぜひ一度行っていろいろおききしたり、みたりを考えています。もう少し体をしっかりさせなければと思っています。⁶⁵

病魔に取りつかれている野間は春子の執筆を鞭撻し、九州まで行っている春子と交流する希望を綴っている。また、一九五四年野間から牛島春子宛ての書簡で、野間は春子を激励し、「困難な踏み込みにくい時代」を「直観力をもって、切り開こう」と決心した事を書いている。

じつに困難な踏み込みにくい時代になっていますが、どうかするどい直観力をもって、切りひらいてほしいと思います。もちろんこれは、牛島さんにつたえると同時に、自分の心につたえなければならない言葉です。⁶⁶

一九五九年十一月一日から三日にかけて新日本文学会第九回大会は安保条約改訂反対の宣言を発表した。新安保条約が五月十九日に国会で強行採決されたことが引き金になり、国民的な大規模の反対運動が一気に盛り上がり、新日本文学会にも波及した。『「新日本文学」の60年』によると、「一九五〇年代後半の、「スターリン批判」で堰を切った過去の見直しは、世界的な規模のものでもあったが、戦争責任を「戦後責任」の問題として追求する志向、文学芸術の革新を政治や運動のそれとも関連してとらえる視点が、しだいに現実的な力を持ちはじめた。一九五八年の警職法改定反対闘争にひきつづく「六〇年安保」闘争は、旧来の思考方法や運動の「指導」ではとらえきれない、新しい運動のエネルギーを生み出した」という⁶⁷。安保闘争以後の革新内部での矛盾が露呈してゆく中で一九六一年七月に、共産党第八回大会を前に新日本文学会の有志安部公房、泉大八、大西巨人、岡本潤、且原純夫、黒田喜夫、栗原幸夫、小林祥一郎、小林勝、菅原克己、武井昭夫、竹内実、玉井五一、中野秀人、野間宏、花田清輝、濱田知章、針生一郎、広末保、檜山久夫、柁木恭介の二十一名が「真理と革命のために党再建の第一歩をふみだそう」（一九六一年七月二十八日東京『朝日新聞』朝刊にて紹介）という題の声明を発表した。共産党の綱領改正が行われて大会が終了したあとの八月にも新たに石田郁夫、岡田憲一、木原啓充、杉浦明平、関根弘、羽山英作、丸山静の七名を加えた二十八人の党員文学者が声明「革命運動の前進のために再び全党に訴える」を発表した。その結果、翌年までに安部公房や野間宏といった党員文学者は共産党から除名されることになった。

野間はその一九六一年八月十八日付ビラ「革命運動の前進のために再び全党に訴える」を牛島春子にも郵送した。野間は当時、激しい行動を取り、一九六四年ソ連共産党の「部分的核実験停止条約」の押し付けに同調した。一九六四年六月十八日東京『朝日新聞』朝刊によると、朝倉摂（日本画家）出隆（元東大教授、哲学者）国分一太郎（児童文学者）佐多稲子（作家）佐藤忠良（彫刻家）野間宏（作家）本郷新（彫刻家）丸木位里（洋画家）丸木俊子（同）富島義勇（映画カメラマン）山田勝次郎（農業経済学者）渡部義通（歴史学者）の十二人の党員文化人が「要請」という形で党中央に送りつけた。さらに、十月には反党「声明」を発表し、メディアに送付した。十一月、野間は佐多稲子ら十人が共産党から除名された。

牛島春子は過激な行動をしなかったが、野間の味方として野間を支えていた。彼女は東京まで行き、病床に臥している野間を見舞った。一九六四年五月五日野間よりお見舞いの礼状が届いた。「この間は、わざわざ家までお見舞下さって、美しい唐津湯呑をおおくり頂き、有難う存じました。時々だして眺めています。いまの僕の気持ちに支えをあたえてくれるようです」。野間はリーダーシップを持ったたくましい男性のように見えながら、春子の

ような女性作家に頼る一面も持っていたようである。

一九五三年五月から一九六五年三月にかけて、牛島春子は『新日本文学』に随筆「日患同盟メーデー参加」「福岡にエレンブルグ氏を迎えて」、短編小説「アルカリ地帯の町」「或るメルヘン」「夢について」、ルポルタージュ「黒い谷間からの証言―筑豊炭田地帯」、中篇小説「ある通信員の手記」を発表した。これらの作品はほとんど人間性、博愛、反戦のモチーフが入っている。一九五三年五月号に載っている「日患同盟のメーデー参加」で春子は弱い立場の労働者に関心と同情を持っているが、己の過去に対する一種のコンプレックスを表している。「私は、ただ一度だけメーデーに参加したことがある。昭和二十四年のメーデーだった。その四、五日前に女流作家のSさん宅へいったときに突然に誘われ、実は、少々面喰って聞いた。(私のようなものでも、参加していいのでしょうか)」。一九六〇年一月号に掲載された「黒い谷間からの証言―築豊炭田地帯―」(共同作成)は筑豊炭田地帯の困窮状況に関する報告である。春子は炭田で暮らしている底辺の人々の苦しい生活を記録したルポである。それに、一九五七年十二月号に載っている「或るメルヘン」である。それは戦争による悲劇を描写し、反戦の意がこめられていると考えている。主人公の坂井信五は結婚一ヶ月後、兵隊に行かされた。妻久子に子供ができていたことを予知し、また三人で幸せに生活することを想像しながら、苦しい兵隊生活を忍んできた。「信五は自分が父親らしい感じであるのを意識する。夢から覚めてもごくわずかの間、彼は夢の中で経験した父親らしい感じの手応えを現実として味わうことができた。それは、彼が自分は兵隊でなく人間なのだという本源的なものに立ちかえる幸福な安らぎの瞬間でもあったのだ」

(「或るメルヘン」)それはナショナリズムを超える人間性の自然の現れである。このように、坂井は久子と子供のことを精神の柱として、ようやく久留米に生還した。残念なことに、故郷は戦争で変貌して「軍都」となり、さらに悲惨の空襲で瓦礫に化した。久子と子供も空襲で亡くなっていた。

「彼が兵隊として戦場で苦しんで来たことも、久子と子供の無惨の死も、哀れまれて出されるにこのにぎりめしの値いしかなかったというのか。これが辱かしめでなくて何であろうか。坂井信五の目から涙は枯れてしまい、その時から彼の相貌は一変してしまったのだ。憤想と憎悪を燃やしつづけ…」坂井はにぎりめしを渡した笹本夫婦と十五歳の息子を殺した。死刑囚坂井の顔に微笑が浮かんでいる。「久子と子供に今度こそは会える」という確信をしていた。坂井は妻子と平和で安穏な生活を送るというメルヘンを「刑場への道に変わってしまった」。

「牛島春子年譜」には新日本文学会から退会した時期が明確に記載されていない。一九六五年三月以後、春子は『新日本文学』に作品を発表しなくなったことからみると、その頃、退会したと推測している。一九六五年十二月、野間宏よりの書簡には「新日本文学会のこと、ふききれないところがあるとの御気持ち、最近、他の方からも、同じ感想を時々きかされ、僕も気になっています。やはり雑誌に創造の火とでもいうべきものが、もえさかかっていないというところに、問題があると僕は考えるのです」と新日本文学会への不満

をこぼした箇所がある。明らかに牛島春子は「新日本文学会のこと、ふききれないところがある」⁶⁸という気持を率直に野間に伝え、野間はそれを受け止めた後の返事であろう。野間は次第に共産党に失望していくが、「停滞している日本文学を破るエネルギー」を蓄える新日本文学会にまだ最後の望みを持つており、また、牛島春子の創作を激励し、期待している意を表明した。

僕は、代々木の幹部の人たちには、もう、まったく期待をもっていません。しかし、日本の平和運動、革命運動に、絶望しきっているのではありません。やはり思想のものを、時間をかけて変えて行くことを考えているわけで、日本はじつに今後、長い時間かかると思います、やはりやりとげなければならないと思っています。

東南アジア、ジャカルタなどにはぜひ一度行きたいと考えていて、まだ行かないので、御手紙のなかにその空気が動いているようで、気持がほぐれました。特別な印象がおありになったのではないかと思います。

新日文がグループ誌に近いものにならないようにしなければならないのは、もちろんですが、それと同時にもっと、創造によって日本文学の中軸のところに自分をすえつづけなければならないのに、それができないのです。三十代の人たち、四十代の初めの人たちがもっと会のために全力をつくして勢をつくり出さなければならないのですが、その勢がまだ出てきません。しかしほかには、停滞している日本文学を破るエネルギーを集めることはできないと僕は考え、新日本文学会に、最後の望みのようなものをたくしています。もちろん（民主文学）など、文学名にもあたいたくないでしょう。本年三月また大会があるわけですが、ただ大会というだけではなく、長期の展望をもった文学創造に発する人たちの出発が、ここで行なわれ、その勢ぞろいのようなものがなされなければならないように考えています。どうかお大事に。よい作品をすすめて下さい。⁶⁹

一九七四年牛島春子は福岡市で「日本、アラブ文化連帯会議」に力を入れ、大役を果たした。野間も福岡に行き、春子と面談した。そのお礼として一九七四年八月二十日、野間は春子に手紙を出した。「福岡市での日本、アラブ文化連帯会議の大衆集会のために、大きな役をはたして下さったこと心から御礼申し上げます。御会いして、いろいろとお話しできたこともうれしいことでした」⁷⁰その大会の経験に基づき、一九七六年野間宏の『第三世界と現代文明 日本アラブ文化連帯会議の記録』が上梓された。それによると、「日本、アラブ文化連帯会議」は「一九七四年カイロに於てアジア・アフリカ作家会議のビューロー会議が開かれた時、日本から田所泉と野間宏の二人が出席し、提案したものである。この日本アラブ文化連帯会議を日本で開くという提案は、日本 AA 作家会議準備会のなかで、討議されてきたものであって、ぜひともアラブの文学、文化を日本にひろくひろげ、日本とアラブの文学、文化の創造的な結合の基礎をつくるにその目標をおいていた」（三頁）「一九七四年六月二十六日より七月四日にわたって、東京、大阪、福岡の三か所で大衆集

会、シンポジウムの二つの形の下に開かれたが、福岡では大衆集会のみで、シンポジウムは行われなかった」。(三頁)

一九七七年、春子はアジア・アフリカ作家会議会員となった。一九八〇年八月、日中文化交流使節団の一員として、中国東北地区を訪問した。牛島春子は十日間ばかり中国東北部の長春、瀋陽、撫順の旅をした。瀋陽で旧「満洲」時代の作家たちと「再会」(初対面であったが)した。遼寧大学では日本文学研究室の先生たちと座談会を開いた。そこで「女」という小説のコピーが渡された。牛島春子のエッセー「自分を書く」はその中国訪問の様子を記録している。

今年八月、十日間ばかり中国東北部の長春、瀋陽、撫順の旅をした。私はそれを里帰りした、と述べている。(中略)、(瀋陽)そこで思いがけなく今も健在でいる旧満時代の作家たちに再会(初対面であったけれど再会と私にしたい)することが出来て、感慨深い思いをした。また遼寧大学では日本文学研究室の先生たちと座談会をもつ機会を与えてもらったが、そこで私は旧満洲時代の刊行物が今も資料室に保存してあるのを知った。

引揚げ体験をきっかけに、牛島春子は「満洲」の本質を認識しつつあるが、二十年後、植民地主義から完全に脱構築できたといえよう。エッセー「ある微笑一日中不再戦植樹に思う」で次のように締めくくっている。

自分にとって満州とはなんだっだろうという問いかけがはじまったのは正確にいうと日本に引き揚げてきてからである。満州国が日本の大陸侵略のための虚構の国であったことは確かである。そして私たちはうかうかそれに乗った愚かな庶民の一人であったことも疑問の余地はない。

そのくせ片方では、何人もの青年がまるで“革命的”熱情をかけるように『王道楽土』の精神に自分を賭けて辺地で死んでいった事実を忘れることができないでいた。まだ私はこの土地とそこの人たちを深く愛していると信じていた。辺地で死んでいった青年たちの精神は無垢なのであり、私の愛情もまた『侵略主義』とは関係ないのではないかと、たえず心の底でつぶやかずにおれなかった。(中略)それが私の思いあがりエゴイズムであったこと、また他民族が他民族を支配することにはどのような正当な理由もありもしないことに気づくのに、恥ずかしいことながら私は二十年近くの歳月を費やしてしまったのである。

おわりに

本論文は実地調査に踏まえ、野間宏より牛島春子宛の書簡五通、牛島春子の『手記』などオリジナルな資料を作品と合わせて検証を行ったものであるが、その中で牛島春子の「転

向」への意識、思想の変遷が徐々に浮かび上がってきた。私は在満女性作家牛島春子の出発の原点に辿りつき、彼女の主体形成や転向意識、彼女の文学の本質を究明する試みをしたつもりである。

考察してきたように、牛島春子の戦前から戦後までの活動を振り返ってみると、彼女はマルキストというよりヒューマニストといったほうが適切であろう。彼女はヒューマニズムを宝物として、生涯手放さなかった。それは、時には非人間的なものに対する闘いであり、時には労働者階級に対する同情と関心である。牛島春子のせいで家族が異端視されていたこと、「世間」から外されたことが彼女の「転向」を促した。春子は右翼の鹿子木員信に師事した牛嶋晴男と交際し、結婚するのは昔の左翼活動とけじめをつけるような意味を持っている。そこで、牛島春子「転向」の第一段階は大衆からの孤立による「世間」への屈服である。

「満洲」に逃亡した牛島春子は政治運動をやめ、文学活動に従事しはじめた。「満洲」時代の創作は一九四一年を境に、大きく前期と後期に分けられる。前期の作品はいずれも中国人を主人公とし、リアリズムの手法で「満洲」暗黒部を暴露し、労働大衆に対し同情の意を示したが、国策に沿う表現も免れなかった。久留米時代の政治運動の経験も作品に投影している。後期になると、春子は戦時色濃い作品を書くようになり、男性と女性は役割分担で、戦争に協力することを宣伝した。特に、戦争の正当性、女性が積極的に銃後活動に参加することを強調した。意識的に女性を主人公にしたり、女性の戦争役割に注目したりする傾向が見られる。このように、春子の小説のテーマは労働者大衆に対する同情と「満洲」暗黒部の摘発から完全に戦争賞揚、女性の戦争加担に変わった。彼女自身も自分の「転向」に気づき、喜びを感じたという。夫の牛嶋晴男が「満洲」で発表した文章は牛島春子に代筆された可能性は高いと推測している。その面で彼女は夫の晴男の立身出世を支え、「内助の功」を果たしたのであろう。牛島春子は理想と現実の大きな隔たりを意識し、ヒューマニズムを胸に秘めて「満洲」での生き方を思索していた。したがって、牛島春子「転向」の第二段階はコロニアリズムへの屈服である。敗戦後の「満洲放浪」は牛島春子にとって、新鮮で活気あふれるロマンチックな一時期である。彼女はしきりに「満洲」のことを思い出し、民族を超えた人間の善良性に気づき、「満洲」の本質を考え直した。そのために春子の引き揚げ体験記には脱植民地化の傾向が次第に強くなってきた。戦後、牛島春子は新日本文学会に入会し、共産党に再び接近し、「転向」以後の生き方から、再度、方向変換をした。牛島春子は共産党内の天皇誹謗などの非人間的な行為へ批判のスタンスを取っていたが、共産党員を大いに賞賛する意を表明した。春子は野間宏と親しく交流し、激動した社会において、過激な行動を取らなかったが、うしろで野間を支持する一面もあった。一方、野間からも鞭撻され、背中を押された。彼女は一九八〇年代、中国東北部を訪問することをきっかけに、「満洲」の本質を再認識し、植民地主義から完全に脱構築できた。それは第三段階の方向変換につながっている。

注

- ¹本多秋五『転向文学論』 未来社 一九七二年
- ²鶴見俊輔『転向研究』 筑摩書房 一九七六年
- ³吉本隆明「転向論」『吉本隆明 現代の文学二十五』 講談社 一九七八年 三九〇頁
- ⁴思想の科学研究会『共同研究 転向』平凡社 二〇一二年
- ⁵川村湊『「満洲文学」から「戦後文学へ」—牛島春子インタビュー』『文学史を読みかえる 5』インパクト出版会 二〇〇二年 一〇八～一二五頁
- ⁶祖父江孝男著『県民性：文化人類学的考察』中央公論社 一九七一年 一九九～二〇〇頁
- ⁷牛島春子「〈街路樹〉の頃と勇さんと」『丸山豊と「母音」の詩人たち』1 野田宇太郎資料館 一九九五年 十六頁
- ⁸坂本正博「牛島春子年譜」（第二稿）を参考
- ⁹加藤尚武『ヘーゲル事典』弘文堂 二〇一四年
- ¹⁰河北倫明『坂本繁二郎』中央公論美術出版 一九七四年 十二頁
- ¹¹牛島春子「秋深む窓」『女人藝術』第一集 一九四九年一月 二十三頁
- ¹²ベルナル・デュシャトレ 村上光彦訳『ロマン・ロラン伝：一八六六～一九四四』（みすず書房 二〇一一年）を参照
- ¹³蛇原徳夫『ロマン・ロラン研究』第三文明社 一九八一年 八十一頁
- ¹⁴楨村哲朗「歴史の中のロマン・ロラン」『民主文学』二〇一一年十二月
- ¹⁵小島政二郎：（一八九四年～一九九四年）は、日本の小説家、随筆家、俳人である。一九一九年に慶大文学部講師となり、最終的には同学部教授へ昇格し、一九八一年まで勤め、また一九二〇年には『三田文学』編集委員となった。一九三四年には直木賞、芥川賞の選考委員となった。朝鮮藝術賞審査員など文壇の中心人物として活躍した。『緑の騎士』『眼中の人』などの代表作がある。
- ¹⁶「芥川龍之介賞経緯」『文藝春秋』特別号 一九四一年三月
- ¹⁷小島政二郎本人の言い方
- ¹⁸小島政二郎「眼中の人」『小島政二郎全集 第九巻』日本図書センター二〇〇二年二月 十五頁
- ¹⁹小島政二郎「眼中の人」『小島政二郎全集 第九巻』日本図書センター二〇〇二年二月 十五頁
- ²⁰小島政二郎「眼中の人」『小島政二郎全集 第九巻』日本図書センター二〇〇二年二月 二十四頁
- ²¹関口安義『よみがえる芥川龍之介』日本放送出版協会 二〇〇六年六月 一〇五～一〇六頁
- ²²北野民夫『特高と思想検事』 一九八二年 みすず書房 四四七頁
- ²³牛島春子「秋深かむ窓」『女人芸術』第一集 一九四九年一月 十三頁
- ²⁴阿部謹也『「世間」とは何か』 講談社 一九九五年七月
- ²⁵吉本隆明「転向論」『吉本隆明 現代の文学二十五』 講談社 一九七八年 三八七頁
- ²⁶川村湊「〈満洲文学〉から〈戦後文学へ〉—牛島春子インタビュー」『文学史を読みかえる 5』 インパクト出版会 二〇〇二年 一〇八～一二五頁
- ²⁷牛島春子『手記』 自家版 一九三八年 一頁
- ²⁸宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想—安部磯雄と鹿子木員信の場合』木鐸社 一九八四年 六十八～七十七頁
- ²⁹葉照子「鹿子木員信における日本精神とナチズム」『近代日本とドイツ』 ミネルヴァ書房 二〇〇七年

-
- ³⁰三井誠『刑事法辞典』信山社 二〇〇三年
- ³¹大内隆雄『満洲文学二十年』国民画報社一九四四年 三三一頁
- ³²赤川幸一「東遊記帳」『北窓』第一卷第二号 一九三九年七月 三十六～四十一頁
- ³³赤川幸一「東遊記帳」『北窓』第一卷第二号 一九三九年七月 三十七頁
- ³⁴川村湊『満洲崩壊—「大東亜文学」と作家たち』 三三四頁
- ³⁵一九四六年十一月十九日牛島春子野田に宛てた書簡
- ³⁶「秋深かむ窓」『女人芸術』第一集 一九四九年一月 二十四頁
- ³⁷小山貞知『満洲協和会の発達』中央公論社 一九四一年
- ³⁸一九四三年一月十四日牛島春子野田に宛てた書簡
- ³⁹梧桐書院編集部『明治・大正・昭和のうた』梧桐書院 二〇〇三年十二月 四一一頁
- ⁴⁰牛島春子一九四二年五月二十日野田宛の書簡
- ⁴¹一九四三年二月十日 野田宛の書簡
- ⁴²岩井忠正他著『特攻 自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』 新日本出版社 二〇〇二年七月 一六四頁
- ⁴³北影雄幸『これだけは読んでおきたい特攻の本』 光人社 二〇〇七年
- ⁴⁴牛島春子「鵲の巣と冬」川村湊『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 一八八頁
- ⁴⁵牛島春子『手記』 自家版 一九三八年 四十九頁
- ⁴⁶牛島春子『手記』 自家版 一九三八年 四十五頁
- ⁴⁷牛島春子一九四六年七月二十六日野田宛の書簡
- ⁴⁸『新日本文学』創刊号 六十二頁
- ⁴⁹『新日本文学』創刊号 六十二頁
- ⁵⁰『新日本文学』創刊号 六十三頁
- ⁵¹『新日本文学』創刊準備号 十二頁
- ⁵²吉田永広「戦後「政治と文学」論争・その後一主として中野重治、平野謙」『国文学』一九九七年五月 一〇一～一一一頁
- ⁵³平野謙「政治と文学」『政治と文学』学芸書林 二〇〇三年 三九八頁
- ⁵⁴平野謙「政治と文学」『政治と文学』学芸書林 二〇〇三年 三九九頁
- ⁵⁵中野重治「批評の人間性」『政治と文学』学芸書林 二〇〇三年 四三六頁
- ⁵⁶中野重治は野田宇太郎に宛てた書簡（日付不明）
- ⁵⁷野田宇太郎「有明先生の晩年」『新日本文学』 一九五二年四月 五十二頁
- ⁵⁸野田宇太郎「有明先生の晩年」『新日本文学』 一九五二年四月 五十二頁
- ⁵⁹野田宇太郎「有明先生の晩年」『新日本文学』 一九五二年四月 五十二頁
- ⁶⁰牛島春子一九四八年七月二十二日野田宛の書簡
- ⁶¹牛島春子一九四八年七月二十二日野田宛の書簡
- ⁶²牛島春子一九四八年九月九日野田宛の書簡
- ⁶³日本共産党中央委員会『日本共産党の八十年』 日本共産党中央委員会出版局 二〇〇三年
- ⁶⁴鎌田慧コラム「五十年問題」『「新日本文学」の60年』七つ森書館 二〇〇五年 七十頁
- ⁶⁵消印十月二十一日日付野間宏から牛島春子宛ての書簡
- ⁶⁶一九五四年五月五日野間よりの書簡

⁶⁷鎌田慧コラム「一九六〇年安保と労働者の自己表現」『「新日本文学」の60年』七つ森書館 二〇〇五年 一九二頁

⁶⁸一九六五年十二月野間よりの書簡

⁶⁹一九六五年十二月四日野間宏よりの書簡

⁷⁰一九七四年八月二十日野間よりの書簡

第二章 牛島春子作品から読み取れる「満洲像」

第一節「満洲」の女性問題

はじめに

牛島春子前期の作品「王属官」「苦力」「祝といふ男」「張鳳山」はほとんど被植民者の中国人男性を観察して描いたものである。第Ⅱ部第一章第一節で牛島春子の性意識について考察しているが、彼女は男に憧れているのではなく、女性として生まれても、男性として生まれてもかまわない。ただ、自分を束縛している因襲に反発している。女のセクシュアリティ、そして、女として生きることの伝統、習慣、女であるアイデンティティといったものから脱け出そうとして男権社会に対する反抗の意識を持っている。彼女は敗戦後の「満洲」で男装して「かつて知らなかった、鮮烈な悦びに取り乱してしまった。当時の心境を次のように綴っている。

生まれるときから私を囚えて金縛りにしてしまった女と云う得体の知れない化物が、この瞬間、私から離れ去り、私ははじめて誕生した本当の人間のように、誇りと悦びに自分が輝きだすのを感じた。（「ある旅」）

男装の背後に、男性優位の社会に反抗がある。牛島春子は作品が「女らしくない」「男装心理」であると言われ、かなり「苦悩」した。一九四二年から、彼女の「苦悩」した「女らしくない」という評価を覆すためか、女性として総力戦体制に貢献するためか、川端康成から受けた影響なのか、牛島春子は女性を主人公とする作品を書くようになった。引揚げ後、回想録みたいな作品にもしばしば女性が登場してくる。戦時中、女性を書く作品には「女」「在満女性にある問題」「二太太の命」「牝鶏」「遙遠的訊息」（遠くからの便り）がある。戦後、女性を描く作品には「少女」「笙子」「知子」「青葉の季節」「過去」「夢について」「狂った日々」などがある。牛島春子が持っている性意識やフェミニズム思想はどのように作品に投影したか、また宗主国の女性として、どのように植民地とコミットしたか、どのようなまなざしで植民者の中国人女性を見ていたか、興味深い課題である。本論文は「女」「二太太の命」「牝鶏」という作品をめぐって検討してみる。

一．日本人女性像及び日本人女性へのメッセージ

戦時中、執筆した「女」と「遙遠的訊息」（遠くからの便り）は日本人女性を主人公とする小説である。牛島春子は「満洲」に滞在した時、一九四二年四月『芸文』第一巻第五号四月号

に「女」という短編小説を発表した。出産のため、一時帰国した日本人女性和江を主人公とする短編小説である。「女」について、アメリカの学者 Kimberly Kono は「From the Nikutai to the kokutai: Nationalizing the Maternal Body in Ushijima Haruko's "Woman"」¹（肉体から国体へ：牛島春子の「女」における母体の国民化）で死産した女の子は「満洲国」の崩壊を象徴していると指摘している。

牛島春子は、『西日本新聞』一九八〇年十二月十二日に発表した「自分を書く」というエッセーの中で、実は自分のことを書いたと明らかにした。それは、牛島春子が持つ女性の性、母性を打ち出してみせる作品であり、男女同権をアピールする作品でもある。

牛島春子は十日間ばかり中国東北部の長春、瀋陽、撫順の旅をした。瀋陽で旧「満洲」時代の作家たちと「再会」（初対面であったが）した。遼寧大学では日本文学研究室の先生たちと座談会を開いた。そこで「女」という小説のコピーが渡された。春子はそれを書いたときのことをよく覚えており、次のように論じた。

二番目の子供を産んだときのことであった。太平洋戦争が始まろうとしていた。新京から久留米の実家に帰ってきてそこで出産をしたのだったが、大変陣痛が永くひどくて、やっと生まれた女の子は泣き声もたてないでそのまま死んだ。（「自分を書く」）

牛島春子の分身和江が経験したお産の苦痛はきっと春子自身が耐えてきた苦痛に違いない。小説は極めてリアルな描写を通じ、生物的な女性の産む性を大きく強調した。和江は女の子をほしがっていたが、結局一生懸命生んだ女の子は死産となった。それは、単なる春子の体験談ではなくて、男権社会の中で、女が力を尽くして生きようとしても、生き延びることは難しいというメタファーが潜んでいると思う。その苦痛を解消する特効薬は太平洋戦争の勃発である。

一九四一年十二月八日、久留米滞在中の牛島春子は太平洋戦争を迎えた。一九四三年一月十四日牛島春子の野田宇太郎宛の手紙でその時の心境を打ち明けた。

私が帰国中にこの大きな時期に出会ったことを本当に幸せに思いました。満洲にゐては、とてもこのやうに純粋な興奮を味はうことは出来なかつたでせう。いろんな理屈を考へてまはり道をしないで「兵隊さん、有難う」とそのまんま素直に感謝出来るのもそのためだと思います。

太平洋戦争が勃発してから、牛島春子は「転向」の意識化につとめ、積極的に時局に応じて、戦意高揚の列に入った。当然、生きていくために、戦争協力を余儀なくされた文人は少なくな

かったが、牛島春子はそうではない。彼女の戦争協力はやむを得ぬ行為ではなく、自ら進んでやったことである。実は牛島春子は一九四二年十二月の『観光東亜』に「大いなる時代」というエッセーを發表した。それは²「年譜」をはじめとする先行研究には触れられていない誰も知らない作品である。「編輯後記」によるとそれは太平洋戦争勃発一周年を記念するものである。

「十二月八日は再び目睫の間に迫って来た。(中略)、この間に我々の収めた勝利の記録は数々ある。而して我々は益々火の玉の覚悟と忍耐を続けなければならぬのである」。それは春子の「転向」意識が強く読み取れる随筆である。「私は幾年か思想の混迷から抜け出ることが出来なかった。姿も見せず人間の精神を喰い荒す思想とは細菌よりも恐ろしい魔物である。ここ三四年來私は魔物の呪縛から解き放たれてみたけれど、まだ白昼大手を振って歩く自信は持たなかった」³。すなわち、春子は共産主義思想を「恐ろしい魔物」と位置づけ、「満洲」に渡った時から、既に政治思想を放棄した。にもかかわらず、まだ劣等感を持っている。春子はちょうどラジオで太平洋戦争が勃発したと知り、「生き甲斐を感じてゐる今、これからこそ私の本当の人生が始まる」と興奮した。「私が十二月八日にめぐり合つて涙を流したことは決して唐突ではなかった。(中略)、それが生涯の飛躍の夢であつた。私はほとんど十年ぶりに心の隅々まで幸福にひたることが出来た。六十九になる父は、大東亜戦争に出遭つてもう思い残すことはない…」(牛島春子「大いなる現在」) 家族も同様な態度を示し、春子本人も感激を覚えた。それをきっかけに、春子は戦争協力の道にひた走つた。さらに、「女」においては、「ラジオは勇壯な軍樂を奏し、和江はこの時ほど軍歌を美しく逞しいものに聞いたことはなかった。(中略)、十二月八日にはじまつた、この日本民族にとってかつてない大きな時代を、もし和江が満洲にみたらこのやうに純粹に、ぢかに己れの血の奔騰で感じ取ることが出来たらうか、と思ふのであつた。ニュースのたびに〈兵隊さん有難う〉と見栄もはりもなく涙を流すことが出来たらうかと思ふのであつた」。(「女」) 彼女はと兵士たちが戦場で命をかけて戦う場面を描いて、兵士たちへの賛美の意を表明した。第Ⅱ部第一章第五節で考察したが、その括弧つきの「兵隊さん有難う」は一九三九年一月から発売された軍歌「兵隊さんよありがとう」に因んでいた可能性が極めて高いと考えられる。第Ⅱ部第一章第二節で触れているが、戦争後期になると、春子は特別攻撃隊に憧れ、息子もその一員にさせたがっている気持ちを持っていた。一九四五年二月二十四日野田宇太郎への手紙で「ひと頃の全社会を向ふにまはしたやうな氣負つた反逆はもう不可能で、その意味では今はひたすらに日本の運命に祈りをささげずにはをれません。妙な偶から妙なことをかいてしまいました。まるで思いもしなかつたのに」とある。コ「自分が女であるということにある氣恥ずかしさがつきまとい、それがどこから来るのか自

分でもまだよくわからない」。(「自分を書く」)女として、春子はコンプレックスを持っている。ロニアリズムの介入により、彼女が持っているフェミニズム思想は変形しつつある。家父長社会で、家庭の中に縛られていた牛島春子は戦争を契機に、重視され、動員され、家庭の外に出られるようになった。春子の考えでは、子供を産むことは、女性と男性との絶対的な区別である。彼女は戦時体制の男権社会で男に負けないように、自ら女性の産む性を大きく強調した。

和江は今更のやうに男のもつ使命の偉大さに打たれ、目を開かれる思ひであった。それなら女は？と和江は自らに反問した。それは子供を産むことだ！と和江は叫びかへした。和江の肉体は、精神はさう叫ばずにはをれなかった。男の戦場で闘うことと、女が子を産むことは民族を育てる表裏一体の営みにすぎぬのだ。(中略)己れ一人の悲しみの中からすつくと立ちあがったこの切々とした願ひと、和江の祖国が今の時代に要請してやまぬものがかくも見事に和江の中で一致したことはなかった。これは無上の幸福でなくて何であろうか。和江は産褥の床の中で足を延ばし、自分の体をさすりながら、己れのすこやかな生命を愛むのであった。(牛島春子「女」)

牛島春子は男と平等な地位や権利を求めるには、女しかできないこと一子供を産むことを強調した。男性は勇ましく戦い、女性は子を産むという男女役割分担で戦争に協力することをアピールした。男と平等な地位と権利を求めるには、女しかできないことを取り上げたわけである。「そして、そこには女であることの気恥かしさはないのである。このように、コロニアリズム、戦争の介入により、牛島春子は、合理的に男にちっとも劣っていない女の強みを主張することができた。

無論、時代的な背景も無視できないが、第Ⅰ部で論じたように、一九三一年「九・一八事変」(満洲事変)以降、次第に戦時色が濃くなってゆく状況下で、一九三七年日中戦争、一九四一年太平洋戦争と相次いで戦争が勃発した。岩淵宏子によると「人的資源確保のための国策結婚宣伝の時代を背景に母性ファシズムが吹き荒れ、こうした時代状況とまさに呼応するかたちで、母性の文学が奨揚されたのである」(岩淵二〇〇四)。「多産報国思想」は「軍国の母」賛美の風潮を盛り上げることになった。いわゆる「戦時下母性政策は、戦争遂行のための人口増加を目的とし、本来私的領域である結婚・妊娠・出産を国家が調整しようとするものであり、その要となるのが母性であった」(岩淵二〇〇四)歴史の渦中において、「女」という小説はま

さに「時代の産物」と言えるが、春子は女性としての存在価値を見つけ、それを強調するものでもある。

牛島春子は「気取っていえば『女に生まれたのではなく、女にさせられてしまった』からかもしれない。」（「自分を書く」）と述べている。つまり、人間は生まれてから、そもそも男女の差がなく、家父長制の規範の中で、「女」と位置づけられ、「女」の壁が立てられたわけである。やむを得ず、女の役割を果たし、「女にさせられてしまった」。まさに、牛島春子の『手記』に書いてあるように、「〈女らしい〉〈男の様だ〉それは因襲が造り上げた言葉であった」⁴。

敗戦をきっかけに、牛島春子は男装し、悦びと誇りを感じたという。牛島春子の男装は因襲に囚われ、いつも貶められてきた女性としての役割を打ち破る象徴的な意味を持っている。戦後、春子は次のように反省している。

自分にとって満州とはなんだったろうという問いかけがはじまったのは正確にいうと日本に引き揚げてきてからである。満州国が日本の大陸侵略のための虚構の国であったことは確かである。そして私たちはうかうかそれに乗った愚かな庶民の一人であったことも疑問の余地はない。

そのくせ片方では、何人もの青年がまるで“革命的”熱情をかけるように『王道楽土』の精神に自分を賭けて辺地で死んでいった事実を忘れることができないでいた。まだ私はこの土地とそこの人たちを深く愛していると信じていた。辺地で死んでいった青年たちの精神は無垢なのであり、私の愛情もまた『侵略主義』とは関係ないのではないかと、たえず心の底でつぶやかずにおれなかった。（中略）それが私の思いあがりとエゴイズムであったこと、また他民族が他民族を支配することにはどのような正当な理由もありもしないことに気づくのに、恥ずかしいことながら私は二十年近くの歳月を費やしてしまったのである。（牛島「自分を書く」）

春子は日本内地の思想弾圧や国家権力といった男権の枠組みから脱出しようとして「満洲」に逃げ出した。新天地「満洲」においても、規制される女という点では変わりはない。彼女は、「満洲」と「満洲」の人たちを深く愛しており、彼女の心底には、労働者への同情は変わりはないが重き流れに身を置き、「うかうか」日本の植民地政策に乗り、宗主国の女として使命を

果たした。二十年近く経って、はじめて、他民族を支配しようという植民地主義の本質が認識できた。にもかかわらず、日本の兵士たちへの批判はなかった。

「女」という小説の中に、太平洋戦争をきっかけに、コンプレックスを背負った牛島春子は女性の産む性を強調し、男性と平等な地位を求めようとした。彼女は女性の銃後の役割をアピールし、それに伴って、戦争に加担する「軍国の母」像が浮かび上がってくる。

第Ⅱ部第三章第三節で詳細に検討するが、一九四三年『青年文化』第一号に掲載された牛島春子の中国語の作品「遙遠的訊息」（遠くからの便り）も「女」と同工異曲の戦意高揚作である。それは「牛島春子年譜」にも触れられていないし、対応する日本語の作品はまだ見つかっていない作品である。

ヒロイン日本人女性瑞枝は近代的なモダンガールとして造形されている。父親がなくなった後、瑞枝は仕事をしながら、母親の面倒を見ていた。母親は瑞枝の意見を尊重し、いとこの俊二との婚約話を断った。学校教育を受け、自由に働き、自分の意志で結婚相手を決める瑞枝は俊二の愛から、また家父長制のシンボルとしての俊二の家から脱け出そうとして新天地「満洲」に渡った。あれほど嫌っていた俊二が日本の勇ましい兵士になるのは意外であった。瑞枝の祖国を守るために死を恐れない兵士に対し、彼女は最高の敬意を捧げた。すると、俊二への態度が一変し、慰問袋を作り始めた。春子の女性を主人公とする「女」⁵も「遙遠的訊息（遠くからの便り）」も、どちらも日本人女性に目を向け、軍人を賛美するとともに、女性の戦争協力を呼びかける作品である。戦時中、男性と女性が役割分担によってともに、戦争に協力する内容の小説である。

引揚げ後、牛島春子は少女時代や政治運動体験を回想し、女性を登場させる作品を続々と書いた。「手紙」「笙子」「少女」「青葉の季節」「野薊」「知子」「夢について」「狂った日々」などである。牛島春子は戦時中に書いた「軍国の母」とは正反対のだらしない女を造形するようになった。前述したように「手紙」は旧「満洲」からの引揚げの混乱の中で、男女の出会いと激しい愛を書いた小説である。作者の分身である「私」は夫が生きていることを知りながら、遠慮なく、大胆に若い東大出身の青年と官能的なラブシーンを繰り広げる。

「野薊」という小説もだらしない女益子と竹子の不幸な婚姻生活を描写する作品である。アザミの名前の由来は、「葉には刺（とげ）多し、阿佐美（あさみ）」という記述があり、傷むとか傷ましいの意である。「野薊」には「女にもなれないし、男にもなれない」女性のトラウマというメタファーが潜んでいる。ヒロインの一人益子は少年に惚れ、多情な女であり、「主婦としての値打はゼロに等しい」女である。そして、「汚れものを洗片付け」もせず、夫婦喧

嘩のあげく、離縁された。「私」は夫婦問題の「相談役」をやむをえずしている。益子と竹子の口を借りて、春子が普段語れないことを語った。主人は「すこしも私の気持ちを判ってくれない。心を入れかえるのは女の方だけなの」と益子が文句をつけたし、竹子も「みんな人間らしいことは何んにも判らないんだ。」と苦情を言った。「私」は周囲から自分の言動をまともに受け取られなくなった人間は死亡より絶望的なものだと理解を示した。

私の他にもう一人の私がいるのである。そのもう一人の私らしいものは本物の私には一言挨拶なしに、勝手気ままに世間を歩きまわっているらしい。私がある所に行く。すると私より先にそのもう一人の私がちゃんと先まわりして私の坐を占領していたのに気づく。その坐の何と座り心持の妙なものであるか、本物の私はだからますます因循姑息にならざるを得なくなるのである。（「野薊」）

益子や竹子は春子自身を映し出す鏡となり、分裂されるもう一人の「私」の存在に気付いた。聖女の顔の裏に魔女の顔が隠されている春子は引揚げ後、女性の悲劇に注目し、女性解放の道を求めていく。第Ⅱ部第一章第一節で触れている牛島春子には「反体制論」という男女同権を主張し、フェミニストらしい評論がある。一方、牛島春子はどのような眼差しで被植民者の中国人女性を観察したか、彼女達にとどのようなメッセージを発信したかを考察してみる必要がある。

二. 中国人女性像及び中国人女性への発信

中国人女性をヒロインとする牛島春子の作品は極めて少なく、「牝鶏」「二太太の命」がある程度である。「牝鶏」は一九四〇年六月『満洲よもやま一皇軍兵士慰問文集』に発表されたものであり、指導民族の立場で「満洲」の中国人女性を教化する小説である。

小地主朱徳新は鳳琴を三〇〇円で妻として買い、「自分の幸福をうまく云ひ現はせるもんじゃない」と有頂天になっている。自分の妻は特別で「この辺の牝牛のやうな野良育ちの女」とは違い、十分値打のある女だと自慢していながら、不安の気持ちも隠せない。「満洲」には封建残渣が存在して、女性は人間扱いされおらず、商品として売買している現実がこの作品に暴露されている。近代的な自由恋愛や結婚とは無縁な鳳琴は弱い立場にいるが、不従順で反逆的な行動で朱徳新を悩ませる。三十二歳の朱徳新は二十九歳であるとうそをついた。鳳琴は朱徳新にだまされ、怒ってしまい、冷たい女に変身した。「若い男と芝居小屋に入」ったり、「質

屋に入」ったりすることも見てしまう。朱徳新の叔父朱徳義も母親代わりの毛婆も不満でこの常識外れの女を非難ばかりしている。朱徳義と毛婆は封建勢力のシンボルであり、鳳琴を封建規範に引き込もうとしている。

鳳琴はやがて中秋節の里帰りを口実に、家出をしたきり、帰ってこなかった。朱徳義は妻として失格の鳳琴を責め、お金を返してくれと主張したが、結局、朱徳新の愛に感動させられる。毛婆は可愛がっている朱徳新のために、副県長に頼むことを提案した。牛嶋晴男をモデルとする森崎副県長は「大岡越前守になったつもり」で事件の解決に臨んでいる。ここで日本人官吏は人情味あふれる庶民の味方であり、正義に目覚めた存在であることを被植民者にアピールしている。そこで森崎副県長の口を借りて指導民族として「満洲」女性を教化するシーンに連鎖していく。「満洲」の民情を聞いた副県長は年齢欺瞞の朱徳新を責めず、日本の一夫一婦制を教えてから、鳳琴に良妻賢母という「女の道」を説いた。

それは君考へちがひだよ。大体満洲では嫁さんの方が婿さんより三つも四つも七つも八つも年が多いから、婿さんが働きざかりになった時には、嫁さんは一足先に老けこんでしまって顔には皺が出来、すっかりお婆さんになってしまふ。婿さんは又若い美しい嫁さんが欲しくなって来る。それで満洲では二人も三人も奥さんや妾を置くやうなことになるんだよ。日本ではみんな婿さんの方が嫁さんより年が多いから一夫一婦主義で円満に行くのだよ。(中略) 女は一度嫁ぐとそこが一生の死場所であること。女の幸福と言ふものは結局はよき妻であり、よき母親であることこそが最上のものであること。⁶

牛島春子は一夫多妻制が女性にもたらした災いを認識していたが、植民地支配が女性にもたらした災難を無視した。「怠惰、浮気、夫に従順しない」というオリエンタリズムの眼差しで中国人女性を表象し、「良妻賢母」になるよう教化したのである。彼女は「在満女性にある問題」では「満洲」女性を批判し、在満日本女性の責任と矜持を綴っている。「私達、在満女性が日本内地の女性よりも、もう一つ多く課せられてゐる重要な任務は、私達が指導民族の女性であるといふ自覚とその矜持である」⁷。

鳳琴は朱徳新の哀願をよそにし、強硬な態度を取り続ける。質屋に行く理由を聞かれると、「肋膜炎がすこし悪くなったので医者にかかたりして、みんな養生費につかひました」と答えた。肋膜炎は政治運動で春子が久留米で入獄した時、患っていた病気である。ここで春子は自分の持病を小説に投影したのである。やがて「鳳琴が豹変して、帰る気になった」。叔父の朱

徳義は迎えに来て、毛婆はごちそうを用意して待っているというハッピーエンディングの円満解決につながった。

朱徳新は副県長に感謝する気持ちを表すために、「卵を山盛りした二つの籠と二羽のめんどりをもって森崎副県長の公館にたづねた」。(「牝鶏」七十六頁) そのラストシーンは、二羽のめんどりは見事な卵をつぎつぎと産みはじめたという場面である。これで一件落着、事件が円満に解決し、鳳琴は体制内の女性になり、出産するというメタファーが内包していると読み取れる。

もう一つ中国人女性を題材とする作品は「二太太の命」である。これも封建主義の一夫多妻制の犠牲になった女性の悲劇を書き出す作品である。二太太は県長の二番目の奥さんである。「満人は二人も三人も細君をもつから本当にいけない。日本人は一人の夫に一人の妻で本当にいい。日本はいい、満人は悪い」と日本を褒め、一夫多妻制を批判した。二太太は封建大家族で出やすいタイプである。彼女は子供が産めないから、二人の男の子を産んでいる三太太に監視され、小遣いまでもらいにくくなり、いじめられている。二太太は結婚体制内の生殖が強要されている。鎌田明子『性と生殖の女性学』によると、「女性はその身体ないに子どもを孕み、誕生させる」という事実から「生来の男と女の相違点が絶対化され、性別役割分担の正当性が固定されがちであった。女性は、男性には代行できない生殖能力があり、それこそ女性の〈天職、本性〉であるということにされた」⁸。ゆえに、女性は「生む機械」と見なされ、生に制限が設けられている。「産めない」女性が見捨てられたのは、「文化」から女性に振るわれた目で見えない暴力であるといえよう。ところが、牛島春子がここで批判しようとするのは封建的な一夫多妻制である。二太太は「私」に苦情を訴えることもあるが、「この人と民族が、歴史が、風習がちがふといふことが、この人の悲しみをそのまま私共の体感にまで伝えることを阻んだ。一夫多妻制の犠牲になったのは女性だけではなく、「温容豁達で、慈父のやうに県民から慕はれてゐた県長さんも、さすがに二太太と三太太のいざごごには頭を悩ましてゐた」し、経済的な負担も大きい。

こんな息苦しい生活のせいで、二太太は重体になり、見舞いに行った「私」から十円包んだ封筒を受け取り、号泣した。

私も次第に胸がつまり、涙があふれ出て来た。もう耳を蔽ひたいとも思はなかった。白々しい気にもならなかった。のみならず、文字通り飼い殺しにされ、なしくづしに削りとられ

て行く二太太の不幸ないのちを、私ははじめて体感し、次第に肩筋がひえていくのであった。

(「二太太の命」)

このように、牛島春子は一夫多妻制などの封建残渣が残っている「満洲」で中国人女性が抑圧されている状況に気づき、同情を示したが、植民地主義に抑圧されている境遇に目を向けなかった。しかも、指導民族の女性として、矜持を持ち、従順な「良妻賢母」の中国人女性を教化しようとしている。それは日本人女性に呼びかけたものとは違う。春子が持っている女性解放思想やフェミニズム思想は国境を越え、ある程度の変化が見られた。

一方、より全面的に中国女性像を究明するには中国人女性作家の声を聞く必要がある。人間が存在し、人間の精神活動があるかぎり文学が生まれる。必ず、語るものが現れ、様々の声を発する。「満洲」も例外ではない。被植民者の中国人女性は厳しい思想統制の下で不自由な言葉遣いで、中国人女性を困む状況を語っていた。

呉瑛は当時「満洲文壇」の女性作家の中でリーダー格の存在であり、注目されていた。彼女の運命が「満洲国」の存亡と深く関わりを持っていた。彼女は自分自身が女性であることを強く意識し、その作品は女性を主人公とするものがほとんどである。短編小説「旅」は主人公の新婚の若い妻が封建伝統と暴力的な「近代化」の板ばさみになり、息苦しく抑圧され、結局、美男の夫にふられるという悲惨な運命を描いた。登場人物の設定には若い妻のほかに、美男の夫、姑、母親、それに近代的なモダンガールがある。

若い妻鳳鈴は姑と離れ、夫と二人でハルピンに行くことになった。若い妻が一人で荷作りしている間、夫、姑、母親の三人の反応を通じ、四人の間の力関係が読み取れる。長顔の姑は「仕立屋から届けて来た」チャイナドレスを取って「舶来者ではあるし、わたしなんかの若い頃のように、正真正銘の本絹と言ふわけには行かぬにしても、お粗末な事ね」と不満を言っている。姑は封建伝統の擁護者であり、代弁者でもあるといえよう。外来の新しいものを一切受け入れようとせず、常に批判の姿勢を持っている。「五・四運動」の新思想の波は旧軍閥と旧い価値観の中を生きた姑の魂にまで届いていない。一九二八年、張作霖の息子張学良「東北易幟」と決断し、中央政府に接近し、近代化に邁進していた。三年も経たないうちに、日本の植民地とされて異様な「近代化」が進められていた。新旧並存の時空に生じたギャップは世代を分断したと推測できよう。姑は「息子にあまり嫁の事を考へてもらひたく無いものだと思ふと、何だか苦痛を覚え、一種の嫉妬が募って来るのです。『小癩の娼婦め』心の内では此んな風に、若い妻を呪詛し、「何事にも儉約して、旦那さまが着物の事をかれこれ言っても、決して言

ふとほりになるんぢありませんよ、かと言って、あれの機嫌を悪くしない様に」と封建礼教で若い妻を厳しく躰けた。母親はずっと笑顔で姑を喜ばせるために娘に幸抱するように注意した。二人とも反逆を知らずに従順に生きてきた封建礼教の犠牲者である。

若い妻はささやかな不満の色もなく、温和な声で逆らひもせず返事した。と同時にチャイナドレスを試着している若い妻は「おづおづしながら、着物と美男の夫を見くらべて」夫の反応を気にして、「夫の不満そうに憤った表情を見て、恥づかしさと躊躇を感じ、着物を脱いで、丁寧に元の箱の中へ、しまひ込みました」。彼女は従順な「三従四徳」の模範であり、封建礼教と家父長制に縛られている旧い中国良妻賢母の典型である。結局一枚の服を持っていくかどうか、自分でも決められなくて、夫と姑の言いなりになる。妻が自分の付属品だと思い込み、人格を尊重しようとしなない夫は少しも愛情がなく、「人に自分の無格好な嫁を見せびらかす様なものぢあ無いか」と考えていた。「父母の命令」「媒酌の言」で結ばれた二人だと推測できよう。ハルピンに行ったら、夫は姑の儉約教育を無視し、自分の顔を立てるため、妻に新しい服を買わせる。若い妻は「姑の言ふ様にすべきだらうか、それとも夫に従ふべきであらうか」と板挟みの苦しみを味わった。夫は妻の立場を考えず、「グズグズ言ふなら家へ帰してしまふよ」と激怒した。夫は一見して立派な仕事に携わり、わりと「近代的」な人間のようにであるが、妻を人間扱ひしない封建意識が強い男である。

若い妻はいい奥さんになろうとし、夫の言いなりになってきたが、結局、旧くて鈍感な妻は歓迎パーティーで近代的な女たちと接触したとき、不安で「引け目を感じ」る。中には夫の浮気相手もいた。結局、若い妻は交際が下手だという理由で、帰されてしまった。

美男子の夫は近代化に憧れているが、本質的に封建主義の泥沼に陥って、そこから抜け出せない状態である。若い妻は最後に「美男の夫に連れられて、生まれて初めて来た此の町を去って行くのでした。嬉しくも、悲しくも思はないのですけれど、あの長顔の姑の長い長い顔が眼前にチラつくのでした」。夫と別れても、妻の重苦しい生活はこれでおわりでもなく、「嬉しくも、悲しくも思はない」というかなり複雑な心境である。呉瑛はこのように、何重の抑圧を堪えながら、惨めな生活を送った切ない中国人女性の悲劇を見逃さなかった。日本の植民地となることによる受身の「近代化」は、中国女性を解放するどころか、「五・四運動」の女性解放思想から逆戻りしたといつても過言ではない。一九四三年呉瑛は「紅一点」の女性代表として「第一回東亜文学者大会」に参加した経験は彼女にいろいろな災いをもたらした。「国家総動員戦争」を実現するために、日本人女性だけでなく、被植民者の女性を動員し、参与させ

ることは時勢の需要である。「満洲国」崩壊後、利用された呉瑛は「売国奴」（裏切り者）の汚名を着せられ、ひどい目に遭い、惨めな生の軌跡を辿った。

また、梅娘の「僑民」も女性の視点で女性の運命を描いた小説である。当時「南玲北梅」という流行語があったように、女性作家といえば、南のほうは張愛玲であり、北のほうは梅娘である。幼いころ、妾の母に先立たれ、コンプレックスを感じた梅娘は父から強い影響を受けている。彼女の文学についての造詣には貴重な日本留学の経験が不可欠であったが、「僑民」「小婦人」といったごく少数な作品で「日本」のことに言及している。「僑民」は梅娘が日本に滞在したとき、『新満洲』に寄稿された短編小説である。宗主国で植民地の「僑民」が置かれた状況、特に女性の生活空間や複雑な心理を断片的に語る物語である。

この作品の内容は阪急電車という閉鎖的な限られた空間の中で展開していく。冒頭部は「冬寒むの名残りがあって、どんよりとした曇り空が重苦しく押さえつけてくる」というような重い雰囲気漂っている。「マスクを外して大きく息を吸い込み、「私」の「寂し」くで「泣きたい」心境につながっていく。

海岸の番をする老人の小屋に雨宿りをしたとき、老人は「私が異国の人間だからといって馬鹿にしたことはな」かった。ゆえに、海辺に憧れている「私」は「無性に電車の遅さにいらだってき」た。梅娘は植民地人として抑圧され、軽蔑されているムードから抜け出し、心の避難所を探そうと無差別な自由な所に憧れている。

後ろに朝鮮人の男がいたので「電車に乗ったときには、艶やかな出立ちの娘が二人そばにいたのだが、彼女たちは、白いハンカチで口を押えながら良い服を着た人たちの集まっている向こう側に行ってしまった」。そこから「朝鮮人」や中国人に対して「臭い」という感覚的反応がありのまま描写し、「五族協和」の対極にある植民地支配と民族差別を書き出している。車内は社会の縮図である。「満洲」の地だけでなく、異国の日本に行っても、人々は服装や見かけでその人の地位や職業を判断しがちであり、差別が消えることはない。濱田麻矢は越境する女性の位置づけをし、「朝鮮人の男はおそらく〈わたし〉を日本人と思って席を譲つたのだらう」⁹という考えを示したが、私は違う考えを持っている。「私」が去って行く日本人女性とは違うグループに属する人間であることが朝鮮人の男にはわかるはずであるから。「赤ら顔」の朝鮮男は差別された植民地主義の被害者であると位置づけられたが、「私」にはわからない言葉で大きな声で朝鮮人女性に何かを言った。「女性はびくっとして立ち上がり」席を譲ってくれた。服は男より「ちょっときれいなだけ」であり、「月給取りの小公務員」に見えたからである。男はただ服装など見かけで相手の職業や地位を推測し、「私」のほうがもっと上だと気

づいたのではないか。朝鮮人女性は「困惑と不安の目で」動かない「私を見つめ、顔を赤くした男を見つめ、胸元の結び目をいじったり、チマをなでたりして何とも落ち着かな」かった。さらに、「私」は女性の「レンガ色で先の尖った朝鮮靴と白い木綿の靴下」に注目し、「日本に来たばかりなのだ」と推測している。その後、男の「ぴかぴか光っている革靴」に視線を移し、「丹念に磨き上げた様子がうかがえる」。その「ぴかぴか光っている革靴」の裏には男に従順する「良妻賢母」像が潜んでいると思う。下車するとき、男は「きつい声で女に命令したが、女は怯えて手が震えてままになら」なかった。

「私」はジェンダー規範に束縛され、社会の底辺に位置する人権と人格を剥奪されてきた女性の「性的抑圧」に対する怒りを示している。同様に植民地被支配者であるにもかかわらず、朝鮮人男は威張って、地位の低い人に強く当たり、地位の高い人にへつらってしまうという姿勢が赤裸々に描き出された。腕時計が買えない男に同情しながら、大雨の中、「私」は「かわいそうな女に替ってその夫に報復してやろう」という思いで、タクシーに乗るふりをし、男を狼狽えさせた。そこで畸形な人間関係が浮き彫りになってくる。朝鮮人男女は「私」のアイデンティティを再認識させる鏡である。同じく宗主国で薄給のままで生き延びて、日本人と平等な地位を求めようとする弱い国の国民であるから、彼に時計をあげて彼の身分を高め、差別をなくすことは「私」の望みでもある。目は心の窓であるため、梅娘が「僑民」同士の視線のやりとりを通じて、公の場で語れないことを語ってしまったのではないか。

以上考察してきたように、牛島春子の作品は抑圧されている労働者階層に対する同情や「満洲国」の暗い部分の摘発と戦意高揚など、彼女自身は矛盾しながら、国策や国家権力に対して屈服していた。日本女性は侵略の戦争の一翼になり、被植民者側の女性の声を聞かず、世界女性のために権利を求めるのではなく、日本女性のために権利を求めつつあったのである。左翼の日本女性たちが持っているマルキシズム思潮、及びフェミニズム思想は「満洲」の地に渡り、ある程度の変容が現れていた。日本内地では、牛島春子が体験したのは思想弾圧の苛酷さ、家父長制の束縛などであるが、「満洲」では相対的な自由と富も得ている上に、植民者としての矜持と優越感も湧いてきた。弱い立場の日本人女性は植民地という環境の中で、強い立場に立つようになり、有利な状況を保持するために、コロニアリズムに身を寄せたのではなかろうか。したがって、牛島春子に於いて、マルキシズム、フェミニズムよりナショナリズムのほうが優先されたわけであろう。第Ⅱ部第一章第二節で詳述しているが、戦時色が濃くなるにつれ、牛島春子は昔の政治運動の「混迷」から脱出し、戦時動員中の植民支配の「常識」に接近してい

く心身の変化が見られる。歳月とともに牛島春子は成熟し、「大人」になった。野田宇太郎に宛てた手紙で牛島春子はその変化を次のように、打ち明けた。

(前略)、物の考へ方など、いろんな混迷からやっと抜けはじめた所でございます。すこし常識人に近づきました。何か依り所を見つけたら、又、昔のやうになる我武者羅さを感じますが、すこしは大人になりました。¹⁰

牛島春子が遭遇した「満洲」、女性から見た「満洲」の問題が安易に標本化されぬよう、それこそ戦前から戦後を含めた総体での見直しが必要であろう。牛島春子は宗主国の女性として、見事に使命を果たした。中国人女性が悲惨な運命を辿ったのは封建主義のせいにした。片方の抑圧だけに目を向け、植民地主義がもたらした災いに一切触れていなかった。サバルタンの声が聞こえないままである。それにひきかえ、「満洲国」のメディアに発表された中国の女性作家の作品には封建主義と植民地支配という二重の抑圧と反植民地主義イデオロギーが読み取れる。ユートピアとして書き出される「満洲」の自然風土のイメージには隠しきれない苦しさが漂っている。日本女性作家が持っている女性解放思想やフェミニズム思想は国境を越えて変容し、日本の娘達に呼びかけたものとは異なっていた。牛島春子は指導民族の立場で植民地の中国人女性を教化し、日本帝国主義に奉仕することになった。マルキシズムやフェミニズム思想はコロニアリズムに呑みこまれたといえよう。

注

¹二〇一三年四十五号『日米女性ジャーナル』 六十九頁

²西原和海先生に提供していただいた

³牛島春子「大いなる現在」『観光東亜』 一九四二年十二月

⁴牛島春子『手記』自家版 一九三八年 二十頁

⁵一九四二年四月『芸文』に発表

⁶牛島春子「牝鶏」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 七十三頁

⁷牛島春子「在満女性にある問題」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年

⁸鎌田明子『性と生殖の女性学』世界思想社 二〇〇六年 七頁

⁹濱田麻矢「三人の越境する女たち」『帝国主義と文学』研文出版 二〇一〇年 一六一頁

¹⁰一九四二年二月二十八日野田宛の書簡

第二節 異民族接触と異文化衝突

一. 「祝といふ男」論

(一) ポストコロニアリズムから見た「祝」の本質

昭和十五年下半期（第十二回）芥川賞次席として知られた牛島春子の代表作「祝といふ男」は、一九四〇年九月『満洲新聞』に初めて掲載されてから、一九四〇年十二月『日満露在満作家短編選集』、一九四一年三月特別号『文藝春秋』、一九四一年十二月『日本小説代表作全集・昭和十六年前半期』、一九四二年『満洲国各民族創作選集』、一九六四年十一月『昭和戦争文学全集』、一九九六年『〈外地〉の日本語文学選』第二巻「満洲・内蒙古／樺太」、二〇〇一年九月『日本植民地文学精選集』「満洲編」七「牛島春子作品集」といった諸書に収録や転載された経緯がある。それは相当な影響力を持っている作品であり、同時代の評価としては芥川賞候補作にとどまっているが、今日では大学生用の教科書にも採録されているという。「満洲」文学作品としてそれほど注目されているのは珍しいことである。「満洲」の日本語文学を論じる際に避けては通れない「祝といふ男」が牛島春子の代表作であることは疑う余地のないことである。グローバル化の中で、アジアの視野で被植民者であった中国人の立場でこの「祝といふ男」のような小説を再評価する必要性を私は痛感している。

牛島春子は「重い鎖—『祝といふ男』のこと」で次のように述べている。

『祝といふ男』は四十枚の短編で、昭和十五年の秋ごろ（？）満洲新聞に連載したものだ。日、満、露、鮮と在満の、異なった民族作家たちの作品が十編ばかりシリーズの形で連載されたその中の一つだった。そのときの満洲新聞の文芸部長はかつてのプロレタリア作家山田清三郎さんだった。山田さんはわたしの知らない間に芥川賞選考委員にこの作品を推薦してしてくれた。¹

たしかに、この作品は芥川賞選考委員に推薦したのは山田清三郎である。結果的には桜田常久の「平賀源内」が受賞し、「祝といふ男」はそれとともに一九四一年三月特別号『文藝春秋』に掲載された。同誌に「芥川龍之介賞経緯」という選考委員²たちの選評も載せている。高く評価されているところは二点ある。

「…況んや作者の女流なるに於てをや」（佐藤春夫）「祝と云ふ満人の一異人種の、非常に特殊な性格をこれ程まで見詰めた一女流作家としては珍しいインテリ、しかも、その性格描写に於ける成功は、特筆していいと思ふ。殊に、女流としては珍しい理知的な構成、展開の現実的な精確さ、作品の裏打ちになっている作者の心の置きどころの適度さ—」（小島政二郎）「満人の不思議な性格が不思議なままに写せているし、婦人作家としては強いけれども…」（川端康成）

一つ目は作者は女性としては強い、珍しい。これらの選評は一見褒めているように見えるが、男尊女卑の意が入っている。選考委員はみな男性作家であり、当時、女性作家は重

視されていなかったと思われる。

「この個性的な有為の人物の風貌性格をよく把握し、可なりに複雑な人と事とを簡素に大まかなしかも陰影の多い力ある筆で十分に活写して自らに新興国満洲の役人社会らしい趣を示し清新の気の漲るもののあるのを敬愛する」(佐藤春夫)「祝と云ふ満人の一異人種の、非常に特殊な性格をこれ程まで見詰めた。(中略)しかも、その性格描写に於ける成功は、特筆していいと思ふ。殊に、女流としては珍しい理知的な構成、展開の現実的な精確さ、作品の裏打ちになっている作者の心の置きどころの適度さ、私は正確な記録を読んでいる楽しさのうちに、祝といふ不思議な性格をまのあたり見る心地がした。異人種を、これだけ理解したといふことは、一つの立派な収穫だと思ふ」(小島政二郎)「この主人公の性格などは表現されてゐる。(中略)この作品は、満洲の治政の内面なども窺はれて、読んでは得る所があった」(瀧井孝作)『祝といふ男』は、祝といふ、一と癖あるが、理性的なところのある、日本びいきの、満人を中心にして、満洲のさまざまな役人の裏面を書いたものであるが、祝といふ毛色の変った人間の性格がわりに書けてゐる上に、満洲国の裏面も或程度まで出てゐる、好短編である」。(宇野浩二)

上述したように、二つ目の価値として認められたのは、強い個性を持っている祝という人物の造形と「満洲」の暗部への深い観察である。

それにひきかえ、選考委員たちは作品の欠点について共通認識を持っている。「この作品は描写がモノクロマックなところが欠点と云へば欠点だが」(小島政二郎)「少し粗いやうでまだ十分には信頼しかねるところがある」(川端康成)など表現が粗く、繊細さに欠けていることを批判した。牛島春子自身も足りないところに気づいたが、「一年後新京(長春)に住むようになってから「祝といふ男」を書いたのだった。すこし気負って、硬い文章で書いているのが気になるが、それほど祝廉天の印象は強烈だった」。³

牛島春子は後のエッセーで祝のことに触れている。「祝廉天は拝泉県公署の通訳だったのである。山東省出身で、どこかの日本語学校を出たと後日聞いたけれど、大へん日本語がうまかった」⁴。祝という男は実在人物であり、本名は「祝廉夫」である。初出の『満洲新聞』に連載された時、誤植で「夫」が「天」に誤られたという。その後、「祝廉天」のままに転載されてきた。

作品論においては、この作品は牛島春子のほかの作品に比べて、先行研究がやや多いようである。これまで尾崎秀樹、川村湊、黒川創、大川育子、原武哲、尹東燦などが論じている。戦後「祝といふ男」を初めて評価したのは尾崎秀樹である。この小説の文学的意義を述べ、その後の評論の視座を基礎付けた。「〈満州国〉における文学の種々相」で彼は次のように祝の不可解な性格、民族協和の困難さを指摘した。

県長弁公処通訳を主人公にした「祝といふ男」という短編がある。他民族と協和するということがいかに困難であるかを、この作品ほど端的に語ったものはすくないだろう。通訳祝廉天の行動は、傲慢とも、不遜ともとれる不可解さに満ちている。彼は上司に対

して忠実であろうと努める。王道建設の理想に背馳するどす黒い醜悪が、今もなお政治の手のとどかない農村で、永い伝統と因習をよりどころにして、毒草のようにはびこっているのを彼を見すごしはしない。しかしその行動は、満日どちらからも快く思われな
いのだ。⁵

また川村湊の『異郷の昭和文学』では、祝が嫌われる理由について述べた。「新しく副
県長として赴任して来た風間真吉は、祝の評判と彼の人物像の隔たりに驚き、祝がむしろ
『日本人』的な行動パターン、原理で動くことが、かえって疎んじられた理由であること
に彼は気付く。『非常に官僚的だよ、満系であれ程傲慢な奴はいないな』という祝の評判は、
いってみれば、祝があまりにも『日本人』的であり過ぎることへの反発なのだ」「日本人よ
りも日本人化した満州人。下層官僚として融通の効かないその性格は、まさに“植民地人”
の一つの典型というべきものなのである」という。要するに、祝が日系からも満系からも
嫌われるのは『日本人』的な行動パターン、原理で動いたためである。

これに対し、大川育子は「牛島春子『祝といふ男』論」では祝が吉村事件の取調べに対
し、「べらべらと問われるままに喋ってしまった」ことを取り上げ、祝は日本的というよ
り「むしろ正反対で、日本的な義理人情を無視したから敵視の的になった」と正反対の
論点を出した。『日系人』が祝を憎悪したわけは、彼が日本的であったからではなく、
『満人』のくせに日本人より西洋的だったから、なのである。⁶そして原武哲も大川と同
じような見解を示した。

西田勝は「祝が日本人に嫌われたのは、どこまでも形の上では非難すべき点は何一つ発
見できないが、そこに反抗、皮肉、冷淡さえも感じられたから」と書かれているが、「反抗、
皮肉、冷淡」は時として「日系」に向けられる現象的な相貌であって、その本質は日本人
的でもなく、「満人」（漢族）的でもなく、伝統や因習に囚われない冷徹で非情な硬質の「西
洋的合理主義」ではなかろうか。⁷

それに『〈外地〉の日本語文学選』の編者黒川創はその「解説」で『満州国が潰れたら、
祝はまつ先にやられますな』。こう言っただけの人物の姿を、硬質的な冷めた文体で描いて
いくタッチは、なにか作者の深刻な政治経験のようなものをにじませている。『祝といふ男』
には、こうした経験を経た上での、政治的なるものへの深刻な懐疑、苦い洞察が、一つの
臨界点をなして刻まれてるだろう。これは白とも黒とも判然としない『冷たい化石したよ
うな顔』をめぐる話であり、その謎は、結末にいたっても解かれることがない。祝という
男の存在は、風間という日本人にとって、いわば解答のない問いなのだ」と綴っている。
黒川は日本語が堪能な植民地人の内面の不可解さ、宗主国との関係の危うさを指摘し、牛
島春子の政治体験が滲んでいることを主張した。

尹東燦の「牛島春子『祝といふ男』論」⁸では「この不思議にさえ思われると、はっきり
した内外分別は、実は祝の生き方、信念の現れでもある。つまり、祝が忠実を示そうとす
るのは満洲国を象徴する権力にであって、それを代表する個々の人間ではない」と祝の不

思議な性格を分析した。

祝廉天は最後まで正体不明のままである。本論文は中国人の視点からポストコロニアリズム理論を用いて、祝廉天の内面に立ち入り、祝という植民地人の正体を明らかにしようとするものである。

異民族の日本人の目に映った通訳祝廉天は「傲慢とも、不遜ともとれる不可解さに満ちている」不思議な人物であり、「日本人よりも日本人化した満州人」である。祝の「冷たい化石したような顔」は日本人には解かれることがない。実際に中国人の立場から祝の行動を考えると、ちっとも不可解とは思わないであろう。「冷たい化石したような顔」の裏に、正義感や人間性が潜んでいる。中国の古典『三国志・蜀志・先主伝』に「喜怒不行于色，好交結豪俠，年少爭附之」という名文がある。「喜怒不行于色」とは喜びも怒りも顔に表れないという意味である。それは中国人は昔から懂れてきた悟っている状態である。自分の情緒をよくコントロールできる証にもなるし、相手に自分の心を読み取られないというメリットもある。しかも、植民地「満洲」で、祝は心に秘めたものを漏らさず、被植民者の心境を植民者に読み取られないように努め、顔を「化石化」したのではないか。それは生き延びるための術であり、動物の保護色みたいなものであると思う。祝が吉村事件の取調べに対し、「べらべらと問われるままに喋ってしまった」のも、自分を無罪にし、生き延びるためである。後に、祝はすぐれた直観力や判断力、戦略や行動力により真吉を助けたことも首にならない努力であり、生き延びていくためである。

こんな祝の心にも人間性と正義感が宿っている。彼は真吉の家を尋ねる時、弱音を吐いて、他人に見せない悩み多い顔を真吉夫婦に見せた。後に、彼は副県長真吉に協力し、いろいろな難事件を解決し、悪い因習を取り締まった。「彼の正義感が非常な冷酷さと一緒に住んでゐる際、或ひは自分の一身の利害に直接かかはってくれば何時でもかなぐり捨てられる正義感なのではないだらうかと疑はれて来る。祝を動かしてゐるものは、今は満洲国に進んで忠節であることこそ流れに棹さすもっともさかしい生き方なのだといふ処世上の知恵でしかないやうに見える」⁹祝は確かに正義感を持っているが、それは自分が損にならないことを前提とするものである。祝は本当に「満洲国」を信じて愛着を持っているわけではなく、彼は特定の時代にやむを得ず、「もっともさかしい生き方」を選んだに過ぎない。祝をはじめとする中国人に限らず、戦中の日本人も生き延びるために、時代の流れに身を委ねずにはおられなかった。真吉の転勤を知った時、祝は「急に黙りこんでちっと立ってゐた」反応は、真吉に人間らしいさを感じさせられた。副県長婦人みちが祝の家に戻って別れの挨拶をしにいく時、「ちっとみちを見る祝の顔に寸時ほのかなものが動いたやうであった。それきりであった」。最後に、真吉達の乗ったトラックが出発するまで「祝の冷たい化石したやうな顔は動かなかった」。祝の悲惨の運命が暗示されると同時に、その「化石化」した顔の裏に日本人に対する憎しみ、恨み、中国人に対する優越感、自分自身への不満や悲しさ、切なさ、虚しさも隠されているのではなかろうか。

前述のように、祝が日系からも満系からも嫌われる理由について、川村湊と大川育子は

異なっている見解を示したが、いずれも日系に嫌われる理由と満系に嫌われる理由とを区別しなかった。日系と満系は民族的な立場がそれぞれ違うので、同じ次元で論じることはできない。牛島春子は小説で祝が日本人に嫌われる理由に触れている。

日系職員達が理屈は兎も角、ただもう無やみと祝を憎悪し出してゐたとすると、それは彼の噂されてゐる悪徳のせみばかりではなく、実はあの祝がもつ満系らしからぬ一種の陰しさ、鋭さにあつたかもしれなかつた。¹⁰

「祝がもつ満系らしからぬ一種の陰しさ、鋭さ」こそ、彼が日本人に憎悪される理由である。「満系らしからぬ」というフレーズが気になるが、「満系らしい」とは何かという問題に連鎖していく。アジア大陸の東端に位置する日本は、脱亜して欧米諸国とアジアの地域で覇権を争い、唯一の帝国主義国となった。

「亜細亜の東辺」に「国土」があれば、地政学的には、最も遅れているはずなのだが、「国土」の地政学ではなく、「国民の精神」の地政学で言うと、すでに「脱亜」を果たしているというのである。ここで注目しておかねばならないのは、福沢が、国力としての経済力や軍事力については問題化せず、「精神」だけを特化している点であろう。¹¹

アメリカの批評家サイードは『オリエンタリズム』（一九七八年）で、ヨーロッパのアジア表象の権力性を批判した。「脱亜入欧」の日本人における中国人の表象は西洋のオリエンタリズムと共通していた。しかし日本がヨーロッパと異なるのは、日本が東アジアに位置する黄色人種の国だということであり、その点が日本のオリエンタリズムの在り方を複雑にしてきた。近代日本のアジア認識は、西洋に対抗するアジア的な価値の強調と、他のアジア諸国とは異なる日本の独自性、優位性の強調という、二つの傾向の緊張の中で展開された。¹²日本は植民地「満洲」で指導民族と自称し、中国人を抑圧し、統治していながら、戦争の拡大とともに、「大東亜共栄圏」というアジア的なものを構築しようとした。一見矛盾するようであるが、結局「脱亜入欧」も「大東亜共栄圏」も特定の時期に、日本が自国の利益のために作りあげた口実であろう。

日本人はかつて中国人を他者として抑圧、疎外することによって自らのアイデンティティを確立しようとした。日本人のオリエンタリズムは日本人の分裂した自己意識が投影されたものであった。彼らは日本民族の対立項として、異様なもの、劣ったもの、女性的なものとして中国を見下ろしている。優越的な日本民族の対極に「満系らしい」とは「野蛮」「狡猾」「怠惰」「恭順」「愚鈍、無知」であろう。被抑圧者はもっと多様な存在であった。日本オリエンタリズムの暴力で中国人の個別の人格を無視し、集合として、あるいは一つの類型として扱おうとし、植民地の人々の人間性と人間的な経験を剥奪した。祝の「カン」の鋭さ縦横の才智が満系だと思ふとなんとなく神経にさわって仕方がない。祝は頭がき

れて、簡単にやめさせられない存在感のある有能な中国人である。日本人が祝を憎悪した理由はまさに自分達が持っている能力を持っている祝に対して、一種のコンプレックスと嫉妬が湧いてくるからであろう。それは民族差別、日本のオリエンタリズムによるものである。

それにもう一つ、日系の反感を買ったことは、吉村事件で祝が「吉村との関係をべらべらと問はれるままに喋ってしまった」ということである。それは文化の違いから生じたものである。日本の美德は深い伝統があるものである。江戸時代の歌舞伎や浄瑠璃にもしばしば見られる事であるが、このような場合、日本人は自分が正しいことを主張せず、黙って、罪をかぶるのが美德とされる。外観がはげたかみみたいな祝は「主を売る」「無節操」「冷酷無比」な人であると思われがちである。しかし、中国人の祝から見ると、それは保身のためであり、それほど悪質なことはない。また、祝が首にならないように副県長真吉のお宅をひそかに訪ねた時、「祝が悪いならその他にまだ悪い事をやってゐる職員が警察官あたりゐます」と警察を告発した。祝は罪の意識を持っていない。祝は先が読めるように、後の警察事件と呼応していく。『満洲新聞』掲載の本文にあった「その娘が来ると風呂の中につれこみ、拳銃をつきつけて無理やりに自由にしてしまった」という警察官が養子娘に暴行を振るう一文はその後、転載される時、削除された。警察の悪質な強姦行為に触れているから、わざと削除されたと考えられる。満系警察官が勝手に暴行をふるえたのは日系警察官の保護の下にあり、黙認されたからではないかと思う。

他の職員達と交ってゐても一人際立って身のこなしの敏捷な、日本語の達者な満系がゐるのだった。誰彼の区別なく無遠慮に相手を見据ゑてづけづけと物を云ふ。歩く時、机に向かってゐる時、不用意の手のあげさげにも何か確信ありげな、不屈なものを感じさせる。これはまるで激しい日本人のタイプぢゃないかと真吉がひそかに目を見はって眺めた男が、祝廉天なのであった。¹³

『満洲新聞』に載った本文では「不屈」ではなく、「不屈き」と書いてある。手書きの原稿を活字にする作業をする時、誤植は免れない。しかし、この場合は「き」がついているから、誤植の可能性は低いであろう。編集者が故意に改めたのではないかと思われる。「不屈き」とは否定的形容であり「①道理や法に従わないこと。ふらちなこと。また、そのさま。②行き届かないこと。不注意なこと。」(『大辞林』第三版)という意味であるのに対し、「不屈」とは肯定的評価を示す語であり、「困難に屈せず意志を貫くこと(さま)」(『大辞林』第三版)という意味である。二つの修飾語によって、祝の性格も微妙に違ってくる。

日本人を映し出すための鏡として中国人の表象を措築された。祝のような被植民地的主体は隅々まで、風間真吉のような帝国主義的な他者の監視と凝視のまなざしに曝され、かつ刺し貫かれることになる。中国人は日本人を映し出すための鏡であった。「敏捷」「無遠

慮」「確信ありげ」「不屈」というのは「激しい日本人のタイプ」であるということになる。自己中心的に他者を見るという行為は、他者もまたそのようにして、見返してくるものであるが、そのことは忘れられがちである。“日本人”は眼差す主体であると同時に、“中国人”に眼差される存在でもある。祝は「日系同士が猫のひたひほどのこの土地で、時々縄張根性やら小姑根性をむき出しにしてなぐり合ひをはじめる事などを冷然と半ば嘲るやうに語るのだった」¹⁴それに対し、「満系であれ程傲慢な奴はいないな」と祝といった中国人を凝視した日本人たちはいかに優越的な自己イメージを保ちたくても、他者の中国人はそのようには見てくれないという苛立ちが隠せない。

植民者の女みちと被植民者の男祝、お互いのまなざしに複雑な要素が含まれている。植民地はサイドをはじめとする理論家に「女性」として表象されている。『オリエンタリズム』によると、被植民者女性「クチュクは入の心をかき乱す豊穰性のシンボルであり、彼女の旺盛でいつ果てるともしれぬ性的魅力は、とりわけてオリエンタリズム的なものである」¹⁵とある。サイドは宗主国男性にとってオリエンタリズム（植民地）＝女性という表象に対し、批判している。前述したように、「脱亜入欧」の日本人における中国人の表象は西洋のオリエンタリズムと共通していた。しかし日本がヨーロッパと異なるのは、日本が東アジアに位置する黄色人種の国だということであり、その点が日本のオリエンタリズムの在り方を複雑にしてきた。近代日本のアジア認識は、西洋に対抗するアジア的な価値の強調と、他のアジア諸国とは異なる日本の独自性、優位性の強調という、二つの傾向の緊張の中で展開された。¹⁶祝が女性のように「従順的」に植民者の言いなりにすることは望まれていた。すなわち、コロニアリズムによって被植民者の男性祝は象徴的に去勢され、ジェンダー化されているといえよう。「満洲」で社会を形成するには女性植民者が欠かせない。彼女たちは生命や労働力の再生産の任務を担い、男性植民者を支えている。牛島春子もその中の一人であり、コロニアリズムによって「男性化」される存在であろう。被植民者の地位は家父長制社会の女性と同様である。家父長制に束縛されていること、裏切り（転向）の経験、ある意味では牛島春子は祝と同じ立場の人間であるから、祝に強い関心を寄せたわけである。予見された祝の顛末は女性としての悲劇につながる。しかし、有能な祝は副県長真吉に協力し、いろいろな難事件を解決した。みちは傍で傍観するしかなく、「男の領域」に入れない。その場合、被植民者男性は植民者女性の上に移動する。植民地のヒエラルキーの最高位に位置するのは植民者男性であり、最下位に位置するのは被植民者女性であるが、植民者女性と被植民者男性の順位がシフトする場合もある。

さて、祝は同族の満系にも嫌われる理由は何であろうか。小説には真吉の同僚陳克洪と祝廉天の類似点を取り上げるところがある。

今真吉を強く捉へてゐるのは南満にゐた頃の同僚であつた、陳克洪と祝廉天のいちじるし類似点であつた。官吏になりたての真吉に、王道建設の高い夢に背馳する幾多のどす黒い醜悪が今もなほ政治の手の届かぬ農村の裏に、永い伝統と因襲を根じろにして毒

虫のやうに執拗に農民達の血をすすりあげてゐる姿を、まざまざと伺かせてくれたのは陳克洪であった。彼はそれらを発き満人達の隠蔽主義をひっくりかへして行ったために、周囲の満系からも日系からも快く思はれてゐない男であった。¹⁷

つまり、作者の牛島春子から見て、満系に嫌われる原因は「醜悪」をあばき、満人達の隠蔽主義をひっくり返すことである。祝は陳克洪と類似的に満人達の「掩護幕」を取り外したので憎悪されたという。

実は深層を探って見ると、中国人民衆に嫌われた最も重要な理由は祝が裏切者である。祝は被植民者でありながら、植民者側に協力して同胞を統治していた為、抑圧された当時の中国民衆に恨まれ、憎まれたわけである。弱い集団の人間と強い集団の人間とがぶつかる時、上下関係、利益関係に左右され、祝のような人物が生まれやすい。祝がいなくなっても、次の人が必然的に現われる。『満洲国が潰れたら、祝はまつ先にやられますな』半ばまじめに、半ばはうそぶくやうな態度だった。日本人が支配者の座から去らないかぎり、しばらく祝の身の安全を保障できるが、「満洲国」が崩壊にしたら、母国を裏切った祝は周りの人に裁かれるに決まっていると自身も予感した。「彼はやはり同族の敏感さで、一見忠実に為政にしたがひ、異議らしいことも申立てぬ柔和な相貌の者達の幾部かが、もし一朝ことあった場合、突然反満抗日の旗をかかげ、銃をあべこべに擬して立ち上らぬとも限らぬ、さうしたものを嗅ぎ取ってゐたのだろうか」。祝は生きている自分がやられる覚悟ができてゐる。一九三二年、国際世論の非難を浴びつつ建国された「満洲国」は、これを独立国と呼ぶ日本政府の言説とは裏腹に、内実は軍の支配を背景にした植民地であり、民族協和の実体とは、当地に生活する諸民族の差異を生かしつつ共存することではなく、人々にひとしなみ、日本語日本文化を押し付け一元化するものにほかならなかつた。「満洲」時代、いわゆる「民族協和」の現状について、春子も素直に綴ったが、「役所の中でも仕事の上から視る時は、日系と満系がさほど距りをもって向き合つてゐるとは感じられないのに、生活を徹してみる時二者ははっきりと別の世界に住んでゐるのである。それも日系の暢気で開けっぴろげな無関心さとはちがって、満系は自分等の世界の上に共同で一種の掩護幕をはって日本人が踏み込んで来るのを守り合はうとする意識をもつてゐるのである」。当時「満洲国の官庁に勤めてゐる中国人のうち大部分は、自分の財産と身の安全を守るために、あるいは逃亡すれば家族が皆殺しにされることを恐れて、仕方なしに」そこに「とどまつてゐるのであつて、けつして喜んで働いてゐるのではない。また多くの中国人官吏は反日感情をもち、省や市の役人のなかには反満抗日運動をひそかに援助している者が多」¹⁸かつた。そればかりか、中国民衆にも植民地主義への不満や反抗の暗流が秘めてゐることが祝にはよくわかつてゐる。にもかかわらず、生き延びるためとはいえ、同族の怒りや憎みを買うのも当然のことであろう。擬態のアンビバレンスで解釈すると、「被支配者を認知、統御可能な他者として表象する過程で、その「白人ではない」という可視化された差異が、支配を脅かす記号とも容易に転換しうる」¹⁹他者として表象するプロセスの中では中国人

たちの「日本人ではない」という可視化された差異が、日本人の植民地支配を脅かした。牛島春子も被植民者による脅威を感じたに違いない。

言うまでもなく、祝も疑いなく、「五族協和」「王道楽土」を完全に信じ込んでいたわけではなく、「祝の心底には何か悲劇めいた匂いがなくはな」く、意識して「どいういふ時でも拳銃を肌身につけてみた」。

「真吉の妻のみちが急用が出来たりして暑い盛りに呼びに行ったりすると、鶏や豚を飼ってゐる古びた家の中から、白い日本の湯あがりにぐるぐる兵児帯をまきつけ、ほう歯の下駄をつつかけた祝が出てきた。物珍しさに着てゐるとも見へず、自然に平気で着ながしてゐるのだった」祝の服装は日本人化している。中国人の日本人化という例はほかにもあるようであるが、小泉菊枝の『満洲人の少女』の主人公李桂玉はやがて中国の衣服よりも和服を好むようになった。「満洲」服よりも和服のほうを好んでまとうようになる李桂玉の変化は、反満抗日思想を身につけた桂玉が自己の出自を否定し日本の中国に対する優位性、日本の「満洲国」に対する優位性を受け入れた経緯である。和服を「自然に平気で着ながしてゐる」祝もそうであろう。結局、二人とも日本人になりきれず、少女はそんなに大きくならなかったし、祝は惨殺されたという悲劇になってしまった。再びバーバの「擬態とアンビバレンス」論理が想起させられる。植民地教育を受けた現地人は支配者の言語を巧みに練り、「教養」を身につけたエリートとは植民地支配者の擬態、すなわち「ほとんど同じだが完全ではない」状態にあった。植民地教育を植民地の被支配者は帝国の中心に存在すると想像した真正なる支配者の像を、延々と擬態しつづけなければならず、しかし、決してその像と同一化することはできない²⁰という。あんな時代を生き延びた祝はまさに悲劇的な人物である。引揚げ後、牛島春子は友人の K さんからの手紙に基づき、「祝のいた『満洲・拝泉』というエッセーで、祝の顛末に関して書いている。

一九四四年に拝泉県公署にも動員課が新設され、K さんはその課付になり、祝廉天は股長（係長）になった。動員課は、住民の徴兵不合格者を組織して勤労奉仕隊を作り、開発、土木、灌概などに従事させる仕事で、相当に苛酷なものであったらしい。（中略）（敗戦後）祝廉天股長は、住民たちの手で、大通りの十字路に首だけを出して生き埋めにされ、処刑勝手という高札が立てられて惨殺されたという。²¹

尚、「牛島春子年譜」によると、一九九六年八月三十日に、原武哲他の訪中団が拝泉を訪問し、祝廉天と同じ時期に拝泉県公署に勤めていた中国人張風庭、王志財から祝の顛末を聞き取っていた。二人は、祝が拝泉西門で銃殺されたと証言していた。その執行者や経過は不明である。祝の最後に関して二種の伝聞には食い違いはあるが、混乱期のことからこれ以上の究明は困難であろう。いずれにしても、「祝といふ男」の文中で、「満洲国が潰れたら、祝はまっ先にやられますな」と自らの運命を祝に発言させた箇所は、その予感通りの顛末となったわけである。祝のような世に合わせて生きている人間は大きな社会構

造や政治体制が変動する時、必ず批判され、殺されたりもするのであろう。

(二)『罪と罰』・『阿Q正伝』の影

「牛島春子年譜」によると、牛島春子は渡満後から「祝といふ男」を執筆するまでの期間にドストエフスキー『罪と罰』（『ドストエフスキー全集』普及版第六、七巻、米川正夫訳、三笠書房、一九三五年）を耽読したという。

ドストエフスキーの背後に『聖書』がある。祝廉天は真吉夫婦にとって「毒にも薬にもなる果物の誘惑」であった。それは『旧約聖書』「創世記」で蛇が誘う木の果実を踏まえたイメージであろう。真吉夫婦は「アダムとエバ」であり、祝は神様が食べてはいけないと命じた「木の果実」である。祝は無遠慮に不正を発き、真吉の政治を助ける「薬」にもなるし、無節操な冷酷な「毒」にもなる。真吉夫婦は周りの祝追放の声の中で、善悪を見分けて「弊政」を治す「薬」になるのではないかと、期待していると同時に、祝の冷たさで損になるのではないかと心配もしている。まさにその時の心境はエデンの園での「アダムとエバ」とそっくりであろう。

祝は不評に囲まれ、真吉にその原因を打診されるシーンがある。

「それは祝は吉村さんの事件で取り調べを受けました。ああいふ不祥事件に係はりあったのは祝の不徳でまことに申訳ありません。けれども祝は決して悪い事はしてをりません」。また、報酬を受けたかどうかという質問に対し、「いいえ、一銭も頂きません。吉村さんにはお世話になりました。上司でもありますので命令はその通りに致しましたけれども、報酬は一銭も頂きません」。

祝から見ると、自分は上司の命令に従っただけであり、罪の意識は持ってない。自分の行為は「不徳」と言いながらも、悪事とは思わないようである。それは作者の春子の政治体験を連想させられる。春子の自分自身の「罪の意識」が投影されている箇所ではないか。彼女は日本の獄中で「転向理由書」を書かされ、「思想犯」というラベルが貼られ、執行猶予の身で「満洲」に逃亡した。牛島春子のせいで家族が異端視されていたこと、「世間」から外されたことが彼女の「転向」を促した。流謫の意識とそれを投影する像は野田宇太郎資料館に牛島春子の油絵の「自画像」が保存されている。周りの背景が暗くて、何かに覆われているような重苦しい雰囲気漂っている。その顔は能面みたいに無表情である。この無力感に照応し、日本の集団性は春子のような「思想犯」「流謫者」を排除する。仲間意識の交感から外れたもの、それが流謫者であり、「罰」とはこの場合、集団からの排除である。牛島春子は、「転向理由書」で「私は此の運動に入る時、この運動こそ今の社会に於いては唯一無二の正義への道であり、大道徳だと信じ、偉大な社会革命の完成のためには目の前の多少の犠牲や生起する悲劇は当然なことだ、私達はそれを乗り越えてこそ、本当の革命家たることが出来るのだと考えへておりました。最近私は色々な考と共にそれが一面には最なことだとは云へ、全く若いもの々陥り易いはき違へたヒロイズムであり、一種の誇大妄想に過ぎなかったと考へる様になりました。父母にとってよい娘であり、兄姉にとっ

ても良い妹であり、そうして私の真面目な正義への追求もゆがめなくて、もっと正常に生きて行く道があってよい筈だとひそかに思ひ廻らしてみた際、私は父に会いました。何時も無口で我儘な私にも無頓着だと思はれる位に寛大だった。父のやっぱりムツッリした姿を薄暗い面会所で見出した時、私は自分で自分の頑固さが意地も張りもなく音を立て崩れて行くのを感じました。私の転向の動機は只それ丈です」²²と打ち明けている。春子は祝と同じように、家族に迷惑をかけたことは悪かったと認識しながらも、まったくと言っていいほど当時罪の意識を持っていなかった。「満洲」は牛島春子をはじめとする日本人たちにとって「流謫の地」である。脅迫観念にかられて日本を離れ疎開地の「満洲」に逃れた。生き延びるために、やむを得ず新天地「満洲」に渡ったが、祝のような自己分裂を免れずに救済されなかった。しかし、春子は「思想犯」としての「罪」は認めないが、結局、戦後の一九六九年『ある微笑』で自白したように、植民者として「罪」を認めた。来日した「中国からの文化使節団」に交じっていた「小柄の若い婦人」との対面をきっかけであった。その婦人は家族全員が日本軍に殺され、一人延安に逃れて抗日戦争に参加した。しかし、春子はその対面の際に、この婦人と「同じテーブルにいて私はそのひとの、言葉すくなく、つつましい微笑をたやさない姿にうたれ」て「はじめて私は日本人である自分に深い苛責を感じた」²³という。「他民族が他民族を支配することにはどのような正当な理由もありはしないことに気づくのに、恥づかしいことながら私は二十年近くの歳月を費やしてしまったのである」と植民者としての「罪」を認識できた。ドストエフスキー『罪と罰』を耽読してから、二十年近くを経て、作者の春子はやっと植民者としての「罪」の意識を持つようになり、「苛責を感じた」。

それに対し、『罪と罰』の主人公ラスコーニコフは殺人直後、精神状態がおかしくなるほどのうしろめたさにとらわれた。罪の意識が強かった彼は十字架を背負って入獄し、罰を受けることによって、救済された。牛島春子は奉天に住みたてのころ、アパートのすぐ近くにある映画館でよく映画を見ていた。一番深い印象をうけたのはキリストを主人公にした映画「ゴルゴタの丘」である。「ののしり騒ぐ群衆の中を、十字架を背負って黙々と刑場に歩むキリストに私はとても人間的な哀しみを感じた。(中略)、新京では、場末の汚い映画館までわざわざ『罪と罰』を見にいった。老婆の頭にナタをうちこむぼくっというにぶい音と、殺人を犯してそのアパートから出ていく時、あたりをうかがいヒザ小僧から先にギクシャクと歩きはじめるあの姿が、その時の主人公の心理と一つになってやきついている」²⁴という。「老婆の頭にナタをうちこむぼくっというにぶい音」は春子に苦しい体験を連想させ、「殺人を犯してそのアパートから出ていく時、あたりをうかがいヒザ小僧から先にギクシャクと歩きはじめるあの姿」は厳しい監視の中で生きる春子の姿と重なって「その時の主人公の心理と一つになってやきついている」。祝も日系の厳しい監視の下ではらはらと生き延びている状態であり、「満洲国が潰れたら、祝はまっ先にやられますな」と自ら「罰」を予測した。祝とラスコーニコフ二人とも強い正義感を持っていて、社会の底辺に位置している貧しい人達に同情している。他人から見て二人の性格や行為は「不

可解」であり、「謎」に満ちるものである。

「牛島春子年譜」によると「満洲」時代、牛島春子が読み込んだもう一冊の本は『大魯迅全集』全七巻（井上紅梅等訳、改造社、一九三七年）であり、特に『阿Q正伝』を何度も読み返したという。魯迅は『狂人日記』や『阿Q正伝』などの代表作をはじめ、彼の作品に社会の暗黒とその病根を暴露するものがほとんどである。登場人物は無知、愚鈍、卑屈、狡猾、醜悪な人物像である。魯迅はこのような血肉をそなえた大衆の悲劇を描写することにより、中国人の病態的な精神を表現し、国民に自らのみともなさと惨めさを認識させようとした。魯迅は自ら暗黒の外に立つ輝かしい英雄としてではなく、自分も暗黒の中にいる一人として覚醒し、運命共同体の人達に、自由と解放を自らの努力で獲得しようと大声で叫んだわけである。暗黒に身を置いている覚醒者による現実暴露こそ魯迅の文学の特徴であると思われる。

『阿Q正伝』は魯迅の名作であり、中国の高校教科書に採用され、中国国民の多くに知られている小説である。魯迅が描いたのは、人が人を食う「食人社会」に生きた民衆の姿である。そのなかに埋没した男の姿である。阿Qはそういう愚かで情けない民衆の象徴であった。

「ところが彼は今まで見た事もない恐ろしい眼付を更に発見した。鈍くもあるが鋭くもあった。すでに彼の話を咀嚼したのみならず、彼の皮肉以上の代物を歯みしめて、附かず離れずとこしえに彼の跡にくっついて来る。これ等の眼玉は一つに繋がって、もうどこかそこらで彼の靈魂に咬みついているようでもあった（井上紅梅等訳）」死刑処罰直前の阿Qに恐怖を感じさせたのは死より周りの「恐ろしい眼付」であった。祝も阿Qも悲劇的な人物であるが、阿Qと正反対の人物に造形された。「祝」も「恐ろしい眼付」で監視されていたが、阿Qと異なった態度で対応した。土地も持っていない、家も持っていない小作農よりもっと下に位置する阿Qは弱者であり、自分の運命に対して無自覚である。その「食人社会」には生きていけなく、結局悲惨な死の運命に辿った。それにひきかえ、祝は強者であり、「処世上の智慧」を持っている通訳であり、懸命に生き延びようとした。「満洲国が潰れたら、祝はまっ先にやられますな」と自らの運命も予測した。にもかかわらず、こんな祝まで悲劇な死を免れなかった。まさに皮肉的なものである。

魯迅は『阿Q正伝』の中で、愚民としての民衆を徹底して批判し、そのうえでそれを救おうとする。目覚めさせようとする。「祝といふ男」にも日本の国民性を鋭く批判した箇所がある。祝の口を借りて「日系同士が猫のひたひほどのこの土地で、時々縄張根性やら小姑根性をむき出しにしてなぐり合ひをはじめの事」を發いた。また、満人社会の実状を書いたところに「満系達は日本人のやうに相手の弱点を突きあって満人の前で大びらに喧嘩をやるやうなことはほとんどない」と満人と比較しながら、日本人の国民性を批判した。さらに春子は「被抑圧者」の立場に立ち、「それは一見陰険にも狡猾にも見えるけれど、これも永い被抑圧者の生活が教へた智慧かもしれぬ」と満人の行為に同情と理解を示した。それは作者の左翼体験と切っても切れない関係を持っているのではないか。日本の国民性

を批判し、「五族協和」「王道楽土」の現状を素直に書き出し、鋭く指摘した。支配者の日本人達の覚醒も呼び覚まそうとしたと捉えたら言いすぎであろうか。

おわりに

以上見てきたように、祝廉天の内面に立ち入ることは困難である。本論文は中国人の視点からポストコロニアリズム理論を用い、祝という植民地人の正体を検討し、「祝といふ男」の解説を試みた。

日本人には解かれることがない祝の「冷たい化石したような顔」は実際に中国人の立場から考えると、不可解とは思われないであろう。「冷たい化石したような顔」の裏に、正義感や人間性が潜んでいる。それは自分の情緒をよくコントロールできる証にもなるし、相手に自分の心を読み取られないというメリットもある。しかも植民地「満洲」で、祝は心に秘めたものを漏らさないために、被植民者の心境を植民者に読み取られないために、顔を「化石化」したのではないか。それは生き延びるための術であり、動物の保護色みたいなものであると思う。特定の時代にやむを得ず、「もっともさかしい生き方」を選んだに過ぎないのである。

日本人が祝を憎悪した理由はまさに民族差別、日本のオリエンタリズムによるものである。そのオリエンタリズムの暴力で中国人の個別の人格を無視し、集合として、あるいは一つの類型として扱おうとし、植民地の人々の人間性と人間的な経験を蔑ろにした。それに対し、中国人に嫌われたのは祝が満人達の「掩護幕」を取り外したからと作者は書いているが、深層を探って見ると、中国人民衆に嫌われた最も重要な理由は祝が裏切者となった事である。祝は被植民者でありながら、植民者側に協力して同胞を統治していた為、抑圧された中国民衆に恨まれ、憎まれたわけである。中国人たちの「日本人ではない」という可視化された差異が、日本人の植民地支配を脅かした。

また、牛島春子が「満洲」時代に、耽読したドストエフスキー『罪と罰』、魯迅『阿Q正伝』はいかに「祝といふ男」に浸透し、投影されていたかについても明らかにした。

注

-
- ¹川村湊『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 二八九頁
- ²佐藤春夫、横光利一、室生犀星、小島正二郎、瀧井孝作、川端康成、宇野浩二
- ³「祝のいた『満洲・拝泉』」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 三一三頁
- ⁴「祝のいた『満洲・拝泉』」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 三一三頁
- ⁵尾崎秀樹「〈満州国〉における文学の種々相」『旧植民地文学の研究』勁草書房一九七一年 一二七頁
- ⁶大川育子「牛島春子『祝といふ男』論」『昭和文学史における「満州」の問題第一』早稲田大学教育学部杉野要吉研究室 一九九二年
- ⁷原武哲「〈満州〉時代の牛島春子」『近代日本と偽満州国』日本社会文学会 三五九頁
- ⁸尹東燦『「満洲」文学の研究』明石書房 二〇一〇年 一九八頁
- ⁹牛島春子「祝といふ男」『文藝春秋』三九五頁
- ¹⁰牛島春子「祝といふ男」『文藝春秋』三九五頁
- ¹¹小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店 二〇〇一年 viii頁
- ¹²村井寛志「日本のオリエンタリズムと中国」『ポストコロニアリズム』姜尚中編 作品社二〇〇一年 一二四頁
- ¹³牛島春子「祝といふ男」『文藝春秋』三八五頁
- ¹⁴牛島春子「祝といふ男」『文藝春秋』三八八頁
- ¹⁵エドワード・サイード著今井紀子訳『オリエンタリズム』平凡社一九八六年 四二八頁
- ¹⁶村井寛志「日本のオリエンタリズムと中国」『ポストコロニアリズム』姜尚中編 作品社二〇〇一年 一二四頁
- ¹⁷牛島春子「祝といふ男」『文藝春秋』三八五頁
- ¹⁸山室信一『キメラ—満洲国の肖像』中央公論新社 二〇〇四年 二三六頁
- ¹⁹大橋洋一『現代批評理論のすべて』新書館 二〇〇六年 八十三頁
- ²⁰小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店 二〇〇一年 viii頁
- ²¹「祝のいた『満洲・拝泉』」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 三一四頁
- ²²北野民夫『特高と思想検事』みすず書房 一九八二年 四四七頁
- ²³牛島春子「ある微笑」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 二九四頁
- ²⁴牛島春子「ゴルゴタの丘」『ある微笑』創樹社 一九六九年 一七一頁

二. 牛島春子の捉えた「苦力」—水上勉などとの対比に即して

はじめに

日清戦争、日露戦争の勝利は、日本人に誇りと自信をもたらし、中国を再認識させる節目となった。その後、数多くの日本人は中国の地に踏み込み、自らの目で視察したり、旅行したりした。特に傀儡国家「満洲国」が発足して以来、日本人の移民のブームが起こりはじめ、満鉄の招待で「満洲」旅行をした文学者が続々と出てきた。その中には夏目漱石、与謝野晶子のような大作家をはじめ、夥しい数の男女の作家が植民地に赴き、ルポルタージュを書いている。さらに異文化の中で執筆活動を続けた長期滞在の日本人も少なくなかった。

苦力は衰えている中国のシンボルとして、作家達によく取上げられた。苦力は「満洲」の中国人を表象する符号である思われた為、夏目漱石、清岡卓行、遠藤周作、北川冬彦、水上勉といった作家は苦力像を筆を以て描き、彼等のそれぞれの中国観に連鎖していく。牛島春子も苦力達に注目し、異民族交流と苦力統制の方策を模索してみた。日本文学がどのような眼差しで苦力を凝視したかを究明するのは非常に有意義なことである。苦力に関する文学作品研究は極めて乏しくて、近年、石崎等（二〇〇一）「苦力の声—文学者は何を聞いたか」¹古野直也（二〇〇一）「中国幻想（十八）苦力（クーリー）と拝金（バイチン）」²林五郎（二〇〇二）「私の二十世紀 苦力（クーリー）」³谷光隆（二〇〇七）「支那苦力（特に上海に於けるもの）」⁴といった論文がある。これらの先行研究はオリエンタリズムの視線で中国人表象を分析している。「満洲」時代における苦力を扱う一連の文学作品はまだ整理されていない状態である。牛島春子の短編小説「苦力」も無視され、ほとんど論じられていない。本論文は牛島春子の「苦力」を軸に、ポストコロニアリズムの視点で日本人作家が苦力描写に熱中した動機と苦力像に投影した価値観を検討してみる。

（一）文学上の「苦力」表現

苦力とは「〔中国語〕 肉体労働に従事した下層の中国人、インド人労働者。一九世紀、アフリカ・インド・アジアの植民地で酷使された。クーリー」。（『大辞林』第三版）中国語の語彙が日本語として定着していること自体が「苦力」の相当な影響力を物語っている。一九三三年南満洲鉄道株式会社経済調査会により、『満洲の苦力』という本が編纂され、一九三四年再び増補され、出版された。「満洲産業界を一睥する者の何人もが見過ごする事の出来ないものは凡有る産業部門に向って安価な労働力売居る所の彼の漢系満人の不精練労働者、即ち「苦力」の存在である。（中略）、出稼苦力の中には真に素朴にして、しかも、従順其のもの如き者も少なくはないが、多数の中には満洲国の治安を害する虞れのある者が無いとは何人も断言することが出来ない、この意味に於いて今後彼等を如何に取り扱ふべきかは残されて居る大きな問題である」⁵と苦力に注目する理由を明らかにした。即ち、「彼等を如何に取り扱ふべきかは残されて居る大きな問題」と認識し、これを解決するために、苦力に関心を寄せたわけである。その後、一九三七年満洲郷土色研究会

により、苦力の生活ぶりをありのままに描写する『苦力素描』も出版された。作家達が苦力を書く大きな歴史背景が存在している。

苦力は「満洲」の産業を動かす基盤的原動力であり、非常に重要な役目であった。小説家赤川次郎の父親赤川幸一は一九三九年「満洲」民生部社会科に勤めたが、苦力と「満洲」の関係や苦力統制にも注目していた。彼は「東遊記帳」という文章ではそれについて次のように記している。

専ら満洲名物〈苦力〉統制研究に没頭することになった。苦力は如何に満洲国の産業開発の原動力たるか、満洲文化の土台建設を為す者なるかを、ざっと一年近く勉強して遂ひに私は〈苦力と満洲文化〉の相関関係を肯定するやうになった。(中略)、満洲と苦力と文化を並べて一向に不思議でなくなった動機は、労働事情調査の為に、山東省の芝生へ行き、全国の工場を歩き、鉱山を訪れてから切実なものとなった。⁶

赤川は苦力が置かれている過酷な労働条件には無関心で、あくまでも植民地「満洲」を運営するために、苦力を利用し、彼等の労働能力を重視しているようである。

他にも多くの日本文学者が苦力の実態に触れている。たとえば、明治時代に夏目漱石が満洲を訪問した際も、黙々と働く苦力の姿に驚嘆した。「夏目漱石年譜」⁷によると、彼は『それから』を完成した後、一九〇九年九月二日から十月十五日まで胃潰瘍のために体調を崩したにもかかわらず、旧友満鉄総裁の中村是公の招待に応じて「満洲」、朝鮮を旅行している。その時の記録『満韓ところどころ』という紀行文が『東京朝日新聞』（一九〇九年十月二十一日～十二月三十日）に連載された。この『満韓ところどころ』は、漱石文学に於いて傑作とはいえない。九十年代から、ポストコロニアリズム文学批評の流行と共に、漱石が植民地に対するスタンスや被植民者に対する差別的な意識が露出したテキストとして、多くの研究者達に取上げられてきた。川村湊は「大英帝国に対しては卑屈ともいえる態度を取っていた漱石も、「満韓」においてはむしろ傲慢とか高飛車といってよい態度を一貫して取っていたとあってよい。そこに「脱亜入欧」という時代の強い思想的風潮が働いていたと考えもよい」⁸と批評している。一方、泊功は「漱石が〈妙に考へたく〉なったのは、クーリーたちが決して単に〈汚らしい〉上に虚弱なだけの植民地的奴隷などではなく、その昔漢楚興亡のヒーロー韓信をひざまずかせた〈豪傑〉にも通ずる〈得体の知れない恐ろしさ〉を持った〈人間〉でもあったことへの不安なのではなかったか」⁹と違う見解を示した。

漱石は、大連での体験を次のように書き留めている。

船が飯田河岸のような石垣へ横にびたりと着くんだから海とは思へない。河岸の上には人が沢山並んでゐる。けれどもその大分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う沢山塊ると更に不体裁である。余は甲板の上に立って、遠

くから此群衆を見下ろしながら、腹の中で、へえー此奴は妙な所へ着いたねと思った¹⁰

夏目漱石は遠近法を用いて苦力を描写した。最初に大連の地を踏んだ漱石は遠くから苦力を見下ろし、「汚らしい」「見苦しい」「不体裁」という第一印象を持っている。後に、大連の大豆油製造工場を見学したとき、次のように記している。

クーリーは大人なしくて、丈夫で、力があって、よく働いて、ただ見物するのでさへ心持が好い。(中略)

クーリーは実に美事に働きますね、且非常に静肅だ、と出掛に感心すると、案内は、とても日本人には真似も出来ません。あれで一日五六銭で食ってゐるんですからね。どうしてああ強いのだか全くわかりませんと、左も呆れた様に云って聞かせた。¹¹

漱石は苦力をクローズアップして、その作業状況を観察しているうちに、彼等の取柄に気付いた。そこで態度が一変して、「美事に働きます」「静肅」「強い」と表現し、感心した。これは異民族接触でよくあるケースである。次の考察でわかるように、これは日本人が苦力を認識する典型的なパターンであろう。

北原白秋の「満洲地図」には苦力を描写する箇所がある。それは「大連」という節で「満洲」建設の壮図に焼きついた苦力の群れである。

大連埠頭、わらわらと、苦力がいつもたかかります。

潮の色まで大東亜、朝は旗雲なびきます。¹²

大連を訪問した人達にとって港湾労働に従事する苦力達の仕事ぶりは印象深かったらしく、複数の書籍に苦力が登場している。指導教官三木紀人先生は遠藤周作展の記憶により、遠藤周作に「満洲」の大連を書く随筆があり、調べるようにと指示してくれた。神奈川近代文学館の館員のご協力で展覧会の時、展示された遠藤周作の「満洲」関連のエッセーのタイトルがわかった。それはほとんど知られていなかった作品だろう。その随筆によると、遠藤周作は四歳から小学校三年生までの少年時代を「満洲」で暮らし、大連埠頭で働いている苦力の姿は深く記憶にとどめ、四十年後の一九七九年中国改革開放にあたり、大連を再訪した。

大連埠頭には思い出がある。日本から親類が来るたびに何度も両親に連れられて埠頭に迎えに来たからだ。その頃、この埠頭には裸足の中国人苦力が雨にぬれて大きな豆粕の袋や石炭袋をかつぎ働かされていた。子供心にも彼等の表情のない無気力な顔がいたいたしかったが、今、見る埠頭には少くともそのような苦力も誇りのない顔もない。それは私のように共産主義者でない人間にも否定することはできぬ。¹³

幼い遠藤の心にも苦力の「表情のない無気力な顔がいたいたしかった」。遠藤は共産主義翼賛ではないが、日本の植民地時代と比べ、少なくとも苦力がなくなったことがありがたいというコロニアリズム批判の意を表した。苦力のほかに両親の離婚も幼い遠藤の心に暗い影を落とした。これらのトラウマは遠藤の性格形成に決定的な影響を及ぼし、彼の文学創作の原風景となっている。遠藤は次のように打ち明けている。

(前略)、私の大連の思い出は半分は明るく、半分は暗く憂鬱である。明るい思い出は四歳の時、大連に両親と来て小学校三年まで続く。そしてその小学校三年になった頃から両親が不和になり、父と離婚を決心した母が兄と私とを連れて日本に戻るまでは暗い追憶しかない。(中略)、思えば今日の私の性格は大連時代の暗い日々で作られたのかもしれない。¹⁴

遠藤周作と同じ風景を眺めたもう一人の日本人はモダニズム詩誌『亜』の同人北川冬彦である。彼は大連埠頭の苦力を描く意味深い詩がある。

萎びた一本の腕で一豆粕の層が肩の上から片側に陰をつくってゐるからいいものの、強烈な太陽に曝されたもう一方の側は、油汗と埃とで固まって、これはたしかにわたしの顔なのだが、どうしたって他人の顔としか思はれないんだ。胸へは、蚯蚓の這ふやうに汗が流れてくる。わたしの鞆先が、そいつがやぶれてゐたために、汽船へ渡してあるふみ板の節穴に引っかかった。¹⁵

北川冬彦は苦力の作業中のつらさをリアルに表現している。苦力の本当の顔が「油汗と埃とで固まって」いるので、「他人の顔としか思はれない」。一般的に思われる苦力のイメージは彼らの本質に即していないという認識によるメタファーが入っていると考えている。「油汗と埃とで固まっ」た仮面を取り外したら、暖かい人間性が溢れてくるのではないだろうか。近代になり、引き続き、「満洲」の風物詩苦力を伝承しようとしたのは川村湊である。『満洲鉄道まぼろし旅行』では、「満洲の底力」と苦力を位置づけ、「大連の港で、こうした重労働に従事している人たちは、「苦力」として、劣悪な労働環境のもとで差別的な扱いを受けてきた」¹⁶ことを明言し、「苦力」の問題は満洲産業界の大きな社会問題であると指摘した。

一九八八年、水上勉は四十八年ぶりに「家内や子供にさえくわしくはなしていない自分だけの四十八年前のあの時代へ、自分は自分なりに立ちもどって、わすれたままになっていることや、意識してわすれようとしてきたことなどの詰まっている満洲時代の空白部分を、この際にたしかめておきた」く、瀋陽の地に踏み込んだ。「苦力監督見習」として苦力達と接触した。それは水上が「意識してわすれようとしてきた」ことであろう。

物乞いしていた失業者の風体そっくりだった。略、夢精髭を生やした陽焼け顔は誰も
のことで、一週間は風呂へ入らないカサカサの首すじだし、すぎんだ掌は、子供の爪ぐ
らいのあかぎれが切れ、履き物もなくはだしで、ひとりふたりは破れ布靴だったかと思
う。略、文盲者が多かった。¹⁷

水上の目に映った苦力像は乞食同様に汚くて文盲である。日本人監督は苦力を畜生扱い
をし、さんざん暴力を振るっていたが、当時、十九歳の少年水上は良識があり、柔らかい
態度をとっていたため、苦力達は喜んでいて、水上に家の状況を尋ね、交流しようとした。
しかし、うまく苦力達をコントロールできなかった。

周知のように、水上はドラマチックな人生を歩んでいた。彼は福井県大飯郡の貧しい家
に生まれ、厳しい環境の中で育てられた。貧困で十歳の時、寺院の僧侶となるべく修行に
入り、あまりの厳しさとで十七歳で還俗した。その後、菓の行商、役所勤め、労働者の監督、
出版、編集業、代用教員、洋服の訪問販売などを経て、一九六一年『雁の寺』で直木賞を受
賞し、作家として日本文壇に登場した。水上は苦力のような貧困な生活を忍んできたので、
苦力の立場と似ている。「満洲」に渡った十九歳の水上は苦力の苦痛をよく理解していた。
水上は植民者の責任と贖罪への意識を『瀋陽の月』で「あの夜かくれて見えなかった月が
四十八年目にのぞいたのだった」¹⁸と表明した。月を見る目は時代に曇らされていて、月
日の積み重ねによって、ようやく全体像が見えるようになった。当時、植民地「満洲」の
真相を見極めることができなかったが、今日になって、やっと再認識できた。「正直なとこ
ろぼくは、国策会社という名の御用商人の傘下で、ムチをもって寒空の苦力をこき使った
仲間のひとりなのだ。中略、苦しい仕事はやりきれぬとぼやきながら、ムチをもって、苦
しい人の上にあぐらをかいていた者の一人だ」¹⁹と水上勉は自らが苦力を酷使したことを
反省し、中国人の苦力に対する自分の所業への悔恨などの複雑な気持ちが小説の中に書き
込んでいる。

宮尾登美子『朱夏』²⁰にも類似的な苦力描写が見られる。ヒロイン綾子の目に映った苦
力は「大蒜を常食する」上に、「入浴の習慣がない」ゆえに、臭くて「骨の髄からしみ込ん
でいる」。綾子は「鼻を覆いながら彼らの顔を飽かず眺め」、「皆おなじようにのっぺりと無
表情で目はとろんと霞んでおり、悲しそうでも嬉しそうでもない風情」(六十頁)と不思議
に思っていた。綾子は鼻を覆い、苦力を軽蔑しているが、同情の涙も出て「可哀相に」感
じていた。周りの日本人は矜持を持って「彼らに近寄らず話題にもせず、無関係のまま暮
らしてゆく」。(六十三頁) 苦力達が人間扱いされず、「怨みの視線は感じられないものの、
替りにすわ、とばかり何か事を起こしそうな不気味な気配が感じられる」(六十三頁)とい
う。「満洲」のヒエラルキーの頂点に立っている日本人でさえ「五族協和」の真実を疑い、
被植民者の反抗といった脅かしを察知し、怖がっていた。

ラカンの鏡像理論に添って検討すると、中国苦力は日本人を映し出す鏡のような存在と

いうことになる。日本人優越のアイデンティティを再認識させる「他者」として書かれてきた。苦力は「満洲」記号の一つになり、深く「満洲」文学作品に浸透し、研究者にとって避けられないテーマとなっている。日本の文学者の目に映った苦力の第一印象は油汗と埃まみれで見苦しいが、近づいていくと、強くてよく働く一面が見られるし、暖かい人間性も持っている。このような苦力は「満洲」産業を支える不可欠な原動力であるため、どのように彼らを統制すべきか、「満洲」時代に、文学者たちはそれぞれ関心を寄せていたわけであろう。

(二) 牛島春子の試み—人間同士の異民族交流

牛島春子も「満洲名物」と言われる苦力達に注目し、異民族交流と苦力統制の模索をした一人である。「苦力」は牛島春子が一九三七年十月『満洲行政』（第四巻十号）に発表した小説である。一九三四年主人の牛嶋晴男は大同学院に入学する前に、春子の姉婿鈴木春造に頼り、「満洲」の錦州に渡った。そこで中国人労務者の監督をした。その実体験を「苦力」に、書き込んでいる。そのことに関する裏づけとして、川村湊のインタビューが残っている。「私の姉婿が軍人で新京にいましてね。苦力なんか使っていたんです。そこに晴男さんが頼っていったんです、私のツテで。」²¹前述した苦力の声がない文学作品と異なり、牛島春子は苦力を群れとして、遠くから眺めるのではなく、一人一人をクローズアップし、個性のあふれる描写は独特である。しかも、単なる傍観者として苦力の様子を書くだけでなく、彼等の声をとらえていることが魅力的である。

牛嶋晴男をモデルとする野村新二は「垢光りのした制服に、穴の明いた角帽を被って」やってきた。六人の常雇苦力と初対面の時、苦力の「垢と脂で煮メたやうな着物を着て、あばたの顔や、そっぱの顔が他所々々しい睨むやうな目付」を感じ、「傍に寄って行くと、ムンとへどの出そうな臭ひがした」。汚い、見苦しい、冷たい、臭いという苦力像が鮮明に現れてくる。苦力への第一印象は夏目漱石の表現と似ている。学生気質がまだ抜けきれない野村でも、オリエンタリズムを思わせる眼差しで苦力を凝視し、軽蔑している。『瀋陽の月』で、苦力監督見習の「ぼく」は受け身的にやる気がなかったようである。

苦力たちには、ぼくのやる気のなさは喜ばしいことに違いないが、ぼくの無気力さを逆に心配してくれて、息子でも見る眼で、通じぬ言葉ながら、日本に親がいるのか、親は何をしてくらしているのかと、しつこくたずねる煙草くさい年輩苦力もいるのだった。(一三八頁)

このネガティブな水上勉と異なり、野村は積極的に「王道楽土」を実現する夢を持って苦力監督の仕事に従事している。野村は「苦力なんかを、まともな人間だと思ったら大違ひでさ。あいつらにや後からピストルをつきつける位に」するようにとほかの日本人に注意されることを思い出した。しかし、野村は人間扱いされていない苦力を暴力なしで使い

こなそうと決心した。すると、野村は学生から軍人に変身し、「満洲」という接触空間において、中国人苦力との異民族接触が始まる。『人間の条件』の主人公梶を想起させる。梶は正義感や責任感を持っている人間性豊かな人であるから、ほかの日本人と違って、炭坑で労働している中国人を人間扱いをしようとした。結局、中国人を庇おうとすることで日本人たちに仲間外れされてしまった。中国人も彼のことを誤解して、信じていなかった。『瀋陽の月』の苦力達も「戸波の不在の時はきまってぼくを軽視し、足音させても積藁にかくれて出てこないことがある。」(一三七頁)と記されるような存在であった。

さて野村の場合は成功できるかストーリーの展開とともに明らかになる。

苦力たちは「石炭の粉や貨物からまひあがるごみで」汚れた空気の中で「無表情な顔つきでさっさと仕事をしていた」。過酷な労働条件を凌ぎ、「苦力達は最初つから野村に無愛想で、親愛の情をしめそうとはしなかった」。最初のごろ、苦力達はまた前の監督と同じように残酷に使われるのではないかと心配し、野村に嫌悪を感じていたらしい。野村はインテリであり、苦力達を納得させながらやっといこうと決心していた。野村は日本語がわかる一人の苦力を通じ、命令を伝え、彼等の過失を大目に見て、寛大な態度を取っていた。言語の壁を越えなくては異民族交流は成り立たない。根本的には牛島春子は常に弱者に同情の視線を投げていく。これは彼女のプロレタリア政治運動体験と切っても切れない関係があるといえよう。牛島春子も中国語というツールを用い、底辺に位置している中国人百姓と親しくなったという。「私の童話」で次のように述べている。

私はまめらぬ満語でだけどいろいろな人達とよく話した。もともとあまり社交的な女でない私は乏しい満語を使ひ果して立往生してしまったり、意味が通せず間の悪い思ひをしたりしたこともたびたびだったけれど、農家の子供やお婆さんや姑娘はみんな本当に気持ちよく私にしたしんでくれた。

私につかへてくれた藪にらみのボーイも、鼻のもげた県公署の馬夫も、ひげの先に氷の玉をびっしよりつけて水運びをしてくれる、水汲みも、みんな私の友達であった。²²

休憩中、野村が熱心に中国語を勉強しているところを見ると、苦力達は「口を尖らせて教へるやうになった」。それで、前の監督から引き継いだ苦力達との間にあった障壁が自然に取り除かれてしまった。苦力達に近づくと、「汗と垢に汚れた顔のどれにも、その臭ひから野村のもってゐるのと同じやうな、あの清新な輝いた若さが、丁度涙の中から沁み出てゐる清水のやうに清冽にのぞけてゐるのである」。野村と同じく人間性、純潔な魂を持っている苦力像が次第に鮮明になってきた。

このように異民族接触によって植民者が「偏見」を再認識するケースは「満洲」時代にしばしばあったものである。女性作家望月百合子も類似した経験を持っている。『青年文化』第一巻第三期に望月百合子の評論「在満日系女性談」を載せた。彼女は広東人と偽装し、北京の青年学生の中に混入し生活した。それをきっかけとして、中国人に対する見方がす

っかり変わったという。「以前、我对中国人的想法，未曾从侨居日本的中国奸狡商人的观念脱离过；所以有时感到轻蔑，也有时觉得恐怖；一些没有与中国人接近的意思。可是待至住在周围全是中国人的古都北京后，才察觉自己以前的看法是多么浅薄，而觉得有些可耻，于是我发现中国人才是可信赖的国民，比任何国家的国民都可亲近。」（以前、中国人に対する見方は日本に住んでいる狡猾な中国商人というイメージから離れなくて、軽蔑したり、恐れたりして、中国人と接近したくなかった。身の回りがみな中国人の古都北京に住んだら、今まで自分の見方がどれだけ愚かかに気づいてきた。ちょっと恥ずかしく感じている。中国人こそ信頼できる国民であり、ほかのどこの国よりも親しみやすいと思う）²³百合子はほかの日本人女性と異なり、オリエンタリズムの視線から離脱し、中国人との接触を通じ、本当の中国人を理解し、信頼できる国民であると高く評価した。

しかし、いくら親しくなっても、日本人は植民者の身分が変わらず、ある種の矜持を持ち、自ら「指導民族」と称し、被植民者を教化しようとしがちである。労働を強化し、効率を上げ、「戦時給養」に協力する一方、人間以下の扱いしか受けていない植民地の奴隷に人間的に対応する試みをしている。野村は遅刻した横柄な苦力に容赦なく、やはり前の監督と同じように、激しく殴りつけ、暴力で事件を解決した。そこから、ある限界が否認できないであろう。野村の「温情主義」はただ苦力をうまく操る手段の一つである。本気で苦力達の身になって、救う気は全然なかった。「満洲」時代の日本人はコロニアリズムの本質を見極めなかったゆえに、苦力を強制的に働かせるのがいかに人権侵害であるかを認識できなかった。「満洲」における望月百合子の女性教育の構想も「若い娘達に良き妻となり良き母となるための技術と心と肚を磨くことを目的にし」た、「云はば女性道を磨く道場のやうなもの」（「空の教室にて」）²⁴に変容し、戦前、戦後の日本の娘達に呼びかけたものとは異なっていた。やはり植民者として植民地の中国人女性を教化し、日本帝国主義に奉仕することになった。そこでフェミニストとしての限界が現われている。彼女のフェミニズムはコロニアリズムに吞まれ、ナショナリズムが優先にされた。

それに対し、中国人が麻痺し、植民地支配を当たり前のように甘受し、反抗しなかった状況も文中から読み取れた。「一人前の苦力頭のやうにあれこれと指図を始めた。今まで自分達が野村に云ひつけられてゐたのとそっくりの調子を真似て命令してゐる様子が野村には可笑しくて堪らなかつた」。苦力頭は苦力達と同じ立場であるものの、全然気付かないうちに、日本人植民者の戦時給養に貢献している。この点においては魯迅『阿 Q 正伝』の中の阿 Q、「王属官」の中の農民達と似ていて、いずれも愚かで情けない中国民衆の象徴である。魯迅は『阿 Q 正伝』で「哀其不幸，怒其不爭」（彼等の不幸に哀しみ、彼等の従順に怒る）という心境を訴えたが、牛島春子はただ同情にとどまった。最も滑稽なことに、苦力頭は日本人をまねて振舞っている。支配者の日本人に憧れ、なろうとしていたが、なれるわけがない。野村が西瓜を売る中国人に騙される時、苦力達は立ち上がって、野村の味方になって、庇っていた。野村の「温情主義」に心が打たれた苦力達はすっかり民族の壁を越えたようであるが、実質的には植民者と被植民者の位置関係は変わらない。野村は自

己満足し、苦力達に庇ってもらって、「幸福に感じ、これ以上何も欲しくない」という気持ちさえ持った。

中国人は日本人を真似し、敵から友にシフトする例はほかにもあるようであるが、小泉菊枝の『満洲人の少女』の主人公李桂玉もその中の一人である。『満洲のモダニズム』によると、「小泉菊枝は海軍主計軍人の夫とともに一九三五年満洲に渡り、同地での生活を綴っては東京の友人に知らせ送っていた。『満洲人の少女』はそのうちの一編で、一九三六年から一九三八年にかけて『満洲少女』のタイトルで、雑誌『まこと』に発表された。小泉は熱心な法華経信者であり、日蓮主義の在家団体である国柱会に参加していた土光節子、美子姉妹らと、若い主婦を中心とする法華経の研究会、まこと会を結成している。『まこと』はその機関誌だった」²⁵という。『満洲人の少女』（月刊満洲社 一九三八年十二月三〇日）は日本人の主婦とお使いの十四歳の中国人少女と過した日々を記録したドキュメンタリーである。「満洲」服よりも和服のほうを好んでまとうようになる李桂玉の変化は、反満抗日思想を身につけた桂玉が自己の出自を否定し、日本の「満洲国」に対する優位性を受け入れた経緯である。結局、少女はそんなに大きくならなかった悲惨な運命に辿った。再びバーバの「擬態とアンビバレンス」論理を呼び込むことになる。「植民地教育を受けた現地人は支配者の言語を巧みに繰り、「教養」を身につけたエリートとは植民地支配者の擬態、すなわち「ほとんど同じだが完全ではない」状態にあった。植民地教育を植民地の被支配者は帝国の中心に存在すると想像した真正なる支配者の像を、延々と擬態しつづけなければならず、しかし、決してその像と同一化することはできない」²⁶という。あんな時代を生き延びた苦力頭は日本語ができて、エリートとは言えないが、野村の様子を模倣し、自分も苦力達と同じ立場であることを意識できなかった。まさに皮肉な存在である。

また、野村と苦力達の目に入った「有名な満人の私娼窟」の様子に触れている。「満洲」ヒエラルキーの中に、苦力達より階級的にもっと下に位置する売春婦がいる。彼女たちは「鉛色の白粉を塗って、ピラピラした人絹の着物を着た女達が交ってゐて、疲れたやうなまなざして野村たちを見上げてゐる」。生き延びるために、女の肉体で異民族か同族の男と「交流」している。このようなサバルタンたちはセクシュアリティのほかに、「交流」の術はなかったことが伺える。水上勉は『瀋陽の月』で異国で出会った優しい娼婦に対する特別な感情を示したが、牛島春子はただ「満洲」の疲弊を取上げることにとどまり、悲惨な中国人女性の声を聞こうともしなかった。

最後に、野村は賃金など苦力達の待遇を高める方法を「楽しい気持ちで考えた」。異民族交流はこれでスムーズに進行していくようである。苦力達は結局、野村の「温情主義」によって感化され、同化されるハッピーエンディングになった。このように、人情味あふれ、公正賢明な日本人官吏像を樹立し、作品は完結した。牛嶋晴男の官吏としての活動に牛島春子は「内助の功」を果たしたといえよう。「王属官」「祝といふ男」「雪空」「牝鶏」といった初期の作品は夫の牛嶋晴男の為政を支える傾向が強かったと思う。

おわりに

衰弱している中国の象徴として、作家達はよく苦力を描いている。中国苦力は日本人の意識を映し出す鏡であり、日本人のアイデンティティを再認識させる「他者」として書かれてきた。日本の文学者の目に映った苦力像は群れで行動する、汚くて貧乏であるが、接近していくと、強くて暖かい人間性を持っているに気付いた。その上、苦力は「満洲」産業を支える不可欠な原動力であるため、どのように彼らを統制すべきか、そのような問題を念頭に置きつつ、「満洲」時代に、文学者たちはそれぞれ苦力の内面を見極めようとしたのであろう。

牛島春子の「苦力」は前述の作家達の「苦力」描写と比べると、ヒューマンイズムのエレメントが織り交ぜられ、「苦力」を語らせることがユニックに感じられる。異民族交流に成功したように見えるが、それは日本人の錯覚に過ぎないと思われる。実際には植民地構造における位置関係は全然変わらなかった。第Ⅱ部第一章第二節で詳しく論じたように、牛島春子は野田宛の書簡で自分の信念を明らかにした。「ヒューマニティといふ言葉、私はかつてこれを人に向かって口にしたことはありませんでした。私はこの言葉を安易に使いたくないのです。最も高貴なもの謂いだそれは思います。略、この言葉を大切な宝としてしまいこんでみました。私がこういふことを考へはじめたのは十四位の時からでせう。私の世俗的なものへの反逆もその頃からはじまったのですが。私があんな思想運動に入ったのもそのためなら、それからぬけ出したのもそのためですし、今度の戦争もそういふ面から理解し肯定しようと四苦八苦をしましたが、何時でも何処でもさして不安を感じないのは私なりにこの宝を抱いてあるからだと思っております。これから先も、私はこの言葉を周囲の人に安易に口にすることはないだろうと思っております」²⁷。牛島春子は矛盾の統一体であり、分裂している。彼女は苦力といった大衆にヒューマニスティックな愛と軽蔑を共に抱えている。自分の性質について『手記—青空と自殺』で次のように書き留めた。「愛と嫌悪、愛と軽蔑を同時に感ずる事もある。むしろそれらの場合の方が多いかも知れない」²⁸。

結局、植民者としての牛島春子には限界があり、暴力を振るわずに温情を施したのは苦力を救うためではなく、うまく苦力を操るためである。それは「民族協和」の「王道楽土」の国策宣伝にもつながっていく。牛島春子も水上勉と同様、「満洲」時代、覆い隠された「月」がはっきり見えなかったに違いない。

注

- ¹石崎等「苦力の声—文学者は何を聞いたか」『立教大学大学院日本文学論叢』二〇〇一年三月 九～三十三頁
- ²古野直也「中国幻想（十八）苦力（クーリー）と拝金（バイチン）」『月刊日本』二〇〇一年十一月 一二六～一二九頁
- ³林五郎「私の二十世紀 苦力（クーリー）」『民主文学』二〇〇二年三月 一四七～一四九頁
- ⁴谷光隆「支那苦力（特に上海に於けるもの）」『愛知大学国際問題研究所紀要』二〇〇七年九月 二二五～二三九頁
- ⁵南満洲鉄道株式会社経済調査会編『満洲の苦力』南満洲鉄道 一九三四年
- ⁶赤川幸一「東遊記帳」『北窓』第一巻 第二号満鉄ハルピン図書館一九三九年七月 三十六頁
- ⁷三好行雄「夏目漱石年譜」『夏目漱石事典』（別冊国文学）学燈社 一九九〇年七月 三九四頁
- ⁸川村湊「〈自己嫌悪〉としてのアジア観」『漱石がわかる』朝日新聞社 一九九八年 一〇六頁
- ⁹泊功「夏目漱石『満韓ところどころ』における差別表現と写生文」『函館工業高等学専門学校紀要』四十七号 二〇一三年 八十七頁
- ¹⁰夏目漱石「満韓ところどころ」『漱石全集』岩波書店 一九九四年 二三四頁
- ¹¹夏目漱石「満韓ところどころ」『漱石全集』岩波書店 一九九四年 二六六～二六七頁
- ¹²北原白秋「満州地図」『童謡集』一九八七年 岩波書店 一八七頁
- ¹³遠藤周作「クワッ、クワッ先生行状記」『小説現代』一九七九年九月 五十三頁
- ¹⁴遠藤周作「クワッ、クワッ先生行状記」『小説現代』一九七九年九月 五十四～五十五頁
- ¹⁵「北川冬彦集」『現代日本文学大系』六十七 筑摩書房
- ¹⁶川村湊『満洲鉄道まぼろし旅行』文春文庫 二〇〇二年七月 三十二頁
- ¹⁷水上勉『瀋陽の月』新潮社 一九八九年 八十八頁
- ¹⁸水上勉『瀋陽の月』新潮社 一九八九年 一七六頁
- ¹⁹北原白秋「満州地図」『童謡集』一九八七年 岩波書店 九十八頁
- ²⁰宮尾登美子「朱夏」『宮尾登美子全集』第三巻 朝日新聞社 一九九二年
- ²¹「〈満洲文学〉から〈戦後文学〉へ—牛島春子インタビュー」『戦後という制度』インパクト出版会 二〇〇二年 一〇八～一二五頁
- ²²牛島春子「私の童話」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 九十八頁
- ²³望月百合子の中国語の作品である。筆者訳
- ²⁴望月百合子「空の教室にて」『大陸を生きる』大和書店 一九四一年
- ²⁵小泉京美『満洲のモダニズム』ゆまに書房 二〇一三年六月 九四九頁
- ²⁶小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店 二〇〇〇年 viii頁
- ²⁷一九四六年十一月十九日牛島春子野田宛の書簡
- ²⁸牛島春子『手記—青空と自殺』自家版 一九三八年 二十五頁

第三節「ある旅」に見る引揚体験と表現

はじめに

二〇一四年十一月、筆者は舞鶴引揚記念館に足を運んだ。引揚体験を論じるには、言うまでもなく、まず「引き揚げ」とは何かから考えなくてはいけない。舞鶴引揚記念館の資料によると、「1945年第二次世界大戦の終結にともない、当時海外に残された日本人は660万人以上ともいわれ、これらの方々をすみやかに帰国させなければならなくなりました。これを“引き揚げ”といいます」。第二次世界大戦前は「軍港の町」であった舞鶴は、戦後「引き揚げの町」として有名になった。敗戦に際し、海外に渡った軍人、軍属、民間人は日本への帰還を迫られた。舞鶴は博多や浦賀と共に、それらの「引揚者」を受け入れるために政府が指定した引揚港の一つとなり、主に「満洲」などからシベリアへ連行された日本兵を受け入れる港であった。「昭和20(1945)年10月7日引き揚げ第一船の入港から昭和33年(1958)9月7日最終船まで。実に13年間の長きにわたり、その使命を果たしました」(舞鶴引揚記念館資料)また、舞鶴港に引き揚げてきた人は六十六万四千五百三十一人である。そのうち、福岡県は二万八千八百四十人がいた。牛島春子もその中の一人であった。

川村湊は『満洲国一砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』(二〇一一 現代書館)では、引揚文学を次のように位置づけている。「満洲からの引き揚げの苦難の記録や文学作品は、枚挙のいとまがないほどだ。ある意味では、日本の戦後文学は、こうした満洲や朝鮮や台湾などの〈外地〉の植民地からの引き揚げ者や、前線や軍隊からの復員者によって作り上げられた文学であったといっても過言ではないかもしれない」¹引揚派作家として安部公房『けものたちは故郷をめざす』宇野鴻一郎『野性の蛇』水上勉『瀋陽の月』木山捷平『大陸の細道』橘外男『神の地は汚された』宮尾登美子『朱夏』清岡卓行『アカシアの大連』三木卓『われらアジアの子』石沢英太郎『つるばあ』新田次郎『望郷』藤原てい『流れる星は生きている』が取り上げられている。このように戦後、さまざまな引き揚げ作品が書かれ、何度も注目されてきた。「引き揚げ文学」はほとんど加害者が犠牲者に変身する一種倒錯した世界の物語なのである。川村は「これらの作家、作品には、国家や政府といった権力に対する否定や嫌悪、不信を表明していると思われるものがあり、満洲の引き揚げ体験がそうした文学精神の基となっている」²と指摘している。

引揚者の問題は複雑である。そしてその複雑さは植民地と植民地主義の複雑さに由来している。引揚者は棄民でもあり難民でもあるが、「引揚者」と命名された瞬間に問題の本質がぼかされてしまう。坂岡庸子「満洲からの引揚体験」(二〇一一)は「満洲への移動は、集団移住でも、個人の意志決定という選択の余地はあった。しかし、引き揚げは、敗戦による満洲国崩壊の結果であり、選択の余地はなく、強制移動である」³と指摘し、福岡県生まれの溝口節の引揚体験をリアルに記録している。「引き揚げ」は彼女たちの長い生涯のごく短い一時期の様態を示すにすぎないが、引揚者にはそれ以前とそれ以後の生涯がある。一言で「引揚者」と呼ばれる人々は複雑な集団である。牛島春子のように、「引揚者」と呼ば

れる以前、彼女は植民者と官僚夫人であり、帝国主義の実践者であった。他方では彼女は日本内地から疎外された逃亡者であり、新天地を求めて「王道楽土」のイデオロギーを真剣に受け入れた人であった。したがって、引揚者は植民地に出かける前の日本内地との関係、帰ってきてからの戦後日本との関係、さらに引揚者同士の関係を統合的に考慮に入れてはじめて「引き揚げ」の全容が見えてくると思う。引き揚げは植民地主義が生み出した後遺症であり、人類史上前例のない人口大移動である。近年、成田龍一（二〇〇六）「〈引揚げ〉と〈抑留〉」⁴は日本の引き揚げ事業を総括的に論じ、藤原ていの「責任感」、牛島春子の「解放感」、望月百合子の「日本人の分裂」とそれぞれ引揚げ体験をまとめている。個人研究としては西川祐子（二〇一四）『八木秋子日記』に幻の引き揚げ小説をさがして⁵は『八木秋子日記』から八木の移動年譜を作り、八木が残した「満洲引き揚げ」手記の主題は永嶋暢子の死と息子健一郎の死であると指摘している。それによると、「満洲」女性作家八木秋子は戦後引き揚げて母子寮の寮母をし、表立った活動はしていなかった。戦後、約四十年間をほとんど沈黙のうちに過ごした後に、一九八三年亡くなったという。

一方、同じく「満洲」女性作家として活躍した牛島春子は八木秋子と正反対の行動を取っていた。春子は引揚げた直後、続々と「満洲放浪記」を書いたが、牛島春子の引揚げ体験の全容はまだ究明されていないままである。言うまでもなく、引揚げ体験は決して一様に語れない、多様で複雑なものである。コロニアリズムの真ん中にいた牛島春子はいかに敗戦を受け止めたか、作品中語れなかったことは何か、また、内面化された植民地主義からいかに脱構築したかといった問題を念頭に入れながら、本論文は実地調査に踏まえ、牛島春子が野田宛の書簡と照らし合わせ、彼女の詳細な移動ルートを整理し、牛島春子の「満洲」引き揚げの主題を詳しく検討してみる。

一. 牛島春子の引き揚げ体験

誰にでも忘れられない風景がある。牛島春子にとって、葫蘆島から引き揚げ船が離陸する前に見た風景は生涯頭に焼きついて消えなかったものである。春子のエッセー「引揚者の絵葉書」⁶でその「風景」を描き出した。「私は健忘症でありたいし、楽道家でありたい。私は私が受けてきたさまざまな体験や苦しみはもう何一つとして思い出したくない。けれど、この美しく、そして哀しいコロ島の船出前の風景だけは、絵葉書のもつ非情な、静止のそのままの状態、私の脳裏に貼りつけて消え去ることがない」⁷。中国遼寧省社会科学院の研究員張志坤らは論文「1946年葫蘆島百万日本侨俘大遣返始末調査」⁸（「1946年葫蘆島から百万の日本人の引揚に関する調査」）で葫蘆島からの引揚を詳細に考察した。それによると、「1946年1月5日、中美在上海召开第二次遣送日侨俘会议，对东北日侨俘遣返作出实质性的安排与部署，美军总部日侨俘遣送组长魏特曼上校提出：『关于满洲之组织，至少需使用两港口，其一预计为葫芦岛，若获得允许，另一港将为大连。尤有进者，吾人希望于沈阳成立一美军输送总部，该地区亦需有一中国之机构，华军（指东北民主联军）于哈尔滨、长春及齐齐哈尔，亦需设立遣送队，俾使日人按时自内地移至港口区，实为必要」。〔1946年

1月5日、中米両国は上海で第二次在留日本人送還会議が開かれ、東北地方に在留している日本人の送還について、実質的な手配ができた。米軍総司令部日本人送還組長ホイットマン少将が提議したが、「満洲に関しては、少なくとも二つの港湾が必要とする。その候補の一つは葫蘆島にする。許可されるなら、もう一つは大連にする。できれば瀋陽で米軍輸送本部を設立し、同時に中国側の関連機構も必要とする。できたら、華軍（東北民主連軍）はハルピン、長春、チチハルに送還隊を設立し、在留日本人を内陸から港湾まで時間通りに移動させることを必要とする。」中国遼寧省の南西部に位置する葫蘆島は三面が海に面し、北部は大陸と繋がっている良港である。民国時代、張学良はそこで港を建設を計画したが、「九・一八事変」で中止させられた。舞鶴引揚記念館のパネルによると、葫蘆島港は「中国の錦州湾に面しており、昭和十一年（1936）頃より、日本軍が旧満洲の石炭を日本へ運ぶために築港するも未完成のまま終戦を迎えました」。このように、まだ建設中の港は戦後、百万以上の日本人を送還する有名な所になった。「一般人の日本への帰国は昭和21年（1946）5月7日から昭和23年（1948）9月20日の2年4ヶ月で、1051047人（舞鶴港への引揚げ111481人）の日本人が帰国しました。」（舞鶴引揚記念館パネル）また、張の論文に載っている「東北地区日侨俘遣送计划表」（五十一頁）を参照すると、引揚げは五期に分けられた。牛島春子のいた瀋陽からの移動は第一期に決定され、大連は最も遅く、第五期に指定された。その忘れがたい葫蘆島にたどり着くまで、牛島春子は三児をつれ、戦乱の「満洲」で一年の放浪生活をしていた。ソ連軍参戦で牛島春子は疎開列車に子供三人と乗り、時代に翻弄され、やむを得ぬ「旅」に発つことになった。その引き揚げのルートを詳しく記録したエッセー「感傷の満洲」は、次のように書かれている。

昭和二十年八月十五日を私と子供三人とは営口でむかえた。ソ連軍が近付いているので、三、四日のあとには新京は市街戦になるだろうというので、夫の勤務先であった協和会本部から指示をうけて、新京を離れることになったのは八月十一日頃だったと思う。そのとき長男は六才、二男は二才四ヶ月、三男は十ヶ月であった。夜が明けて列車は南に走っていたが、何処に行くのかわからなかったもので、引率者らしい人を探し聞いてみると、その人も知らない、多分北鮮の方では、という。それで私は奉天に着くと、すぐに私だけ疎開列車から降りた。同じ苦勞するなら、棲み馴れた満洲で、と思ったのである。そして、電々に勤めている友人の母子と営口に行ったのだった。

終戦後も二、三日は事もなかった。けれどある日突然、日本人居留民は六時間以内に営口を退去しなければ銃殺にするというソ連軍の通達が流されてきた。（中略）、大石橋駅で私は再び友人母子と出会い、一緒に奉天の彼女の社宅に帰ってきた。そこで私たちは髪を切って男装した。時々ソ連兵がやってくるのだった。十日位経ってだったと思う。治安も収まってきて、五人以上の団体ならば乗車できることになったので、私は見知らぬ仲間四人とも組んで新京行きの汽車にのった。（中略）、新京のわが家に帰りついたが、そこはソ連軍と日本人の双方に荒されたそうで、ほとんどなにもない、といってもよか

った。それから二十一年七月奉天から引き揚げるまで、子供三人連れての放浪に近い生活がはじまった。⁹

このように新京→奉天→営口→奉天→新京→奉天→葫蘆島の経路で、転々と移動させられた牛島春子は一九四六年七月、舞鶴に上陸した。彼女の引き揚げ体験について、「年譜」は「七月、春子と子供三人は奉天を離れて引き揚げ船（マーキンネー号）で舞鶴港に上陸し帰国」とあり、具体的に記されていない。二〇一四年十一月、筆者は舞鶴引揚記念館での資料調査を通じて牛島春子の引き揚げの時期とルートがだいたい把握できた。牛島春子は一九四六年七月十一日、東京の野田に葉書を出した。「帰へりついて十日やっど人心地がついて来ました」という葉書の一文から牛島春子は一九四六年七月一日に、引き揚げてきたことがわかった。それに一九四六年八月十四日野田宛の書簡で「舞鶴で上陸」したことを記録している。「舞鶴入港の引揚船一覧表」¹⁰によると、当時「満洲」からの出港地は葫蘆島と大連である。敗戦時、「満洲」に一七〇万人の日本人が残された。牛島春子はその中の一人である。舞鶴引揚記念館のパネルによると、「ソ連の侵攻により、開拓団の男達の大半が現地召集（根こそぎ動員）となり、残った老人と婦女子は自殺用の青酸カリを持たされ、悲惨極まる逃避行でありました」。それに、終戦時、武装解除された日本軍人は、シベリアなどへ抑留生活を強いられた。葫蘆島から引き揚げてきたのはほとんど女性と子供であった。牛島春子は営口で敗戦を迎えたが、一九四六年六月二十六日或いは二十七日に葫蘆島から三人の子供をつれ、アメリカの船に乗り、四～五日かかって、黄海、東支那海、日本海を渡って、七月一日に舞鶴西港に上陸したと推測している。舞鶴引揚記念館の学芸員によると、当時、船から小さいボートに乗り換え、長い栈橋を経由して上陸した。岸壁で待っていた各県の人達の歓迎の声の中でバスで移動された。

続いて、牛島春子は如何にこれらの経験を受け止め、語ったか、また、如何に小説で表現したかなどについての問題意識に基づき、牛島春子ならではの引揚文学の主題を考察してみる。

二．牛島春子が残した「満洲引き揚げ」の主題—ロマンチズムと人間性

「満洲放浪」は牛島春子にとって、新鮮で活気あふれているロマンチックな一時期である。引揚後、彼女はその忘れがたい不思議な心境を野田に打ち明けた。

満洲での放浪生活がしきりに思い出されます。あのやうなロマンチックな（非現実的な意味で）一時期を思ふと、私今でも飛躍したがります。何時になっても何かしら憧れてゐる困った性分です。¹¹

一九五一年四月『九州文学』に載っている「ある旅」は奉天での避難生活からはじまり、新京へ引き返す冒険的な旅を書く小説である。奉天での窒息しそうな生活は不安に満ちて

いたが牛島春子は男装して、「鮮烈な悦びに取り乱」し、「生まれるときから私を囚えて金縛りにしてしまった女と云う得体の知れない化物が、この瞬間、私から離れ去り、私ははじめて誕生した本当の人間のように、誇りと悦びに自分が輝やきだすのを感じた」（「ある旅」）。それは男装への羨望ではないかと誤解されやすいが、実はそれは牛島春子が持っていた一種の反逆である。第Ⅱ部第一章第一節で論じたように、少女時代から牛島春子は因襲から解放されることを望んでいた。彼女は「男でも女でもどちらでも好いのだった。唯彼女がのがれたいと思ったのは因襲であった。因襲が縛り付けた女といふものであった」¹²。春子の心にしまいこんでいる望みが皮肉なことに戦乱の「満洲」で実現したとき、彼女は「こんな恵まれた機会が亦とあろうか」と興奮している。春子は勇気満々の気持で団体を結成し、新京へ向う準備をし、「ずぼんのぼけつとに両手を突込んで、大腿に歩いていった」。すると、「ひどくロマンチックな気分になっていた。自分が昔話の中の冒険好きな少年主人公でもあるような気がしてならなかった。何もかもが興味深く、新鮮で、感動にみちていた」。（「ある旅」）

「昔話の中の冒険好きな少年主人公」というと、ピーターパン、ロビンソン・クルーソーなど冒険ロマンの少年を想起させるが、牛島春子は当時危険を予知しながらも、冒険の楽しみを味わい、未知の自由な世界に飛び込もうとしていた。春子だけでなく、「満洲」に渡っていた人たちには反体制的な人たちが多し。在満女性作家八木秋子も敗戦を自由という根本理念にむすびつけ、新しい冒険への出発として受け止めた。そのロマンチズム、飛躍、憧れは牛島春子の引揚小説にも込み込んでいるモチーフである。

満洲国といふ一つの国が、八月十五日を境にしてまるきり空中楼阁でもあったやうに忽然として歴史の中から消え失せた。そのあとに現はれた混乱の様相には何か現実離れのした奇妙なロマンチズムがあるやうに知子には感じた。¹³

敗戦の混乱で国家、階級、ジェンダーなどさまざまな権力と欲望が消えてしまい、牛島春子がかえって活発になり、生き甲斐を感じたのであろう。

電燈も水道も使ひ放題なのに、まだ料金とりといふものがこない。その位のことではない、横領詐欺を働かうが、人を殺そうが、だれも干渉するものもゐないし、捕へにくる者さへゐないのであった。生きることの苦しさも、こうなればもはや童話じみたロマンチズムの領域だと知子には思へるのであった。¹⁴

あらゆる束縛が無効になり、二度とこない非現実的な自由が得られた。反逆の心、自由への憧れは久留米時代から牛島春子の一生を貫く不変なものである。牛島春子は機敏で芯が強い人である。その冒険的なロマンチックな旅で色々な人たちに出会い、次々と無事に難関を乗り越えた。一時的であるが、無限の自由は人間性を引き出すきっかけにもなった。

牛島春子は引揚げた直後、野田宛の手紙で自らが遭遇した体験を記録した。

色々な経験をして来ました。支那人の暴徒に囲まれて物をはぎとられた事もあったし、子供三人をつれて旅から旅へ、今度も背中にリュックをしょひ、胸に下の子をくゝりつけ片手に荷物をさげ、もう一方の手で中の子の手を引き、みんなの列より百米もおくればとゝ帰ってきました。(中略)、ロシヤ兵が来ると云っては床下に逃げこんだり、街頭に自分の持物を賣りに出たり、四十度七分の熱を出してうは言ばかり云って一ヶ月めに骨と皮ばかりになって起きあがったり、(この時はぐるりの人は私が死ぬと思ったそうです)両替屋さんになって街角で大道説法みたいな事をやったり、でした。(中略)、それからこれからの私の生きてゆく道、私は子供三人抱へ女一人の行手が随分険しいものであると承知しながら、その道がどうしてもか楽しいやうな気もしてゐました¹⁵

ここで牛島春子はエッセー「感傷の満洲」には書いていない苦情を野田に吐いてしまった。まさにこのような悲惨さこそ放浪生活の付き物であろう。しかし、明らかに彼女の小説やエッセーが読者に伝えたかったのは引揚げの惨めさと苦しさだけではない。続いて、牛島春子は「満洲」からの引き揚げ体験を書く決意をしたが、誰にも知らせたくない「放浪生活をありのままに描くためには葬ることの出来ない要素」をどのように取り扱うか迷っている。

私はあせりません。書きたい意欲は大いにあります。書きたいことがのびのびと書ける世の中になったので、かへって自重したい気でゐます。満洲放浪記も書きます。どうか読んで下さい。でもこれも昔からの悩みなのですが、主人があることは私を裸にさせないのです。どうしたらいいか教へて頂けたらと思ひます。今度も私は主人がある限り葬り去らねばならない一頁を持ってをります。誰れにも話すことも書くこともないかもしれませぬ。そのくせその事は私の放浪生活をありのままに描くためには葬ることの出来ない要素なのです。¹⁶

一九四六年八月二十四日、牛島春子は親友の野田にその「放浪生活をありのままに描くためには葬ることの出来ない要素」を打ち明け、完成した「満洲放浪記」を手紙と共に野田に送った。

この前の手紙に変な事を書きましたので、きっと御心配かけてゐると思ひます。事実はそのどさくさの時に、六つも年下の人から恋愛的に接近されて、私はその激情から遁れることが出来なかつたのです。愛されたかはり苦しめられもしたのです。私がその人を愛してをれば、私は人の妻でも、子の母でも幸福であつたでせうけれど、その人の謂ゆる「暴風的性格」に完全に圧倒されてしまいました。(中略) この手紙と一緒に原稿

をお送りしました。題は一応「東北放浪一年記」と書きましたが、何か適当な題があったらかへて下さい。脱字誤字もあることが判ってゐますけれど、落ちつきのない生活で書いたものですから、文の粗雑なのもかんべんして下さい。この一年記（舞鶴上陸まで）は大体三つに分けてやはり五十枚前後づつになると思います。創作も書きたいと思つてゐます。¹⁷

野田はその「東北放浪一年記」をそれぞれ「手紙」「笙子」「ある旅」「十字路」「知子」「アルカリ地帯の町」と題を付け、発表を手伝ってくれた可能性が高い。ユニークなことに、この一連の小説のモチーフはその体験のつらさや惨めさではなく、その一つは恋愛である。

恋愛は引揚直後の牛島春子の中に納まりきれないものである。一九四六年九月十四日、春子は恋から脱却しつつあることを手紙で「数ヶ月の恋みたいなものにつかれて、今それから脱却しつつあります」と野田に伝え、同時に「私は優越感をもつことより、劣等感をもつ時の方が私自己に即した見方だと云う気がしてなりません」と自分の持っているコンプレックスも隠さなかった。

牛島春子が発表した一連の引揚小説に、つねに人間性、ロマンチズム、自由が物語の中心におかれた。一九四六年、引揚げてきた直後に「手紙」¹⁸という小説を『九州文学』第十四号に発表した。「手紙」はこの忘れがたい恋を書く小説である。これは「満洲」からの引き上げの混乱中、男女の出会いと激しい愛を書いた小説である。文中の「あなた」は東大出の金権主義の青年である。「私」は春子の分身であり、この作品はその男への手紙である。夫が活着ていることを知りながら、春子は思い切つてこの小説を書いた。小説中も「私」は夫が活着ていることを知りながら、大胆に若い東大出身の青年との官能的なラブシーンで、女性のセクシュアリティをさらけ出した。

たしかにあの夜は私の不覚でした。私は暗い玄関の壁ざわに押しつめられ、あなたはいきなり私を抱きすくめてしまひ、息も出来ないやうに激しい接吻で顔中を埋めてしまひました。それがあなたの謂ゆる「暴風の性格」の現はれでした。それから後の私は始終あなたのその暴風の性格に圧倒されつづけて来たと云へます。¹⁹

その男は暴風のように、衝動的で猛烈な愛情で春子を圧倒していた。春子は反抗できず、拒否しにくかつたことであろう。まさに春子は『手記』で、「私は同時に幾人もの異性を愛し得る」²⁰「私は尼になるより、むしろ淫売になるでせう」²¹と予言したような女性となった。「聖女」に見えた春子の中には「悪女」が住んでいたようである。

「十字路」もその青年と二人が新京で両替屋をやっている生活を細かく書いている小説である。

「奥さんを、ぼくの恋人だと思っていいだろうか？」と彼は突然云った。私は一寸戸惑ったけれど、別に愕かなかった。(中略)

私はたしかに予感しないことではなかった。それに私は貞操というものをそれほど神秘的なものだとは思っていない。それは自分に属し、自分の責任において扱われていいものだと考えていた。²²

制約がない非現実な世界において、相引いている男女が恋に落ちるのは自然の人間性の現れである。さらに「ある旅」も同行の青年に告白され、断った後の心理活動を書く箇所がある。

私は去っていく彼の不均合いな青い中華服をみやった。と、不意に、切ないほどの恋情が私の中に燃えあがってきた。足を返して彼に追いつき、優しく抱かれたいと激しく願った。(中略)、機械的な動作のくりかえしがやがて次第に、私の激情を鎮めてくれた。激情が去ると、私は今度は深い哀しみと悔恨に堕ちて行った。悲しみと悔恨の想いは新たにやってきて、ついには私の肉体を充たしてしまった。²³

男女愛のほかに、「秩序も規律も掬もない」無限の自由の中で、自分達が歴史の轍から弾きだされた、浮塵のような人間群でしかない(「ある旅」)。牛島春子はこのような浮遊感覚、アイデンティティの不安を抱え、自分だけが生きることを必死に考えればよいという人間のエコニズムにも遭遇した。

気の毒の仲間の女が、見知らぬ男と汽車を降りていく時、私たちは黙って見送ったように、私はこの仲間が兵隊から通路に荒々しく引きだされた時も、他人事のように眺めていたのだし、私が捨身の戦法で検札を切りぬける時も仲間は素知らぬ顔でいた。²⁴

一枚の切符で結びつけた「仲間」は結局、脆くて、自分の命は自分で守るよりほかはなかった。歴史の転換点に位置し、制約を離れた人間のエゴイズムが浮かび上がってきた。にもかかわらず、他方、ナショナリズムの壁を越えれば、人間固有の人間らしさ、善良性が現れてくる。困窮極まっている牛島春子は被植民者の中国人に何回も救助されていた。一回目は奉天から新京行きの列車に乗ろうと、ホームに入ったとたん、

横あいからおむつと弁当を入れた風呂敷包みを引たくられた。(中略)、人ごみの中に隠れ去ろうとする男から無造作に取り戻して来てくれたのは、新四軍(人民解放軍)の少年のような兵士であった。兵士は無表情にだまって荷物をわたしてくれたが、私はこの青木綿の軍服を着た若いコンミンニストの兵士に云いようのない親しみを感じずにはおれなかった。²⁵

続いて、二回目は新京行きの列車で三男が急に泣き出し、見知らぬ中国人達に助けられたことである。

前斜の方から、多分通路の方角から、ぽんと弧を描いて私の膝の上に落ちてきたものがあった。それは小麦粉をこねて焼いた、丸い平たい焼餅子であった。私は愕いて顔をあげた。と又別の方角から饅頭がとんできた。(中略)、投げ主を目で探したが判らなかつた。誰れも彼も、私にそつぽを向き、まるで私のことなど気にも留めていないように、素知らぬ顔をしているのだった。「謝々、謝々」と私はまわりを見まわしながら、みんなに聞こえるように礼を述べた。²⁶

三回目は新京で電車に乗った時のことである。

新京で電車は動いていたので何気なしに乗ると、乗客はほとんど中国人ばかりで、日本人はてくてく歩いている、ということに気付いた。それでも私は子供をおぶった姿で電車に乗っていたが、あるとき見知らぬ中年の中国人が、降りようとする私に黙って人參を一束握らせてくれた。²⁷

このように、牛島春子は民族を超えた人間の善良性に気付き、「満洲」の本質を考え直した。そこで、彼女は植民地支配、戦争翼賛を反省し、過ちを犯した自分と決別をつけるという脱植民地化の傾向が次第に強くなる。

満洲の最後をこの目で見とどけることを義務のように思いこんでしまったもの。それは、ここではっきり云ってしまえば、私が満洲を愛していたためであるけれど、その満洲とは、髭の先に氷の粒々を光らせて街々を走る馬夫、日溜りで虱とりに余念のない苦力、泥だらけの手で、チンと手洩をかむ農夫たちであった。臭く不潔で、無智で、そして善良な彼ら。私は彼らをどれほど深く愛していたろう。満洲帝国などという、豪壮華麗な上層建築を私は信じていなかった。私の夫も含めて満洲政府の日系官僚のあり方を私は私なりの目で眺めつづけ、私なりに物思いにふけていた。²⁸

第Ⅱ部第一章第四節で考察したように、牛島春子は戦中、国策協力の作品を発表し、夫を支えていたが、戦後、態度は一変して内面化した植民主義を脱構築する努力をした。しかし、彼女には限界があり、素朴な中国人の「善良」を認めたが「不潔」「無智」といった中国人を表象する表現はやはりオリエンタリズムの視線から離脱することができなかった。これはナショナリズムの限界でもあるが、春子の少女時代の思想にも関係がある。春子は労働運動に身を投じ、大衆を軽蔑しているものの、無視してはいなかった。「愛と嫌悪、愛

と軽蔑を同時に感ずる事もある」²⁹という。第Ⅱ部第一章第四節で詳述したが、引揚後、牛島春子は再度、方向転換し、新日本文学会に入会し、マルキシズムの理想と現実とのギャップ、新日本文学会の理想と現実とのギャップに目覚め、がっかりした。もう一つの逃げ場としての「ヒューマニズム」で抵抗しつつある。

おわりに

牛島春子は政治運動で内地から疎外された脱落者であり、ロマンチックな新天地を求めて建国精神を真剣に擁護した一人の女性である。女性たちは傀儡国家という収奪した土地に住み、植民者の利権によって生活したが、侵略ということに無意識であり、究極には他者としての異民族の真の意味での理解者ではなかった。「満洲」体験やその後の「満洲崩壊」について喪失と恥辱の記憶のゆえか黙して語らぬ女性作家もいれば、贖罪意識で書き続ける女性作家もいる。引き揚げ以後、在満の日本人女性作家八木秋子、横田文子らは戦前の活発な文筆活動にもかかわらず、戦後、沈黙を選び、植民地体験を伝えようとはしなかった。牛島春子は戦中、戦後を通して書き続けた珍しい在満女性作家である。それは野田宇太郎、川端康成、野間宏からの鞭撻も深く関係していると考えているが、牛島春子自身の性格による所が大きいであろう。牛島春子も植民者、引揚者としてコンプレックスを持っていたが、自らの体験を通じて人間性や物事の本質を見極めることができた。それらについて筆を以って訴えようとしていたであろう。本論文は実地調査を踏まえ、春子の敗戦後の空間移動を整理することによって、「満洲」引き揚げの主題と社会変動の行方を把握することができた。

「ある旅」をはじめとする牛島春子の一連の引揚小説の主題はロマンチズムと人間性である。引揚体験は牛島春子にとって反省の契機を与えてくれた運命的な存在であろう。歴史外に追い出された浮塵のような牛島春子はアイデンティティの再構築に面し、敗戦を無限な自由とロマンチズムという根本理念にむすびつけ、新しい冒険への出発として受け止めた。皮肉なことに、「満洲国」崩壊後、一時的に国家、階級、ジェンダーなどさまざまな権力と欲望が消えてしまい、牛島春子がかえって活発になり、生き甲斐が感じられた。あらゆる規範が失効になった時空の中で、大胆な男女の恋、生き延びるためのエゴイズム、民族の壁を越えた人道主義といった赤裸々な人間性がさらけ出された。そのロマンチズムとヒューマニティは牛島春子が少女時代から持ち続けている不変の信念である。牛島春子の引揚小説から彼女の内面化した植民地主義から脱構築する努力が読み取れた。しかし、牛島春子自身はナショナリズム、階級の限界があり、相変わらずオリエンタリズムの眼差しで中国人を凝視し、表象していることが明らかになった。

注

- ¹川村湊『満洲国一砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』 現代書館 二〇一一 一三六頁
- ²川村湊『満洲国一砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』 現代書館 二〇一一 一四〇頁
- ³坂岡庸子「満洲からの引揚体験」『帝国崩壊とひとつの再移動引揚げ、送還、そして残留』 勉誠出版 二〇一一年九月 七十六頁
- ⁴崔佳琪「満洲引揚げ文学について：研究史の整理及びこれからの展望」『現代社会文化研究』 二〇一二年十二月 三十九～五十五頁
- ⁵西川祐子『八木秋子日記』に幻の引き揚げ小説をさがして」二〇一四年 一〇九～一五二頁
- ⁶牛島春子「引揚者の絵葉書」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 二八三～二八五頁
- ⁷牛島春子「引揚者の絵葉書」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 二八五頁
- ⁸張志坤「1946年胡芦島百万日本侨俘大遣返始末調査」（「1946年胡蘆島から百万の日本人の引揚に関する調査」）『日本研究』 二〇〇六年六月二十日 四十九～五十六頁
- ⁹牛島春子「感傷の満洲」（三）『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 三〇四～三〇五頁
- ¹⁰舞鶴引揚記念館資料
- ¹¹一九四六年十一月十九日野田宛の書簡
- ¹²牛島春子『手記』自家版 一九三八年 二十頁
- ¹³牛島春子「知子」『藝林』一九五四年五月一日 五十八頁
- ¹⁴牛島春子「知子」『藝林』一九五四年五月一日 五十八頁
- ¹⁵一九四六年七月二十六日野田宛の書簡
- ¹⁶一九四六年十一月十九日野田宛の書簡
- ¹⁷一九四六年八月二十四日野田宛の書簡
- ¹⁸牛島春子「手紙」『九州文学』第十四号 一九四六年十月 二十九～三十一頁
- ¹⁹一九四六年七月二十六日野田宛の書簡
- ²⁰牛島春子『手記』自家版 一九三八年 三十六頁
- ²¹牛島春子『手記』自家版 一九三八年 四十頁
- ²²牛島春子「十字路」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 二七二～二七三頁
- ²³牛島春子「ある旅」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 二六二～二六三頁
- ²⁴牛島春子「ある旅」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 二五八頁
- ²⁵牛島春子「ある旅」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 二五四頁
- ²⁶牛島春子「感傷の満洲」（三）『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 三〇五頁
- ²⁷牛島春子「感傷の満洲」（三）『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 三〇五頁
- ²⁸牛島春子「ある旅」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 三六〇頁
- ²⁹牛島春子『手記』自家版 一九三八年 二十五頁

第三章 牛島文学の翻訳と変貌

第一節「祝といふ男」の中国語訳の分析

はじめに

近年、「満洲文学」の研究が進み、牛島文学の意義が問われ、評価が高まっている状況の中で、中国側の資料や視点に基づき、新たな研究を展開する可能性が広がっている。しかし、多民族が共存した植民地「満洲」において、異民族支配、交流には、翻訳は不可欠な手段であり、重要な領域である。にもかかわらず、中国語の雑誌に掲載された日本人の作品についての翻訳や中国人読者への受容についての研究はまだ十分とはいえない。それを究明しないと、「満洲文学」の全容が見えにくいであろう。「満洲」文学の翻訳の問題を深く掘り下げることによって、「満洲」ならではの文化構造の複雑性や翻訳の力学が理解できるはずだ。筆者は二〇一三年四月、中国東北部の図書館で資料調査を行った結果、長春の東北師範大学図書館で「祝廉天」(『新満洲』第三卷六月号「満洲女性特輯」と「遙遠の訊息(遠くからの便り)」(一九四三年『青年文化』第一号)を発見した。これらの中国語の作品の存在はほとんど知られていない。

本論文は新たな視点で牛島春子の代表作「祝といふ男」の中国語訳「祝廉天」に焦点を当て、「満洲文学」の翻訳の実相を掘り下げることを試みたい。

一. 中国語訳「祝廉天」

「満洲国」時代、日本文学の移植か、「満洲」独自の文化を樹立するかという「満洲文学論争」が行われていたが、本格的な文学システムはまだ整備していなかった。当時の各機関誌や新聞には数多くの翻訳作品が載せてある。翻訳文学は社会的コンテクストと切り離せない密接な関係を持っている。特に植民地の場合、状況は一層複雑になりかねない。訳本のディスクールには訳者の内心に潜めているものが入っているに違いない。翻訳作品を深く探ることによって、「満洲国」の文化構造やイデオロギーの多様性と複雑性が窺える。「満洲」の翻訳状況について、岡田英樹は『続 文学にみる「満洲国」の位相』で考察している。

日本人が「在満」中国人との交流を目的として、その作品を翻訳する「民族協和型」であるのに対して中国人側は同時期日本人の文学には冷淡である。

(中略) この時代の趨勢が一定影を落としていて「国策文学」とされる作品が混在しているが、日本近代文学の代表作を翻訳するという基本姿勢は貫かれると言えるだろう

1

岡田の考察によると、当時「満洲」文学の翻訳の単行本として出版されたのは少数であり、牛島春子『王属官』と大内隆雄の『文藝談叢』以外に見当たらず、翻訳されたのはほとんど日本近代文学の代表作であり、雑誌も同じ傾向を呈した。そこに中国人の抵抗を見ている。筆者は訳本『王属官』を入手し、第Ⅱ部第三章第二節で詳しく考察するが、それが藤川研一の脚本を翻訳したものであることを確認できた。牛島春子『王属官』というよ

り藤川研一の脚本『王属官』といったほうが適切な程、修正されている。

このような社会風潮の中で女性作家氷壺は日本の近代文学の代表作でもない「祝といふ男」を訳したのは珍しいことである。氷壺に関する情報は極めて少ない。「満洲」の中国人女性作家呉瑛²の「満洲女性的人と作品」（「満洲女性のひとと作品」）³の中には氷壺についての紹介がある。

氷壺出身于明大，曾在社会上活动有很多年的历史，但我们在从文上来看，最擅长的恐怕要算她那冲淡明快的散文或小品吧！对其散文和小品的脉路，很看出有和早期冰心作品相类似的地方，从文章里透出那样令人感到轻朗的意味，确为冰壺作品的一大特长。（氷壺は明大出身であり、長年間、社会で活躍したが、物書きの面から見ると、最も上手なのは恐らくそのあっさりした明快な散文と小品であろう。その散文や小品の作風は氷心⁴の早期の作品と似ている。文章から朗らかなものが滲み出ていることは確かに氷壺の作品の特徴の一つである⁵）

呉瑛は氷壺の作品は明朗であり、謝冰心の早期の繊細優美な作風に似ていると高く評価しているが、実は氷壺は流れ星のように文学生命が短い女性作家である。

氷壺が訳した「祝廉天」の原本はどれからかを検討しなければならない。「祝といふ男」は一九四〇年九月『満洲新聞』に初めて掲載されてから、一九四〇年十二月『日満露在満作家短編選集』、一九四一年三月特別号『文藝春秋』、一九四一年十二月『日本小説代表作全集・昭和十六年前半期』、一九四二年『満洲国各民族創作選集』に載っている。戦後になって一九六四年十一月『昭和戦争文学全集』、一九九六年『〈外地〉の日本語文学選』第二巻「満洲・内蒙古／権太」、二〇〇一年九月『日本植民地文学精選集』「満洲編」七「牛島春子作品集」といった収録や転載の経緯がある。中国人女性作家氷壺の訳には「1941年3月25日訳完（訳済み）」と末尾に記載されているので、『満洲新聞』『日満露在満作家短編選集』『文藝春秋』に掲載されたものが訳された可能性がある。ただし、訳文の形式は『満洲新聞』に連載の形式と違うし、内容からみれば、『日満露在満作家短編選集』に転載されたものとも違う。たとえば、『日満露在満作家短編選集』には「第一非常に宣伝的だよ。満系であれ程傲慢な奴はゐないな」という祝のことを批判する文は、『文藝春秋』では「第一非常に官僚的だよ。満系であれ程傲慢な奴はゐないな。」という文になる。訳文は後者と一致している。したがって、一九四一年三月特別号『文藝春秋』が中国語訳の原本になっていると判断したい。

二. 氷壺による翻訳表現の特徴

次は翻訳の細部に触れながら、訳者の意図や選択を考察してみる。氷壺はタイトルを主人公の名前をタイトルにし、「祝廉天」に変えた。「祝といふ男」というタイトルは宗主国の女性（牛島春子）と植民地の男性（祝）の関係をも表象している点を強調するが、「祝廉

天」はもっと具体的であり、性別を問わずにただ一人の人間にクローズアップするという意味合いが強い。『新満洲』に掲載された中国語訳「祝廉天」はタイトルのすぐ下に、「芥川賞候補作」という括弧つきの部分があり、「牛島春子作、氷壺訳」と作者、訳者それぞれ明記された。一頁目の右側に、チャイナドレス姿の短髪の中国人女性の挿絵が描いてある。中国風の女性が女性特輯を際立てるための工夫であろう。氷壺訳には内容の面では大きな書き換えが見られなかったが、表現細部に差異があり、それは牛島春子の原作と氷壺の翻訳を通して「満洲文学」の力学が浮かび上がる。

まず、言葉遣いからみると、枚挙にいとまがないほど日本語と中国語の混用は非常に目立っている。中には中国語にはない日本語語彙もあれば、中国語と同形異義語の日本語語彙もある。いくつかの例を挙げてみる。

① 祝を呼び、陶器の卸の斡旋方を祝にたのんだのであった。

訳文：把祝喚去，求他给斡旋卸陶器的事情。

② 訊問が始まると祝はぴったりと真吉の傍にゐて、真吉の鋭い訊問を注意深く、正確に通訳して行った。興奮もしてゐず、顔色も動かない。その機械のやうな非情さは不気味にすら見えた。

訳文：訊問开始时，祝紧紧坐在真吉的旁边，深深注意真吉锐利的讯问，正确的去给翻译，也不興奮，也不动顔色，这种机械似的无感情的样子，看起来似乎令人可怕。

① ②は中国語にもある語彙であるが、日本語の意味とは微妙に異なっている。次の表にまとめてみる⁶。

	中国語の意味	日本語の意味
卸	荷を卸す、部品などを取り外す	商品を問屋が小売商に売りわたす
訊問	問う、聞く、尋ねる	裁判所などがある事件について証人、鑑定人、当事者などに口頭で問いただすこと
興奮	元気付く、活気付く、うれしい	感情の高まること
顔色	色	顔の色

③ 頭に受けた傷は全治二週間の打撲傷だったと証言した。

訳文：据说是头部受伤，为全治需两礼拜的打撲傷。

④ かういふ時、祝の持つあの鋭利な刃物にひやりと触れる気がする。

訳文：这时就觉得好像冰冷的触到了祝所携带的那个锐利的刃物似的。

⑤ 四人は懲戒免職、四人を始末書で、真吉はこの事件を終りにした。いふまでもなく有形無形の祝の協力は大きいものであった。

訳文：四人懲戒免職，四人写始末書，真吉这样把这个事件解决了，不肖说有形无形中，

祝的協力很大。

- ⑥ はじめ各村に出向いて行って下検査を行ひ、それに合格したものが今度は県城で省から来た係員の本検査を受けることになってみた。

訳文：現在要开始到各村去行下检查，合格的把他带到县城，再受从省里来的係员的本格检查。

- ⑦ ああいふ家からでも兵隊にとられるのだからと村民達は何がなしに安堵し、募兵の性質も見なほしたやうに見受けられ、凡ては案外スムーズに運んだ。ほかに原因もあつたであらうが、兎も角真吉のやった募兵では一人の脱走者も、替玉もなかったことは事実であつた。

訳文：村民们一听说从那样的家里，都挑了兵去，定能觉得安堵，以使她们明瞭募兵的性质，一切运行都意外的顺调，另外也许还有别的原因，不过无论如何，真吉所行的募兵，没有一个逃走的或替身的，这是事实。

③～⑦はいずれも日本語固有の語彙であり、中国語にはない。氷壺は現代中国語と違う日本語の意味そのままに訳した。今日考えて見ると、とても理解しにくい文であるが、「満洲国」という独特な時代に限って、通じていたと考えられる。

この現象について、岡田英樹が『文学にみる満洲国の位相』で詳しく分析を行った。

中国人は、漢字による日本語語彙を受け入れるにあたって、みずからの発音をこれにあてた。政府側は皇室関係の人名や日本の地名などには日本語の読みをおしつけたということだが、また榻榻米、古魯碼といったことばが、東北の田舎にはのこされている、という指摘もあるが、大部分の語彙は中国語の発音に変換されて流入していったと考えられる。ということは、ある程度の定着をみせた日本語は、文字のうえからも、音声のうえから母語との区別がつかなくなることを意味する。抗日戦に勝利し、日本人がいなくなったあとでも、東北人の語彙のなかから「輸入された日本語」を払拭することは、容易ではなかった。⁷

日本語流入に対する作家の対応をみると、二つの立場があつた。古丁は、積極的に外来語を吸収して、中国語の語彙を豊かにすべきだ、と主張する。それにたいし、在満作家小松は、新しい語彙が入り込んできて、意味不明の文章が横行し、「国語」に乱れが生じていると警告し、小説家が「国語の文学」を守るため、「語彙の運用」、「語彙の鑑定」に慎重であるよう、注意を喚起している。

訳者の氷壺はこれだけ積極的に日本語語彙を導入したから、古丁の見方と一致していることが伺える。

三. 訳語におけるニュアンスの違い

中国人読者が受け止めた「祝廉天」と日本人読者が受け止めた「祝といふ男」は微妙な

違いがある。それは氷壺が誤訳したか、それとも意識的に工夫して翻訳したかを断言したいが、その差異に目を向けないと、「満洲」文学の本質を把握しえないであろう。次は氷壺訳「祝廉天」の表現の特徴を考察してみる。

(一) 植民者日本人についての翻訳表現

日本人についての描写はマイナスな表現を控えていることが浮き彫りになった。実際に「満洲」を支配している植民者、指導民族としての日本人を批判したら、ひどい目に遭う恐れがある。たぶんそれは当時デリケートな問題であり、訳者も身を護るために慎重に訳したと考えている。

①それに続いて県下の各機関や、県公署内の風潮日系同士が猫のひたひほどの土地で時々縄張根性やら小姑根性をむき出しにしてなぐり合ひはじめる事などを冷然と半ば嘲るやうに語るのだった。

訳文：继续关于县下各机关和县公署内的风潮，甚至日系同士们因为一块极小的土地，也会小气的，嫉妒的，互相殴斗起来，他冷然半嘲笑的讲了一些。

牛島春子が「縄張根性」と「小姑根性」という日本民族の劣っている根性を暴き出す文であるが、氷壺はそれぞれ「小气」（けち、気が小さい）「嫉妒」（嫉妬する）と訳した。客観的に、批判の程度が軽減された。「縄張根性」は「排他性」（排他性）、「小姑根性」は「搬弄是非」（無責任なうわさ話をしてごたごたを巻き起こす、騒ぎを引き起こす）と訳したほうが原文の意味に近い。当時、文学者達は「八不主義」という恐怖に覆われていた。その中の一つは「時局に対し逆行的傾向を有するもの」である。厳しい検閲の目の下に置かれ、「五族協和」と裏腹に、「排他性」と訳したら、「逆行的」になりかねない。

②それは一見陰険にも狡猾にも見えるけれど、これも永い被抑圧者の生活が教へた知恵かもしれぬ。だから満系達は日本人のやうに弱点を發きあつて満人の前で大びらに喧嘩をやるやうなことはほとんどない。

訳文：令人一看便觉得阴险，狡猾，然而这也许是长期被抑压的生活所教给的智慧，所以满系们几乎没有像日本人那样发挥弱点，在满人面前，公然吵架的事情

これは日本人同士がお互いに弱点を發き、満人の前で喧嘩するという日本人職員を批判する文である。『満洲新聞』に連載された時、「相手の弱点を發きあつて」と「相手」がついているが、一九四〇年十二月『日滿露在滿作家短編選集』、一九四一年三月特別号『文藝春秋』に転載された時、「相手」という語が削除された。それは編集者の意志であるか、或は牛島春子本人の意志であるか確認できないが、日本人の悪質な行為を弱めにする効果が見られる。また、「弱点を發きあつて」に当てる中国語は「互相揭短」である。氷壺は「发挥弱点」（弱点を生かす）と訳すと、「お互いに弱点を發く」という悪質な根性が読み取れなくなる。

(二) 祝についての翻訳表現

主人公祝についての描写に注目してみると、原文のずれが多いことに気付く。中国人と

しての氷壺は同胞の祝に対し、同情、理解、賞賛という複雑な気持ちを持っているのであろうか。訳文の微妙な変化によって、祝という人物像も微妙に変わっていく。

①「気の毒だったと思ひます。けれど副県長殿、吉村さんも上司なら、検察官も上司です。祝は上司に対して正直であったまでです」

訳文：我也觉得很对不起，不过，副县长，吉村先生是上司，检察官也是上司，祝只是对于上司，就是要忠实。

原文の意味と大きなずれがある。「気の毒」は「かわいそう」という同情の意味であるが、お詫びの訳文になってしまった。「很对不起」というのは「たいへん申訳ありませんでした」という意味である。原文においては、祝という人物は罪の意識を持っていないため、謝罪する意識も全くない。中国人読者が読み取れる祝は反省し、日本人上司に謝る人間である。それは祝の心理や人物造形に影響を及ぼしかねない。

②所が、間もなく祝廉天は真吉が思ひもかけなかったタイプの人間として真吉の前に登場して来たのである。

訳文：然而不久，祝廉天出乎真吉的意料之外的乃是一个很有派力的人，在真吉的面前登场了。

「很有派力的人」とは「気迫のある人」という意味である。ここで訳者は原文にはない褒め言葉を追加し、祝を評価した。

③歩く時、机に向かってゐる時、不用意の手のあげさげにも何か確信ありげな、不屈なものを感じさせる。

訳文：走路时，在桌旁时，他那不出于故意的一举手一投足的轻微动作，都好像有什么确信似的，而让人感到绝不是好惹的。

「祝といふ男」は一九四〇年九月はじめて『満洲新聞』に連載された時、「不屈」ではなく、「不屈き」と書いてある。一九四〇年十二月『日満露在満作家短編選集』、一九四一年三月特別号『文藝春秋』に転載された時、「不屈」と変えられた。否定の言葉を肯定の言葉に転じ、まさに雲泥の差である。それは「五族協和」「王道楽土」の理念に基づいた牛島春子の変化と伺える。さて、「不屈」とは「困難にあっても志を貫くこと」であり、中国語に当てると「不屈不撓」が一番適切であるが氷壺は「不是好惹的」（ばかにすることができない）と訳した。「中国人をばかにしていけない」という反抗の意が読み取れている。

④よく喋る男ね

訳文：很能讲究の一个人啊

これは祝が帰った直後、妻のみちは真吉に祝のことを評価した文である。「讲究」とは「～に凝っている」という意味である。「よく喋る」に該当する中国語は「很能说、能说会道」である。ここでも訳文と原文のずれが見られ、次第に祝の性格も変わっていくであろう。それに、原文にある「男」は「人」になってしまった。タイトルの変化と相応し、性別をぼかしていることが浮き彫りになる。

⑤祝はあの晩真吉に半ば哀願したことも忘れたやうに相変わらず瘦せた肩をそびやかし、

無遠慮に大股で各課を歩きまはり日系職員達と一緒に入口に近い机で満文の翻訳をやったり、書類の整理などをしてゐた。

訳文：祝像是想了那天晚上向真吉半哀愿了的事情似的，依然耸着瘦削的肩膀，不客气的迈着大步，在各课里走来走去，和日系职员们一起在靠近门口的一张桌子上，从事满文翻译，书类整理等。

「忘れた」は「忘记、忘了」という意味であるが、正反対の語「想了」（思い出した）に訳された。原文は祝の分裂した姿を強調するため、真吉に哀願する姿と役所で無遠慮な振舞いを対照的に表していた。それにひきかえ、訳文は祝は真吉に哀願したから、無遠慮に歩き回り、通常通りに仕事できたという意味になる。したがって、分裂かつ矛盾している祝の内面が見えにくくなってしまった。

（三）その他

①二時間以上も喋ると祝は急に坐りなほし、真吉と後にずっとお茶をくみながら話を聞いてゐた妻のみちの方に向きなほって、

訳文：讲有两个小时以上的话了的祝，立时改成了坐的姿势，对着真吉和在后面一面喝茶一面听着说话的妻一道子说道。

妻のみちが傍でお茶を入れながら、祝と真吉の話を聞いているシーンである。「お茶をくみながら」に当てる中国語訳は「一面倒茶」である。「一面喝茶」（お茶を飲みながら）と訳されると、真吉に従属する「良妻」の姿がぼかされてしまった。

②北満の冬は四時にはもううす暗くなる。真吉が夕食をすまして一服してゐると、表の方で轍のきしむ音がし、それからちりんちりと馬夫の踏む涼しい鈴がなった。

訳文：北满的冬，四点钟时候，天已薄暗了，真吉用过晚饭穿上件衣服，就听见外面隐隐的辙音，随着便是叮当叮当的马车夫踏的凄凉的铃声。

これは祝が馬車を用意し、真吉を迎え、満系警察をひそかに調査に行く場面である。原文の「涼しい」は「清爽、凉爽」の意味であり、負の語感がなさそうであるが、訳者は「凄凉」（もの寂しい、ぞっとするような寂しさ。荒れ果てて見る影もない）と訳した。「王道楽土」と裏腹に植民地「満洲」の物寂しい、暗い雰囲気漂ってくる。このように、氷壺の翻訳から女性として、被植民者としてのささやかな抵抗が読み取れる。

おわりに

中国語に翻訳された牛島春子の作品はほとんど知られていなかった。それらの翻訳作品を深く探ることによって、「満洲国」の文化構造やイデオロギーの多様性と複雑性が窺えるであろう。「祝廉天」と「祝といふ男」の対照研究により、「満洲」時代ならではの翻訳状況が見られる。また翻訳者氷壺の選択により、当時「満洲」の中国人読者が理解した「祝廉天」は原作と微妙な違いがあることも明らかになった。「祝といふ男」は宗主国の女性（牛島春子）と植民地の男性（祝）の関係をも表象している点を強調するが、「祝廉天」は性別をぼかし、一人の中国人にクローズアップする意味合いが強い。氷壺は古丁の見解と一致

し、積極的に日本語語彙をそのまま導入した。翻訳に大きな書き換えはないが、ニュアンスが違ふ文は少ない。被植民者の言論が厳しく制約され、やむを得ない選択であろうか、「祝廉天」では日本人に対する批判の表現が控えめに、軽減される現象が見られる。さらに、氷壺は同族の祝への同情、憧れなど複雑な心境が入っているためか、祝に関する表現は褒め言葉に書き換えられる例がしばしば出てくる。次第に中国人読者に与えた祝の人物像も変わっていく。裏付けの資料がなく、氷壺の翻訳は誤訳なのか、意識的に工夫して翻訳したか、断言できないといえるが、翻訳テキストの変容からみると、ひそかな抵抗が読み取れる。

牛島春子のもう一編の中国語の作品「遙遠的訊息(遠くからの便り)」⁸は1943年『青年文化』第一号に掲載された小説である。不思議なことに、訳者の名前がなく、文末に「筆者は満洲有数の女性作家である。作品は満洲の風土を題材とするが、「祝といふ男」「王属官」などの作品がある。後者は満映により、映画化された」⁹という括弧付きの説明がある。これまで「牛島春子年譜」にも触れられておらず、対応する日本語の作品はまだ見つからない。それについて第Ⅱ部第三章第三節で論じたい。

注

¹岡田英樹『続 文学にみる「満洲国」の位相』 研文出版 二〇一三年八月 二二九～二三五頁

²「満洲」で有名な中国人女性作家

³『青年文化』満洲青少年文化社 一九四四年 九七七頁

⁴謝氷心(一九〇〇～一九九九)は中国近代の有名な女性作家、翻訳家、詩人、児童文学家である。

⁵筆者訳

⁶『広辞苑』第五版 岩波書店 一九九八年を参照『中日辞典』第二版 小学館 二〇〇二年を参照

⁷岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版 二〇〇七年 一七八頁

⁸小論「満洲」と日本女性一発掘した牛島春子の中国語作品『遙遠的訊息(遠くからの便り)』を中心に」で論じた 『日本言語文化研究』(城西国際大学大学院紀要) 二〇一四年三月

⁹筆者訳

第二節 「王属官」の変容

一. 牛島春子「王属官」

一九三七年春、牛島春子は短編小説「王属官」（原題「豚」）をもって「満洲」の文壇にデビューし、「満洲」建国記念文芸賞を受賞した。それは「祝といふ男」とともに、影響力が強い力作である。春子は随筆「感傷の満洲」で小説誕生の経緯を述べた。

第一回建国記念文芸賞というのに「豚」という五十枚ばかりの私の小説が入選した。（満洲で）初めて書いた小説だったので自分でびっくりしてしまった。夫の勤めている奉天商工署に陳さんという同僚がいて、ある時、夫はうちに連れてきて、二人で色々話しをしていた。傍から聞いていて、その中の一つのエピソードを小説にしよう、とわたしは思った。それは陳さんが役向きで出かけていく近郷の農村の一つで起こったことで、地主と地方役人が結託して、（土豪劣紳という言葉がよく使われていたと思う）農家から豚一頭につき税金と称して金を巻きあげ、偽の納税票を渡していた、という事件だった。陳さんはその偽の納税票を見てそれを知ったのである…日本から奉天市に移り住むようになって六ヶ月位で、満洲の農村などまるで知るはずもなかったのも、たしか大同学院で発行されていた『満洲国農村実地調査』という本を横において、ひたすらそれを読み返しながら、その農村を舞台にした小説を書いたのだ。¹

つまり、牛島春子は夫の同僚陳属官から聞き取った事件をもとに、大同学院の『満洲国農村実地調査』という本を参照しながら、短編小説「王属官」（原題「豚」）を書き上げた。春子は陳を王属官のモデルにし、リアリズムの手法で「満洲」の農村問題を取り上げた。

一九三八年三月、牛島春子は「農村を描け—『王属官』を中心に—」というエッセーで記しているが、「王属官」は春子が第一回建国記念文芸賞に応募するために描いたものではなく、描いているところに募集があり、口説かれてしぶしぶ出したという。「事件は凡て実際にあった事であり、登場者も実在の人であった…応募作品にするためにほんのくだらない所に意識的にヒンマゲをやったりしたが（全く恥ずかしい事だ）」と小説「王属官」の中で「意識的にヒンマゲ」の不本意な部分があることを素直に記した。国策に沿い、建国精神を宣伝する部分、たとえば最後に王属官が農民の前で演説する部分はいわゆる「意識的にヒンマゲ」であろう。また、春子は自分の主張を箇条書きでまとめている。

第一に、私は王属官で農村を描かうと思った。つまり私は「農村を描け」と主張したかったのである。

満洲国が、目覚しく躍進する国都新京や、建国精神を体得した日本人で代表されてみると思ったら大変な違ひだ。実はその大きな土台石となってゐるものは、全く石のやうな幾世紀も前から踏みにじられ、無視され、しかも黙々とそれに耐へながら土地を耕して来た歴大な農民大衆なのだ。

喩へて見れば、満洲国は樹、農民大衆はそれが根を張ってゐる土だ。輝かしい建設の結実は、建設につくす栽培者達の真摯な努力の結果ばかりではない。(中略)

第二に、私はそうした農村をリアリズムの手法で描かうとした。つまり私は満洲にリアリズムを提唱したかったのである。(中略)でも、私の云はうとしてゐるのは単なる平凡な写実主義ではないのだ。現象のうは面を一なでして通る事ではない。現象を本質に於いて把握する事だと思ふ。²

牛島春子は「満洲国」の土台である農民大衆の地位と重要性を認識し、現象から本質まで見通し、ありのままの「満洲」を描くことを呼びかけた。それは牛島春子の左翼運動の経験と切っても切れない関係を持っているであろう。彼女は常に労働者大衆に注目していることが浮き彫りになったが、中国人の立場から読むと、別の意味も読み取れるではないか。小説の中には関玉福をはじめとする農民大衆、悪い役人、理想的な官吏王属官、日本人官吏中村といういくつかの人物像がある。物語の展開とともに、人物の輪郭が次第に見えてくる。

最初の登場人物関玉福は社会の底辺に位置する極貧な小作農であり、愚かで情けない善良な民衆の象徴である。春子からみれば、「封建軍閥時代の非人間的な残滓が、彼等の内にも外にも、王道楽土等と云ふ美しいよびなの否定的要素として、そうした観念への、現実の無言の批判者として皮肉な姿態を横たへてゐる」³のである。屯丁はうその税金を取りに来たとき、関は黙ってお金を出した。「百姓にとって衛門ほどおつかないものはない、税を取りに来たとなれば黙って出すより他にはないが、どうも今までとはすこし勝手が違うような気が関にはしたのであるけれど関はそのことについて深く考えてみようとしなかったし、又考えるだけの頭もなかった、よしんば考えたところにしてもそんなことははじめっから無駄なことは関には判りすぎる程判っていたのである」(「王属官」) (関玉福をはじめとする農民達は不正の税金に対し、おかしいと思いながら、役所を恐れ、無条件に従順するほかならなかつた。これは何千年もわたり、根強い封建支配がもたらした観念である。その後の証拠収集の段階に入っても、農民達は「皆々事勿れ主義を喜び衛門などの係りあいを極端におそれ」迷惑を避けてばかりいる。王属官は真相を掴むには相当な工夫がいる。関は領収書を出したせいで、ひどい目に遭い、「国の税金をごまかした」罪で五日間も入獄した。「悪い役人達は臭い物には蓋をする」ばかりに、百姓の無知を利用し、彼らを脅かした。関は曲牌長に騙され、警察官にうそをつき、釈放されたが、結局、真相をわからないまま、家に帰った。

一方、同じ農民といえども、主人公の王属官(本名:王床子)の家は「三百畝近くの畠を持っている自作農で、村では大きな百姓であり、関玉福より経済的な余裕を持っている。兄は家業を継ぎ、王は公学堂から満鉄経営の農学校に進学し、五年間も県城の農事試験場に勤めた後、通訳として県公署に入った。その後、彼は昇進の道に踏み、実業股長になり、さらに公署の属官になった。「百姓が一生かかって望んでも手の届かない知識だとか、

社会的な地位とか名誉とかいうものへの憧憬を、よく出来る末子によって具体化し、小さな満足を得ようとするあの心理を王の両親達も持っているたのである」(「王属官」) 農民出身の王は農民達にとって憧れの存在であり、不正を発くまじめな人である。春子は彼の真摯な努力は「王道楽土の肯定的要素として否定的要素を克服して行く姿がある」⁴と考えていた。しかし、「祝といふ男」の祝と同じ正義感を持っている人であるが、固くて完全に植民者の代弁者となり、被植民者として、一人の人間としての個性を持っていない。「百姓育ちの王は過去に張学良～下の役人達が農民に向けて来た様々な暴政、それに傷つけられて来た長い間の内に何時の間にかそれから身を護る術を獲得した農民の性格、それ等は王はよく知っていたそしてそれは新しく打ち立てて行かすべき満洲国の政治にとって貴重なものであった」農村に残存している悪い因習は「満洲国」の建国により、打ち消せるし、大衆を匪賊や悪い役人から守れると王属官は「王道楽土」「五族協和」という「満洲国」のスローガンを疑わなく完全に信じ込んでいた。植民地主義の本質を認識できず、封建主義の病弊を解消しようという王の考えはいかに植民者的であるかが伺える。張学良は東北軍閥張作霖の息子であり、父が日本人に爆殺された後、「反満抗日」の旗を掲げ、国民政府と連携し抗日運動を行った愛国な民族英雄であると思われる。当時の中国人にとって、階級矛盾より、ナショナリズムを優先にしたため、張学良が批判されるどころか、褒められていた。にもかかわらず、ここで王は植民者側と同調し、封建支配の病弊を全部軍閥の統治のせいにし、傀儡国家を救い主のように見せかけ、その正当性をアピールする口実にした。ホミ・バーバは植民地化された地域の人々が、宗主国の文化や言説に対して「適切な模倣」をすることを強いられ、結果として宗主国の論理に「占有」されてしまうプロセスに対して、「不適切な模倣」、すなわちずらしやあざけりのパロディーをとおして、自分たちを表現する可能性があることを示した。王属官はまさにその好例ではないか。

続いて、王は容赦なく幽霊税を摘発しようとする段階で日本人官僚中村が登場した。王はいくら農村のことを熟知しても、勝手に解決することができない。彼は一々中村に報告し、その指示に従い行動するしかない。報告した時、王は直接に「満洲」の暗黒部を批判するのではなく、婉曲的に「中村さん、街村制はうまく行っていると思いますか？」と切り出した。それは当時、中国人の「満洲」批判がタブーのためであろうか。中村は賢明な指導者らしい振る舞いをし、「去年の秋施行した街村制は言わば街村行政の基準を示したもので、実際にその通りが一から十まで行われているとは思っていないよ、まだまだ改革すべき事実が裏面には沢山ある」(「王属官」)と認め、徹底的に調べることを命じた。街村制は一九三七年十二月一日に「村制」と「街制」に分けられて公布された。街村制は植民地支配を強固にするために、「民族協和」を基調とし、「満洲国」の政策を農村まで普及することを目的とするが、財政の制限で県の指導力は屯まで届かなかった。⁵春子の小説「王属官」は実施したばかりの街村制の実施状況を反映し、まさに時代に相応しい作品であろう。やがて、省公署までやってきて王を説得しようとする屯丁が殴られた。「中村の忠告を無視して百姓を引っ張った県の不信義、何時までも臭い物には蓋をするより外に方法を考

えようとしなない百姓の無智」「曲達の陰険で執拗なもみ消し運動」と「王の怒りは三重になった」。王の調査によって、結局、被害の全貌が明らかになった。王は農民達を興奮させるような演説をしたが、期待通りの結果にはなれず、最後は関玉福の「二匹いた豚の内、一匹は正月前に殺し、一匹はついこの間京城から来た商人に二十七円で売り払ったのである。関は思わず豚小屋の方を見黒い毛を被って、元気に歩き廻っていた豚の小屋をちょっとさびしいと思った」というシーンである。この豚が残されているということの重要性について、北田幸恵は「特集読み物 牛島春子の文学からみた「満洲」 満洲文学の代表作品から満洲国国民の心情をさぐる」⁶で詳しく論じている。豚は肉が食べられるし、糞が肥料になるし、農民にとって宝物である。にもかかわらず、生き延びるため、関はやむをえず、豚を売ることになり、さびしい思いをした。農民大衆は依然として二重抑圧され、厳しい生活状況はちっとも改善されていないようである。「満洲」の建国精神と「満洲」の現実には食い違いがあり、春子はそれを意識し、暗喩したのではないか。

牛島春子の左翼経験と照り合わせて見ると、作品にはいくつか春子自身の投影が見られる。春子の性格に根ざした最も重要なのは人間性である。「満洲」でもその初志が貫いているといえよう。

和江の共産主義者としての出発の源をなしたものは労働者としての自覚ではなかった。直接的には和江たち婦人のおかれてあるいひやうなく暗黒な封建的地位への反逆でもなかった。それはまだ女学校の制服を着てゐた和江が読んだ一冊の本、フランスのヒューマンイズムの作家によって描かれたある音楽家の生涯への感動と共感からであった。〈人たる名に値するために己れの出来る凡てをつくす〉人として、〈日々の凡庸さに己れを委し去らない者にとっては人生は日毎の闘争である〉といふ言葉で物語られたこの音楽家の生涯であった。〈人たる名に値するために…〉この言葉はその時以来和江の胸に大きく刻みこまれた金文字となった。⁷

「満洲」の農民大衆に関心を寄せる裏には人間性を重視している春子の労働組合運動の経験がある。常に社会の底辺に位置する農民大衆に対する同情、関心を示した上に、悪い役人達が罪を犯した原因は「現在の月給が十元であり」、「妻子を抱えて食って行くのには少し無理」であると理解を示した。すると、人間的に「まず彼等の生活を保証してやる事が先決問題ではないか」と王属官は気づいたわけである。

また、王属官が農民達の「無智」に対する怒りの裏に牛島春子が勤労者や小商人の「無智」に対する憤りと憎悪がある。春子の一家をモデルにした和江の一家は「世間」から疎外されていた。

世間からうけた有形無形の屈辱は小さいものではなかった。中学校の教師であった和江の兄はそのために生徒の父兄達の圧迫で学校を追はれたし、和江の家に入りして

た者の足はだんだん意識して遠ざかり、傭の女は世間体を気にやんで暇乞ひを申し出た。父や母が人中に出ていくと露骨な目で衣裳を眺めまはし、一寸ばかり家の造作をしても、あれはみんな共産党から金が出てゐるのだ、と世間は噂した。さういふ人々の多くが貧しい勤労者や小商人たちであり、和江たちの運動はさういふ人々の人間と生活の解放を望んでゐるのに…（中略）和江の胸は憤りと憎悪でたぎり、しかもその憤りと憎悪がともすれば支配者共へよりも直接彼等の「無智」に向はうとする衝動を和江は抑へることはできなかつた。⁸

更に偉い建国精神と「満洲」の暗い現実の食い違いに苦しんでいることの裏に春子が共産主義者としてプロレタリア運動に参加し、その理念と実践の食い違いに苦しんでいた経験がある。和江は日本時代「共産主義者こそ最も人間らしい人間でなければならぬ、といふ信念は今でもゆるがない。けれど現実の活動の中で和江はたびたび理念と実践の間に食い違ひを感じ、ジレンマに陥ち苦しんできたのも事実であつた」⁹小説の王属官も「満洲」の暗黒の現状に苦しみながら、「王道政治という合言葉が上の方にいる偉いお役人達だけの空念仏に終わってはならない」ように努力を続けている。

二. 「王属官」の流転と変容

この小説は書き上げられた後、春子の手を離れ、ドラマチックな運命を辿っていた。まず、人気小説家赤川次郎の父親赤川幸一により、「王属官」と改題された。赤川幸一は当時満洲国文教部社会教育科に勤めていた。ハルビン図書館の出版物『北窓』という雑誌に「東遊記帳」¹⁰という赤川幸一の文章が載っている。それによると、彼は美術展覧会や建国記念文芸原稿募集など、幅広く仕事を展開したが、一番印象深かつたのは一九三七年の建国五周年記念文芸募集の時の当選作、牛島春子の「王属官」であるという。

当時文教部内には「審査員」なる者は私一人しかなく、他にも私以上の優秀なる学者文人は雲の如く在っても「小説」とか「劇」とかいふものとは縁の遠い賢人ばかりで、結局、私は当時百二三十篇の応募原稿を抱へて、下宿へ帰るやユーウツになって天井ばかりを睨んだのである。¹¹

「満洲」に劇団ができれば、この作品を上演しようと考えながら選び出したという。その時に、赤川幸一は勝手に「豚」という題名を「王属官」と変えた。改題の理由については、「〈雇員〉の身分だったから、〈属官〉に憧れてでもいたのだろう」と彼は自分の心境を打ち明けた。赤川幸一の選定動機は「王属官」の今後の運命を左右した。この短編小説は全七回にわたって改題されたまま、『大新京日報』に連載された。同年八月、「王属官」の題で、書き換えた脚本を使って、大同劇団が初演した。藤川研一の「王属官の映画化」¹²によると、大同劇団結成第一回公演と日本公演で「王属官」は大同劇団

の十八番物になった。牛島春子夫妻と劇中の実在人物は同席し、第一回の公演を観賞した。第一回公演について、藤川は詳しく綴っている。

御承知の方も多いと思ふが、この「王属官」がそれぞれ社会に名乗って出たのは、
康徳四年の春当時文教部と称してゐた現在の民生部で、最初に募集した建国記念文藝
小説の当選作で牛島春子女史の作品である。大同劇団が同年八月結成公演を行ふに際
して、今満映の開発課長として敏腕をふるってゐる赤川孝一氏が、当時その衝に当っ
ておられて快諾を得て劇化したものである。第一回公演の折は、はるばる奉天を隔る
僻地から、牛島夫妻並に王属官、中村官吏と劇中の実在人物が見物に見へられた。そ
の時の脚色は原作に忠実であったが、(中略)、この公演は日本語だったので(満語部
も出演するにはしたが) …¹³

その後、大同劇団は第二回目の日本公演にも赴いた。名古屋、東京、横浜、大阪の四
都市で十一日間十五回の公演を行い、一四五〇〇名余りの観客を得たという¹⁴。大同劇
団訪日公演のパンフレットに公演の意義が書いてある。「一に日満親善の強き楔となら
んとするに外ならぬが同時にこのことは大同劇団を正しく育てるかどうか重大な契機
と言はねばならぬ、一大同劇団の問題でなく隣邦満洲に生まれるそれは今後凡ゆる文化
的事業藝術的業績の上に影響をもつ重大なポイントと言ふべきである」。日本公演は「日
満親善」にとっても、大同劇団にとっても重大な意義を持っていたことが明らかになっ
た。

「第二回目の日本公演記念の際は満語が中心で、日、鮮語の応援出演」¹⁵に変えられ
た。大同劇団は当時、中国東北部における三大職業劇団の一つであり、「満洲」にいた
日本人官吏、会社員や協和会職員等のアマチュアの研究会として発足し、一九三六年に
は「満洲国演劇研究会」となった。この研究会は「新国家」の啓蒙機関であった協和会
内に仮事務所を置き、顧問格には甘粕正彦がいた。一九三七年、日本人演出家藤川研一
がこの「満洲国演劇研究会」と自身の劇団、さらに新京の二つの中国系小劇団を合同さ
せ、大同劇団を成立させた。¹⁶大同劇団の特徴は「組織内に日、満、鮮を有しそれぞれ
の観客層を持ってゐることである」¹⁷日本人だけでなく中国人、朝鮮人を含む劇団であ
り、言語も日本語を第一部とし、中国語である満語を第二部、一九三八年に朝鮮系の劇
団が加わり朝鮮語部が発足し、朝鮮語を第三部とした。さらにロシア語部の創設も計画
された。一九三八年十月四日から十一月九日にかけて、藤川研一が脚本した「王属官」
は『大新京日報』(十月十一日から『満洲新聞』と改名)に連載されたが、原作者牛島
春子の名が書いてなかった。藤川はその理由を弁明した。「第二回目の脚本はもう殆ん
ど原作とは離れた戯曲「王属官」としてのものだった。原作者に対しては申し訳ない程
に改作改変して了った。その出来栄への良否は別として、脚色に当たった私としては、作
者牛島氏の名前を出すのは、かへって作者への冒瀆であると考へた程である」。つまり

藤川はあまりにも大幅に書き換えたので、あえて原作者の牛島春子の名前を書いていなかったということである。この脚本は十月四日から十一月九日にかけて『大新京日報』（十月十一日から『満洲新聞』と改名）に連載された。

「満語脚本は東方国民文庫に、民生部の劉貴徳属官の翻訳を煩わして出版して頂いた」という藤川「王属官の映画化」の中の一文から「満洲」民生部の属官劉貴徳は頼まれて藤川の日本語脚本を翻訳したことがわかった。一九三九年劉貴徳訳の中国語脚本『王属官』は満日文化協会によって単行本東方国民文庫第十六編として出版された。当時の翻訳状況に関して、岡田英樹が考察をしていた。

日本人が「在満」中国人との交流を目的として、その作品を翻訳する「民族協和型」であるのに対して中国人側は同時期日本人の文学には冷淡である。

(中略)、この時代の趨勢が一定影を落としていて「国策文学」とされる作品が混在しているが、日本近代文学の代表作を翻訳するという基本姿勢は貫かれると言えるだろう

18

当時、翻訳の単行本として、出版されたのは牛島春子『王属官』と大内隆雄の『文藝談叢』以外に、ほとんど日本近代文学の代表作である。雑誌も同じ傾向を呈した。劉貴徳は「満洲」官吏であり、自ら進んで『王属官』を訳したのではなく、仕事範疇の作業であった可能性が大きい。次は詳しく論述するが、筆者は「牛島春子年譜」では未確認の劉貴徳訳の『王属官』を入手し、藤川「王属官」と対照してみた。彼はほぼ忠実に国策文学の藤川版「王属官」を翻訳したといえよう。「王属官」は一九四〇年に「満映」で映画化され、漫画にもなっていた。

こんなに大きな波紋を広げた「王属官」は原作者牛島春子の手を離れ、次々と日本語の脚本、中国語訳の脚本、映画、漫画と変容されてきた。特に、今までの先行研究は「王属官」の中国語訳、映画、漫画にふれたことがないことに気付く。特定な時空において、「王属官」の変容は決して偶然なことではないと考え、本論文は「王属官」の歩みの軌跡を辿ることによって、主旨の変化、登場人物の変容、改作者の動機などの諸問題を究明してみることとする。

三 翻訳と脚色と多彩な流通

(一) 藤川研一の「王属官」

一九三八年十月四日から十一月九日にかけて『大新京日報』（十月十一日から『満洲新聞』と改名）に連載された藤川研一の脚本した「王属官」と原作との相違点をまとめてみる。

まず、時間設定の面において、春子の原作は「満洲」建国五年後の一九三七年ごろと時間設定したが、藤川は建国二年後の一九三四年ごろと設定している。にもかかわらず、一

九三七年公布された街村制の実施状況について藤川の脚本には触れている。藤川は建国直後の「満洲」を描きたかったと推測している。それは旧軍閥張作霖の支配を非難する下敷きにもなる。原作は短編小説であるが、藤川版「王属官」は原作のエピソードを全部取り込んだ上、豊富な場面を設定した。

また、王属官の婚約者、牌長の息子、朝鮮人農民など登場人物は原作より多くなっている。物語は愛と正義などにより生じた葛藤が織り込まれ、大衆の好みに合うようなものに改作された。旧正月の元宵節のにぎやかなシーンを設け、高脚踊、大頭舞、獅子舞、汗船、老漢背少妻、龍灯舞といった中国人に好まれている伝統芸術を舞台に登場させ、娯楽性を増した。元宵節は中国人に重視されている一家団欒の日である。関がその前日に留置場に入れられたのは一層、観衆の同情を誘うことになると思う。それは藤川は中国伝統文化をよく理解した上での書き換えといえよう。日本公演に際しても、「満洲」色豊かな演技をパンフレットでアピールし、セールスポイントになっていた。『王属官』の劇中、郷土色豊かな満洲舞踊を紹介しバラエティ的濕ひを与へてゐる。(中略)、劇中「元宵節」前夜の場、満洲独特の「武技踊」「剣の舞」「獅子舞」「汗船」「龍頭舞」の名舞踊を紹介してゐる、動きの激しい異彩あるものである。

事件のほかに、王属官を中心とした恋愛、肉親愛も語られた。主人公王属官の本名はインテリらしい名前王文章となり、その婚約者の麗穎と結婚話をするために、帰郷した。原作では正月の休暇で親戚や友人に尋ねるためである。麗穎の父親は屯丁の劉星文である。原文の屯丁はただ不正の協力者、実行者であるが、劉は脅迫され、麗穎の身の安全のために、不正徴税に協力した。思わずこの「幽霊税」を徴収した劉のせいで、王は麗穎との結婚を先に伸ばした。劉は悪い役人と王を愛する娘との板ばさみになり、王属官に追究された時、娘への愛のゆえに精神的葛藤に苦しんでいた。王の説得で劉は過ちを悔い改め、正義の味方に転じ、事件の解決に協力した。結局、免罪になり、みんなに許された。準岳父の劉が関わっているにもかかわらず、王は自分の結婚を棚上げし、公正に事件の真相を追究した。婚約者の父として登場した劉は公正な「満洲」官吏像を鮮明にさせる重要なキャラクターになっている。

王属官は不正徴税を発く過程で、愛している麗穎としばらく別れ、命さえ脅かされたが、動揺せずに徹底的に厳しく調査を行った。王は愛の葛藤と死亡の危険を乗り越え、ようやく不正徴税の真相を究明できた。原文の王属官は固くて人間性に欠けている植民者の操り人形である。藤川版の王属官は人間性がゆたかになり、鮮明な個性を持っている生き生きとした人間に変容したといえるが、完全に植民者の代弁者になり、中国の売国奴になってしまった。原作では王属官は中村に不正徴税を報告した時、取り上げたのは「街村制」である。脚本では時代が「満洲国」建国二年後に設定されたが王属官は同じく「街村制」の問題を中村に投げていた。実は「街村制」が一九三七年から実施されたため、藤川版の「王属官」の現実離れの矛盾した一箇所になるわけである。そればかりでなく、藤川は百姓が役所に恐怖を持っているのは「旧軍閥政治の遺産」であることを指摘し、植民地支配の正

当性をでっちあげる心遣いがあると考えている。さらに、王属官は中国人としての自覚をまったく失い、日本人の目に映った歪曲された中国人像を語った。「私自身満洲人であり乍らこんなことを云っては恥ですが、私も建国前の支那人です。支那人は卑屈で狡猾で野蛮だといわれています。私も肯定します」。王は中国人でありながら、中国人を蔑視し、自らの民族的なアイデンティティがなくなり、完全に植民者の代弁者になってしまった。もっとひどいことに、王は「昔、日清戦争に負けたのも、支那人の無智と、個人主義と没法子観からです」と台詞が続いた。最後に王が「共産匪賊の殲滅に努力したい」と決心した。つまり、共産党殲滅の問題も藤川により、新たに付け加えられた。それは藤川をはじめとする日本植民者達が日本帝国主義の侵略を粉飾し、民衆をだまし、煽てようとする工夫であろう。植民者日本人の目からみると完璧なヒーローであり、被植民者中国人の目からみると裏切り者、売国奴である王属官という人物像に変容された。

農民関玉福も無智で従順な受身の農民像から人間性、生命感にあふれる人物像に変容した。彼は劉を許し、庇い、結果的には劉を悔悟させた。藤川は中国人をよく知っているつもりでどん底に位置している醜い中国農民像を樹立しようと、わざと関の立小便の場面を入れた。残念なことに、予想はずれになり、中国人観衆にはいい反響をもたらさなかった。一九三八年二月二日『大新京日報』に「脚本飢饉—この国文藝家の怠慢」という評論で、次のように脚本「王属官」を振り返っている。「今年の『王属官』公演の時、私は農夫関玉福に立小便をさして、満人観客層におもねった。その後近藤伊与氏に指摘されたが、私はこれを知ってめてやった丈に心苦しかったが満人層はさ程之を醜いと思わなかったといふ評を耳にしてきて、と考へ直してみたが、結局私の舞台上に於けるケレン以外の何物でもない事を知って恥だ。いかに醜い或はどん底生活を描いても、舞台美を忘却する事は許されない。台辞にしても、必要以上のおしゃべり、必要以上の醜い言動は排すべきである」中村の謝罪に対し、「考えてみりゃ俺達も悪いだ、なんぼ字を知らねえ百姓でも、無暗に更に衛門をこわがっていたからな」と自己認識できた。それに朝鮮人農民も登場した。彼等も中国農民と同じ被抑圧者であり、関に同情している。朝鮮人農民達は「満洲」で稼いだお金を朝鮮にいる母親に送るような苦しい生活を送っていた。関が留置場にいた時、彼等はお菓子を持って病床に伏している奥さん春鳳を見舞いに行った。朝鮮人農民達は中村に謝罪され、鮮満農夫協和の要を説かれたのは大同劇団の性質とも密接な関係を持っている。藤川は建国精神の「五族協和」をアピールするために、工夫して朝鮮農民の登場を付け加えたであろう。

また、原作より藤川の脚本は善悪鮮明な人物設定になっている。原作にはない麗穎を片思いし、絡み付いている趙牌長の息子作新という人物も設定した。作新はごろつきであり、人々に嫌われる人物である。「この父あって、この子あり」、彼の登場によって、趙牌長をもっと「悪人」にした。また、趙牌長、共謀者張子林、県公署租税徴収員周起成、省公署黄属官といった一連の悪人を新たに設定した。張が王属官銃殺を企て、謀殺しようというシーンが織り込まれ、観客の神経を刺激し、興奮させる。張子林は張作霖軍閥時期の役人

であり、「働いているものは安い月給だ、そうでもしなきゃ、うまいもの一つ食べやしねえ！それに百姓に金持たして楽しちゃいけねえ、というのがその頃の方針だった」とこじつけの弁解をした。張という人物設定を通じ、張作霖軍閥への批判にもつながっていったといえよう。さらに張に脅されて不正徴税を協力した県公署の租税徴収員周起成は現在の月給は十元しかない。「建国」後の行政改革前は月給三十元だったが、税金の余得があるだろうというので上役が二十元取り上げていた。「建国」後は、その上役が、「不正の公になるのをおそれて、十元でいいと査定したそうです」と周は強弁した。これに対し、王属官は「之は単に税金問題丈ではない、建国創業の隙間に巢食う、官吏の面を覆った匪賊の掃蕩が必要だ」と見解を示した。ここから「満洲」の偉い建国理念と現実との食い違いが露見された。建国直後の「満洲国」にはまだ暗い部分がたくさん秘められている。原作の末尾に関が飼っている「二匹いた豚の内、一匹は正月前に殺し、一匹はついこの間京城から来た商人に二十七円で売り払ったのである。関は思わず豚小屋の方を見黒い毛を被って、元気に歩き廻っていた豚の小屋をちょっとさびしいと思った」と最終的な解決が懸念されているのに対し、藤川版の「王属官」は円満に事件を解決し、いい人は無罪釈放され、悪い人は罰を受けることになった。藤川の脚本では「善」と「悪」の対立が強調され、「善」は必ず「悪」に勝てるという勧善懲悪の意味合いが強く読み取れ、大衆の好みに迎合する演劇に変質した。藤川によって改作された「王属官」は国策協力の道に大いに邁進したが、最後に、大衆の好みに合うように、王属官が婚約者麗穎に近付き、肩をもつという添い遂げることを暗示するハッピーエンディングに変容された。

（二）中国語訳『王属官』

翻訳作品を深く探ることによって、「満洲国」の文化構造やイデオロギーの多様性と複雑性が窺える。訳本のディスクリールには訳者の内心に潜めているものが入っているに違いない。翻訳文学は社会的コンテクストと切り離せない密接な関係を持っている。特に植民地の場合、状況は一層複雑になりかねない。前述したように、一九三九年、「満洲」民生部属官劉貴徳により、翻訳された『王属官』は単行本として出版された。手元にある『大新京日報』に連載された藤川の「王属官」と劉貴徳の『王属官』を一字一句対照しながら読み上げた結果、劉貴徳の『王属官』は藤川の脚本を忠実に訳し、大きな書き換えをしなかったことがわかった。あらすじはほぼ一致している。特に、中国人を侮辱する箇所までありのままに翻訳された。

ただし、細部にはいくつか微妙なところがある。たとえば、日本人官吏中村が朝鮮農民達に謝罪するところを訳さなかった。藤川「王属官」第三幕第三場マイクより「同時に鮮系農民朴外二名も直に帰村するのを許された、特に朴等に対しては、中村官吏より、懇々と此の経緯を語り帰村後も鮮満農夫協和の要を説き、自らの不明を詫びたのである」というナレーションがある。劉貴徳は「同时朝鲜农民朴姓以外二名也都即刻释放回家。中村事务官对于他们特别恳切说明原委，并嘱咐他们归村以后，要努力于满鲜农夫的协和，把自己

的不明详细申述了」と訳した。「把自己的不明详细申述了」は「自らの不明なところを詳しく述べた」という意味になる。劉は、指導民族の日本人官吏が被植民者の中国人に謝るシーンをカットしたと考えられる。劉自身も「満洲」官吏であり、日本人の指示に従い、行動する立場である。劉は日本人官吏が実権を握っている状況、日本人が支配者であることを考慮に入れ、非難されないように、中国人読者に強い指導民族の姿勢を見せようとした。

また、時間の書き換えが二箇所ある。第二幕第四場麗穎が父の劉星文のことを言っている。「もう一月以上になるわね、牌長さんの家に行ったきり帰らないの」。訳文は「已经两个多月啦，自到牌长家去以后永没有回来！」になっている。一ヶ月を二ヶ月に書き換えたわけである。長期間を強調し、麗穎と劉の気の毒さを増した効果につながる。さらに、第三幕第二場に王は不正徴税の共犯者宋巡官の居場所を尋ねる箇所がある。警士は「三日程前から病気で欠勤です」と答えた。訳文は「在三个月以前因病请假了」と宋巡官の不在期間を「三ヶ月」に延ばした。次第に宋巡官が事件の発覚を恐れてとっくに逃げたという意味合いになる。

さらに、劉貴徳が訳した『王属官』には誤訳が多いことが気になる。それらは、中国人読者に違うイメージをもたらすきらいがある。特に目立っている誤訳をリストアップしてみる。

藤川「王属官」	劉貴徳『王属官』	中国語訳の意味
①姿を出した作新ニヤニヤしながら木門から入ってくる	①作新又出现，且行且吹，旋自木门入。	「且行且吹」は歩きながら吹くという意味
②王さんでなくちゃだらう	②你不烦王先生吧？	「你不烦王先生吧」は王さんが嫌いではないだろうという意味
③ひっこんでろ、御飯だから	③别说啦，吃饭去吧	「别说啦」はもういい、もうおしゃべりをやめてという意味
④好人物相な律義一点張りという五十がらみの男、卑屈な生活の中に	④刘为五十许拘谨之人物，处于不得志之生活下	「不得志」は不遇という意味
⑤日本の兵隊と満洲国軍が討伐に来た時は嬉しかったぞ、双龍って匪賊の親方を捕へた時にや屯中お祭り騒ぎちゃった	⑤日本兵和满洲的军队讨伐来的时候，是好极了！把双龙那个贼的父亲拿住的时候屯中像唱戏那样的热闹。	「贼的父亲」は匪賊の父親という意味；「像唱戏那样的热闹」は旧劇を演じているようににぎやかだったという意味
⑥何だ、何うしたい劉さん	⑥什么事，刘先生怎么的	「看狗啊」は犬をみるとい

… <u>今晚は</u>	了， <u>看狗啊</u> 。	う意味であり、上下の文脈に合わない
⑦盗棒だッ関さん <u>手伝って</u> くれ。	⑦胡子来啦，关大叔你去 <u>去传一声</u>	「 <u>去传一声</u> 」は伝えてくれという意味
⑧王：(取りすがり) やめておくれ <u>こわい</u>	⑧母：(以手掖王令坐) 孩子， <u>拉倒吧</u>	王の台詞は母の台詞に変えた。「(以手掖王令坐) 孩子， <u>拉倒吧</u> 」は(手で王を止めて座らせる)王、もういいという意味である。中国語訳のほうは王が勇ましく悪人と戦おうとする姿が一層鮮明になる
⑨お父さんだって <u>承知だ</u> 、麗穎だって <u>嫌がってやしないぞ</u> 。	⑨我父亲 <u>谅解</u> 啦，在麗穎方面也 <u>不要反对</u> 吧	「 <u>谅解</u> 」は許したという意味であり、「 <u>不要反对</u> 」は反対しないぞという意味
⑩君は何か言はうとして <u>ゐることがあるんぢやないのかね</u>	⑩照你说的事，大约是 <u>没有的吧</u> ？	「 <u>照你说的事，大约是没有的吧</u> ？」は君が言っていることはないだろうという意味
⑪ふー、そうか、 <u>これはいい手がかりだ</u>	⑪噢，这么样么？	「 <u>これはいい手がかりだ</u> 」は「这是个好线索」という意味であるが、脱落され、訳されなかった
⑫ <u>それにもめげず</u> 良く報告してくれた	⑫那倒不要紧，你报告的很 <u>详细</u>	「 <u>那倒不要紧，你报告的很详细</u> 」はそれなら大丈夫、君が詳しく報告してくれたという意味
⑬何うやらうまく行っ <u>たぞ</u> 、元宵節前に留置場入りは相当効果があるぞ	⑬ <u>怎么办好呢</u> ？在元宵节前把他送进看守所相当的效果吧	「 <u>怎么办好呢</u> 」はどうしたらいいかという意味
⑭あんたのお父っあんも <u>気の毒</u> な人だよ	⑭你的爸爸也 <u>觉得很难过</u> 的。	「 <u>觉得很难过</u> 」は悲しがっているという意味
⑮わしは十何年も <u>屯丁</u> をやっ来てとる、だから、 <u>不正</u> だか、でないか良く知っ	⑮我做了十几年的 <u>屯丁</u> ，我作事正与不正，你是 <u>详细知道</u> 的	「 <u>我作事正与不正，你是详细知道的</u> 」はわしがやっていることが正しいかどうか

てるよ		か、君がよく知っているという意味
⑩張はお前が今度の張本人だと白状したぞ	⑩张子林把你和他本人的口供都招出来了	「他本人」は張子林本人という意味
⑪一切の事情は明白だ、張本人は誰かッ、それを聞き度い	⑪一切的事情都明白了, 张的本人和谁咧的意见我都要打听打听。	「张的本人和谁咧的意见我都要打听打听」は張さん本人と誰かの意見を聞きたいという意味である。⑩と同じ間違いである。

以上、対照しながら、考察してきたように、劉貴徳は日本語が達者ではなく、彼によって翻訳された『王属官』は国策文学の性質は変わらないが、けっこう誤訳が多くて、藤川脚本と微妙な違いが読み取れる。

(三) 映画「王属官」

更に、大同劇団の演劇作品としての「王属官」から満映で映画化される道を進んだ。『満洲映画』には映画「王属官」についての紹介がある。

「王属官」は何度もの舞台での成功を経た後スクリーンに移される事になった。物語は頗る緊張したもので、国境地帯の黒河に材を採り、一小官吏と農村の種々の問題を描いてゐる。原作者牛島春子女史である。この作品は嘗て建国文芸賞を獲得したもの、芸術的香気と社会的価値とを併せ持っている。

大同劇団は「王属官」を何度も公演した。今回映画化することになったが、その成功は決定的であらう。主演は大同劇団の趙剛と馬雪筠、舞台人がライトを浴びるのであるが必ずや驚異的好評を呼ぶであらう。¹⁹

藤川は映画を撮影する際に、面白さにこだわり、より人間としての王属官像を工夫していた。

第一劇と違って露骨に不正税金問題のみを取り扱ったのでは興味がないであらうし、かへって逆の効果を生んだりする危険性がある。何はさておき、先づ面白く観せねばならない。映画「王属官」でなければならない。

かうした原因から映画では不正事件は陰の筋を通す役目になって、王属官を中心とした肉親愛、恋愛が表面化してゐる。公私ともに悩みぬいた王属官に、人間王文章としての苦悩と幸福への到達を描かしてゐる。²⁰

監督は高橋紀と藤川研一であり、主役は大同劇団の趙剛と馬雪筠である。この大同劇団のユニット作品の撮影は藤川らにとって「満洲に於ける演劇人の映画行進曲の第一歩」であると位置づけられた。『満洲映画』²¹に映画「王属官」物語のあらすじが掲載された。前述した藤川脚本「王属官」とはずいぶん違う物語として展開していく。

時期は「満洲」建国後まもないある年の早春に設定された。登場人物の面においてもかなり書き換えられた。日本人官吏中村の代わりに中国人官吏楊事務官を登場させた。指導民族として実権を握った日本人や朝鮮農民を退場させることによって、「五族協和」というイデオロギーが薄くなっている。また、その妹素英という新たな登場人物を設定した。演劇の重要人物農民関玉福といったキャラクターもキャンセルされた。牛島春子が最も注目していた農民、農村問題はぼやかされてしまう。焦点は王属官の恋愛や肉親愛に移りつつある。王属官は一人で帰郷でなく、楊事務官と妹の素英と共に汽車に乗って帰郷する。兄の文禎、弟の文華が駅に出迎えていた。許婚者麗穎の父劉は王文章の叔父蔡の家で豚の税を取っている。蔡は文禎の家に来、変な豚税のことを話していた。王属官は兄文禎から税金の話聞き、税票を見たら、不正徴税であることを察知した。さっそく劉を訪ね、豚税のことで突っ込んだ。劉は評判は悪い人であり、王の尋問に困りきっていた。王は税票を回収することを劉に頼み、麗穎との結婚もしばらく延期してもらうことにする。

王は役所に引き返そうとするところ、母や村人に迷惑がかかるようなことをしないように兄から注意された。王は楊事務官に報告した。楊事務官は「…よく解った。街村制が布かれても一から十まで巧く行ってるとは思ってゐなかったが、しかしまだ斯うした不正事件が公然と行はれてあると言ふのは嘆かましいことだ。では早速警務局の方へ廻して徹底的に取調べることにしよう」と指示した。演劇と同じく「街村制」を取上げたが、県公署自主して調べてもらうかわりに、王を警務局へ行って調べてもらうことになった。王はその晩、楊事務官の家に泊まった。税票を奪い取ろうとする男が忍び込んだ。すると、王はその男と格闘し、拳銃で傷ついた。演劇「王属官」では村の兄の家で起った出来事が楊事務官の家に移された。

一方、村では蔡が引き立てられ、県公署に送られた。趙牌長は要領よく取調べに答えろと示唆した。演劇「王属官」では農民関は留置され、趙牌長の示唆通りに言って、釈放されたが、映画「王属官」は農民関という人物をなくし、王の叔父蔡の逮捕になった。

劉は趙牌長と張子林という悪い連中に監禁されたが、逃げ出し、家に帰って、麗穎に謝罪した。それは演劇にはない新たに追加されたエピソードである。劉は村で撃たれ、家に帰り、やっと王へ届ける手紙を麗穎に渡したら、なくなった。

元宵節前夜、麗穎は道を尋ねながら、王のアパートに着いた。あいにく、楊事務官の妹素英が王を誘って一緒に踊りを見に行くために、訪ねている。仲よさそうに一緒に出てくる王と素英を見て、麗穎はやきもちをして、悄然街へ出ていった。高脚踊りを見ている王は麗穎の姿をちらっと見て、後を追ったが、見失ってしまった。王と素英が帰ったら、机の上に一通の手紙と紙包みが置いてある。麗穎からの手紙である「父は張の手にかかって

死にました。死ぬ時にぜひあなたに渡してくれと一通の手紙を残して死んだのです。今日それをお届けするためにわざわざお訪ね致しました。けれども、やはり私のやうな田舎娘は、来なかった方が幸福でした。何も申し上げず、父の手紙だけを置いてまた村へ帰ります。どうぞお仕合せにお暮らし下さいませ」。映画「王属官」は麗穎を誤解させるために、素英という女性を新たに設定したに違いない。このように、王属官と麗穎の恋愛が誇張され、クローズアップされた。

王は急いで楊事務官を訪ねる。劉の遺書には農民を苦しめる不正役人の名前が書いてある。楊事務官はそれに基づき、警務局に電話をして逮捕状を出してもらった。悪党はようやく逮捕された。新聞もこの事件について「農民の膏血を搾る悪魔一味悉く検挙さる！大検挙の蔭に咲く王属官の献身的美談！！」と報道した。映画「王属官」は事件のことを淡々と語っただけである。「露骨に不正税金問題のみを取り扱ったのでは興味がないであらうし、かへって逆の効果を生んだりする危険性がある」²²と心配され、書き換えられた。

最後に、王属官は楊事務官と素英と同行し、帰郷した。父の墓の前で泣いている麗穎を見て、麗穎の肩を引き寄せた。素英はその様子を見て微笑んでいる。村の花火は上げられて、雲雀の声も聞こえた。このようなめでたいシーンで締めくくられた。

以上の考察を通じて、映画「王属官」は藤川版「王属官」との相違点を浮き彫りにした。事件の経緯を詳しく演じず、農民役、日本人官吏役もキャンセルされた。農民の苦しい生活や「五族協和」というイデオロギーがぼやかされるようになった。男女の恋愛の葛藤、ヒロインとしての王属官の行動を中心に物語が展開している。

(四) 漫画「王属官」

漫画「王属官」は『満洲映画』康徳7年7月号に載っている。タイトル「王属官」の下に「原作…牛島春子、主演…趙剛、馬雪筠、王三、涵子、漫画…藤井凶夢」と書いてある。映画「王属官」とはまた微妙な書き換えが見られる。

王属官は半年振りに恋人麗穎に会いに帰ってきたが、ちょうど豚税を取って回っている劉を見た。王は豚税の票を見て不思議に思い、村人を集めた。みんな豚税をおさめたことがわかり、恋人麗穎をつれて劉の家へ行った。劉は知らないと言張り、娘との許婚も断ると言った。演劇「王属官」も映画「王属官」も王自身が結婚を延期すると決断するが、漫画「王属官」は豚税で劉が許婚を断ることに変容した。すると、王は街へ帰り、楊事務官に一々報告した。二人は悪い役人摘発の方法を相談する。その晩、悪漢どもが楊事務官の家に忍び込み、税票を奪い取ろうとした。そこに泊まっている王が傷つき、倒れた。村では豚の税票を王に渡した者が全員留置場に入れられ、趙牌長に脅かされて、豚税を否定した。同時に、劉は射殺され、駆けつけてきた娘麗へ遺言として手紙を王属官に渡してくれと頼んだ。麗穎は後を王の兄に託して、王の所にかけてきた。その時、王はちょうど楊事務官の妹のピアノを聴いている。麗穎は誤解して、手紙を置いて去った。映画は踊りを見にいく二人を見て、誤解したが、漫画はピアノを弾いている場面に変えられた。王は手

紙を見て、楊事務長に報告した。楊事務長は警務局に電話し、悪人を逮捕すると命令した。警察全員は非常召集して悪役人趙牌長の隠れ家へ急行した。激しい銃戦の後、牌長一党は投獄され、事件は解決できた。最後に、王属官は麗穎を抱きしめ、めでたいラストシーンとなった。これらの出来事は映画「王属官」と似ているが、微妙な書き換えがある。漫画「王属官」は映画「王属官」に基づき、描いたものであると推測している。読者の好みに合うように、事件を淡々と描いて、人間味溢れる王属官を造型していく。国策色彩は薄くなり、面白さは増している。

おわりに

牛島春子「豚」は赤川孝一の手によって「王属官」に改題され、波乱の「満洲」で大きな波紋を広げていた。王という無名な「満洲」官僚は一举に津々浦々知れ渡るようになった。本論文は日本語脚本、中国語脚本、映画、漫画といった多彩な流通を経ていた「王属官」の変容を究明する試みである。特定な時空において、「王属官」の変容は決して偶然なことではない。植民地という複雑な状況において、これらの微妙な変容を明らかにすることによって、当時の社会の力関係、細部に浸透しているコロニアリズムも伺えた。

藤川研一が書き換えた脚本を使って、大同劇団が初演した。牛島春子夫妻と劇中の実在人物は同席し、第一回の公演を観賞した。それは原作に忠実なものであった。しかし、二回目の書き換えは原作とかなり離れ、新聞に連載された時、あえて原作者の牛島春子の名前を書いていなかった。「五族協和」をアピールするために、朝鮮人農民など多くの人物を登場させた。物語は愛と正義などにより生じた葛藤が織り込まれ、大衆の好みに合うようなものに改作された。しかも旧正月の元宵節のにぎやかなシーンを設け、高脚踊、大頭舞、獅子舞、汗船、老漢背少妻、龍灯舞といった中国人に好まれている伝統芸術を舞台に登場させ、娯楽性を増した。牛島春子原作の王属官は固くて人間性に欠けている植民者の操り人形である。藤川版の王属官は人間性がゆたかになり、鮮明な個性を持っている生き生きとした人間に変容したとはいっても、完全に植民者の代弁者になり、中国の売国奴になってしまった。さらに、共産党殲滅の問題も藤川により、新たに付け加えられた。それは藤川をはじめとする日本植民者達が日本帝国主義の侵略を粉飾する工夫であろう。藤川によって改作された「王属官」は国策協力の道に大いに邁進し、大衆の好みに合うように、いい人は無罪釈放され、悪い人は罰を受けるといった勧善懲悪の主旨も読み取れる。

また、珍しい翻訳の単行本『王属官』について、考察した結果、「満洲」民生部の属官劉貴徳は頼まれて藤川の日本語脚本を翻訳し、藤川の脚本を忠実に訳し、大きな書き換えをしなかったことがわかった。ただし、細部にはいくつか微妙なところがあり、誤訳も多く、藤川脚本と微妙な違いが読み取れる。

映画「王属官」は事件の経緯を詳しく演じず、農民役、日本人官吏役もカットされた。農民の苦しい生活や「五族協和」というイデオロギーがぼやかされるようになったといえよう。そのかわりに男女恋愛の葛藤、ヒーローとしての王属官の勇氣溢れる行動を中心に

物語が展開している。国策映画というより、娯楽映画に近付きつつある。

漫画「王属官」の出来事は映画「王属官」と似ているが、微妙な書き換えがある。漫画「王属官」は映画「王属官」に基づき、描いたものであると推測している。読者の好みに合うように、事件を淡々と描いて、人間味溢れる王属官に焦点を移した。国策色彩は薄くなり、面白さが重視されている。

注

- ¹ 「感傷の満洲」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年 三〇〇～三〇一頁
- ² 「農村を描け—『王属官』を中心に—」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年三十二～三十三頁
- ³ 「農村を描け—『王属官』を中心に—」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年三十二～三十三頁
- ⁴ 「農村を描け—『王属官』を中心に—」『牛島春子作品集』ゆまに書房 二〇〇一年三十二～三十三頁
- ⁵ 孫邦 偽満洲国資料叢書『殖民政権』吉林人民出版社 一九九三年を参照
- ⁶ 北田幸恵「特集読み物 牛島春子の文学からみた「満洲」 満洲文学の代表作品から満洲国国民の心情をさぐる」『歴史読み本』二〇一三年八月 一八二～一八七頁
- ⁷ 牛島春子「秋深かむ窓」『女人芸術』第一集一九四九年一月 二十三頁
- ⁸ 牛島春子「秋深かむ窓」『女人芸術』第一集一九四九年一月 十三頁
- ⁹ 牛島春子「秋深かむ窓」『女人芸術』第一集一九四九年一月 二十四頁
- ¹⁰ 赤川幸一「東遊記帳」『北窓』第一卷第二号 一九三九年七月十五日 三十六～四十一頁
- ¹¹ 川村湊『満洲崩壊：「大東亜文学」と作家たち』文藝春秋 一九九七年 三三三頁
- ¹² 『満洲映画』康徳七年六月号 一〇八頁
- ¹³ 『満洲映画』康徳七年六月号 一〇八頁
- ¹⁴ 坂本正博「牛島春子年譜」を参照
- ¹⁵ 『満洲映画』康徳七年六月号 一〇八頁
- ¹⁶ 『満洲映画』康徳七年六月号 一〇八頁
- ¹⁷ 『満洲映画』康徳七年六月号 一〇八頁
- ¹⁸ 岡田英樹『続 文学にみる「満洲国」の位相』研文出版 二〇一三年八月 二二九～二三五頁
- ¹⁹ 『満洲映画』康徳七年七月号 三十一頁
- ²⁰ 『満洲映画』康徳七年六月号 一〇八頁
- ²¹ 『満洲映画』康徳七年七月号 八〇頁
- ²² 『満洲映画』康徳七年六月号 一〇八頁

第三節 対応する日本語の作品が見つからない中国語の作品

はじめに

一. 新資料の紹介

中国東北部の図書館に実地調査することをきっかけに、一九四三年『青年文化』第一号に掲載された牛島春子の中国語の作品「遙遠的訊息」（遠くからの便り）を発見した。『青年文化』は「満洲」後期の新文学作品を発表する総合的な雑誌であり、新人作家を見出すことを目的とした。この雑誌の旧名は『新青年』である。一九三五年奉天協和会の機関誌として発行し始め、大量の新文学作品の発表舞台となった。廃刊後、新京満洲帝国協和会青少年団中央統監部により、『青少年指導者』という雑誌が創刊されたが文芸作品の激減でやむをえず一九四二年七月に廃刊となった。のちに『青少年指導者』の同人たちは満洲青年文化社を設立した。彼らにより一九四三年八月新京で月刊『青年文化』が創刊されて一九四五年一月廃刊まで十八期も発行された。

今までの先行研究では中国側の研究者も日本側の研究者も「遙遠的訊息」に触れたことなく、牛島春子の経歴を詳しく紹介した「牛島春子年譜」（第二稿）¹にも収録されておらず、この作品はほとんど知られていない状態にある。ジャンルは短編小説に属しているが、内容から見ると国策に沿った女性関連の作品である。文末に「筆者は満洲有数の女性作家である。作品は満洲の風土を題材とするが、「祝といふ男」「王属官」などがある。後者は満映により、映画化された」²という括弧付きの説明がある。第Ⅱ部第三章第一節で記しているが、「満洲」時代、日本文学の代表作でもない牛島春子の作品が翻訳されてことは極めて珍しいことである。この作品は対応する日本語の作品がまだ見つからないため、日本人にその内容を紹介することにする。

主人公は瑞枝という日本人女性である。彼女は従兄の江川俊二に付き纏われて、婚約話まで出されて、やむをえず「満洲」に逃げ出した。そこで就職して、会社の寮に住んでいる。ある日、俊二からの葉書が届いた。いやいやながら読んでみたら、俊二は南支派遣軍に編入されたことがわかった。俊二は南支の戦場で命の価値が実感できたという。十年間、悪夢のように瑞枝の青春を狂わせた俊二の葉書は、瑞枝の記憶を呼び戻した。十年前、瑞枝が十六歳の頃、九州のある郊外に住んでいる伯母の家へ遊びに行った。風呂上がりの瑞枝は川端で風景を眺めていたが、突然、後ろから俊二に抱きしめられた。あの時、十六歳の瑞枝は俊二の気持ちはわかるはずがない。言葉で出せないほど恐怖感と嫌悪を抱いていた。あれから、瑞枝は俊二の家から遠ざかっていった。女学校の教務長を務めている父親と主婦の母親と三人家族で幸せに生活を送っていたが、十九歳、瑞枝は専門学校二年の時、急性肺炎で父に死なれた。母親と家を借りて、仕事をしながら母親の面倒を見ていた。二十二歳のとき、母親は用事があって、俊二の家で一泊したがその際に、俊二との婚約話を持って帰った。瑞枝は倒れるほどショックを受けた。彼女は断固として断ったので、それ以来伯母一家に嫌われるようになった。その後、瑞枝に関する悪い噂が流れていた。二十五歳の時、母親はひどい風邪から腎臓を患い亡くなった。一人ぼっちの瑞枝はしばらく伯

母のうちで下宿した。そこで俊二は旦那ぶりを発揮して、瑞枝に世話をさせた。やむをえず、瑞枝は新しい生活を求めて新京に逃げた。

そんな俊二が日本の勇ましい兵士になるとは意外であった。瑞枝の祖国を守るために死を恐れない兵士に対して、彼女は敬意を捧げた。すると、瑞枝は俊二への態度が一変して、慰問袋を作り始めた。以上のような筋である。

二. 作品の解説

(一) 言葉遣いの特徴

中国語の小説であるにもかかわらず、本格的な中国語の作品と違って、日本語混じりの部分の多いことが目立った。岡田英樹氏は「中国人作家が意識せぬうちに中国語をおしのけ、多くの日本語が文章のなかに浸透していた」という事実を指摘し、「ある程度の定着をみせた日本語は、文字のうえからも、音声のうえから母語との区別がつかなくなる」³としている。それは、当時「満洲」で行われた日本語強制教育と密接な関係があるであろう。この小説には多数の日本語語彙を取り入れたと言える。例えば⁴、

- ① 「那是军事郵便，发信人是南支派遣军某部队的江川俊二」（あれは、軍事郵便であり、送り手は南支派遣軍ある部隊の江川俊二である）
- ② 「从女学校卒業后，便允许考进了上级的学校」（女学校を卒業後、進学が許された）
- ③ 「瑞枝十九岁在专门学校二年的时候，父亲患急性肺炎去世了」（瑞枝は19歳専門学校二年の時、父親が急性肺炎でなくなった）
- ④ 「怪不得您的颜色像煞有其事似的」（何かあったような顔色をしている）
- ⑤ 「母亲瞧到瑞枝过度兴奋的样子，只好呆然地看她走去」（母親は瑞枝の興奮し過ぎた様子を見て、やむをえず呆然と彼女に目をやった）
- ⑥ 「瑞枝读着俊二的胁迫状般的书信，竟惊异格外冷静到自己了」（瑞枝は俊二の脅迫状のような手紙を読みながら、意外に落着いていた。）
- ⑦ 「此后的瑞枝，每从公司下班，便急忙地回到宿舍，取出装着布头的盒子，热心地缝起人形」（その後、瑞枝は会社から帰ると急いで宿舍に帰って、小さい布の入った箱を取り出して、熱心に人形を縫い始めた）
- ⑧ 「瑞枝的祖国，为创造明日的历史，赌国家的运命，在战争着」（瑞枝の祖国は、明日の歴史を作るために、国の運命をかけて、戦っている）
- ⑨ 「装满一个足以满足俊二的慰問袋，写一封信，只不过是更高洁的，换句话说：那是日本的一个女性捧呈给军人的至诚的祈祷罢了」（俊二を満足させる慰問袋を一杯詰め込むのも、手紙を書くもの、もっと清らかになるにほかならない。言い換えれば、それは一人の日本人女性は軍人に捧げるお祈りだけである）

④と⑤は中国語にもある語彙であるが、意味が違う。中国語の「颜色」は一般的に「色」に相当する。また、中国語の「興奮」は「非常に嬉しい」という意味であるが、上述の例はいずれも日本語の意味そのまま使われていた。

(二)「世間」に流された日本人女性

内容から見ると、この小説は第三人称で書かれた戦争昂揚の作品である。日本人の男性は徴兵制度を支持すべきであり、女性は戦争を協力すべきであると呼びかけた。中国人にも戦争の正当性をアピールしようとしたのではないかと考えられる。牛島春子の日本語で書かれた作品「女」と比べても、主旨が変わらない。一九四二年四月『芸文』第一巻第五号四月号に発表された短編小説「女」も日本人女性の戦争協力を呼びかける作品である。

家父長制のもとで抑圧と差別に苦しんできた東アジアの女性たちにとって、植民地主義という新しいタイプの支配構造が彼女たちにもたらした複雑な「生」の軌跡をさぐってみた。第Ⅱ部第一章第五節で考察したように、牛島春子は左翼運動参加の経験があっても、植民地「満洲」に渡った後、「世間」に流されて、「転向」した。家父長制、ジェンダー、階級的な衝突より、ナショナリズムを優先にすることが浮き彫りになった。春子の一家は「世間からうけた有形無形の屈辱は小さいものではなかった。中学校の教師であった和江の兄はそのために生徒の父兄達の圧迫で学校を追はれたし、和江の家に入入りしてゐた者の足はだんだん意識して遠ざかり、傭の女は世間体を気にやんで暇乞ひを申し出た。父や母が人中に出ていくと露骨な目で衣裳を眺めまはし、一寸ばかり家の造作をしても、あれはみんな共産党から金が出てゐるのだ、と世間は噂した。さういふ人々の多くが貧しい勤労者や小商人たちであり、和江たちの運動はさういふ人々の人間と生活の解放を望んでゐるのに…(中略)和江の胸は憤りと憎悪でたぎり、しかもその憤りと憎悪がともすれば支配者共へよりも直接彼等の「無智」に向はうとする衝動を和江は抑へることはできなかった」⁵。

「世間論」の提唱者阿部謹也が「明治時代に我が国は国を挙げて欧化政策に取りかかるしかなかったのである。しかし、欧化といってもそれは法律や行政機構、産業、教育制度などに限定され、人と人の関係のあり方にまではどうても及ぶものではなかった。(中略)人間関係は従来を形を残すことになった。(中略)従来人と人のあり方とは一言でいえば「世間」のことであり、「世間」が生き残ったということなのである」⁶と述べた。日本社会は「世間論」で成り立っているとされる。牛島春子のせいで家族が異端視されていたこと、「世間」から疎外されたことが彼女の「転向」を促した。

牛島春子は、「転向理由書」で「私は此の運動に入る時、この運動こそ今の社会に於いては唯一無二の正義への道であり、大道徳だと信じ、偉大な社会革命の完成のためには目の前の多少の犠牲や生起する悲劇は当然なことだ、私達はそれを乗り越えてこそ、本当の革命家たることが出来るのだと考えへてみました。最近私は色々な考と共にそれが一面には最なことだとは云へ、全く若いもの々陥り易いはき違へたヒロイズムであり、一種の誇大妄想に過ぎなかったと考へる様になりました。父母に取ってよい娘であり、兄姉に取っても良い妹であり、そうして私の真面目な正義への追求もゆがめないうで、もっと正常に生きて行く道があつてよい筈だとひそかに思ひ廻らしてゐた際、私は父に会ひました。何時も無口で我儘な私にも無頓着だと思はれる位に寛大だった。父のやっぱりムツツリした姿

を薄暗い面会所で見出した時、私は自分で自分の頑固さが意地も張りもなく音を立て崩れて行くのを感じました。私の転向の動機は只それ丈です」⁷と打ち明けている。「一口に「転向文学者」といってもその後の「満洲国」での歩みを見ると、実にさまざまである。「満洲国」が成立すると、「満洲国」に対して、次の三つのいずれかの立場あるいはコースをとることを迫られていた。①表向きは一応容認する。消極的なコミット②積極的に肯定する。あるいは同時に便乗する。積極的なコミット③表向きは一応あるいは積極的に肯定するが、内実では抵抗を試みる」⁸と西田勝氏は「転向文学者」を分類したが、牛島春子はそのどれに属するか、作品全体から判断を下すべきであろう。戦争中、牛島春子をはじめとするプロレタリア文学の転向者たちの表現には多く国家権力に対して屈服と抵抗が織り交ざっていたが、全体としては屈服すなわち侵略戦争への協力がメインである。

当時の「世間」は戦争と切っても切れない関係がある。福沢諭吉の「脱亜論」で戦争が正当化された。明治維新以後、日本は位置的にはアジアの一員であるが、実際には『万国公法』を内面化して、欧米列強と競争して植民地を奪いはじめた。「[亜細亜の東辺]に「国土」があれば、地政学的には、最も遅れているはずなのであるが、「国土」の地政学ではなく、「国民の精神」の地政学で言うと、すでに「脱亜」を果たしているというのである。ここで注目しておかねばならないのは、福沢が、国力としての経済力や軍事力については問題化せず、「精神」だけを特化している点であろう」⁹福沢が怯えているのは、欧米列強のオリエンタリズムの視線に「日本」が「支那朝鮮」とひとしなみに刺し貫かれてしまうことなのである。欧米帝国主義列強の論理で自己植民地化していく過程を、国内的には「文明」と「進歩」の名によって、欧米列強と対等になるのだと強弁してナショナリズムを煽っていく自己矛盾、ナショナリズムが自己矛盾であるがゆえに、その矛盾を隠すために、清国へ敵気心を煽りつつ、朝鮮半島への植民地主義的な侵略の野望に振り向け、軍備拡張のための増税を臣民に押し付けていく。

日本が太平洋戦争を起こした原因は米英を追い出して、東アジアの権益を確保することにある。宗主国の女として瑞枝は完全に原住民のことを視野に入れなかった。他国で戦っている日本の男は彼女の母国を守るため、歴史をつくるためだという戦争の侵略性を粉飾したわけである。ジェンダーの問題が意識できて、反抗した日本人女性は、やはりナショナリズムを優先にした。

日本近代文学には戦争文学、特に長期間外地体験を持っていて、戦後、引き揚げてきた日本人たちが書いた文学が欠かせないものである。明治維新後の富国強兵政策の中で一八七三年の徴兵令の公布により国民皆兵理念が普及し始めた。戦争は特定陣営のものから、全国民の義務となった。俊二はまさにその中の一人であろう。「我自从荷枪于南支的战野，空前的体会到生命的价值，而似乎都达到了视死如归的心境」（僕は銃を負って南支の戦場に赴いてきてからというもの、命の価値を実感した。死は帰省のごとくという心境になったようである）と戦時中男性の存在価値を表明した。国から与えられた使命を果たそうとしているのである。

一九四一年十二月二十八日、太平洋戦争が勃発した。開戦から八日後、竹内好が「大東亜戦争と吾等の決意」という文章を発表した。

歴史はつくられた。世界は一夜にして変貌した。われらは目のあたりそれを見た。感動にうちふるえながら、虹のように流れる一すじの光芒のゆくえを見守った。(中略)十二月八日、宣戦の大詔が下った日、日本国民の決意は一つに燃えた。爽やかな気持ちであった。(中略)率直に言えば、われらは支那事変に対して、にわかと同じがたい感情があった。疑惑がわれらを苦しめた。(中略)わが日本は、東亜建設の美名に隠れて弱いものいじめをするのではないかと今の今まで疑ってきたのである。(中略)この世界史の変革を壮挙の前には、思えば支那事変は一個の犠牲として堪え得られる底のものであった。(中略)大東亜戦争は見事に支那事変を完遂し、これを世界上に復活せしめた。今や大東亜戦争を完遂するものこそ、われらである。¹⁰

竹内好は「満洲事変」が起こった年の一九三一年、東京帝国大学文学部支那文学科(現在の東京大学)で勉強していた。一九三七年北京留学もしていたし、中国通である。中国だけを相手とする戦争なら、「弱いものいじめをするではないか」と疑問に思ったようであるが、強いアメリカやイギリスを相手とする戦争であれば、「爽やかな気持ち」で日本国民としての決意を述べたわけである。牛島春子の作品が発表された当時、泥沼に陥った日中戦争は太平洋戦争にエスカレートしたところである。日本国民は「歴史を作る」正当な戦争であると戦争を位置付けたであろう。牛島春子の戦争認識も変わらなく、「瑞枝の祖国、为创造明日的历史，赌国家的命运，在战争着」(瑞枝の母国は、明日の歴史を作るために、国の運命をかけて、戦闘している)当時、太平洋戦争は弱肉強食の侵略戦争ではなく、歴史を作る戦争であると日本人に認識されたのである。さらに綴ったが「你从俊二的手中解放了，此后你自由地开拓你的幸福吧」(君は俊二の手から解放された。それからご自由に君なりの幸福を開拓してください)と俊二はすべてを手放して、命がけで国に忠を尽くす心構えが伺える。「在这激流里，瑞枝和俊二，洗涤旧日个人的感情残渣，二人在更高的地方，将要重新握手了。那真是遥远的感觉。祖国战争的圣美，在这一点也会让她感到」(この渦巻きの中に、瑞枝と俊二は昔の感情の屑が洗われて、もっと高いところで手をつなぐことになる。それは本当に遠い感じである。母国戦争の神聖と美も感じられた)と瑞枝は戦争の神聖と正当性を訴えた。対立してきた二人は国の戦争のために味方になって、協力関係に転じた。最後に、慰問袋を作ってあげて、「装满一个足以满足俊二的慰問袋，写一封信，只不过是更高洁的，换句话说：那是日本的一个女性捧呈给军人的至诚的祈祷罢了」(俊二を満足させる慰問袋を一杯詰め込むのも、手紙を書くのも、もっと清らかになることにほかならない。言い換えれば、それは一人の日本人女性は軍人に捧げるお祈りだけである)と日本人女性銃後の支援をアピールした。常に死と隣り合わせても、恐れず勇ましく戦う兵士の姿が大いに褒美された。

作者の創作意図は、日本人の男を積極的に勇ましく戦うように激励すること、日本人の女に慰問袋とか銃後の協力を呼びかけること、中国人に戦争の正当性をアピールすることなどに意図があるのではないかと考えられる。

(三) 植民地におけるフェミニズム思想の変容

近代は「家族」の時代であるといわれる。恋愛や結婚、家や家族の問題は中心的なテーマになっている。「それは近代的な自我意識に基づいてた、自由な恋愛こそ近代が実現を目指す人間解放とつながりあうと考えられていたからであり、だからこそ自由な恋愛を抑圧する「家」は近代文学の大きな闘争対象となった」¹¹瑞枝の父親は女学校の教務長を担当していて、学者気質に満ちているタイプであり、彼女に対して非常に優しい。三人家族は幸せに親しく暮らしている。父親は亡くなった後、瑞枝は仕事しながら母親の面倒をみる。母親は強制的に結婚させず、瑞枝の意見を尊重し、俊二との婚約話を断った。学校教育を受けたし、自由に働けるし、自分の意志で結婚相手を決めるし、瑞枝はわりと近代的かつ理想的な家庭で育てられた。それに対して、俊二の家は家父長制の象徴といえるであろう。父親は公立病院の院長であるし、裕福な家庭環境と言える。瑞枝は俊二の愛から家父長制の束縛から抜け出そうとして新天地「満洲」に渡った。自立で恋のない結婚を大胆に拒否して、男権に服従としない近代女性像が浮き彫りになった。しかし、植民地にはフェミニズムの限界がある。

一九三二年、国際世論の非難を浴びつつ建国された「満洲国」は、これを独立国と呼ぶ日本政府の言説とは裏腹に、内実は軍の支配を背景にした植民地であって、「民族協和」の実態とは、当地に生活する諸民族の差異を生かしつつ共存することではなく、人々に日本語日本文化を押し付け一元化するものにほかならなかった。「私達満洲女性が日本内地の女性よりも、もう一つ多く課せられてある重要な任務は、私達が指導民族の女性であるといふ自覚とその矜持である」¹²と牛島春子が述べたように、日本女性が中国人女性の優位に立って彼女たちを教化し、しかも日本女性の視座にたつて中国系女性を表象し、日本女性の言説に中国人女性の言説を吸収させてしまう。中国は日本にとって「野蛮の地」であり、最もオリエンタルな存在である。より近代化され、知的であり、自立し、しかも女性的でもある日本人女性たちの目に映った中国人の女性は怠け者で、向上心がなく、一夫多妻制を甘受し、非衛生的で、繊細な情緒に欠けている女たちである。中国人女性を啓蒙し自立を促すという近代化の立場から教化しなければならない。自立した瑞枝は中国人女性の近代化を促すモデルにほかならない。サイードの『オリエンタリズム』(一九七八)に「東洋という他者をめぐる、精緻的な分析と記述を可能にする言説の体系を創出することによって、他者としての東洋の文化的異質性を鏡としながら、西洋というヨーロッパの人々にとって自己像が構成されてきた。そして東洋について詳細な議論を積み重ねることによって、ヨーロッパの人々は、それとは異質な西洋を権威化し、東洋を支配し、教え導き、西洋的な価値観や世界観によって、「世界」を操作する主体を編成してきたのである」¹³とあるが、

これはその一例であろう。

このように日本女性は戦争を機に、家庭の外に出て、いわゆる社会への進出が実現できた。そこから、自らの存在価値も意識した。牛島春子は侵略の戦争の一翼になって、被植民者側の女性の声を聞かず、世界女性のために権利を求めるのではなく、日本女性のために権利を求めつつあったのである。

おわりに

以上、対応する日本語の作品が見つからない牛島春子の中国語で書かれた作品「遙遠的訊息」（遠くからの便り）を取り上げることによって、政治や歴史の記録から読み取りにくい「満洲」と日本女性との関係を浮き彫りにする試みをした。春子による創作された「満洲」時代の「女」などの作品と同様、主旨が変わらず、日本人の男を積極的に勇ましく戦うべしと激励すること、日本人の女は慰問袋とか銃後の協力を呼びかけること、中国人に戦争の正当性をアピールすることなどである。牛島春子をはじめとする「転向者」たちは日本で左翼運動に参加した経験があっても、植民地「満洲」に渡ったら、「世間」に流された。日本の社会は「世間」の論理で成立しており、日本人はその中で生きてきた。家族が異端視されていたこと、「世間」から外されたことが彼女の「転向」を促した。春子のように、西欧の個人に、ベートーベンやドストエフスキーの読書体験でしか接触できなかった戦前の共産党員は、「世間」の一員としての意識の方が実際の生活では主導するのである。

また植民地にはフェミニズムの限界があり、日本人女性は家父長制、ジェンダー、階級的な衝突よりナショナリズムを優先して、侵略の戦争の一翼になり、被植民者側の女性の声を聞かず、世界女性のために権利を求めるのではなく、日本女性のために権利を求めつつあった。福沢諭吉の「脱亜論」が侵略戦争をエスカレートさせ、さらに戦争の正当性につながる。他国で戦っている日本の男は日本を守るため、歴史をつくるためであるという戦争の侵略性を粉飾した経緯を辿った。ジェンダーの問題を意識し、反抗した日本人女性も、やはりナショナリズムを優先した。中国は日本にとって「野蛮の地」であり、最もオリエンタルな存在である。日本女性は中国人女性の優位に立って教化してきたのであり、牛島春子もその一人であったと言えよう。周縁化されてきた女性達は戦争中、国策に添って重視され、家庭の外に出て男並みに社会進出が実現できた。牛島春子の戦争協力は総動員体制と関わっているが、もう一つの理由は春子が戦争を機に女性としての存在価値を見つけた事によると考えている。

注：

¹坂本正博「牛島春子年譜（第二稿）」二〇〇二年『絃説』二（三）二〇五～二一三頁

²筆者訳

³岡田英樹『文学にみる満洲国の位相』二〇〇〇年 研文出版 一七五頁

⁴原文は古い繁体字で書かれたが、簡体字に書き直した

⁵牛島春子「秋深かむ窓」『女人芸術』第一集一九四九年一月 十三頁

⁶阿部謹也『教養とは何か』一九九七年 講談社 十三～十四頁

⁷北野民夫『特高と思想検事』一九八二年 みずず書房 四四七頁

⁸西田勝「ある転向文学者の軌跡」『植民地文化研究』（六）二〇〇七年 七十一頁

⁹森田陽一『ポストコロニアル』二〇〇一年 岩波書店 四十二頁

¹⁰『中国文学』八十号 一九四二年 満洲新聞社 三十六頁

¹¹渡辺澄子『女性文学を学ぶ人のために』二〇〇〇年 世界思想社 二十頁

¹²牛島春子「在満女性にある問題」『牛島春子作品集』二〇〇一年 ゆまに書房 一三八頁

¹³森田陽一『ポストコロニアル』二〇〇一年 岩波書店 四十二頁

第四章 結論

「満洲文学」の研究が進み、牛島春子文学の意義が問われつつあり、評価が高まっている状況の中で、新資料を援用し、新たな研究を展開する価値が充分ある。牛島春子の知られていない作品はまだあるし、牛島春子研究の基礎作業はしっかりしているとは言えない。資料の制限で牛島春子文学の全容が見えにくい恐れがあるから、実証調査や散逸作品の収集が最も重要かつ基礎的なステップである私は思う。執筆する前に、筆者は中国東北部の図書館、日本の国立国会図書館、福岡県小郡の野田宇太郎資料館、福岡県久留米中央図書館、舞鶴引揚記念館といった、牛島春子とゆかりのある地に踏み、調査や資料収集をしてきた。さらに、「牛島春子年譜」の作成者坂本正博、『満洲・重い鎖 牛島春子の昭和史』の著者多田茂治にもお目にかかり、お話を聞かせていただいた。

本博士論文は先行研究を踏まえ、実証研究の方法を用い、まず「牛島春子年譜」における事実関係の修正、補充を試みた。また、「牛島春子年譜」に載っていない、或は未確認の作品合わせて八編を確認し、牛島春子の執筆目録を更新した。更に、ほぼ十年間にわたり、官僚夫人と女性作家という二重の身分で「満洲」に定住し、植民地や戦争の激動を体験してきた牛島春子の個人の記憶に焦点を当て、牛島春子の特質、「転向」への意識を検討した。牛島春子の記憶はどのように日本植民地文学に作用したか、また戦争、植民地支配がどのように牛島春子個人の記憶に投影したかについて解明する試みをした。最後に中国語に翻訳された牛島春子の作品に注目し、その翻訳と変貌を考察した。各部、各章の概要は以下の通りである。

序章では、研究の目的と意義を論じた上に、先行研究をまとめ、牛島春子研究の理由と必然性を述べ、本論文の研究課題を取り上げた。「満洲国」は一時期日本にとって、ロマンチズムのシンボルであり、亡命先でもあると見なされていた。少なからぬ知識人が混乱の内地を嫌い、逃れて「満洲」の地を踏んだ。牛島春子をはじめとする日本人女性と「満洲」の関係を究明することは非常に有意義なことである。彼女は「満洲」へ移住した日本人女性の記号であり、植民地女性の記憶を筆で記録している。近年、「満洲」文学研究がブームになり、牛島春子研究においては、坂本正博、多田茂治、川村湊、田中益三、崔佳琪、Kimbelly Kono(日系アメリカ人)らの研究者が現れた。さらに、先行研究に踏まえ、本博士論文の新たな研究課題とオリジナリティを提起する。

第Ⅰ部は一章からなる。

歴史的な背景として、日本人女性が「満洲」移住、進出を行った機縁と歴史的展開を振り返り、「満洲」文壇の女性文学者の女性表現と「満洲」崩壊後の運命をまとめる。

まず、先行研究を踏まえ、「満洲」と縁を結んだ女性達の位置づけを考え、彼女達はどのような経緯で「満洲」と関わってきたか、を振り返った。次に、中日両国の研究者により、定義された「満洲文学」を確認し、「満洲」における女性文学を概観した。さらに、「満洲」の地で執筆活動を行った女性作家を分類し、それぞれの経歴を略述した。

第Ⅱ部は四章からなる。

戦争と植民地の激動を体験した牛島春子個人の記憶に焦点を当て、彼女の人と文学を詳細に検討してみた。

第一章では、「牛島春子年譜」における事実関係について修正と補充を試みた後、牛島春子の特質を考察した。第一節は、実証調査に踏まえ、渡満時期、川端康成との対面、引揚体験といった事実関係を究明し、「年譜」未確認の作品、或いは載っていない作品（八編）を確認した。第二節は「トランスジェンダー」と誤解された牛島春子の性意識について、オリジナルな資料『手記』、野田宛の書簡などを用い、作品と合わせて検証を行ってきた。実は、牛島春子性意識の源は「反逆の心」にある。彼女は別に男に憧れているのではなく、男でもいい女でもいい、因襲に束縛されずに、自由に生きていく人間になりたい。少女時代、女性の性に目覚め、男への乙女の恋心を感じていた。一方、性意識の揺れがあり、男も女も好きであり、「魂は悪魔にみまはれた」ら、同性愛の種が芽生えることになる。春子は子供を産み、立派に育ち、「満洲」官僚の夫を支えている同時に、大胆に自分の不倫の激情を書き、矛盾を抱えこんだ統一体と言っても過言ではない。彼女は女性を規範する古い因襲に対抗する女権主義者である。

第三節は牛島春子と野田宇太郎の知遇を考察した。牛島春子研究はテキスト分析のほか、彼女の生活、思想を探る必要もあると感じている。彼女は生まれてから死ぬまでどのような人生を送ったか、どのような人と交流し、どのような考えを抱えていたか、それらの疑問を解くことにより、作品の特徴や意味を正確に読み解くことにつながる。野田宇太郎は「満洲」女性作家の代表者として知られている牛島春子からの書簡などの資料にも目を配り、大切に保存していた。それは小説やエッセーで窺い知れなかった春子の内面を伝える記録ともなっている。野田宇太郎は春子の終生の友であり、彼女の人生に多大な影響を与えた。野田は牛島春子の創作を助言し、激励し続けた。本論文は野田への書簡などの資料を生かし、川端康成との対面、女性文学についての考え、戦争へのスタンスといった重要な情報を読み取ろうとつとめて制作したものである。

第四節は、牛島春子の文豪川端康成との不思議な縁を明らかにした。二〇一三年小谷野敦の研究書『川端康成伝—双面の人』は川端康成の戦争、最低限の協力であると評価し「川端が満洲で牛島春子に会ったのか確認できない」と疑問を残した。在満女性作家牛島春子と文豪川端康成は「不思議な縁」で親しくなり、戦中から戦後にかけて頻繁に交流していた。二人は共通の親友として、古賀春江、野田宇太郎、高田力蔵らがいるし、文学、絵画という共通の趣味まで持っていた。野田宇太郎と川端康成は牛島春子にとって、最も重要な知人であり、彼女の人生を導くような存在である。春子は川端を尊敬し、信頼している。同時に、自分の作品に自信がなく、ストレスを感じて悩んでいた春子を川端全力で鞭撻し、支えていた。

また、川端の戦争関与、植民地との関係については、二回の「満洲」訪問と特別攻撃隊基地の報道班員体験に触れるだけで物足りない気がする。前述したように、川端が牛島春子をはじめとする在満女性作家に積極的に働きかけたことも戦争関与の一側面ではなから

うか。川端康成は在満作家を鞭撻したり、作品の出版を協力したりすることによって、「満洲」文学に力を注ぎ、いわば、植民地主義を内面化していたのである。

第五節は曖昧された牛島春子の「転向」への意識を究明してみた。本論文は実地調査に踏まえ、野間宏から五通の書簡、牛島春子『手記—青空と自殺』（野田宇太郎資料館所蔵）など先行研究には触れていない資料を入れて検証を行うことによって、牛島春子の「転向」への意識、思想の変遷を検討してみる。「転向」問題についての考察は日本人のマルクス主義体験のプロセスを顧みる面においても有意義なことであれば、在満女性作家牛島春子の本音を理解し、作品を解説する面においても基礎的かつ不可欠なものである。ここで牛島春子の作品、書簡、自家版『手記』などオリジナルな資料を叙述にしばしば援用しながら、牛島春子の出発の原点にたどりつき、彼女の「転向」意識を究明した。それは牛島春子文学の本質につながるであろう。

第二章は牛島春子の作品から読み取れる「満洲」の世相を検討した。

第一節は牛島春子の持っている性意識はどのように作品に投影したか、牛島春子の作品における女性像について、特に牛島春子のフェミニズム思想が「満洲」に渡った後にどのように変容したかの問題を掘り下げてみた。

第二節は「祝といふ男」「苦力」を取り上げ、「満洲」における異民族接触の状況とその表現を考察してみた。

日本人には解かれることがない祝の「冷たい化石したような顔」の裏に、正義感や人間性が潜んでいる。植民地「満洲」で、祝は心に秘めたものを漏らさないために、被植民者の心境を植民者に読み取られないために、顔を「化石化」したのではないか。それは生き延びるための術であり、動物の保護色みたいなものであると思う。特定の時代にやむを得ず、「もっともさかしい生き方」を選んだに過ぎない。日本人が祝を憎悪した理由はまさに民族差別、日本のオリエンタリズムによるものである。日本オリエンタリズムの暴力で中国人の個別の人格を無視し、集合として、あるいは一つの類型として扱おうとし、植民地の人々の人間性と人間的な経験を剥奪した。それに対し、中国人に嫌われたのは祝が満人達の「掩護幕」を取り外したからと作者は書いているが、深層を探って見ると、中国人民衆に嫌われた最も重要な理由は祝が裏切者である事である。祝は被植民者でありながら、植民者側に協力して同胞を統治していた為、抑圧された中国民衆に恨まれ、憎まれたわけである。中国人たちの「日本人ではない」という可視化された差異が、日本人の植民地支配を脅かした。あのような時代を生き延びた祝はまさに悲劇的な人物である。さらに牛島春子が「満洲」時代に耽読したドストエフスキー『罪と罰』、魯迅『阿Q正伝』は「祝といふ男」に浸透し、投影されていたことを分析した。

次に、衰弱している中国の象徴として、作家達はよく苦力を描いている。中国苦力は日本人の意識を映し出す鏡であり、日本人のアイデンティティを再認識させる「他者」として書かれてきた。日本の文学者の目に映った苦力像は群れで行動する、汚くて貧乏であるが、接近していくと、強くて暖かい人間性を持っていることに気付いた。その上、苦力は

「満洲」産業を支える不可欠な原動力であるため、どのように彼らを統制すべきか、そのような問題を念頭に置きつつ、「満洲」時代に、文学者たちはそれぞれ苦力の内面を見極めようとしたのであろう。牛島春子の「苦力」は前述の作家達の「苦力」描写と比べると、ヒューマンイズムのエレメントが織り交ぜられ、「苦力」を語らせることがユニークに感じられる。異民族交流に成功したように見えるが、それは日本人の錯覚に過ぎないと思われる。実際には植民地構造における位置関係は全然変わらなかった。牛島春子は矛盾の統一体であり、分裂している。彼女は苦力といった大衆にヒューマンスティックな愛と軽蔑を共に抱えている。結局、植民者としての牛島春子には限界があり、暴力を振るわずに温情を施したのは苦力を救うためではなく、うまく苦力を操るためであったと思われる。

第三節は「ある旅」などの引揚作品を取上げ、実地調査に踏まえ、牛島春子が野田宛の書簡と照らし合わせ、彼女の詳細な移動ルートを整理し、牛島春子の「満洲」引揚げの主題を詳しく検討してみた。「ある旅」をはじめとする牛島春子の一連の引揚小説の主題はロマンチズムと人間性である。引揚体験は牛島春子にとって反省の契機を与えてくれた運命的な存在であろう。歴史外に追い出された浮塵のような牛島春子はアイデンティティの再構築に面し、敗戦を無限な自由とロマンチズムという根本理念にむすびつけ、新しい冒険への出発として受け止めた。皮肉なことに、「満洲国」崩壊後、一時的に国家、階級、ジェンダーなどさまざまな権力と欲望が消えてしまい、牛島春子がかえって活発になり、生き甲斐が感じられた。あらゆる規範が失効になった時空の中で、大胆な男女の恋、生き延びるためのエゴイズム、民族の壁を越えた人道主義といった赤裸々の人間性がさらけ出された。そのロマンチズムとヒューマンティは牛島春子が少女時代から持ち続けている不変の信念である。牛島春子の引揚小説から彼女の内面化した植民地主義から脱構築する努力が読み取れた。しかし、牛島春子自身はナショナリズム、階級の限界があり、相変わらずオリエンタリズムの眼差しで中国人を凝視し、表象していることが明らかになった。

第三章は牛島春子文学の翻訳とそれによる作品の変貌を明らかにした。

第一節は「祝廉天」と「祝といふ男」の対照研究により、「満洲」時代ならではの翻訳状況が見られた。また翻訳者氷壺の選択により、当時「満洲」の中国人読者が理解した『祝廉天』は原作と微妙な違いがあることも明らかになった。「祝といふ男」は宗主国の女性（牛島春子）と植民地の男性（祝）の関係をも表象している点を強調するが、「祝廉天」は性別をぼかし、一人の中国人にクローズアップする意味合いが強い。氷壺は古丁の見解と一致し、積極的に日本語語彙をそのまま導入した。翻訳に大きな書き換えはないが、ニュアンスが違う文は少ない。被植民者の言論が厳しく制約され、やむを得ない選択であろうか、「祝廉天」では日本人に対する批判の表現が控えめに、軽減される現象が見られる。さらに、氷壺は同族の祝への同情、憧れなど複雑な心境が入っているためか、祝に関する表現は褒め言葉に書き換えられる例がしばしば出てくる。次第に中国人読者に与えた祝の人物像も変わっていく。裏付けの資料がなく、氷壺の翻訳は誤訳なのか、意識的に工夫して翻訳したか、断言できないといえるが、翻訳テキストの変容からみると、ひそかな抵抗が読

み取れる。

第二節は中国語訳『王属官』の流転と変容を明らかにした。脚本、映画、漫画と多彩な流通を経て、ドラマチックな運命を辿った「王属官」は微妙に変容しつつある。「満洲」という特定の時空における「王属官」の変容は、決して偶然なことではない。これまで、未確認の「王属官」の中国語訳を視野に入れて、日本語訳本、中国語訳本、映画、漫画といった「王属官」の歩みの軌跡を辿ることによって、変容を究明してみた。

原作とかなり離れ、新聞に連載された時、あえて原作者の牛島春子の名前を書いていなかった。「五族協和」をアピールするために、朝鮮人農民など多くの人物を登場させた。物語は愛と正義などにより生じた葛藤が織り込まれ、大衆の好みに合うようなものに改作された。しかも旧正月の元宵節のにぎやかなシーンを設け、高脚踊、大頭舞、獅子舞、汗船、老漢背少妻、龍灯舞といった中国人に好まれている伝統芸術を舞台に登場させ、娯楽性を増した。牛島春子原作の王属官は固くて人間性に欠けている植民者の操り人形である。藤川版の王属官は人間性がゆたかになり、鮮明な個性を持っている生き生きとした人間に変容したとはいえ、完全に植民者の代弁者になり、中国の売国奴になってしまった。さらに、共産党殲滅の問題も藤川により、新たに付け加えられた。それは藤川をはじめとする日本植民者達が日本帝国主義の侵略を粉飾する工夫であろう。藤川によって改作された「王属官」は国策協力の道に大いに邁進し、大衆の好みに合うように、いい人は無罪釈放され、悪い人は罰を受けるという勸善懲惡の主旨も読み取れた。

また、珍しい翻訳の単行本『王属官』について、考察した結果、「満洲」民生部の属官劉貴徳は頼まれて藤川の日本語脚本を翻訳し、藤川の脚本を忠実に訳し、大きな書き換えをしなかったことがわかった。ただし、細部にはいくつか微妙なところがあり、誤訳も多く、藤川脚本と微妙な違いが読み取れる。

映画「王属官」は事件の経緯を詳しく演じず、農民役、日本人官吏役もカットされた。農民の苦しい生活や「五族協和」というイデオロギーがぼやかされるようになったといえよう。そのかわりに男女恋愛の葛藤、ヒロインとしての王属官の勇氣溢れる行動を中心に物語が展開している。国策映画というより、娯楽映画に近付きつつある。

漫画「王属官」の出来事は映画「王属官」と似ているが、微妙な書き換えがある。漫画「王属官」は映画「王属官」に基づき、描いたものであると推測している。読者の好みに合うように、事件を淡々と描いて、人間味溢れる王属官に焦点を移した。国策色彩は薄くなり、面白さが重視されている。

第三節は対応する日本語の作品がまだ見つからない中国語の作品「遙遠的訊息」（遠くからの便り）を紹介し、解説することにより、日本の方に知られていない牛島春子の側面を究明してみた。同じく男性と女性は分業し、戦争に協力する小説である、春子の「女」という小説「女」で造形された和江は「良妻賢母」「軍国の母」であるのに対し、瑞枝は男権に屈しないモダンガールでもあり、積極的に銃後活動をする戦争加担の女性である。牛島春子がフェミニストとしての側面がこの中国語の作品から伺える。このようにフェミニ

ストの瑞枝は「満洲」の地に渡ることによって、女性という被抑圧者から植民者という抑圧者に変身した。家父長制に反逆した近代女性まで「聖戦」に協力し、常に死と隣合わせでも、怖れず勇ましく戦う兵士の姿を大いに褒美した。春子は被植民者側の女性の声を聞かず、日本女性のために権利を求めつつあり、信仰したマルキシズム及びフェミニズム思想も「満洲」の地に渡り、ある程度の変質が現われた。

最後に、資料調査、収集の経緯を明記した。

後書き 資料収集の経緯と謝辞

牛島春子に関しては、文献調査など基礎的研究の整備がまだ不十分と思われるので、その分野から着手するように、指導教官の三木紀人先生に指示され、筆者は実地調査に取りかかった。まず、二〇一三年四月、牛島春子の散逸された作品を集めようとして、中国東北部の黒龍江省図書館、ハルピン市図書館、吉林省図書館、東北師範大学図書館、吉林大学図書館、遼寧省図書館、遼寧大学図書館へ資料調査に回ってみた。「満洲」文学の関連資料や牛島春子の中国語の作品「遙遠的訊息(遠くからの便り)」代表作「祝といふ男」の中国語訳を発見した。三木先生と城西国際大学水田図書館の浪方様、鶴澤様、佐藤様のご協力で、『王属官』の中国語訳を手に入れた。

その後、先行研究を読んでいるうちに、手がかりを見つけた。川村湊『〈満洲文学〉から〈戦後文学〉へ—牛島春子インタビュー』¹によると、牛島春子は「手許にあったものを全部、久留米の図書館に送ってしまいました」という。そこからヒントを得て、筆者は二〇一三年七月、二〇一四年十一月、二回にわたり、久留米中央図書館に訪問し、調査してみた。平成九年、牛島春子は故郷の久留米中央図書館に資料を寄贈した。書簡が十三通保存されている。野間宏から五通、川端康成から五通、壺井繁治から一通、広津和郎から一通、発信人、発信年月日不明の書簡一通（朝日新聞の学芸課用便箋使用）である。また、はがきは八枚あり、野間宏から二枚、川端康成から二枚、中野重治から一枚、岡本潤から一枚、小倉市砂津 赤司氏から一枚、長谷川四郎から一枚である。新聞切抜き二枚があり、「二月の小説 下 評論家 平野謙」（掲載紙不明）、「きれいな選挙へ わたしの『提言』」作家牛島春子さんへ 評論家中野好夫（『西日本新聞』一九六五年六月十七日）である。外には写真一枚（一九五二年、坂本繁二郎訪問）、中野重治自筆書一枚（一九五三年春）がある。

また、坂本正博「牛島春子年譜作成を通して—その作品評価と書簡紹介」²を通じ、「牛島春子一周忌追悼コーナー展が、二〇〇三年の十二月二十日から二〇〇四年の一月二十五日まで、福岡県小郡市立図書館野田宇太郎資料館においてその野田宇太郎文学資料館において開催された」という事実がわかった。それを手がかりとして、野田宇太郎資料館へ調査にいったわけである。資料館の八田ゆみ様をはじめとする館員の甚大な協力をいただき、牛島春子関連の資料をスムーズに収集することができた。その中には牛島春子は野田宇太郎に宛てた書簡七十九通、葉書十七枚がある。その上、一九三八年日本で出版された自家版の『手記』、牛島春子画油絵「自画像」一点、「薔薇の花」一点、牛島春子の「転向理由書」新聞切抜き「反体制論」（掲載紙不明）「裸婦」（一九五五年『新九州』）なども保存されている。

二〇一三年七月、筆者は植民地文化研究会に入会し、「満洲」文学の研究者西原和海先生のご紹介で福岡で「牛島春子年譜」の作成者坂本正博先生にお目にかかり、インタビューをさせていただいた。その後、北田幸恵先生のご紹介で東京で牛島春子研究者多田茂治先生にインタビューをした。論文作成に際し、西原和海先生、坂本正博先生、多田茂治先

生から貴重な資料をいただき、多大な鞭撻と指導をいただいた。

これらの先行研究には触れていない大切な資料を博士論文で援用できたのは私一人の力ではなく、指導教官の三木紀人先生、北田幸恵先生、劉利国先生、西原和海先生、坂本正博先生、多田茂治先生、杜鳳剛先生、陳岩先生、袁福之先生、野田宇太郎資料館の八田ゆみ様、中国図書館の館員たち、城西国際大学水田図書館の方々のおかげである。本当に優しい方々に支えられ、幸運なことであった。この場を借りて、心から深く最高の敬意と感謝の意を表す次第である。

注

¹川村湊『〈満洲文学〉から〈戦後文学〉へ—牛島春子インタビュー』『文学史を読みかえる 5』 インパクト出版会 二〇〇二年 一〇八～一二五頁

²坂本正博「牛島春子年譜作成を通して—その作品評価と書簡紹介」『朱夏』（十九）

せらび書房 二〇〇四年五月 九十四～一〇六頁

参考文献

〈単行本〉

南満洲鉄道株式会社経済調査会 編『満洲の苦力』	南満洲鉄道	一九三四年
牛島春子『手記一青空と自殺』	自家版	一九三八年
小山貞知『満洲協和会の発達』	中央公論社	一九四一年
望月百合子『大陸に生きる』	大和書店	一九四一年
大内隆雄『満洲文学二十年』	国民画報社	一九四四年
川端康成他編『日本小説代表作全集 10』	小山書店	一九四九年
野田宇太郎『新東京文学散歩』	日本読書新聞	一九五一年
野田宇太郎『九州文学散歩』	創元社	一九五三年
野田宇太郎『灰の季節』	創元社	一九五八年
北村謙次郎の『北辺慕情記』	大学書房	一九六〇年
昭和戦争文学全集編集委員会編『昭和戦争文学全集 1 (戦火満州に挙がる)』	集英社	一九六四年
牛島春子『ある微笑』	創樹社	一九六九年
『西田信春書簡・追悼』	土筆社	一九七〇年
祖父江孝男著『県民性：文化人類学的考察』	中央公論社	一九七一年
本多秋五『転向文学論』	未来社	一九七二年
古賀春江『牛を焚く一古賀春江詩画集』	東出版	一九七四年
河北倫明『坂本繁二郎』	中央公論美術出版	一九七四年
野田宇太郎『母の手鞠』	新生社	一九七五年
鶴見俊輔『転向研究』	筑摩書房	一九七六年
吉本隆明『吉本隆明 現代の文学二十五』	講談社	一九七八年
八木秋子『異境への往還から一八木秋子著作Ⅲ』	J A C 出版	一九八一年
川端康成『川端康成全集』第二十卷	新潮社	一九八一年
蛭原徳夫『ロマン・ロラン研究』	第三文明社	一九八一年
水田宗子『ヒロインからヒーローへー女性の自我と表現』	田畑書店	一九八二年
野田宇太郎『野田宇太郎全詩集』	蒼土舎	一九八二年
北野民夫『特高と思想検事』	みすず書房	一九八二年
川端秀子『川端康成とともに』	新潮社	一九八三年
長谷川泉『川端文学の機構』	教育出版センター	一九八四年
宮本盛太郎『宗教の人間の政治思想—安部磯雄と鹿子木員信の場合』	木鐸社	一九八四年
分銅惇作 [ほか]編『日本現代詩辞典』	桜楓社	一九八六年
エドワード・サイード著今井紀子訳『オリエンタリズム』	平凡社	一九八六年
A. ボシュア (新倉俊一訳)『ジャンヌ・ダルク』	白水社	一九八七年
北原白秋『童謡集』	岩波書店	一九八七年

水上勉『瀋陽の月』	新潮社	一九八九年
川端康成記念会『川端康成全集』(補巻二)	新潮社	一九八九年
川村湊『異郷の昭和文学―「満洲」と近代日本』	岩波書店	一九九〇年
三好行雄『夏目漱石事典』(別冊国文学)	学燈社	一九九〇年
水田宗子『フェミニズムの彼方―女性表現の深層』	講談社	一九九一年
水田宗子『女と表現：フェミニズム批評の現在』	学陽書房	一九九一年
尾崎秀樹『近代文学の傷痕』	岩波書店	一九九一年
野田宇太郎資料館『野田宇太郎資料館ブックレット 1』	野田宇太郎資料館	一九九一年
文藝春秋『文藝春秋七十年史』	文藝春秋	一九九一年
池上俊一『魔女と聖女』	講談社	一九九二年
田中貴子『〈悪女〉論』	紀伊国屋書店	一九九二年
宮尾登美子『宮尾登美子全集』第三巻	朝日新聞社	一九九二年
東栄蔵『横田文子人と作品』	信濃毎日新聞社	一九九三年
石井達郎『男装論』	青弓社	一九九四年
野田宇太郎資料館『丸山豊と「母音」の詩人たち』	野田宇太郎資料館	一九九五年
阿部謹也『「世間」とは何か』	講談社	一九九五年
黒田創『〈外地〉の日本語文学選』	新宿書房	一九九六年
川村湊『満洲崩壊―「大東亜戦争」と作家たち』	文藝春秋	一九九七年
水田宗子『居場所考―家族のゆくえ』	フェミックス	一九九八年
王向遠『“笔部队”和侵华战争：对日本侵华文学的研究与批判』	北京師範大学出版社	一九九九年
江原由美子他著『ジェンダーの社会学』	放送大学教育振興会	一九九九年
岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』	文研出版	二〇〇〇年
川端康成『満洲国各民族創作選集』	ゆまに書房	二〇〇〇年
川村湊『牛島春子作品集』「日本植民地文学精選集 021」	ゆまに書房	二〇〇一年
小森陽一『ポストコロニアル』	岩波書店	二〇〇一年
姜尚中編『ポストコロニアリズム』	作品社	二〇〇一年
ピエール・ノラ『記憶の場』	岩波書店	二〇〇二年
川村湊『満洲鉄道まぼろし旅行』	文春文庫	二〇〇二年
小島政二郎『小島政二郎全集 第九巻』	日本図書センター	二〇〇二年
岩井忠正他著『特攻 自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』	新日本出版社	二〇〇二年
川崎賢子『読む女 書く女―女系読書案内』	白水社	二〇〇三年
三井誠『刑事法辞典』	信山社	二〇〇三年
日本共産党中央委員会『日本共産党の八十年』	日本共産党中央委員会出版局	二〇〇三年
大岡昇平他編『政治と文学』	学芸書林	二〇〇三年
梧桐書院編集部『明治・大正・昭和のうた』	梧桐書院	二〇〇三年

北田幸恵他編『女たちの戦争責任』	東京堂出版	二〇〇四年
野田宇太郎資料館『背に廻った未来』	野田宇太郎資料館	二〇〇四年
山室信一『キメラ—満洲国の肖像』	中央公論新社	二〇〇四年
高山一彦『ジャンヌ・ダルク—歴史を生き続ける「聖女」—』	岩波新書	二〇〇五年
鎌田慧『「新日本文学」の60年』	七つ森書館	二〇〇五年
鎌田明子『性と生殖の女性学』	世界思想社	二〇〇六年
田中益三『長く黄色い道—満洲、女性、戦後』	せらび書房	二〇〇六年
長谷川郁夫『美酒と革囊：第一書房・長谷川巳之吉』	河出書房新社	二〇〇六年
大橋洋一『現代批評理論のすべて』	新書館	二〇〇六年
関口安義『よみがえる芥川龍之介』	日本放送出版協会	二〇〇六年
日本バーナード・ショー協会編『バーナード・ショーへのいざない』	文化書房博文社	二〇〇六年
飯田祐子他編『文学で考える〈日本〉とは何か』	双文社出版	二〇〇七年
藝文社『藝文』	藝文社版	二〇〇七年
岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』	研文出版	二〇〇七年
坂部晶子『「満洲」経験の社会学』	世界思想社	二〇〇八年
多田茂治『満洲、重い鎖—牛島春子の昭和史』	弦書房	二〇〇九年
加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』	朝日出版社	二〇〇九年
謝天振『当代国外翻訳理論』	南開大学出版社	二〇〇九年
尹東燦の『「満洲」文学の研究』	明石書店	二〇一〇年
呂元明他編『「藝文」と満洲藝文聯盟版 満洲藝文協会版』	ゆまに書房	二〇一〇年
野田宇太郎資料館『蝶を追ふ』	野田宇太郎資料館	二〇一〇年
王徳威他編『帝国主義と文学』	研文出版	二〇一〇年
尹東燦『「満洲」文学の研究』	明石書房	二〇一〇年
葉山英之『「満洲文学論」断章』	三交社	二〇一一年
ベルナール・デュシャトレ村上光彦訳『ロマン・ロラン伝：一八六六—一九四四』	みすず書房	二〇一一年
川村湊『満洲国—砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』	現代書館	二〇一一年
蘭信三『帝国崩壊とひとの再移動引揚げ、送還、そして残留』	勉誠出版	二〇一一年
中野重治他編『コレクション戦争と文学9 さまざまな8.15』	集英社	二〇一二年
思想の科学研究会『共同研究 転向』	平凡社	二〇一二年
小谷野敦『川端康成伝—双面の人』	中央公論新社	二〇一三年
小泉京美『満洲のモダニズム』	ゆまに書房	二〇一三年
岡田英樹『続 文学にみる「満洲国」の位相』	研文出版	二〇一三年
植民地文化学会『近代日本と「満洲国」』	不二出版	二〇一四年
加藤尚武『ヘーゲル事典』	弘文堂	二〇一四年

西川祐子『「帰郷」の物語/「移動」の語り 戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』
平凡社 二〇一四年

〈研究論文〉

- 吉田永広「戦後「政治と文学」論争・その後—主として中野重治、平野謙」『国文学』
一九九七七年五月
- 川村湊「〈自己嫌悪〉としてのアジア観」『漱石がわかる』朝日新聞社 一九九八年
- 坂本正博「拝泉へのまなざし—旧満洲での牛島春子の作品（上）」『敍説二』文学批評（通
号 一） 二〇〇一年一月
- 石崎等「苦力の声—文学者は何を聞いたか」『立教大学大学院日本文学論叢』
二〇〇一年三月
- 坂本正博「拝泉へのまなざし—旧満洲での牛島春子の作品（下）」『敍説2』文学批評（通
号 二） 二〇〇一年八月
- 古野直也「中国幻想（十八）苦力（クーリー）と拝金（バイチン）」『月刊日本』
二〇〇一年十一月
- 川村湊「〈満洲文学〉から〈戦後文学へ〉—牛島春子インタビュー」『文学史を読みかえる
5』 インパクト出版会 二〇〇二年
- 井上洋子「終戦の軌跡—牛島春子と小郡」野田宇太郎文学資料館十五周年記念
『背に廻った未来』 二〇〇二年
- 岸陽子「〈満洲国〉の女性作家 梅娘を読む」『環：歴史・環境・文明 10』 二〇〇二年
- 坂本正博「牛島春子年譜（第二稿）」『敍説 二（三）』 二〇〇二年一月
- 林五郎「私の二十世紀 苦力（クーリー）」『民主文学』 二〇〇二年三月
- 岸陽子「〈満洲国〉の女性作家、但〔テイ〕を読む」『アジア遊学 日中から見る「旧満州」』
二〇〇二年一〇月
- 田中益三の「牛島春子の戦前・戦後」 『朱夏』（十八） 二〇〇三年六月
- 岩淵宏子「戦時下の「母性」幻想—総力戦体制の要」『女たちの戦争責任』東京堂出版
二〇〇四年
- 坂本正博「牛島春子と野田宇太郎」『野田宇太郎顕彰会会報』第十一号 二〇〇四年三月
- 坂本正博「牛島春子年譜作成を通して—その作品評価と書簡紹介」『朱夏』（十九）
二〇〇四年五月
- 山中正樹「〈十五年戦争〉と作家〈川端康成〉（覚え書き）—昭和十年代の作品を中心に—」
『桜花学園大学人文学部研究紀要』二〇〇五年三月
- 張志坤「1946年葫蘆島百万日本侨俘大遣返始末調査」（「1946年葫蘆島から百万の日本人の
引揚に関する調査」） 『日本研究』 二〇〇六年六月二十日
- 藤井淑禎「野田宇太郎研究のために」『立教大学日本文学』第九十七号二〇〇六年十二月
- 葉照子「鹿子木員信における日本精神とナチズム」『近代日本とドイツ』ミネルヴァ書房

二〇〇七年

谷光隆「支那苦力（特に上海に於けるもの）」『愛知大学国際問題研究所紀要』

二〇〇七年九月

八木福次郎「愛書家、思い出写真帖 野田宇太郎さん」『日本古書通信』二〇〇八年十月

多田茂治「ある微笑—牛島春子と野田宇太郎—」『蝶を追ふ』野田宇太郎生誕一〇〇周年

二〇一〇年

李聖傑「川端康成における戦争体験について—「敗戦のころ」を手がかりに—」

『ソシオサイエンス』十七 二〇一一年

崔佳琪「牛島春子『祝といふ男』の基礎考察—転載の経過から主人公造型論に及ぶ—」

『現代社会文化研究』二〇一一年十二月

榎村哲朗「歴史の中のロマン・ロラン」

『民主文学』

二〇一一年十二月

長濱拓磨は「川端康成「生命の樹」論：戦後文学と聖書」『キリスト教文学研究（二十九）』

二〇一二年

崔佳琪「満洲引揚げ文学について：研究史の整理及びこれからの展望」『現代社会文化研究』

二〇一二年十二月

泊功「夏目漱石『満韓ところどころ』における差別表現と写生文」『函館工業高等学専門学校紀要』四十七号

二〇一三年

Kimberly Kono「From the Nikutai to the kokutai:Nationalizing the Maternal Body in Ushijima Haruko's "Woman"」『日米女性ジャーナル』

二〇一三年四十五号

北田幸恵「特集読み物 牛島春子の文学からみた「満洲」 満洲文学の代表作品から満洲国民の心情をさぐる」『歴史読み本』

二〇一三年八月

三木紀人「野田宇太郎と宮尾登美子、そして牛島春子」『野田宇太郎顕彰会会報』二十二号

二〇一五年掲載予定